
ようこそ藍越学園へ

TAKUMAKI?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ藍越学園へ

【Nコード】

N3338T

【作者名】

TAKUMAKI?

【あらすじ】

IS インフィニット・ストラトス の二次創作です。ISが生まれず私立藍越学園に普通に通う事になるキャラクター達が織り成す学園モノ。主人公・織斑一夏は藍越学園に入学し、普通に学園生活を送ります。ファースト幼馴染はシャルロットです。あと織斑家は4人兄弟です。一夏には千冬の他に兄1人と姉1人がいます。アイキャッチしりとりました。

第一話 織斑一夏、今日から高校生です（前書き）

思いつきで書いてみました。

駄文ですが読んでいただけたら幸いです。

8 / 2 2 1話と2話をくっ付けました

第一話 織斑一夏、今日から高校生です

春である。

桜は咲き誇り、温かな春風がそれらを穏やかに揺らし、陽はうららかに大地を照らす。

誰もが言う気持ちの良い春である。

『ピピピピ、ピピピピ』

おりむらいちか

この部屋の主である織斑一夏の目覚まし時計が鳴り響く。モゾモゾと布団が動きそこから伸びた手が目覚まし時計に伸び目覚ましを止めた。一夏は布団から起き上がり若干寝癖のついた髪をばりばりと掻きながら呟く。

「朝か・・・、起きるか」

ベッドから起き上がると背伸び一つして窓を開ける。

「今日から高校生か」

今日は彼が入学する私立藍越学園の入学式。新しい世界の幕開け、その初日だ。誰しもが胸を躍らせるものだ。

天気も雲一つ無い快晴で春独特の風がそよそよと一夏の髪を撫でた。

「さて、朝飯の準備するか」

一夏は自室をあとにした。

歯を磨き、寝癖を直し、スッキリしたところで一夏は朝食を用意する。

朝食の準備はこの家で一番寝起きがいい一夏が担当する事が多い。織斑家の今日の朝食はトーストにベーコンエッグ、簡単なサラダにコーヒールと洋食で揃えられていた。そこへ1人の男性と1人の女性がリビングに姿を現す。

「「おはよう一夏」」

「ああ、おはよう百春兄と千秋姉」

男性の方は織斑百春^{ももはる}。一夏の兄で織斑家の長男だ。スーツ姿で鞆を手にして仕事に行く準備も万全だ。

女性の方は織斑千秋^{とあき}。一夏の姉で織斑家の次女。まだ起きたばかりなのか服はまだパジャマのままだ。

兄弟3人が朝の挨拶を交わしテーブルに着く。

「千冬姉^{ちふゆ}はやっぱりまだ？」

「うん」

一夏の問いに笑顔で答える千秋は暢気にサラダを口にす。

「あの姉が自力で起きるとおもつか？」

と苦笑いを浮かべた百春はコーヒールを啜る。

「じゃあ、着替えもあるし俺が起こしてくる」

「任せる」

「よろしくね」

そう言つて一夏はリビングをあとにして2階上がる。

自室に戻ると真新しい私立藍越学園の制服に着替えるとそのまま長女である織斑千冬の部屋へ向かう。

『コンコン』

部屋をノックしてから声を掛ける。

「千冬姉、朝飯できたから起きてくれ。そろそろ起きないと時間もマズイぞ」

「ん」

部屋の中から寝惚けた声が聞こえた。声は千冬のもだった。

「起きた？朝飯できてるから早く準備して来てくれよ」

「あ」

どうやらまだ半覚醒状態らしい千冬だが一夏は部屋には入らない。入ったら千冬に怒られるからだ。

とりあえず千冬が返答をしたので一夏はリビングへ降りていった。

朝の準備を終えた千冬も合流し兄弟4人がテーブルを囲み一緒に朝食を取る。この家の住人である織斑家はこれで全て集合だ。

彼らには両親がいない。

何故かないのか？

一言で言うなら『死別』である。

父の名前は「織斑萬月」まんげつ

母の名前は「織斑四季」しき

織斑兄弟の両親は外交官をしていた。仕事で家を空けることが多かったが家にいるときは家族の時間を大事にしてくれた。時には仕事で海外に行くときに子供達を連れていくこともあった。仕事を放り出して家族で海外観光を楽しんだりもした。公私混同とも取れることとしていた両親だったが仕事をするときはきちんとかなす人たちだったので信頼もされていた。そんな両親の愛情をしっかりと感じて育った4人は幸せだった。

しかし6年前に事件が起きた。

両親は仕事の為に4人を家に残して海外へ向かった。その飛行機が事故に遭い墜落した。乗客数百人の命が失われた。その中に織斑夫妻がいたのだ。

突然の両親との死別。

両親はもしものときの為にかなりの額の遺産を残していたため4人が生きていくための資金は充分だった。親戚関係者が4人を引き取るという話もあったが4人一緒というのは難しく、それぞれ別々に引き取られることになったのだがそんなのは4人とも嫌だった。親戚関係者には無理を言って4人は両親の残してくれた家で暮らすことになった。

それから6年間、辛いこともあったが4人は負けなかった。4人は互いに差さえあって生きてきた。

家族の、兄弟の愛であつた。

朝食を食べ終えた4人はそれぞれの行動を開始する。千冬と百春は仕事に行き、十秋は学校の準備で一夏は食器の片付けだ。

「悪いな一夏。入学式見に行けなくて」

「いいよ百春兄、千冬姉も来れないらしいけど俺ももう子供じゃないんだし」

「何を言っている？お前なんぞまだ子供だ」

「千冬姉、もうちょっと優しい言葉はないのかよ・・・」

「そういう所が子供だと言ってるんだ」

「まあまあ姉さん、あまり一夏をいじめないであげてよ。いくら本当の事だからって」

「十秋、お前も充分ヒドイぞ」

「姉2人の優しさに涙出るよホントに！！」

「一夏、そこで怒るから子供だと言われる」

「も、百春兄まで！！」

「では、私はもう行くぞ」

「俺ももう行く。今日はちょっと早めに着きたいからな」

「二人共、いつてらしゃい」

「・・・、いつてらっしゃい」

千冬と百春は家を出た。それを見送る十秋と一夏。一夏はまだ少し不貞腐れている。

「ほらほら、いつまでも拗ねてないで私達も行こう」

十秋が一夏を促す。十秋は一夏と同じ私立藍越学園に通っているので行き先は同じだ。

「わかったよ。俺も入学式遅れるのは勘弁だからな」

鞆を手に取り靴を履いて2人は玄関を出る。

「忘れ物は無い？」

「ああ、大丈夫だよ十秋姉」

「じゃ、行こうか」

「おう」

一夏と十秋は並んで歩き出す。藍越学園は織斑家からは徒歩で10分ほどのところにあるので余裕を持って行動すれば時間を気にする必要はさほどない。

これから始まる高校生活に一夏は胸を躍らせるのであった。

アイキャッチしりとり

一夏「ようこそ藍越学園へ!!」

十秋「えーっと、今日は入学式の日だね!」

私立藍越学園。

私立でありながら学費が格段に安くその上、卒業生の進学率と就職率も高く一夏にとっては正に理想の学校であった。

本来なら一夏は中学を出たら就職するつもりでいたのだ。親が残してくれた遺産と姉達の稼ぎのお蔭で生活が苦しいということはないがやはり姉達ばかりに負担をかけるのは心苦しいものがあった。

ならば自分はその負担を少しでも減らすために早めに働こうと考えたのだが姉達がそれを認めなかった。

そのことを千冬に話したときも

「何を言っている大馬鹿者!ここでその選択をするのは尚早というものだ。お前には未来への無数の可能性があるのだぞ。それを中学を卒業した時点で決めてしまっやつがあるか。」

と怒ったのだ。

百春も

「お前がそれを気にする必要はない。俺達は迷惑だとは思っていない」

と喋りながら来た。

上の2人とは違いまだ高校生の十秋も

「とりあえず進学してみたら？あたしも同じような事考えてたけど進学してみてよかったと思ってるよ。一夏もそこから新しくやりたい事が見つかるかもしれないし高校生活は楽しいよ」と進学を勧めてきた。

一夏の目には姉2人と兄の3人はいつも大人っぽく見えていた。だから自分も早く大人になりたいくて中学を出たら就職するつもりでいた。少しでも早く姉達や兄に追いつきたい。

口では『もう子供じゃない』と言うがでもやはり自分はまだ子供だと一夏は思った。就職の話を終えたとき一夏はそれを凄く実感したのだ。

そんなこともあり一夏は進学を決断した。

藍越学園を選んだのは上記にもある学費が安く卒業生の進学率と就職率も高いというのもあるが千冬と百春はこの卒業生で十秋は今在学中であるというのがこの学校を選んだのが理由だ。

ここで自分の新たな可能性を見つけ自分だけの未来を切り開くために。

「一夏と一緒に学校に行くのも2年ぶりだね」

「そうだな。俺が中1で十秋姉が中3のとき以来だから2年ぶりかな？」

「うんうん、可愛い弟と登校できてお姉さんは嬉しいよ」

そう言つて十秋は上機嫌で一夏の頭を撫でる。

子供扱いされてるみたいで一夏は少しムスツとしたが振り払おうとはしない。

「十秋姉、もうすぐ学校に着くからやめてくれ」

「あら、恥ずかしいの？」

「俺はもう子供じゃない」

「それさつきも言つてたよね」

大人っぽい笑みを浮かべながら十秋は頭を撫でるのを止める。

「十秋姉は今年で3年生だろ？これから大変じゃないのか？」

「まあね。でもまだ時間はあるし進路はもう決めてあるから心配はいらないよ」

「進路って進学？就職？」

「内緒」

「内緒って・・・」

「ほらほら、校門に着いたよ」

「あ、ホントだ」

そこで一夏は校門に到着したのに気付いた。十秋と話しながら歩いていたので気付かなかったようだ。

「じゃ、クラス分け見てくるね」

「ああ、じゃあ俺も見てくるよ」

「うん、またあとでね」

十秋は3年生のクラス発表が掲示されている掲示板の方へ歩いて行った。

1人校門に残された一夏はふっと空を見上げた。雲一つ無い快晴で絶好の入学式日和だ。

見上げた視界には校門に掲げられた大きな看板がありそこにはこう書かれていた。

『ようこそ藍越学園へ』

「俺も行こうかな」

一夏はクラス分が掲示されている掲示板へと歩き出した。

第一話 織斑一夏、今日から高校生です（後書き）

何か一夏を子供っぽく書きすぎたかな？と思いますが
とりあえずプロローグは終わりです。

僕の思いつきをふんだんに取り入れた結果このような作品になっています。

のんびり書いて行こうとおもいますのでどうぞよろしくです。

第二話 とびきりの笑顔との再会（前書き）

篤好きなファース党の方、すみません！

僕は一夏×シャルロット主義者なのでファースト幼馴染はシャルロットなんです。

それにこの作品はISが出ないので彼女の出生は不幸ではありませんせん！ちゃんと両親に愛されて育っています！

あと原作者の弓弦先生にもすみません！

あとシャルロットってなんで碧眼って言われてるんでしょうか？どうみても瞳は紫だからエメラルドではなくてアメジストだよね？

織斑家の両親にも名前をつけました。父が「萬月^{まんげつ}」で母が「四季^{しき}」です。

第二話 とびきりの笑顔との再会

一夏は1年生のクラス分けが掲示された掲示板のところにやってきた。苗字の最初が「お」なので比較的に名前は上の方に書かれている事が多いので見つけやすい苗字なのだが一夏はそれさえも確認できなかった。

「うわ・・・、何この人ばかりは」

掲示板の前は一夏と同じ新生で溢れかえっていた。ざっと見渡しても100人以上はいそうだった。自分は何というタイミングでここに来てしまったのだろうと一夏は思った。別に人ごみを掻き分けて行くのは一夏にとっては苦にはならないがもうちょっと空くのを待った方が利口なのではないかとも思っていた。

「さて、どうしたものかね」

「ホント、どうしようね？」

「ん？」

突然自分の独り言に応答するように声を掛けられて一夏はそちらを見る。

そこには1人の少女がいた。

人懐っこそうな顔で瞳はアメジスト。髪は濃い金髪で黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。日本人離れした容姿のその少女は一夏にとっては特別な少女であった。

「シャルじゃないか！」

「うん！」

にこつと少女は微笑む。彼女の名は『シャルロット・デュノア』
といい名前や容姿でわかるように日本人ではない。彼女はフランス
人で一夏の幼馴染の1人だ。ちなみに一夏は彼女を『シャル』とい
う愛称で呼んでいる。

「久しぶりだなシャル！」

「うん、前にあったのは3年くらい前だったよね」

「そっか、もうそんなになるか」

「でもすぐに僕だってわかってくれたね」

「そりゃわかるさ、シャルの事ならな」

「う、うん」

「ところで何でここにシャルが？何時日本に来たんだ？ってゆーか
何で藍越学園の制服着てるんだ？」

「一夏、そんなに一度に質問されても困るんだけど」

「ああ、すまん」

「うん、まずは質問答えただけ僕は留学生として日本に来たんだ。
日本に着いたのは2日前かな。何で藍越学園の制服を着ているのか

は今日から僕も此処の生徒だからだよ」

「そうなのか？」

「驚いた？」

「ああ、驚いた」

「僕の計画成功だね」

「それにしてもよく藍越に入れたな」

「留学の話が来てね、どうしようか迷ったんだけど学校の名前聞いたら一夏がメールで言ってた学校だったから留学決めたんだ」

「ってゆーか言ってくれば空港まで迎えに行ったのに」

「それじゃサプライズにならないよね？」

「その演出はいるのか？」

「僕が一夏を驚かせたかったからね」

「はいはい。お、掲示板の前かなり空いたな。見に行くか」

「うん」

「日本に来るの久しぶりだろ？何か困ったことあったら言えよ？協力するからな」

「ありがとう、一夏！」

またしてもにこっとシャルロットは笑顔を見せる。その無防備な笑顔に一夏はドキッとしてしまうが彼女の笑顔につられて一夏も笑顔を見せる。傍からみれば仲睦まじいカップルに見えなくもない。実際一夏はシャルロットの笑顔が大好きだしシャルロットは自分を笑顔にしてくれる一夏の事が大好きなのだ。

そして一夏は思った。

(この笑顔はあのと一緒だ)

アイキヤッチしりとり

シャル「ねえ、こっちを向いてよ」

一夏「よ、4秒経つたらな！」

一夏とシャルロットの出会いはまだ一夏が小学校に上がる直前の春

休みだった。まだ健在だった織斑家の両親が仕事でフランスに行くことになりそれに子供である一夏達が付いていったときだった。

両親が公務を終えて一夏達を連れてフランス観光に繰り出したときに訪れた公園で一夏は1人ブラブラと公園内を探検していた。そんなとき公園の入り口で泣いている女の子を見つけた。

その少女こそシャルロットだった。一夏はフランス語がほとんどわからないにもかかわらずその泣いている女の子に話しかけたのだ。突然話しかけられてシャルロットは困惑と怯えた表情をしていたが一夏は泣いていた彼女を放っておくことができなかったのでちょっとだけ両親に教えられていたフランス語で彼女を泣き止ませようとした。このときに一夏が知っていたフランス語は簡単な会話や挨拶と自己紹介くらいしかなかったが拙いフランス語で彼女笑顔にしようと思死だった。シャルロットも自分を泣き止ませようとしていると感じたのか徐々に泣き止んでいった。

そこに四季が一夏を呼びにきて見知らぬ少女がいることに気付いた。四季はフランス語でシャルロットに事情を聞いてくれた。どうやらシャルロットは母親と逸れてしまって泣いていたようだった。

一夏は四季と一緒に彼女の母親を探してあげることにした。公園内にいた父親と姉達に断りを入れてから一夏達はシャルロットの母親を探し始めた。その間一夏はずっとシャルロットの手を握っていた。シャルロットは恥ずかしそうに頬を赤く染めて俯いていたがその手を振り解こうとはしなかった。

それから数分後にシャルロットの母親は見つかった。シャルロットは母親に抱きつきながらまた泣き始め彼女の母も安堵の顔を浮かべて彼女を抱きしめていた。一夏も安心の笑みを浮かべてシャルロッ

ト母子の抱擁を見ていた。

すると四季は何やらフランス語でシャルロットに耳打ちをした。そしてたらシャルロットは顔を真っ赤にして狼狽していた。母親達はそれを見て笑っている。一夏だけが訳がわからずに首をかしげていたが母親に背中を押されてシャルロットは一夏の目の前にやって来た。シャルロットはモジモジしていて一夏はまた首をかしげたが意を決したようにシャルロットは顔をあげてこう言った。

「アリガトウ、イチカ！」

シャルロットは拙い日本語であつたがとびきりの笑顔で一夏にお礼を言った。

（ドキッ！）

そして一夏は初めて見せてくれた彼女の笑顔に胸を撃たれたような感じがした。

彼女の笑顔から目が離せなかった。

この事が縁となり一夏とシャルロットは幼馴染となった。

両親も共に親しくなり手紙を遣り取りするようになった。長い休みになれば一夏がフランスに遊びに行ったりシャルロットが日本に遊びに来たりもした。

一夏は彼女を愛称で呼ぶようになりシャルロットも日本語を学んで一夏と日本語で話せるようになった。

シャルロットが自分の事を『僕』と呼ぶのも当時の一夏の一人称が『僕』だったからそれを真似したのが始まりなのだ。いつしか一夏の一人称は『俺』になったがシャルロットは『僕』と呼ぶのをやめなかった。あの頃の思い出が色褪せてしまわないようにとシャルロットは思っていた。そんな思いを知ってか一夏もそのことには反対はしなかった。一夏もその想いは一緒であった。

「お、俺は1組だな」

クラス発表の掲示板に一夏は自分の名前を見つけた。

「あ！僕も1組だよ！」

シャルロットも1組のところに名前があった。これではれて2人は同じクラスになった。

「よろしくね、一夏」

「ああ、よろしく」

握手を交わす2人は互いに微笑む。

「よし、教室行くぞ」

一夏はシャルロットの手を握り直して彼女の手を引いて歩き出す。
一夏はふつと空を見上げた。雲一つ無い快晴で絶好の入学式日和だ。
そして再会した幼馴染にあの台詞を言いたくなった。

「シャル！」

「何？」

「ようこそ藍越学園へ！！」

第二話 とびきりの笑顔との再会（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

疲れた・・・。

23時から一晩中考えて執筆しました。

読み返すと何かもう2人が付き合っているかのようなようですがまだなんですよw

もちろんお互いに淡い想いは持っていますが言葉に出して伝えては
いません。

「ラムネ」の健二と七海みたいな感じですかね？

さて、次はどのキャラ出そう・・・。

第三話 よろしく、1年1組（前書き）

今回は4人新キャラ出します。

弾、数馬の男2人。数馬は原作に容姿が詳しく書かれていないので勝手に考えてみました。学校も原作では別々ですが藍越に入学してもらいました。

ISヒロインは篝と鈴を出します。色々原作の設定変えてますので嫌な方は戻ってください

第三話 よろしく、1年1組

先ほどまで手を繋いでいた2人だったが下駄箱で内履きに履き替える際に手は離していた。名残惜しいと思いながらも内履きに履き替えて2人は並んで教室に向こう。それでも2人の距離は肩が触れ合いそうなほどに近い。この距離はいつも2人が並んで歩くときには1番自然な距離なのだ。

一夏とシャルロットは1年1組の教室前までやってきた。

「ここだね」

「ああ」

（クラスメイトってシャルしか確認しなかったなあ。何人か知り合いがこの学校に来てる筈なんだけど。ま、教室入りやわかるか。あ、そういえば担任の名前も見えてねえや）

ここで一夏そうは思っていたが『ま、いいや』と教室のドアに手をかける。1-1のプレートが掲げられた教室の中には既に大半の生徒がいた。

黒板には始業式のプログラム時間と席順が書かれた紙が貼られてあった。席順は入学初日なので出席番号順だ。席は廊下側から縦に六席の列が窓側に向って五列ある。そして黒板にはこうも書かれていた。

『新入生の皆さん、ようこそ藍越学園へ』

「よお、一夏」

「一夏、おはようさん」

一夏に2人の男子が話しかけてきた。1人は赤みのがかった茶髪を長髪にしてもう1人はツンツンに跳ねた黒髪に少々キツイ目をしている。

「おう弾と数馬か、おはようさん」

茶髪の方が五反田弾で黒髪の方が御手洗数馬だ。この2人と一夏は中学時代からの友人だ。入学式当日に知り合って以降やたらと馬があつて3年間揃って同じクラスだった。そのこともあつて中学時代はよく3人でつるんでいたのだ。

「高校に来てもお前らと同じクラスとはな」

「どうやら俺たちの友情は切っても切れないみたいだな」

「まさに運命だな」

男子同士のユーモアある会話で盛り上がる3人。だが、2人が一夏の隣にいるシャルロットに気がつく。

「ところで一夏、その金髪美人さんは誰だよお？」

「そんな美人と2人で仲良く登校かあ？」

興味あり気にシャルロットを見る数馬と弾。

「この娘はシャルロット・デュノアだ。ほら前に話しただろ？ フランスにいる俺の幼馴染の女の子の事。それがこの娘だ。ここには留学生として来たんだと」

「シャルロット・デュノアです。よろしく」

人懐っこく挨拶をするシャルロット。

「シャル、こいつらは中学からの友達で茶髪のが五反田弾で黒髪が御手洗数馬だ」

「五反田弾だ。よろしく」

「御手洗数馬だ。よろしく頼む」

2人も紹介され挨拶を交わす。社交的なシャルロットのことだからこの2人とすぐに友人になれるだろうと一夏は思った。

「しかし仲良いねえおふたりさん。さつきも仲良さ気に教室に入ってきたし」

「もしかして2人はお付き合いしてるのかなあ？」

ニヤニヤしながら聞いてくる男子2人。突然そんな事を聞かれて顔を赤くする一夏とシャルロット。

「俺たちは、『まだ』そんなんじゃないけど・・・」

「う、うん。『まだ』そういうのじゃないよね・・・」

俯いてモジモジするシャルロットに顔を逸らして頬をポリポリかく一夏。

「『まだ』ねえええ」

さつきより8割はニヤニヤが増加した2人はからかいの視線を一夏達に向ける。居心地悪い視線を向けられて落ち着かない一夏はチラツとシャルロットを見ると彼女も目だけを一夏の方を向けていた。視線が交錯してバツと目を逸らす一夏とシャルロット。その顔は先ほどより赤く染まっている。弾と数馬の視線に耐えられなくなり一夏は強引に話を変えようとする。

「そ、それより他に同じ中学のやついるのか？俺掲示板でクラスメイトちゃんと確認してないんだよ！！」

「逃げたな」

「ああ、逃げたな」

「う、うるせえ！！」

一夏は声を張り上げる。

「うるさいわねえあんた達。廊下まで声響いてるわよ」

「そうだぞ、入学式という晴れの日に何を騒いでいる？」

そこに2人の女子が入ってきた。

アイキャッチしりとり

箒「なます切りしてやろうか？」

鈴「片付けるの大変だからやめて」

「おお、噂をすれば」

「同じ中学出身者のお出ました」

そういつて登場した女子2人は篠ノ之箒と鳳^{ファン・リン・イン}鈴音の2人だった。長い黒髪をポニーテールにしているのが箒で色の濃い茶髪をツインテールにしているのが鈴音だ。ちなみに鈴音は日本人ではなく中国人でみんなからは『鈴^{リン}』という愛称で呼ばれている。

「鈴に箒か、おはよう」

「うむ」

「おはよ」

この2人はシャルロットと同じで一夏の幼馴染だ。

箒は実家が神社兼剣道場で一夏は小学生のときはその剣道場の門下生だったのだ。箒とは小学校6年間は全部同じクラスだったのだ。

が中学に入ってからはずっと別のクラスだった。

鈴は一夏と箒が小学校3年の頭に一夏達のクラスに転入してきて意気投合したのがキツカケで親しくなった。鈴とは小学校3年から中3まですべて同じクラスだった。鈴の実家は『鳳凰』フォンファンという中華料理屋を経営していて弾の実家である『五反田食堂』と並んで一夏がお世話になっている店のひとつなのだ。今では箒と鈴は親友となっている。

「箒、鈴、おはよう。それと久しぶりだね」

シャルロットが2人に挨拶をする。箒と鈴は一夏を通じてシャルロットとは面識があるのだ。シャルロットが日本に遊びに来たときに4人でよく遊んだものなのだ。

一夏にとってシャルロットがファースト幼馴染でセカンド幼馴染が箒、サード幼馴染が鈴といった感じだ。

「シャルロットか、久しぶりだな。掲示板でお前の名前を見つけてビックリしたぞ」

「ホント水臭いわよね、言ってくれば空港まで行ったのに」

「みんなを驚かしたかったからね。あと鈴と同じ事を一夏にも言われたよ」

「何？一夏も知らなかったの？」

「ああ、今朝掲示板の前で会ってビックリしたさ」

「あのときの一夏の驚いた顔はおかしかったなあ」

「シャル、俺そんなに変な顔してたか？」

「してたよ。もう鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔してたよ」

「それは不覚だった・・・」

「ふん、情けない奴だ。鍛えていないからそうなるのだ」

「いやいや箒さん、鍛えてるとか鍛えてないとか関係ないからな！」

「ふん」

「・・・なんなんだよ」

途端に不機嫌になる箒。

一夏は訳分からんとため息を漏らす。

「でも一夏はすぐに僕だつてわかってくれたよ」

「そんなのは当然だろ？シャルの事ならすぐにわかるよ」

「やっぱり一夏は優しいね」

「そんな事ないだろ？」

「そんな事あるよ。僕は凄く嬉しかったよ。ありがとう、一夏！」

そのお礼の言葉に一夏は照れてしまう。そして周りに誰もいないかのようにいい雰囲気漂浮す2人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それをムスツとした顔で箒が睨んでいる。箒の視線に気付いた2人は慌てて話を戻す。

「あはは、でも懐かしいねえ4人揃ってこうやって話すのも」

「そうね。だいたい3年ぶりになるのよね」

「前にシャルロットが日本にきたとき以来だからな」

「そうだな。俺はメールでやりとりしてたけどやっぱり顔を合わせるのがいいよな」

久しぶりの幼馴染との再会に旧交を温める4人。

そしてすっかり蚊帳の外となっている男子が2名。

「俺たちすっかり忘れられてね?」

少しいじけていた。そしていじけている2人に箒が言葉を放る。

「何だお前達、まだいたのか?」

「それひどくねっ!」

「うるさいぞ」

「すみません・・・」

簾に睨まれて萎縮する2人。一夏もそうだが男性陣は簾に睨まれると何も言えなくなるのだ。男子3人で馬鹿をやり簾がそれを怒り鈴がそれを宥めるとというのが中学時代からの図式なのである。

「何はともあれ皆改めてよろしくね」

シャルロットが笑顔を見せる。この笑顔を見た他の5人もつられて笑う。シャルロットの笑顔のお蔭かこの場は収拾となった。

「ほらそろそろ席着かないと担任の先生が来るわよ」

「そうだな」

「ではまたな」

「おう」

鈴の言葉を合図にそれぞれ割り振られた席に向かう4人。

一夏とシャルロットは顔を見合わせて微笑むと自分の席へと向かった。

それを見ていた簾がまたしてもムスツとして一夏を睨んでいたのを一夏は知る由もない。

席に着くと教室のドアが開く。

担任の先生が教室に来たようだと言顔を上げる一夏だがその担任の顔をみてポカンとしてしまう。

だってそこにいたのは自分にとって家族と言える人だったからだ。

第三話 よろしく、1年1組（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

箒を書くのが難しい……。あと鈴好きの方はすみません。この話では鈴にフラグは立っていません。一夏とは親しい友人となっています。箒と鈴を親友にしたらかこうなりました。男子2人もいざ書き始めると扱い難いです……。

次回はSHRになります。担任はもちろんあの人です。

第四話 学園では家族の知らない顔が見れる（前書き）

今回はタイトル通り4つのイベントが起こります。

あと織斑家が全員出ます。

第四話 学園では家族の知らない顔が見れる

「ええっ！！何で千冬姉がここに！？」

（パアンッ！）

「いつ——！？」

「学校では織斑先生だ」

素っ頓狂な声を上げていきなり頭を叩かれる一夏。

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているが決して過肉厚ではないボディライン。長く伸びた黒髪は首の後ろで束ねている。腕を組んで狼を思わせる鋭い吊り目で一夏を睨んでいるのは間違いなく一夏の実姉である織斑千冬だった。

「1年1組の諸君、おはよう。今日から君達の担任となった織斑千冬だ。担当科目は世界史だ。これからの1年間君達を受け持つことになる。よろしく頼む。」

痛がる一夏を無視して千冬は教壇の前に立って挨拶をする千冬。その挨拶は女とは思えないほどに男前だ。一切余計なことは喋らずに凜とした出で立ちで生徒を見ている。

（今まで職業不詳だったけど、千冬姉って教師をしてたのか？しかも俺の担任？あれ？千冬姉って教員免許持ってるのか？家の事情で大学には行っただけだったはずなのに？え？え？何がどうなってるの？）

しかし一夏はこの状況をちゃんと理解できないでいた。それはそう
だ。今まで姉の職業を知らずにいてその姉がいきなり自分の担任と
して現れたのだ。しかも千冬は親が事故で亡くなったときは18歳
だったのだがその事が原因で大学には進学せずに3人の兄弟達を養
うために高校を出てからは働いていたのだ。その頃から一夏は千冬
が何の仕事をしているか知らなかった。そしていつどうやって教師
となったのかも一夏には一切合切わからないのである。

ちなみに普通は教師と生徒が親族や家族だった場合は受け持つク
ラスは別となるのが一般的だが気にしないでください。大学行つて
いないのに教師をしているのも気にしないでください。

「そろそろ入学式の時間になるので出席番号順に廊下に並べ。もた
もたせずに速やかに行動しろ」

千冬の一声で生徒達は席を立って廊下に出て行く。

「一夏、大丈夫？」

「え？あ、ああ・・・」

未だに状況を飲み込めないで呆けていた一夏だったがシャルロット
が声を掛けてきて我に返る。

「千冬姉が俺達の担任になるとはねえ」

「僕もちよつとビックリしたよ。一夏も知らなかったの?」

「つてゆーか教師なんてやってたの今さっき知ったよ」

「え? そうなんだ? 叩かれたところは大丈夫?」

そう言つてシャルロットは先ほど千冬に叩かれた頭を撫でてる。

「大丈夫だつて。それより早く廊下に並ぼうぜ」

「うん」

頭を撫でられて照れ臭そうにした一夏はそれをやめさせて席を立つ。シャルロットもそれに従つて廊下に出る。すでに2人以外の生徒は出席番号順に並んでいる。

「さつさと並べ馬鹿者共」

「はい・・・」

千冬のお叱りを受けてそそくさと列に入る一夏とシャルロット。それを見ていた鈴、弾、数馬はニヤニヤしていた。箒だけはまた不機嫌そうにしていたのだった。

入学式のために体育館へとやってきた一夏達1年生。

入学式事態はこの高校でも似たようなもののだがそこでも一夏には驚きが待っていたのだった。プログラムも進み少し退屈になって

きたところでそれは起こった。

「続きまして生徒会長歓迎の言葉になります」

司会の先生がそう言うのと1人の女子生徒が壇上に姿を現す。制服に3年生の証の赤いリボン。髪は色の薄い紫で頭の後ろで結っている。その姿はまたしても一夏の見覚えがある人だった。ってゆーか今朝一緒に登校してきたのだ。

「新入生の皆さん、入学おめでとうございます。そして、ようこそ藍越学園へ！私はこの学園の生徒会長の織斑十秋といいます。よろしく願います」

ぺこりとお辞儀をひとつしてから愛想のいい笑顔を見せる一夏のもうひとりの実姉である織斑十秋。

（十秋姉が生徒会長？いや、十秋姉は昔から器用だし頭もいいし人望もあつたから生徒会長やってても不思議じゃないけど、また俺知らなかったよ？）

また身内の知らなかった事実を知らされて呆ける一夏。

十秋は一言で言えばマイペース。周囲の人間は彼女のペースに知らず知らずのうちに巻き込まれ毒気を抜かれてしまう事がある。だからこそ指導者というか大勢を引っ張っていくような生徒会長というポジションが似合うんだろうと一夏は思うのであった。あの千冬でさえ十秋には手玉を取られるほどだ。姉妹喧嘩をしても勝つのはいつも十秋の方なのだ。百春も十秋にはちよつと甘いところある。実際織斑家の家事の類は7割近くを十秋が担当しているほどだ。一夏も家事は好きなので担当してはいるがやはり十秋には敵わないのだ。

織斑家の財布は十秋が握っているのでもはや織斑家の生殺与奪は十秋に握られていると言ってもいいかもしれない。もしも織斑家にヒエラルキーというものがあるなら天辺は間違いなく十秋のものだろう。

「最後に、学校生活が楽しく充実したものになるかは、あなた達次第です。私たちと一緒に、楽しい学校生活を作りましょう！」

思考に浸っている間に十秋の挨拶は終わりとなった。どうやら一夏は随分長い間思考に浸っていたらしい。

壇上から十秋が去っていった。その後は恙無く入学式は終わりを告げた。

入学式が終わり次に待っているのは帰りのSHR。プリントとか何枚か配られたりしたが生徒達の意識はもう別のところにある。

「配れたプリントは各自で読んでおくように。これより学園は部活動誘いの時間となる。興味がある者は参加してみるといい。参加は強制ではないので帰りたい者はもう帰っても構わない。ではSHRを終わりにする。日直はまだいないので号令はいい。では、解散！」

「「「「「はいっ！！！！」「」「」

男前にSHRを終わらせる千冬。それに礼儀正しく返事をする1年1組生徒一同。

千冬が教室を出て行ったあとは皆席を立ち親しくなった者と駄弁る者、帰る者などそれぞれの行動に移る。一夏もシャルロット、箒、鈴、弾、数馬と共に部活動誘へと繰り出すのであった。

藍越学園の新入生の部活動誘はなかなかに壮大である。料理部、茶道部なんかは惣菜の出店やお茶点での体験学習を催しているし、美術部は絵の展示、手芸部は小物の出展、吹奏楽部、軽音楽部は体育館で演奏をしているし、運動部もちよとしたゲームや新入生を交えた簡易試合などを行っている。

「これってちよとした文化祭並みの騒ぎになってるよな」

「そうよね。入学前から噂は聞いてたけどね」

「ああ、藍越学園はやたら行事に力を入れるって事らしいからなあ」

「しかし部活動誘でここまでするものかねえ」

「いいんじゃないかな？楽しそうで僕はいいと思うよ」

「そうだな、こういうのも悪くはない」

6人がそれぞれに感想を漏らす。その顔はどこか楽しそうである。入学式が終わってすぐにちよとした祭りが始まったようなものだ。テンションも上がるうというものだ。

6人は手始めに運動系の部活から回る事にした。

グラウンドで野球部が催している的当てに全員で挑戦。持ち球4球で抜いた枚数に応じて景品が貰えるというシステムだ。2枚抜けばジュース1本、3枚で2本、4枚でジュースとお菓子を詰め合わせた大袋1つといった感じだ。

ちなみにそれぞれの結果は一夏が2枚、シャルロットが1枚、箒が3枚、鈴が4枚、弾が0枚、数馬が1枚だ。

「くそお、フレームに邪魔をされなければ俺もジュース貰えたのに！！」

「男子はもつとしっかりしなさいよね。あたしと箒が1位2位ってゆーのはどうなのよ」

「男子たるものこれぐらいできないでどうする！」

「お前らの運動神経がずば抜けてんだよ。ってゆーか俺と数馬だけ何も無しか？デユノアさんは篠ノ之が取ったジュース貰ってるし」

「箒ありがとうね。次何か景品取ったらお返しするね」

「気にするな、2本もいらなかったしな」

「シャルも惜しかったよな。もう少し力籠めて投げればいけたんじゃないか？」

「そうだね。最後は的の前で落ちちゃったし」

「でも0枚の弾よりマシね」

「弾はノーコン過ぎだろ？何であんな1m近くも的から外れるんだ？」

「あれには思わず笑っちゃったなw」

「お前は何で名前が『弾』なんだ？」

「名前は関係ねえーだろ！？」

「投げる前に自信満々でこれからは『藍越の赤い弾丸』と呼んでくれって言ってたよなw」

「やめてくれ！それはもう黒歴史だ！！」

「……あははははははっ」「……」

鈴がゲットしたお菓子を全員で分け合って食べながら先ほどの戦果を話す6人。その表情は楽しげだ。弾を除いて。

アイキヤッチしりとり

千冬「鉄の女と呼ばないで」

百春「でっていうって何語だ？」

その後サッカー部で男子3人と鈴がサッカー部のレギュラーキーパーを相手にPK勝負、男子3人は止められてしまったが鈴だけはゴールを奪う。景品であるアイスをゲットした。女子に負けてしまつてキーパーはもちろん男子3人もショックを受けていた。ちなみにシャルロットと箒はスカート気にして参加せず。鈴は下にスパッツを穿いていたので参加しました。

次に訪れたのはバスケット部。ここではハーフコートを使って5分間の3オン3の簡易試合。参加するのは一夏、鈴、数馬だ。シャルロットと箒は先ほどと同じ理由で不参加。弾はさつきから良い所無しで自信をなくしてしまい不参加。勝てば全員分のリングォ飴をゲットできる。何故リングォ飴なのかはツッコまないで。

「一夏、行つたぞ！」

「鈴、パス！」

「任せて！」

先ほどから大活躍の鈴。鮮やかなシュートを決める。一夏も負けじと3ポイントラインの外からシュートを決め、数馬も相手の攻撃からうまくボールを奪っている。相手はレギュラーではないがバスケット部の部員だ。それを相手に3人は善戦している。残り時間はあと僅かで10対7で一夏達がリード。しかしここでちょっとした事故が起こった。

相手チームのシュートが外れてリバウンドに行つた一夏だったが相

手の競り合いに負けてバランスを崩し倒れてしまう。そこで思わず手を床につけたときに痛みが走った。どうやらついた角度が悪かったらしく突き指をしてしまったのだ。

「一夏、大丈夫!？」

「ああ、平気だって。ほっときゃそのうち治る」

「ダメだよ!ちゃんと治療しなきゃ!!保健室行こう!」

「そんなに騒ぐほどのモンじゃ・・・」

「いいから行ってきなさいよ。悪化させたら元も子もないでしょ」

「そうだな、行っとけ一夏。試合はもう俺達の勝ちだ」

「そうだな、そうしようかな?」

「心配するな一夏!お前の分のリングコ餡は俺がちゃんと賣っておくから!」

「何だ弾、いたのか?」

「ひどっ!」

「ああゴメン『藍越の赤い弾丸』」

「お願い!もう忘れてそれ!」

「うるさいわよ『藍越の赤い弾丸』」

「黙れ『藍越の赤い弾丸』」

「周りに迷惑だぞ『藍越の赤い弾丸』」

「えつと・・・、落ち着いて『藍越の赤い弾丸』」

「だからやめろおお！！！！そんな馬鹿な男はもう死んだんだああ！！！！！！」

突き指も忘れて馬鹿話をする6人。

結局一夏はシャルロットと共に保健室に行くことになり鈴達はまだ少し運動系の部活を見ていき後で合流することになった。箒もついていくと言ってきたが一夏はシャルロットだけでいいと断つたら箒はまた不機嫌そうになって『フンッ！』と言って去っていった。一夏はまた訳がわからずにため息を漏らす。それをシャルロットは苦笑いで見ていた。

一夏とシャルロットは保健室の前にやってきた。シャルロットがドアをコンコンとノックする。

「入っていいぞ」

と男性の声。一夏はこの声に聞き覚えがあった。

（ん？今の声って何か百春兄に似てたような・・・）

「失礼しまーす」

シャルロットがドアを開ける。

するとそこには白衣を着て椅子に座っている1人の男性がいた。髪は色の少し色の抜けた茶髪。眼鏡を掛けていてその奥にある目つきは鋭い。

「何だ一夏にシャルロットか、どうした？」

ぶっきらぼうな物言いで対応してきたのは一夏の実兄である織斑百春だった。

「百春さん？」

「百春兄、何でここにいるの？」

「何でも何も、俺はこの学園の保険医だぞ。保健室にいてもおかしくはないだろ」

さらっと言つてのける百春。

（え？百春兄が保険医？確か医者になるために大学に行つて去年卒業したらしいけどそのあとの事は俺も聞かされてなかったんだよね？いつも朝はスーツ着て家を出て行つてたからちゃんと仕事はしていると思つてたけどここで保険医なんかやつてたのか？）

百春は小さい頃から医者になるのを夢見ていた。しかし17歳のときに親は事故で他界。一時期はその夢を断念していたが千冬が説得して大学に入って医学の勉強をしていたのだ。学費は千冬の稼ぎと百春自身がバイトをして稼いだ金で賄っていた。去年に大学を出て4月からはスーツを着て仕事に行っていたので一夏は普通に就職し

たのかと思っていたのだ。

上の姉は自分の担任で下の姉は生徒会長、兄は保険医と一夏にとって本日3度目の身内の知られざる事実だ。シャルロットも百春を見て驚いている。

「で、どうしたんだ？怪我でもしたからここに来たんだろ？」

「あ、はいバスケの簡易試合してるときに突き指してしまっただけです」

一夏の代わりにシャルロットが答える。

「そうか。どれ、指を見せろ」

突き指した指を診察する百春。

（しかし昔からそうだけど百春兄って言葉がぶっきらぼうすぎるんだよね。目つきも結構するどいし医者としてはもうちょっと表情を和らげた方がいい気がするけどなあ。あ、でもニコニコしてる百春兄もそれはそれで恐いかも）

「何を考えてるかは知らんが、医者を敵に回すような事は考えん方がいいぞ」

「べ、別に何も考えてねえよ百春兄！」

「そうか？ならいい。あと学校では織斑先生と呼べ」

「はい……。あ、でもそれだと千冬姉と被るんだけど……」

「そのときは下の名前でもいい。公私の区別はちゃんとつける。いいな織斑」

「わかりました、百春先生」

「うむ。突き指は大した事はないな。冷やしてテーピングをすれば大丈夫だろ」

言い方は相変わらずぶっきらぼうではあるがテキパキと治療を行う百春。よく言う『口は悪いけど腕は立つ』というやつである。

「ほら、終わったぞ」

「あ、ありがとう百春兄」

「学校では先生を付けろと言っただろ」

「はい、百春先生」

「よし。部活動誘まだ見て回るなら運動系はやめておけ。今日はあまり無茶はするな」

「わかってるって」

そう言って保健室を出ようとする一夏とシャルロット。

「ちょっと待て、一夏」

「ん？」

急に百春に呼び止められる。振り返ると先ほどまで無愛想な顔をしていた百春が少し表情を和らげていた。

「この学園はどうだ？楽しめそうか？」

いきなり突飛な質問をされて一夏はキョトンとするが返事は決まっていた。

「ああ、楽しいよ。やっぱあのときに就職選はないでよかったよ」

「そうか。ここは俺の母校でもあるからお前にも気に入って貰えるならそれでいい」

「珍しいな、百春兄がそんな事言うなんて」

「ただの気まぐれだ。生意気な弟だがお前は大事な家族だからな」

「あれ？公私の区別は？」

「お前らが黙っていればそれで済む」

「そうだな、ははははっ！」

「話は終わりだ。俺は仕事に戻る」

「わかった。シャル行こうぜ」

「うん」

保健室をあとにする一夏とシャルロット。

「ねえ、一夏」

「ん？どうしたシャル？」

「この学園は楽しい？」

百春と同じ質問をしてくるシャルロットに首を傾げつつも答える。

「ああ、楽しいよ。箒に鈴、弾や数馬もいるし。そして何より」

シャルロットの手を握る一夏。

「お前がいるからな」

笑顔でシャルロットに答える一夏。

「うんっ！！」

そしてシャルロットも笑顔で一夏に答える。

「よし、鈴たちと合流しようぜ！」

「そうだね！」

一夏とシャルロットは手を繋いだまま歩き出した。そして鈴達と合流し2人はこのお祭りを楽しむのであった。

第四話 学園では家族の知らない顔が見れる（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

タイトルも長くなったけど話もちよつと長くなってしまった・・・。

十秋と百春の事はある程度考えてはいたのですが執筆し始めるとなかなか持つて行くのに苦労しました。

親と死別したときは千冬１８歳、百春１７歳、十秋１１歳、一夏９歳の設定です。千冬の担当科目は体育か世界史か現国で悩みましたが世界史にしました。理由は原作は世界一の称号持つてゐるから世界にも多分詳しいから世界史でいいかつと。

ちなみにこの十秋と百春の２人はあるエロゲーの登場人物をモデルにしています。そのうち設定とか書くつもりなのでモデルはそときにわかんと思います。キャラデザはアニメのＩＳと同じで倉嶋丈康なので問題はないと思います。

さて、今考えている悩みは山田先生をどう登場させるか・・・。好きなキャラなんですけどね、どうも普通の高校だと副担任って目立たないんだよね・・・。

あと部活勧誘の件は僕の知り合いのライターさんのＳＳを真似て執筆しました。こんな部活勧誘本当にあつたらいいのにな

キャラ紹介（前書き）

今まで登場したキャラを紹介します

キャラ紹介

織斑 一夏 15歳

主人公。織斑4兄弟の末っ子。原作とは違い両親は9歳のときに飛行機の墜落事故で亡くなっている。両親の仕事が外交官だったため小さい頃はよく両親や兄弟達と海外へ行っていてISヒロイン数人とはそのときに出会っている。よく海外に行っていたおかげか多くの外国語を話せる。

中学卒業の際、千冬達に養ってもらっていることを引け目に感じ就職を考えていたが千冬たちの説得により自分の無数の未来の可能性を模索するために学費が安く進学率、就職率の高い私立藍越学園に入学する。

幼い頃から箒の実家の道場で剣道をたしなんでおり、千冬から体術も学んでいたので潜在的な強さは相当なもの。趣味は家事全般でマッサージも得意。

整った容姿に加え人の心の機微に鋭く、境界線の無い優しさとノリの良さもあって男女問わず人気がある。原作ほどではないが恋愛方面は鈍感で箒の好意には気付いていない。

シャルロットとは特に仲が良く、傍からみると恋人同士のような振る舞いを見せているが付き合っている訳ではない。一夏自身、シャルロットには淡い想いは抱いているがまだハッキリと自覚はしていない。

シャルロット・デュノア 15歳

本作のメインヒロイン。フランス人。原作とは違い両親はちゃんと結婚していて愛されて育っている。

幼少期に一夏がフランスを訪れた際に公園で母と逸れて泣いていた彼女に話しかけ一緒に母親を探してくれた事がありそれが縁で一夏のファースト幼馴染となった。一夏にだけは『シャル』という愛称で呼ばれている。親同士が仲が良く小さい頃からよく一夏を訪ねて日本に来ていた為、箒や鈴とも顔見知りで仲が良い。

中性的な顔立ちで髪は濃い金髪で黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ね体型もスマートである。機転の効く性格で包容力があり、誰に対してもさりげなく気を回す事のできる性格の持ち主。

日本語を喋るときは一人称が『僕』で口調も少し男子口調である。これは日本語を覚える際に子供のころの一夏の口調を真似て覚えた為である。

一夏には子供のころから多大な好意を寄せており自分を笑顔にしてくれる彼の事が好きである。その笑顔はよく一夏をドキッとさせている。一夏同様、その想いをハッキリと言葉にはしていない。

一夏曰く「怒ると凄く怖い」。そのときに見せる笑顔を一夏は『ブリザードスマイル』と呼んでいる。

織斑 千冬 24歳

一夏の姉で織斑家の長女。彼のクラスの担任でもある。担当科目は世界史。一夏からは「千冬姉^{ちふゆねえ}」と呼ばれている。学園ではそう呼ばれる度に「学園内では織斑先生と呼べ」と訂正している。

両親との死別後、4人兄弟の家長として織斑家を支えてきた苦労人でもある。その為家族に対する愛情は深くそれを表に出すのを嫌うので兄弟達には厳しく接している。非常に厳しい性格で、教師としても姉としても厳格な人物。一夏には公私共に厳しく接するが内心はとても大切に思っている。そのためブラコンではないかと言われるが本人を前にして言うところらしい事になるという。

厳格な人物だが家にいるときは結構だらしなく家事もできない。その為か家事の大半を任されている次女の千秋には弱く、彼女と喧嘩をしてもいつも負けている。その事で百春からもよく小言を貰っていて憎まれ口を叩き合うが仲は良い。

織斑 百春 23歳

オリキャラその1

容姿イメージ：『明日の君と逢うために』の夕霧直輝

一夏の兄で織斑家の長男。藍越学園の保険医を勤めている。一夏からは「百春兄^{もちはるにい}」と呼ばれている。

鋭い目とぶつきらばうな物言いだ、保険医としての腕は確かで周囲の信頼は厚い。『口は悪いが腕は立つ』という言葉の代表例みたいな人物。一夏からは保険医なんだからもっと笑顔で生徒に対応した方がいいんじゃないかなと思われているが本人は気にしていない。

千冬同様、家族に対する愛情は深い。特に千秋には甘い。シスコンと言うと「麻酔無しで心臓を摘出するぞ」と脅してくる。一夏の事も「生意気だが大切な家族だ」と言っている。千冬対しては憎まれ口をよく言うが仲は良い。

一夏と同じく心の機微に鋭く外見もいいので学内にファンは多い。

織斑 千秋 17歳

オリキャラその2

容姿イメージ：『明日の君と逢うために』の泉水咲

一夏の姉で織斑家の次女。藍越学園の生徒会長を勤めている。一夏

からは「とあきねえ十秋姉」と呼ばれている。

一言で言えばマイペースで周囲の人間は彼女のペースに知らず知らずのうちに巻き込まれ毒気を抜かれてしまう事がある。

一夏と共に織斑家の家事を任されていて大半は彼女が担当している。織斑家の財布は彼女が握っている。織斑家の生殺与奪は彼女に握られている。

一夏同様、体術を会得していて千冬にも負けないほど強い。

頭もよく器用で物事のイニシアティブを握っているタイプで一見完璧超人のようだが実は胸が小さい事を気にしているなど女の子らしい悩みも持っている。ちなみにその事を指摘すると物凄い笑顔で「ぶち殺すよ」と言われる。本家の『ブリザードスマイル』の使い手でシャルロットの『ブリザードスマイル』も彼女直伝である。

篠ノ之 篇 15歳

一夏のセカンド幼馴染でクラスメイト。長い黒髪とポニーテールが特徴で、年齢以上の胸の発育具合がコンプレックス。

実家は剣道の道場でもある篠ノ之神社。一夏とは小学校1年から6年までずっと同じクラスだったが中学の3年間はずっと違うクラスだった。

幼い頃から剣道をたしなんでおり、その強さから「男女」といじめられたが一夏に庇われたことがある。そのころから現在まで心底から彼に惚れているが彼の前ではどうにも素直になれず、シャルロットの存在もありつい暴力的な態度をとってしまうことが多い。その為が一夏の事ではシャルロットからはいつも1歩遅れてしまうので彼は箒の好意には気付いていない。しかし一夏と過ごした時間の長さではシャルロットには負けていない。恋敵ではあるもののシャルロットとは仲が良く鈴とも親友同士である。中学時代は弾や数馬

とも親交がありよく男子3人の馬鹿に付き合わされていた。弾と数馬に対する態度はかなり辛辣である。

ファン・リンイン
鳳 鈴音 15歳

一夏のサード幼馴染でクラスメイト。中国人で周囲からの愛称は『鈴^{りん}』である。ツインテールが特徴で基本的にはサバサバとした性格。可愛いしい見た目とは裏腹に激しい気性の持ち主。小柄な体格で自他共に認めるほどフットワークが軽い。原作とは違って一夏に惚れてはおらず貧乳も気にしてはいない。むしろ「あたしは小柄だから可愛いの!」と開き直っている。

一夏と篤が小学校3年の頭に一夏達のクラスに転入してきて意気投合したのがキツカケで一夏や篤と親しくなった。一夏とは小学3年から中学3年まですべて同じクラスだった。今では篤と鈴は親友となっている。シャルロットとも一夏を通じて顔見知りである。

一夏との事で篤を応援している。なかなか進展しない事にヤキモキはしているが傍から見てもそれを楽しんでいる。

鈴の実家は『^{フォンファン}鳳凰』という中華料理屋を営んでいる。一夏を含め織斑家がよくお世話になっている店である。

五反田 弾 15歳

一夏の悪友でクラスメイト。一夏達とは中学時代からの友人でよく数馬を含めて馬鹿をしていた。キャラの所為か損な役回りを担当する事が多い。

実家は『五反田食堂』という定食屋を営んでいる。鈴の家と同様で

織斑家御用達の店。家での立場は弱く特に妹には頭が上がらない。
趣味はベースを弾くこと。あまり上手くはない。

御手洗 数馬 15歳

一夏の悪友でクラスメイト。原作はほとんど名前のみの登場なので
オリキャラ的な扱い。一夏達とは中学時代からの友人でよく馬鹿を
していたが、弾とは違い周囲への根回しと火消しには秀でているた
め損な役回りを担うことは少ない。

趣味はギターで腕前は1級品。

ちなみに十秋に惚れている。

キャラ紹介（後書き）

とりあえず以上です。

登場してないセシリアとかラウラとはどうすっかなあ？

ある程度考えてはいるんですけど・・・。

あと十秋のキャラが楯無と被るところ多いので彼女は出さないかもしれません。貧乳がコンプレックスも鈴と被ってるし、鈴好きのセカン党の方には申し訳ありませんが鈴のその設定はなくしました。彼女の魅力とかアイデンティティーとか何処に行った？ 的になってすみません。

第五話 思い出の料理（前書き）

登校初日は今回で終了です。

今回は料理がテーマ。僕自身は簡単なものしか作れないのでレシピを見ながら執筆しました。

今回は筭にもちよつと活躍してもらいます。といってもほぼ談議がメインですが・・・。

第五話 思い出の料理

一夏の突き指も大したこともなかったので箒達と合流した一夏とシヤルロットは文化系の部活動も堪能した。料理部の惣菜を買って食べ、茶道部のお茶点を体験し、美術部の絵を観覧し、体育館で吹奏楽部の演奏と軽音楽部のライブを聞いて盛り上がったりなどなど。一通り部活動誘を楽しんだ一夏達6人は藍越学園をあとにして下校を始めた。

「やっぱりあのギターテクニクが最高だったな！」

「そうか？俺はやっぱりベースの方がいいと感じたけど？」

弾と数馬の2人は軽音楽部の演奏について話していた。2人は楽器を弾くのが趣味なので自然と話がそちらに行ったようであれこれと先ほどのライブについて熱く語っている。そして2人とは帰り道が途中で分かれるので一夏達とは途中で別れる事となった。

「じゃな」

「おう」

「また明日」

「うむ」

「さよなら」

「じゃーねー」

弾と数馬に別れを告げる一夏達。

そのあとも4人は料理部の惣菜の話に花を咲かせていた。

「やっぱり日本の料理はおいしいね。僕は肉じゃががよかったと思うなあ」

「俺はあの鯖の味噌煮が特によかったなあ。食ってて白米欲しくなったぞ」

「鰯の煮付けもなかなかであったな。今度自分でも作ったみるとしよう」

「きんぴらもなかなかよかったわね。やっぱり中華とは違う趣があるわよね」

4人がそれぞれ気に入った料理の感想を述べている。料理部の販売していた惣菜は家事が得意な一夏を唸らせるほどであったのだ。そして一夏はここである事を思い出していた。

「そういえば昔フランスのシャルの家に遊びに行ったときに俺に手料理作ってくれたよな。あの『鶏肉のポトフ』は絶品だったぞ。あれは本当に美味かったなあ」

一夏はフランスでシャルロットに作ってもらった料理を思い出していたのだ。母親にアドバイスを貰いながら一生懸命に料理をしていたシャルロットの姿は本当に愛らしく、それを見ていた一夏は胸が温まるようであった。料理ができていざ食べる時になるとシャルロットは不安そうに一夏を見つめていたが一夏が一口食べてから『C'est bon!（セ ボン）』とフランス語で美味しいと言

ったときは凄く嬉しそうにしていた。そのときの笑顔も一夏はよく覚えていたのだ。

「そ、そう。あれは『プーレ・オ・ポ』とも言ったよ。フランスの代表的な家庭料理なんだ」

「そうだったのか。今度また作ってくれよ。美味かったからさ」

「う、うん。わかったよ一夏」

「それと、シャルは日本料理には挑戦しないのか？」

「え？日本料理？そういえば日本の伝統料理ってすごくいいよね。せつかくだから僕も作れるようになりたいなあとは思ってるよ」

「作れるようになったら是非食べてみたいな」

「う、うん。練習して作ってみるよ。できたら食べてくれる？」

「おう！楽しみにしてるぞ！」

「・・・・・・・・（ムスッ）」

「なんなら箒にコーチしてもらったらどうだ？」

「え！？私がか！？」

そんな一夏とシャルロットの遣り取りをまたムスツとした顔で箒が見ていたが突然一夏から予想外の提案をされて驚いてしまう。

「ほら、箒も料理上手だろ？お前がコーチをすればシャルも心強いだろうし、前にお前が作ってくれた肉じゃががあったろ？あれめっちゃ美味かったぞ」

中学時代に一夏は箒の家にお呼ばれした際に箒の作った肉じゃがを食べたことがあった。そのときの肉じゃがは正直織斑家の肉じゃがよりも美味かったと一夏は思っている。十秋が作った肉じゃがよりも、自分が作った肉じゃががよりまだ。

「そ、そうか。よ、よく覚えているものだな・・・」

「いや、忘れないだろ？幼馴染の料理なんだし、すごく美味かったしな！」

「・・・・・・・・」

ポニーテールをいじりながら頬を少し赤く染めて一夏を見つめる箒。褒められて照れているのだが一夏の前では素直になれない性格のおかげか少々キツイ目で一夏を睨んでしまう。一夏も何で睨まれているのかわからずに首を傾げてしまう。それを見かねた鈴が助け舟を出す。

「箒、せっかくだから教えてあげたら？シャルロットも箒がいれば百人力でしょ？」

「そうだね。箒、お願いできるかな？」

「そ、そうか・・・。ふふっ、仕方ないな。よし、では今度私が教えてやるっ」

「よろしく願います、箒先生」

「せ、せんせい・・・、やめろ、むず痒い」

「何だ？照れてんのかお前？」

「う、うるさい!!」

「ほら箒、落ち着きなさいって。シャルロットと一夏もあまりからかわないの」

「うん。ああそうだ、鈴も一緒にやろうよ」

「え？あたしも？」

「鈴も中華料理店の娘だから料理できるよね。これを機に中華料理も教えて欲しいんだけど」

「そうなの？じゃあ、今度3人で料理大会でもやりましょうか？」

「それはいいな。ではそうするでしょう」

「うん！」

「そんなときゃあ呼んでくれよ！是非食べてみたい!!」

「男は邪魔だ（よ）」↑箒と鈴

「そんな」

「冗談よ、箒だつて一夏に食べて欲しいのよ。ね？」

「なっ……！」

「そうなのか！？」

「むう……、まあ、仮にも幼馴染だからな、食べさせてやらん事もない」

「うんうん！俺はいい幼馴染持ったぜ！ありがとう箒……！」

一夏はいきなり箒の手を握る。途端に箒はボツと顔を赤くする。それを知ってか知らずか一夏は彼女の手をブンブンと振るう。シャルロットも鈴それを見て笑っている。

「手を振るうな！馬鹿者……！」

「ああ、悪い悪い。今離すよ」

「あっ……」

箒が嫌がってると思ったので一夏は箒の手を離す。しかし一夏の手が離れると箒はちよつと名残惜しそうに声を漏らす。一夏もどうかしたのかと箒を見るが箒はそっぽ向いてしまう。

そうこうしているうちに鈴と箒と別れる道まで来ていたのだった。

「じゃ、あたし達はここで！」

「また明日な」

「おう、じゃあな」

「箒、鈴、また明日ね！」

挨拶を交わし箒と鈴は去っていった。

アイキャッチしりとり

弾「弾だんです！弾たまじゃないです！」

数馬「すっかり忘れられてたぜ・・・」

「さて、行こうぜ」

「うん」

そして一夏とシャルロットは並んで歩き出す。自然と2人の距離は肩が触れ合いそうなほどに近くなる。2人並んで歩くときに1番自然な距離。2人きりになったおかげか距離のおかげか2人はお互いを意識するようになる。一夏がチラッと横目で見るとシャルロットも同じようにこっちを見ている。頬を赤く染めて視線を戻す2人。またしても傍からみれば初々しいカップルのようである。

（そういえば、シャルに会ったのは実は3年ぶりなんだよなあ。メールの遣り取りはずっとしてたけど結構長い間顔を合わせてなくて今朝再会したけど懐かしい感じはしなかったな。3年間離れていたとは思えないくらいだった。あと、あまり考えてなかったけどシャルってすごく大人っぽくなったというか可愛くなったよなあ。もともしャルは可愛い娘だとは思ってたけど今はさらに可愛く見えるなあ……。っていかん！何か意識しちゃってドキドキが止まらない！）

（一夏と会うのも3年ぶりかあ。メールの遣り取りをずっとしてたからかな？今朝会ったときも懐かしい感じはしなかったなあ。それに凄く格好良くなってたし。3年前はまだあどけなさもあったけど今は大人っぽくなって凄く素敵に見える……。って、僕何を考えているんだろう！）

2人揃って互いを意識しまくっている。3年という歳月は人を変えるものだ。ましてや淡い想いを抱いている相手が成長した姿を見ると意識してしまうの当然といえば当然なのだ。

「そ、そういえばさあ！」

「ひゃいつ！？」

「ど、どうした？変な声出して？」

「な、なんでもないよ。なんでもないよ？ちょ、ちょっと考え事してたから、それだけ」

「そ、そうか。それでさ、聞きたい事があるんだが」

「な、なにかな？」

「シャルって何処に住んでるんだ？ずっと一緒に帰り道みたいだけど？」

意識を断ち切るかのように一夏は尋ねた。一夏はシャルロットの住まいが何処なのかをまだ聞いていなかったのだ。どうやらここまで帰り道は同じのようですつとあの2人の自然な距離を保ちながら並んで歩いていた。さすがに一夏も気になったので聞いてみたのだった。

「ああ、そういえば言っていなかったね。僕は藍越学園の寮に住んでるんだよ」

「そうなのか……。だから帰り道はこっちなんだな」

「そうなんだ」

「アレ？ちよつと待てよ？確か寮の場所って……」

「うん、一夏の家のすぐそばだよ」

そうなのである。一夏の家である織斑家は十字路になっている結構広い通りの交差点の角にあり藍越学園の寮はその対角線側にあるのである。つまりは凄く住んでいるところは近く帰り道はほぼ一緒なのだ。

「こんなに近くに住んでいるとはな」

「ごめんね？今朝も言っただけど驚かせたかったから」

「いや、それはもういいんだ。そっか、ならいつでも会えるんだよな」

「そうだね。こんなに近くに住んでるんだし」

「3年間会えなかったけどこれから違うよな？」

「うん！」

頬を少し赤く染めて嬉しそうにシャルロットはうなずく。シャルロットの笑顔にまたしても一夏は魅了されていた。一夏は一生この笑顔に敵う事はないだろうなあと思うのであった。やはり自分は笑顔のシャルロットが大好きなのだと思改めて実感したのだった。

「明日は一緒に学校行こうぜ。せつかくこんなに近くに住んでるんだし」

「うん、わかった。それじゃ、また明日ね」

「おう、じゃあな」

手を振ってシャルロットは寮の方へ駆けていった。一夏も手を振ってシャルロットを見送る。

シャルロットの姿が見えなくなると一夏も家の中へ入った。そして普段着に着替えてから冷蔵庫を開けて今日の夕飯のメニューを考える。先ほど部活動誘を回っているときに十秋から「今日ちよつと遅くなるから夕飯は一夏が作って」とメールが届いたので今日の夕飯作りは一夏の仕事だ。千冬も百春も帰りが遅くなることはあるがいつも家にはちゃんと帰ってくるので夕飯はいつもちゃんと4人分作

るのだ。

「えーっと、買い物は昨日行ったから結構材料はあるし。何作ろうかなあ？鶏のもも肉がけっこうあるしこの鶏肉使ってなんか作ろうかなあ？野菜も人参とかカブとかセロリとかあるしこれも使って・・・あ！そうだ！！」

一夏は何か閃いたように声を出す。先ほど会話にも登っていた『鶏肉のポトフ』の事を思い出したのだ。材料は今確認したところ問題なくある。

「作ってみるか。シャル作ってくれたやつみたいに美味しくしてみせるぜ！！」

今日の織斑家の夕飯は『鶏肉のポトフ』に決定。

4人揃って美味しく頂いたそうだ。

「シャルが作ってくれたやつはもつと美味かったんだよね。隠し味に何か入れてんのかな？うん・・・、わからん。今度シャルに聞いてみるか」

一夏はひとり出来栄に納得できていないでいたがシャルロットに今度教えてもらう事にした。

ちなみにシャルロットが作ったポトフに入っていた隠し味は簡単だ。

それは

『愛』
だ。

第五話 思い出の料理（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

ポトフに関してはかなりネットで調べました。僕自身がフランスの家庭料理を知らなかったので・・・。

しかし・・・完全にセシリアとラウラを出すタイミングがわからなくなっちゃった・・・もうね、一夏、シャルロット、箒、鈴、弾、数馬の6人で落ちついちゃったんだよねあ・・・この6人グループがいい感じで書きやすいんですよ。僕はこの6人が並んで走って『SUPER ∞ STREAM』を脳内再生してるくらいなんですけどどうしよう・・・。

何かこうしたらどう？的な意見とかありましたら感想とかと一緒にくだされば嬉しいです。

第六話 織斑家の休日 前編（前書き）

本当は1話にまとめたかったのですが長くなったので前後編に分けました。

織斑家の休日の風景をお楽しみください。

第六話 織斑家の休日 前編

「ん・・・、んん・・・」

眩しい感覚に一夏は目が覚める。

入学式から3日が経ち今日は日曜日だ。

基本的に、彼は寝起きが良い。織斑家で寝起きの良さは彼がトップである。

ちなみに2位は百春で3位が十秋、最下位は千冬である。

一夏は枕もとに置いてある目覚まし時計を手元に持ってくる。

只今の時刻はAM 6:30。

休日なのに偉い早起きだ。

「習慣ってやつかな」

ポリポリと頭を掻きつつ嘆く。とはいえ、起きてしまったものは仕方ないのでベッドから起き上がって窓を開ける。

入学式の日と同じで天気も雲一つ無い快晴で春独特の風がそよそよと一夏の髪を撫でた。

「さて、着替えて朝飯作るか」

一夏は自室をあとにした。

歯を磨き、寝癖を直し、いつものようにスッキリしたところで一夏は朝食を用意する。

今日の朝食はご飯にわかめと油揚げの味噌汁に焼鮭と和食の王道と

呼べるメニューだ。

「おはよう一夏」

「おはよう、ふあ〜」

「おはよう百春兄、十秋姉」

百春と十秋が起きてきた。

百春はもう顔も洗って寝癖も直して普段着に着替えているが十秋はまだ半覚醒状態らしくまだパジャマで顔も洗っていない状態だ。生徒会長らしからぬその怠慢な態度は学校の生徒達には見せられない程である。

「ほら十秋、顔を洗ってスッキリして来い。少しだらけ過ぎだぞ」

「う〜・・・」

なにやら唸りながら廊下をぺたぺたと歩いていく。

「十秋」

「あい〜？」

「転ぶなよ」

「うい〜」

本当に分かっているのかと思う返事をして洗面所へ向かう十秋。

百春はそんな十秋を心配してか声をかけた。普段はぶっきらぼうだが十秋には甘いのである。

「百春兄、朝飯できてるよ」

「ああ、いたどころ」

席に着いて朝食を食べ始める。

そこに顔を洗い終わった十秋もテーブルに着く。

「いただきます」

「おう、召し上がれ」

「うむ」

只今の時刻A M 7 : 23

十秋も朝食を口にする。

ここで一夏も食べ始める。

しばし兄弟3人の会話。

「しかし、たまには手抜きでもしたらどうだ？これを用意するのは面倒じゃないか？」

「別に苦じゃないし、朝飯はちゃんと摂った方がいいだろ？」

「まあな。保険医という立場から言わせて貰えば朝食はちゃんと摂るべきだな」

「そうそう、おいしいものを朝から食べると1日元気が出るよね」

」

「十秋姉の方がもつと美味しいもの作れそうだけど？」

「あたしは一夏みたいに朝すんなり起きれないからね」

「この家の女2人は寝起きが悪いからな」

「でも、あたしは千冬姉さんほどじゃないから」

「確かに千冬姉は・・・」

天井を見上げる3人。きつと千冬はまだ夢の中。休日なのでまだ許される時間であろう。

「あと何時間で起きてくるかな？」

「昼まで起きてこんだろ？」

「さすがにそこまでは・・・、でもそうなると千冬姉の分の朝食が勿体無い事に」

「9時くらいには起きてくると思うよ。」ご飯はレンジで温めれば済むよね」

「そうだな。それより百春兄と十秋姉は今日は何か予定あるの？」

「あたしは特にないかな。ちょっと宿題多く出てるからそれを済ませちゃわないといけないし」

「俺はちよつと片付けておきたい仕事がある。だから15時くらいまでは部屋にいる」

「そつか。じゃあ、昼飯は十秋姉に頼んでいいか？俺は昼ごろに弾の家に遊びに行くから昼飯もあいつの家の店で食ってくるからさ」

「うん、わかったよ」

食事中の適度な会話が進み3人とも優雅に朝食を取るのであった。

只今の時刻AM8:07

朝食を食べ終えてから百春は部屋に戻り、十秋も一度部屋に戻って着替えるとの事。

3人分の食器を洗い終えて一夏はちよつと一息つく。

「ふう、やっぱり食後は緑茶だな。はー、落ち着く」

目を細めてお茶を啜るその姿はかなり爺くさい。

それでいいのか15歳。

「いちか」。あたしお洗濯済ませちゃうからお掃除やってくれるー？」

遠くから十秋が一夏に呼びかける。どうやら着替え終えて洗濯を始めるようだ。

「はいよー」

掃除を任された一夏はまず1階から掃除を開始する。

家事の昔から一夏と十秋が担当してきたのでこの辺りのコンビネーションはかなりのものだ。

自分が洗濯ならもう1人は掃除。姉弟の阿吽の呼吸だ。

1階はリビングに両親の寝室だった部屋に書斎に客間があつてそれなりの時間を要する。

両親の寝室は定期的に掃除をしているので6年たった今でも綺麗なままである。

その部屋は和室なのでそこに仏壇も置いてある。

「~~~~~」

鼻歌を歌いながら掃除機をかける一夏。

その姿はさっきのお茶を啜っていた爺くさい姿とは違い何やら主婦然としている。

本当に15歳の男子高校生なのかと思うほどだ。

でも一夏自身は家事が趣味なのでこれはこれで本人が楽しんでいるのだからいいことなのである。

アイキャッチしりとり

一夏「全開で換気だぁー！！！！」

十秋「あんばん、食パン、カレーパン、あなたはどれが好き？」

只今の時刻A M 9：00

1階をたつぷり時間をかけて掃除をした一夏は2階へ上がってくる。
2階には兄弟4人の各部屋があつて各々がそこで生活をしている。
百春は自分の部屋は掃除は今度でいいと言われ、千冬はまだおそろく睡眠中なので邪魔はできない、十秋はあとで自分ですから掃除機だけ部屋の前に置いておいてとのことだ。
なので一夏は自室と廊下を掃除する事にする。

「~~~~~」

今度は口笛を吹きながら掃除機をかける。

自室はいつもまめに片付けをしていたので掃除機をかけただけで終わりあとは廊下だけだ。

千冬の部屋の前を掃除していると千冬の部屋のドアが開いた。

「ん……」

唸り声を上げて出来たのはもちろん千冬だ。

見た目は明らかに寝起きで虚ろな目をして髪の毛はボサボサ、着ているのもタンクトップにショートパンツとかなりラフである。

「おはよう、千冬姉」

「おゝ・・・」

「ごめん、掃除機煩かった？」

「んゝ・・・」

「起きたなら朝飯食っちゃってくれる？リビングのテーブルにラップして置いてあるから冷めてたらチンして食ってくれ」

「おゝ・・・」

フラフラとした足取りで1階へ下りていく千冬。

やはりその姿は学園の生徒や教師には見せられないほどにだらしない。

しかしそれほど千冬が気を抜ける場所なのであるこの織斑家という場所は。

「さて、千冬姉の部屋はつと」

掃除をしているついでに千冬の部屋も掃除が必要か確認するために開けっ放しになったドア越しに千冬の部屋を覗き見る一夏。

「うわあっ」

部屋はかなり汚かった。

乱雑に散らばった衣服の中には下着まで放り出してある。

部屋の真ん中には小さいテーブルがありその上にはビールの空き缶に一夏が作ったつまみの皿が置きっぱなしになっていた。

ちらほらと本も床に投げ捨てられるかのように転がっている。

「この前掃除したばつかなのにもうこの有様とは……。仕方ない
千冬姉には悪いけどこのまま片付けするか」

そのまま部屋の片付けを始める一夏。

勝手に部屋に入るとあとで千冬に怒られたりするが掃除という名目
を盾にすれば千冬あまり強くは言ってこない。

家ではだらしのない千冬なのでよく一夏がこつやって部屋を掃除した
りすのはよくあること。

下着とかも一夏はもう見慣れてるので気にせずに拾う。

散らばった衣服はそのまま洗濯機のところにいる十秋のもとへ届け
る。

「十秋姉、これも洗濯してくれ」

「あら？これって千冬姉さんの？」

「ああ、またこんなに溜め込んでたみたいで」

「ふふ、しょうがないなあ」

「頼んだよ。それと今日天気いいから布団も干しちゃおうかと思う
んだが」

「そうだね。じゃあ、お願いできる？」

「おう」

十秋は洗濯を再開し一夏は2階へ戻って掃除を再開する。

只今の時刻 A M 1 0 : 1 1

十秋と一夏は洗濯と掃除を終えてちよつと一息。

「一夏、お疲れ様」

「十秋姉もお疲れ」

ハイタッチを交わして2人はリビングのソファに座る。

一夏はまた緑茶を飲んでいて爺くさい姿に逆戻りしていた。

「十秋、一夏、ご苦労だったな」

完全に目が覚めたのか千冬が2人に労いの言葉をかけてきた。
格好も普段着に着替えていて起きたときの寝惚け姿は嘘のようである。

「ああ、千冬姉。部屋のドアが開けっぱなしになってたから部屋の
中見ちゃったんだけど凄い散らかってたから掃除しておいたよ」

「う、そうか。わ、悪いな」

「勝手に部屋に入っただのはゴメン。でもさあ、せめて脱いだ衣服は
洗濯機に入れて開けた缶はゴミ箱に入れて空いたつまみの皿は台所
に戻しておいて欲しいんだけど。そうすればあんなに散らからない
よ?」

「う・・・、わかつてはいるのだが」

バツが悪そうな顔をする千冬。

普段は厳しい態度しか見せないが、織斑家で気を抜いているときはいろいろな表情を見せる。

ギャップがあり過ぎて笑ってしまうことも一夏には少くない。

しかしあまりそれを顔に出しすぎると千冬は照れ隠しに色々と技をかけてきたりするので注意がいる。

「あたしとしては千冬姉さんはもっと女らしくなって欲しいんだけどな」

「む、その言い方は私が女らしくないみたいではないか？」

ちよつとムツとする千冬。

しかし十秋は涼しげな顔で

「ちよつとだらしなさ過ぎるよ。それじゃお嫁には行けないと思うよ？」

「余計なお世話だ。それに私はまだ気を遣われるような歳でもない」

「はいはい」

「馬鹿にしているのか？」

「してないよ」

ちよつと空気がピリツとするが一夏は気にせずにお茶を啜る。
この姉妹の遣り取りも見慣れているので気にはしていないのだ。

只今の時刻 A M 1 1 : 3 0

「じゃあ、俺は弾の家に行ってくるから」

「おう、蔵さんにもよろしく言っておいてくれ」

「あいよ。いつてきます」

リビングでテレビを見ていた千冬に一言告げて一夏は家を出て行った。

ちなみに千冬が言った蔵さんというのは弾の祖父の『五反田蔵』の事だ。五反田食堂の大將をしている齡80を過ぎているが筋肉隆々のマツチヨなお爺様だ。織斑家は家族でよく五反田食堂を利用するのでこの人にはお世話になっているのだ。

一夏が出て行くと千冬は再びテレビに顔を向ける。

百春は今朝から部屋に籠っているし、十秋も宿題を済ませると言って自室に戻っているのでひとりで時間を持て余している。

千冬はこれといって趣味があるわけではないので休日はいたいこうやってテレビを眺めているのがお約束だ。

暇を持て余す千冬はこのあとはどうしたものかと考えながらボーッとテレビを見つめるのであった。

そんな織斑家にこのあと騒がしい来客が訪れるのをこのときの千冬はまだ知らなかったのであった。

第六話 織斑家の休日 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

前編は主に一夏と十秋の家事をしている様子をお届けしました。

後編はある来客がやってきます。

それはあの人の『姉』です。

第七話 織斑家の休日 中編（前書き）

前後の2部にするつもりでしたが結局執筆しているうちに長くなってしまうので中編も作って3部構成にしました。

今回は『アノ』方に登場してもらいました。

第七話 織斑家の休日 中編

只今の時刻PM12:00

「お昼休みは ウ。ウ。 watching あっちこっち そっちどっち いい。も」

一夏が家を出たあと千冬はひとり煎餅を齧ってお茶を飲みながらテレビを見ていた。その姿は一夏同様歳よりくさい。こういうところは姉弟なのでよく似ている。

見ている番組はお昼の定番のアレだ。
するとそこに

『ピンポ―「バタンッ!」

「ちーちゃ~~~~~~~~~
ん!!--!」

インターホンの音が鳴り止まぬうちに玄関のドアが開いて大声が織斑家に木霊した。

「やあやあ!会いたかったよ、ちーちゃん!さあ、ハグハグしよう!愛を確かめ――」

(ガシッ!)

「ぶへっ」

やってきたのは篠ノ之束。 箒の実姉で千冬の幼馴染だ。

リビングにいた千冬を見つけると飛び掛ってきたので千冬は面倒くさそうな顔をしながら束の顔を掴む。

手加減一切なしの万力を込めた指が束の顔面に食い込む。

「煩いぞ、束」

「ぐぬぬぬ・・・、相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そしてヒラリと身体を往なしてその拘束から抜け出す束。
シュタツと着地してから再び千冬の方を見て

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

何もなかったかのように挨拶を交わす2人。

「えゝとっ・・・、どうも。お邪魔します・・・」

続いてリビングに入ってきたのは箒だった。
どうやら姉妹2人で織斑家に来たようだ。

「姉さん、チャイムを鳴らしたら家の人が出てくるまで玄関先で待
っていきましょうよ」

「えゝ、だって早くちーちゃんに会いたかったんだもん」

「しかし、礼儀の問題が」

「いいじゃんそんなのゝ、箒ちゃんってば細かいゝ。そんなことじ
や大きくなれないよお。ああ！でももう充分大きくなってるか！特
にオッパイが——」

（ばちんっ！）

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあゝ……。しかも竹刀で叩いたあゝ、箒ちゃんひどい……。グスンッ」

涙目になって頭を押さえる束。箒もどこから取り出したのか竹刀を持っていた。

千冬はそんな2人の遣り取りを煎餅を齧って黙って見ていた。

「千冬姉さん、何か騒がしいけどどうかしたの？」

そこに十秋がリビングにやって来た。

「あっ」

「あゝゝゝゝ！とあちゃゝゝゝゝん、久しぶり！あれからオッパイは大きくなっただかい！？よし、束さんが直々に確かめてあげ——」

（ガシッ！）

「ふじっ」

今度は十秋に飛び掛かり胸を鷲掴みにしようとした束だったがそれより先に十秋に咽喉輪を掴まれる。

「んふっ、束さんっ」

咽喉輪を掴んだまま凄いにこやかな笑顔で東に向かって言葉をかける十秋。

「ぶち殺します」

笑いながらそう言うてのける十秋。

いや、正確には顔は笑っているけど目が笑っていなかった。物凄く怖かった。

これぞ正しく『ブリザードスマイル』だった

「う、ごべんだじゃい・・・」

「わかればいいですよ」

首を掴まれながら謝罪をする東。

謝罪に満足したのか手を放す十秋。

胸に關しての話題は十秋の前では御法度なのだ。

ちなみにさきほど東が言った『とあちゃん』というのは東のみが使っている十秋の愛称である。千冬のこととは『ちーちゃん』、百春は『もっくん』、一夏は『いっくん』と呼んでいる。

「え」とつ・・・、どうも。お邪魔してます・・・」

先ほど千冬にも言った挨拶を十秋にもする篤。顔はまだ少し引きつっている。

「あら、篤ちゃんもいたんだ。いらっしやい」

「はい、こんにちは十秋さん」

先ほどの怖い笑顔は何処へやらといった感じににこやかに挨拶をする。

胸の話題さえ出さなければいつも十秋は穏やかなのを箒も長い付き合いで心得ていた。

それを知っていてなお十秋に胸の話題を持っていく束はある意味チヤレンジャーなのかもしれない。

「それでお前達は何をしに来たんだ？」

「ああそうだった。目的を忘れるところだったよ」

「姉さんが話を逸らし過ぎなんですよ」

呆れたようにため息をもらした箒が包みを取り出した。

「今日家でいなり寿司を作りましてね。たくさん作ったので織斑家の皆さんにも食べてもらおうと思ひまして」

取り出したのは篠ノ之家特性のいなり寿司だった。

昔から織斑家と篠ノ之家は親交があったのでよく織斑家では篠ノ之家からこうやって御裾分けを貰っていたりしたのだ。

萬月と四季が亡くなったあと何かと氣遣つてくれていた篠ノ之家は今でもこうやって時々御裾分けを持つてくるのだ。

「そうそう、だから私と箒ちゃん御裾分けに来たんだよ。まあ私は久しぶりにちーちゃん達に会いたかったから来たんだけどねえ」

「」

束は普段は家にいないので妹である箒ですら滅多に顔を合わせることはない。

束は自称天才科学者と言い放っていて普段はどこで何をしているのかは家族でさえもわかっていないらしいが、箒も篠ノ之夫妻も束のこの奔放さは身に染みて理解しているのであまり気にはしていないらしい。

「で、あのお、い、一夏は？」

ちよつとモジモジして一夏の所在を聞いてくる箒。

「一夏なら先ほど出かけたぞ。五反田の家に遊びに行ったらしいが」

「そ、そうですか・・・」

残念そうな声を出す箒。その手には先ほど出したいなり寿司の入った包みとは違う包みが握られている。

「おやおや、いつくん出かけちゃってるんだ？ 箒ちゃん自分が作りたいなり寿司はいつくんに食べて欲しくて頑張って作ったのね？」

「なっ！！ね、姉さん！！！！何を言ってる！！！！！！」

「だって作つてるときすごい上機嫌だったじゃん。いつくんに『おいしい』って言われるの想像して作ってたんでしょ？」

「べ、別にそんなこと思ってなんかいません！！」

「ホントにいい？」

「姉さん！！！！」

「わあ！竹刀出さないでよ！ゴメン、悪かったから！！」

再び竹刀を取り出して束を威嚇する箒。

「そういえば一夏は子供の頃からこのいなり寿司好きだったよね。剣道の稽古終わったあとによく嬉しそうに頬ばってたし」

篠ノ之家のいなり寿司は一夏の子供の頃からの大好物なのだ。厚めの揚げにしっかりと染みこませたそれは、ご飯の味付けを抑えめにすることでバランスを取っている。濃口醤油のインパクトとさっぱり酢飯の後味感がとてもいいので一夏はこのいなり寿司が大好物なのだ。

箒は母親直伝のこのいなり寿司を一夏に食べて欲しくて一夏の分は態々別の包みに入れて持ってきたのだ。

入学式の下校時に以前自分が作った肉じゃがを美味しかったと言われ、料理に対して意欲を燃やしていたのでいなり寿司を作って一夏に自分の女らしさと料理上手をさらにアピールしようという計画していたのだ。

緊張してドキドキしていたのに肝心の一夏は外出してしまっているので肩透かしを喰らってしまった箒であった。

「まあ、ちよつと時間が空いてしまうが一夏の分はあいつが帰ってきたら食わせればいいだろう。その包みは置いていけ。私が預かっておこう」

「は、はい」

包みを千冬に手渡す箒。

「せっかくだからお昼ご飯はこれにしようか？ちよつどお昼の用意しようと思つて降りて来たんだ。たくさんあるから皆の分はあるよね？私は百春兄さん呼んでくるね」

千秋は百春を呼びに2階へ行つた。
その間に千冬はお茶の用意をする。
これぐらいのことは千冬でもできるのだ。

アイキヤツチしりとり

束「皆揃つて大爆発！！」

箒「つまらない人生でしたね・・・」

只今の時刻PM12:15

この日の織斑家の昼食は篠ノ之家のいなり寿司に織斑家自家製のお新香だ。

千冬、百春、千秋、束、箒の5人でテーブルを囲んでいなり寿司とお新香を食している。

束と箒も昼食はまだだったようなのでここで一緒に食べることにした。

「もつくんともだいぶお久だね。前に会ったのって何時だったっけ？」

「恐らく正月に家に来たとき以来でしょう。それ以降、俺はあなたに会った記憶はない」

「そうだったね。それにしてももつくんは相変わらず無愛想だね。もう長い付き合いなんだし、私のことはお姉ちゃんと呼んでくれてもいいんだよ」

「姉はもう1人いるので結構です」

「ツレナイなあ。でもそこがもつくんらしい。そこにシビれる！あこがれるウ！」

（ベシッ！）

「静かに食え」

「チョップしなくったていいじゃん。ちーちゃんの愛が痛い・・・」

「何が愛だ」

「姉さん、これ以上篠ノ之家に恥をかかせないでください」

「恥とは失礼な。私は自分の欲望のままに行動しているだけだよ」

「それが恥だと言ってるんです！！」

「こいつの奔放さは今に始まった事じゃないだろ」

「こいつとはひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「誰が呼ぶか」

「2人共、漫才なら他所でやってくれ」

「漫才などしていない」

「漫才かあ。いいね！ちーちゃん、束さんとコンビを組んで一緒に漫才の頂点を目指さないかい！？」

「ひとりでやってろ」

「ちーちゃんがツツコミで私がボケだね。ネタはすべてこの私が考えるから大丈夫だよ」

「だからやらんと言っている」

「えー、やろつよ。ちーちゃんの胸には野望というものが無いのかい？その88センチの――」

「死ね」

（バコンッ！）

「ちょー！その一斗缶何処から出したの！？それに酷いよちーちゃん。束さんの脳は左右真つ二つに割れたよー！？」

「そうか、よかったな。これからは左右で交代に考え事ができるぞ」

「おお！そっかぁ！ちーちゃん頭いい〜！」

「抱きついてこようとするな、暑苦しい」

「愛情表現にハグは欠かせないよ〜。ちーちゃんも照れてないで束さんとあつ〜〜〜く抱き合おう！そうしよう！」

「照れてないし暑苦しいと言っている」

「あ〜ん、ちーちゃんのいけず〜」

「いい加減にせんとその口を縫い付けるぞ」

息の合った漫才を披露する千冬と束。

正確には束が千冬にじゃれついてはしっぺ返しを受けていると言った感じだ。

百春は無視してお新香を食べ、十秋はニコニコしながら漫才を眺め、箒は姉の醜態を見て恥ずかしいのか居心地悪そうにしている。

「すみません千冬さん、姉がご迷惑を」

「お前が気に病む必要はない。悪いのはこいつだ」

「でも面白かったでしょ？ね〜、とあちゃん面白かったよね？」

「ええ、面白かったですよ」

ニコニコ笑顔で感想を述べる十秋。

「胸の件以外は」

その一言でリビングが一瞬で絶対零度と化す。

「「「えっ!?!?!」」」

見れば十秋は先ほどの顔は笑っているけど目が笑っていない表情をしていた。『ブリザードスマイル』再臨だ。

「そつかあ。千冬姉さんは88センチかあ。同じ姉妹なのにあたしはねえ。食べてる物だってあまり変わらないのになあ」

「あ、あのお・・・、十秋さん？」

何やらブツブツと言葉を口にする十秋に恐る恐る声をかける箒。

その後ろで束が怯えた表情をして、千冬は『しまった』と言いたげな顔をしていた。

「そつえば、最近箒ちゃんも発育いいよね？」

「え!?!わ、私ですか!?!」

いきなり自分に矛先が向いてきたので焦る箒。
しかし十秋はかまうことなく箒に詰め寄る。

「ねえ、箒ちゃん?何食べたならそんなに大きくなったの?何か特別な事もあるのかな?あたしに教えてくれない?」

「え、え〜つと・・・」

「どうしたのかなあ？あたしの質問に答えてくれないのかな？」

「いや・・・あの・・・え〜つと・・・」

「ん？」

冷や汗ダラダラの箒。箒自身は特別何かをしていたわけではないしむしろこの胸を邪魔に思っているくらいなのだが今の十秋には通じないの是一目瞭然なので口には出来なかった。

助けを求めるように視線を巡らせるが束はリビングの隅でガクガク震えているし、千冬も遠くに離れてしまっている。百春はいつの間にか居なくなっていた。

「あー！そ、そろそろ私達はお暇しますね！いつまでも邪魔してるのも迷惑ですし！じゃ、帰りますね！ほら姉さん行きますよ！お邪魔しました！！」

遂に耐え切れなくなった箒は逃亡を決め、隅っこで震えている束を抱えると脱兎のごとく織斑家から逃げ出した。

「んふふっ」

しばらくリビングには絶対零度の空気が充満していたのだった。千冬もしばらくは自室に籠っていていようとリビングを後にしたのだった。

第七話 織斑家の休日 中編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

束登場の回でしたがいかがでしたでしょうか？

漫才の件は原作から引用しつつ手を加えてお届けしました。それにしても束って書いてると面白いなあ。そのせいでついつい長くなっ
てしまいました。

篠ノ之姉妹の仲を今回書きましたが原作ほど箸は束を嫌ってはいません。困った姉だが嫌いではないといった感じです。

十秋の胸に関しては触れるとあなります。まあ、鈴のアイデンティティーを盗ってしまっている感は否めないのですが・・・。

では今回はこの辺で。次回は休日最終回にします。

観想もお待ちしていますので、ではではさようなら！

第八話 織斑家の休日 後編（前書き）

休日編最終回です。

ちよつと体調を崩してしまつて投稿に1日間が空いてしまいました。

今回はちよつとセシリアの話題が出ます。

ちよつとだけ紅茶談議も入ります。知識はネットから拾ってきたやつですが・・・

第八話 織斑家の休日 後編

只今の時刻 P M 1 5 : 3 5

百春は今日はずっと自室で前日から残っていた仕事をしていた。

書類の整理や医学に関するレポートの作成、備品の補充リストの作成などなど。

先ほどの昼食は思わぬ来客があり一騒動があつたが百春は1人だけ騒動から見事に逃れていた。十秋の事に関しては鋭いところがある百春は束と千冬の漫才が終わったあとにニコニコしていた十秋に何か得体の知れないモノを感じたのでそのままトンズラを決めこんだのだ。

そのあとは途中であつた仕事をするためにまた部屋に籠っていた。

「ふう。何とか片付いたな」

パソコンの前で椅子に座りながら首をコキコキ鳴らす。

作業はほぼパソコンを使った作業だったので目に疲れが溜まっていたから眼鏡を外して少し目を瞑って目を休ませる。

「下に行つて紅茶でも入れるか」

百春は自室をあとにした。

織斑家には所持しているお茶の種類が結構多い。お茶は玉露をはじめ

めにほうじ茶や玄米茶まであり、コーヒー豆もモカ、ブルーマウンテン、キリマンジャロと揃えてあり、紅茶もダージリン、ウヴァ、キムンと『世界三大紅茶』と呼ばれる紅茶を所持している。

何故こんなにも多くのお茶やコーヒー豆を所持しているかというところ、両親が健在だったころに両親にお世話になった人や親交があったという方々からよく贈られてくるからだ。

外交官の仕事をしていた織斑家の両親である萬月と四季はその仕事柄海外の知り合いが非常に多く、2人が亡くなった今もその知り合いからたくさんのお贈り物が届くのだ。「あの2人の子供達なら自分達にとっても子供達だ」というメッセージが届いたこともあり両親に先立たれた織斑家4人兄弟には非常にありがたい心遣いであった。

百春は紅茶の葉の中からウヴァを選択した。

ウヴァはバラの花にたとえられるほのかな香りの上に、メンソールのような爽やかな芳香を伴うものが代表的な上質種とされるが、スモーキーな香りをもつものもありその特徴的な香りと渋みを含む強い味わいのために、好みの分かれやすい紅茶である。上級種はストレートティーとして香りを楽しむことが多いがウバ茶一般としては、ミルクとの相性が良くミルクティーとして楽しめることも多い。ストレートならダージリン、ミルクティーならウヴァ、どちらにも対応できるのがキムンといった感じである。

百春はこのウヴァの香りを入っていて紅茶を飲むときはウヴァを選ぶことが多い。

今日は疲れていることもありミルクティーを飲みたかったということもある。

「あつ、百春兄さん。紅茶入れるの？」

そこに十秋が現れた。昼間の騒動もどうやら鎮火したようである。いつもの穏やかな表情をしている。

「ああ。仕事も一段落したからな。お前も飲むか？」

「うん。宿題も片付いたし、おやつにでもしようと思ったところだったんだ」

「どうやら宿題も片付き時間も午後3時を過ぎているのでおやつにしようといったところであろう。」

「そうか。そういえばこの前オルコットさんの家から届いたクッキーがあつたな。あれを出そう」

「そうだね。じゃあ、あたしがクッキー用意するから紅茶の方お願いね」

「わかった。お前もミルクティーでいいな？」

「いいよ」

「そういえば、あの姉は何処に行った？」

「千冬姉さんならさっき何処かに出かけたよ」

「なら、2人分でいいな」

「千秋はクッキー、百春はミルクティーの準備に取り掛かった。」

只今の時刻PM16:00

百春と千秋はアフタヌーン・ティーを満喫していた。

ウヴァの葉で入れたミルクティーに先日イギリスの知人である『オルコット家』から贈られて来たクッキーを食する。

オルコット家は織斑家のイギリスの知り合いで生前の両親とも親交があった家の一つだ。オルコット家はイギリスでは有名な名家でいくつもの会社を経営し、成功を収めている家だ。

何故両親がオルコット家と親交を持つことになったかといえば両親がイギリスに赴いた際にカフェでお茶をしていると隣の席にオルコット夫婦が座ったそう。突拍子間無く両親はその場でオルコット夫婦に話しかけたそうでそのまま会話をしていたら色々と話が弾んでそのまま仲良くなったそう。

先ほど言った「あの2人の子供達なら自分達にとっても子供達だ」というメッセージをくれたのもオルコット夫婦だったのだ。

他にもドイツの『ボーデヴィツヒ家』、アメリカの『ファイルス家』など海外との親交が深かった両親の知人は百春達のことを色々気にかけてくれているのだ。

「オルコット家といえば、セシリアちゃんは元気かな？」

セシリアとは、本名を『セシリア・オルコット』。オルコット夫婦のひとり娘だ。

歳は一夏と同じ歳で今年から高校生のはずだ。

「あの娘は賢い娘だからな。勉学も滞りなくしているだろう。それに、もう昔のように病床には着いてはいないだろう」

セシリアは幼少期は身体が弱い娘で入院を繰り返していた経験があるのだ。

織斑4兄弟がセシリアに出会ったのも入院しているときであった。オルコット夫婦から「どうか娘の話し相手になってあげて欲しい」とお願いされたからだ。

「確かもう元気になったんだよね？1年くらい前にオルコットさんから来た手紙に書いてあったし」

「ここ数年は目立った病気にもかかっていないし体力もついたそうだからな」

「イギリスに行ったときはよくあたし達がそばについて話し相手になってたよね」

「そうだったな。一夏は同じ歳だったしすぐに打ち解けたようだったしな。確か一夏は彼女のことはフォース幼馴染とか言ってたよな」

「シャルロットちゃん、篝ちゃん、鈴ちゃんの次にできた幼馴染だからね」

「幼馴染にファーストだのセカンドだのつけるやつはあいつくらいだろうな」

「しかも皆女の子だし」

「節操が無いというべきか」

「シャルロットちゃんと篝ちゃんはもう一夏に墜とされてるけど鈴ちゃんは違みたいだよ。セシリアちゃんが熱を上げているのはむしろ・・・」

十秋は百春を見やる。

「ん、何だ？」

「別に。そういえばセシリアちゃん相手を一番してたのは百春兄さんだったなあと思って」

「まあな。あのころは俺はもう医者を目指していたからな。病人の心配するのは当然だ」

「そうなんだ」

「？」

何やら含みのある笑いを見せる十秋に百春は首を傾げる。
しかし聞いても十秋は答えてくれなさそうだったので百春は聞かないことにした。

「ところで百春兄さん。お願いがあるんだけど」

「お願い？何だ？」

何やら上目使いで百春を見る十秋。

「ちょっとお買い物に行きたいんだけど車出してくれない」

「つまり運転手をしろと言うのか？」

「うん。千冬姉さんは出かけちゃってるから車を運転できるのは百春兄さんだけなの。だめ？」

織斑家で運転免許を所有しているのは18歳以上である千冬と百春の2人だけ。そして今この家にいる免許所有者は百春だけだ。

「・・・。わかった。付き合おう」

「本当に？」

「そうせんと俺には夕食が出なさそうだからな」

夕食担当で織斑家のヒエラルキートップの千秋のお願いだ。断れば百春の今日の夕食はお預けになってしまうだろう。まあ基本的に百春は千秋には甘いので夕食抜きの手配がなくても付き合っていたであらう。

こうして百春と千秋は買い物に出かけたのであった。

アイキャッチしりとり

百春「ネーミングセンス悪いな」

千秋「涙そうそう」

只今の時刻 P M 1 8 : 2 0

「あれ？千冬姉？」

場所は織斑家の前。

弾の家に遊びに出かけていた一夏は自宅に戻ってきた。そこで同じく外出していた千冬と家の前で遭遇したのだった。

「おお、一夏か。今帰りか」

「おう、ただいま」

挨拶を交わす2人。

すると一夏の後ろから1人の女子が顔を出す。

「こんばんわ、ちふ、織斑先生」

そこにいたのはシャルロットだった。

千冬のこと普通に名前と呼ぼうとしたが今は自分の担任教師なのでその呼び方はまずいと思ったのか織斑先生と呼びなおした。そういうところは律儀なシャルロット。

「シャルロットか。ここは学校ではないのだから普通に千冬さんでいい」

「あ、はい。すみません千冬さん」

学校で見せる態度とは違い表情も緩やかな千冬にシャルロットも顔

を綻ばせる。

「千冬姉も出かけてたのか？」

「ああ。昼に束と箒が来てな。そのときにちょっと一悶着があつて家に居ずらくなつたから出かけていたんだ」

「へえ、束さんと箒が来たんだ」

「お前の好物のいなり寿司を差し入れにな。お前の分は残してあるからあとで食べるといい」

「マジか！？じゃああとで頂こうかな」

「お前の分は箒が直々に作ったそうだぞ。感謝して味わつて食べよ」

「そうなんだ？じゃあ、今度箒にお礼言つとかないとな！」

「そうしろ」

一夏は嬉しそうな顔はしたものの箒が何故一夏に分だけ自分で作ったのかは理解していないようである。

せいぜい、「俺の分を手間隙にかけて作ってくれるなんて箒がいいやつだなあ」程度であろう。その手間隙の意味をまったく理解していないので箒も報われないなあと千冬も内心苦笑いだ。

「ところで一悶着つて何があつたんですか？」

シャルロットは気になった一悶着について千冬に訪ねた。すると千冬は顔を歪めた。

首を傾げるシャルロットだが一夏は何かを察したらしく

「もしかして束さん、また十秋姉にあの話題を？」

（コクッ）

千冬は頷いた。

十秋に胸の話題を出すのは御法度なのは一夏も知るところなので毎回十秋に会つとその話題を出す束には一夏も辟易としているのである。

「束さんって天才の割りに学習能力がないよな・・・」

「長い付き合いだがあいつの考えてることは私にもわからん」

「ハア〜〜・・・」

「？」

千冬と一夏は揃ってため息をつく。

話題についていけないシャルロットだけはハテナ顔であった。

シャルロットは束とは箒を通じて面識はあるが十秋に関して胸の話題がご法度なのは知らないものでわからないのも当然なのだ。

「まあさすがにもうほとぼりも冷めてるころだろうと思って戻ってきたということだ。ところで、何故お前達と一緒にいるんだ？一夏、今日は五反田の家で遊んでいたのではないのか？」

一夏と共に居たシャルロットに疑問を持った千冬は2人に問いた。

「ああ、15時くらいまでは弾の家で遊んでただけけどそのあと数馬からゲーセン行こうって誘いがあったから街のゲーセン行ってきた。で、あの2人と解散したあとに街で偶然シャルに会ってさ。一緒に帰ってきたんだ」

一夏は長々とシャルロットを連れている理由を説明した。

「そういうことか。五反田の家に行くと言っただけで実はお前ら2人でデートでもしていたのかと思ったぞ」

「デ、デートッ!!」

千冬の問われ顔をボツと顔を赤くする一夏とシャルロット。

「な、何言っただよ千冬姉!俺たちは『まだ』そういう関係じゃない!」

「そ、そうですよ千冬さん!僕達は『まだ』そういう関係ではないので!」

「『まだ』なあ」

意地の悪い笑みを浮かべて千冬は2人を見る。

俯いてモジモジするシャルロットに顔を逸らして頬をポリポリかく一夏。確か前にもこんなことがあったなあと思う一夏とシャルロットであった。

「そうだシャルロット。久しぶりに家に上がっていけ。なんだったら夕飯も家で食っていけ」

「え！そんな悪いですよ！」

「今更気にするような間柄でもなかるう。一夏、お前も何とか言え」

「え！俺も！」

「そうだ。ほれ」

一夏の尻を叩く千冬。

「シャル、せつかくだから家で夕飯食っていけよ。千冬姉もああ言ってるし……」

「う、うん。じゃあそうしようかな……」

「決まりだな。では、家に入るとしよう」

「お、おう」

「は、はい」

先に家に入っていく千冬。一夏とシャルロットもそれに続いて家に入っていた。

「帰ったぞ」

「ただいま」

「こ、こんばんわ」

「おかえりなさい。あらシャルロットちゃん、いらっしやい」

「ど、どうも」

3人が織斑家に入ると十秋が出迎えてくれた。エプロンを身に着けたいたので恐らく夕食の準備をしていたのである。シャルロットに気付いた十秋は彼女にもにこやかにあいさつをする。

「十秋、いきなりで悪いが今日はシャルロットも家で夕飯をとるこ
とになったが準備は大丈夫か？」

「平気だよ。今日はカレーだから多めに作ってあるし、ご飯も多めに炊いてあるから」

「そうか、それなら問題ないな」

「えーと、本当に頂いちゃっていいんですか？」

「何言ってるの？そんなこと気にするような間柄じゃないでしょ？
存分に甘えちゃって。ね！」

「そ、そうですね」

「まあ玄関で立ち話も何だから上がっちゃって」

「あ、はい。お邪魔します」

十秋に促されてシャルロットは織斑家に上がりリビングのソファーに腰を下ろした。

一夏は荷物を置いてくると言って一度自室に戻っていき、千冬も自

室に戻っていった。

ソファーに座ったはいいもののシャルロットは何やら落ち着かない様子でそわそわしていた。

そこにお茶を持ってきた十秋が声をかける。

「はい、お茶。番茶だけどシャルロットちゃん飲めたよね？」

「は、はい。いただきます」

ズズツと番茶を啜るシャルロット。やはりちよつと落ち着かない様子だ。

「何でそんなに緊張してるの？今まで何回も上がったことある家でしょう？」

「それは小さい頃の話ですし。この家で食事を頂くのも久しぶりですから」

「さつきも言っただけど気にしないでね。あたしは久しぶりにシャルロットちゃんと食事できて嬉しいよ」

「そ、そうですか。僕も久しぶりにここで皆さんと食事できて嬉しいですよ」

「そっかそっか。うんうん」

ニコニコと笑みを浮かべる十秋にシャルロットも次第に緊張が解けていった。そういえば十秋にはよくこうやってお世話になっていたなあと思うシャルロットだった。

「と・こ・ろ・でえ、聞きたいことがあるんだけどお？」

「は、はい？」

急ににやけた顔を近づけてくる十秋にシャルロットは困惑する。

「一夏とはうまくいつてるの？」

「！！」

ブツッとお茶を噴出しそうになるシャルロット。こんなところを絶対に一夏には見られないであろう。

「な、ななな、十秋さん！いきなり何を！！」

「だってシャルロットちゃんって昔から一夏のこと好きなんですよ？」

「そ、そそそ、それはその・・・」

「一夏って身内の鼻屑目無しにしても結構カッコイイとあたしは思うよ。シャルロットちゃんもそう思うでしょ？」

「そ、それは、え、え〜っと・・・は、はいっ」

「今のところの最大のライバルは篝ちゃんね。あの娘も可愛いからシャルロットちゃんも油断しちゃダメよ」

「え、あ、は、はいっ・・・」

「一夏は家事だってできるしマッサージだってうまいよ。結婚できる女性は間違いなく得ね。まさに超優良物件だね」

「け、けけけ、結婚っ!!」

「一夏っていい旦那さんになりそうだよね? ねえ?」

「そ、それは僕もそう思いますけどお・・・」

「でしょ。やっぱりシャルロットちゃんもそう思っただ? で、で、もうキスはしたの? それとも、もうその先まで?」

「——ッ!!!!」

突然にどこぞの噂好きのおばさんのように質問攻めをしてくる十秋に完熟トマトのように顔を真っ赤に染め上げて声にならない叫びをあげるシャルロット。

十秋が言ったその先とやらは読者のご想像にお任せします。ちなみにシャルロットはその先とやらを思いっきり想像してしまいました。

「あら、真っ赤になっちゃって。可愛いなあシャルロットちゃんは」

「と、十秋さん! そもそも僕と一夏はまだそういう関係じゃ——」

「俺がどうしたって?」

「ひゃああ!!」

突然現れた一夏に驚いて可笑しな奇声を上げてしまふシャルロット。そんなシャルロットに一夏も驚いてしまう。

「ど、どうしたシャル！？変な声出して!？」

「へ？い、いいいい、いや、何でもないよ、何でも、はははっ・・・」

「ん？シャル、何か顔赤くないか？熱でも出たか？」

「そ、そんなことないよ」

「そうか？どれ、ちょっとでこを出せ」

「ふえっ!！」

そう言つて一夏はいきなりシャルロットのでこに手を当てて顔を覗き込む。ただ単に熱を測ろうしているのだがシャルロットはいきなり触られて心臓が飛び跳ねる。

（うわ、うわわ、い、一夏、いきなり触ってくるなんて・・・。それに、か、顔も近い・・・。は、恥ずかしいけど、一夏の顔をこんなに近くで見るのも・・・。ああ、やっぱり一夏ってカッコイイなあ・・・。いつか僕が一夏とさつき言つてたような関係になれたら・・・。つて僕はいつたい何を考えて!!あゝ・・・、うゝ・・・。）

只今シャルロットは嬉しさと恥ずかしさで頭が混乱状態に陥っていた。脳内のちっちゃなシャルロット達はもう大慌て動き回っている。しかし100人近くいるのちっちゃなシャルロット達は全員慌てるだけで何の役にも立ちそうにもなかった。

「熱はなさそうだけど本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ。そ、それより一夏、あのぉ・・・」

「ん？何だシャル？」

「そ、その、あのね、そのぉ・・・」

「？」

目をキョロキョロさせるシャルロットだが一夏は状況がわかっていないらしくハテナ顔をするばかりである。

「一夏、顔が近いからシャルロットちゃんは恥ずかしいんだと思うよ」

見かねた十秋が助け舟を出す。

「へ？・・・、あつ！！」

バツとシャルロットから離れる一夏。鼻先5cmほどの超至近距離でシャルロットの顔を覗き込んでいたのだが自覚はしていなかったらしい。

「いや、あのな、俺はお前を心配してだな・・・」

「う、うん。わかってるよ。その、あ、ありがとう・・・」

いたたまれない空気に一夏とシャルロットはどぎまぎしてしまう。お互いに顔から火が出そうなほど真っ赤にされていて心臓は早鐘を打

っ
て
い
て
う
る
さ
い
く
ら
い
だ
。

「
.
.
.
.
.
.
」

「
.
.
.
.
.
.
」

お互い黙ってしまったてさらにどぎまぎしてしまうがその目はお互いの目を見つめていた。

なにやら熱くそして甘ったるい空気がリビングに充滿していたがそんな空気などお構い無しで2人は互いを見詰め合っていた。

「なあ、もうリビングに入ってもいいか？」

「ダメよ、百春兄さん。もうちょっと様子を見てから」

「まったく、あの2人は」

千冬と百春といつの間にかリビングから居なくなっていた十秋が部屋の外からリビングの様子を見ていた。今リビングは2人の世界で構成されてしまっていて立ち入ることができないのだ。

「俺は腹が減ってるんだがなあ」

「もうカレーはできてるんだけどこれじゃ準備できないね。お鍋の火は止めてあるからカレー冷めちゃうかも……。あ、でもリビングに置いておいたら冷めないかもしれないよ」

「やめておけ、あの空気の中に置いておいたら激甘になってしまうだけだ。私はそんなもの食いたくないぞ」

「俺もそれは食いたくないぞ」

「だよな？あたしもそれはちょっと遠慮したいなあ」

「しかし、私達はいつまでこうしてればいいんだ？」

「あいつらが元に戻るまでじゃないか？」

「2人がこのままハジメちゃったらどうする？」

「そのときは入って止めるぞ」

「やだ、千冬姉さんったら無粋ねえ」

「やかましい」

「どうでもいいが早く終わってくれ・・・」

2人が正気に戻ったのはそれから10分近くも後のことで、結局カレーも少し冷めてしまっていて5人が夕食にありついたのはそれから30分も後のことであつた。その日のカレーは何やらいつもより甘かったと5人とも思ったそうだ。

第八話 織斑家の休日 後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

知人にこの小説をみせたのですが百春の年齢は23歳なのですがこの年齢で医者をやっているのはおかしいと指摘を受けました。

ちゃんとした医者になるには最低でも26歳くらいまではかかるらしいのですがもう引けないのでこのまま行きます！

だって千冬だって大学行っていないのに教員やってるんだし！！

セシリアは百春と十秋の会話内での登場となりました。

見ててわかったと思いますがセシリアのフラグは一夏ではなく百春が立っています。

彼は「あの」一夏の兄なのでそれなりに鈍感です。

セシリアには昔は病弱だったというオリ設定を加えています。

夕食前の件は十秋がおばさんっぽくなってしまいましたがこの手の会話をするときの女子ってだいたいこんな感じじゃないですかね？

一夏とシャルロット2人の件も僕の文才ではこれが限界でした。

本当にもう付き合っているかのように書いてますがまだなんです！
こんな空気をまだまだ引つ張ります。そしていつかは……。ね。

次回も読んでくれたら幸いです。

感想もぜひ！

第九話 夢、現（うつつ）（前書き）

暑くなってきましたね。

話の中の一夏とシャルロットも熱くしたいのですが僕の文才ではなかなか・・・。

第九話 夢、現（うつつ）

「うん、美味しかったぞシャル！」

「そ、そう？ありがとう一夏！」

織斑家のキッチンに一夏とシャルロットの姿があった。

練習に練習を重ねて作った肉じゃがを一夏に振舞ったシャルロットは彼から言われた一言に安堵の息を漏らすと同時にこの上ない喜びを感じていた。

箒に教わりながら覚えた肉じゃがは一夏の舌を満足させるものだったように彼もニコニコ顔だ。

「こんなに美味しい肉じゃがをご馳走してもらったんだからご褒美をあげないとな」

「え？いいよ。そんなに大した事してないよ」

「それじゃ俺の気が済まないんだよ！」

褒美をあげたいと言ってきた一夏だったがシャルロットはそこまでしてくれるようなことはしていないと遠慮する。しかし一夏はそれじゃ自分の気が住まないと珍しく押しの強い言葉でシャルロットの言葉を押さえ込む。

「じゃあ、ご褒美な！」

そう言ってシャルロットに近づくと一夏はいきなり彼女を抱き締めた。

「——っ！！えっ！？い、一夏っ！？」

「シャル」

突然抱き締められて瞬間湯沸かし器のように顔を真っ赤にして驚くシャルロットに一夏は彼女の耳元で甘く囁くように彼女の名前を呼ぶ。

「え？ええええええ？い、いきなり何を！？」

「何をつて、ご褒美だよ」

彼の腕の中で少し身動ぎして彼の行動に問いを投げかけるが彼はまたしても耳元で甘く囁いてくるのでシャルロットは全身の力が抜けてしまいそうになる。しかし一夏はシャルロットを抱き締める腕に力を込めて彼女の身体が崩れてしまうのを許さない。

「イヤか？」

「い、イヤじゃ、ないよ」

「そうか、よかった」

一夏はまたシャルロットを抱き締める腕に力を込める。シャルロットも彼の背中に手を回す。この至福の時間が逃げてしまわないように。

「一夏の胸の鼓動が聞こえるよ」

「ああ、俺今凄いドキドキしてる」

一夏の胸に耳を当てると彼の心臓は早鐘を打っているのがはっきりわかった。

彼のハートビートはもうオーバーヒート寸前で爆発しそうだった。

「一夏、僕は今凄く嬉しいよ」

「俺もだ。ドキドキしてどうにかなっちまいそうだ」

互いを優しく包み込むように抱き締め合う。

永遠の時とも思えるほどの長い時間抱き締めあった2人は自然とお互いを見詰め合う。

「シャル・・・」

「一夏・・・」

2人だけしかないこの場所でお互いに相手だけを映した瞳が揺れる。

その先の言葉などいらなかった。

2人の顔が徐々に近づきその距離はゼロになり唇が触れ

。

「——あ、れ？」

目を覚ましたシャルロットはここが織斑家ではないことを認識した。しかし頭がボーっとしていて状況の理解はまだできていないようだった。場所は寮の自室。部屋に一夏の姿は無い。ちなみに只今の時刻はAM6:30。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、ゆ、夢・・・」

正解。

夢です。

「はああああ・・・・・・・・・・」

深く深く深海2万マイルほどのため息。

それほどまで彼女にとっては先ほどの光景が夢だったのが本当に残念でならなかった。

（夢なら夢で、せめてあと5秒、いや3秒でもいいから見せてくれないに・・・）

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しむ。

夢内容は急速に失われていくようなモノだがシャルロットはまだ執着していてなかなか消せないでいた。それはまるでお気に入りの

映画やドラマのワンシーンを何度を再生し直しているような感覚だ。

（こんな夢見るなんて、前に十秋さんにあんなこと言われた所為かな？）

シャルロットはあのような夢を見てしまった原因をなんとなく理解していた。

先日織斑家にお邪魔した際に一夏の姉である十秋からされた質問の所為だった。

『一夏とはうまくいつてるの？』

『シャルロットちゃんって昔から一夏のこと好きなんですよ？』

『一夏っていい旦那さんになりそうだよね？』

『もうキスはしたの？それとも、もうその先まで？』

このように質問攻めを受けてシャルロットは狼狽してしまつてまともに答えることができなかった。

さらにそのあとにダメ押し待っていた。

狼狽していたシャルロットを心配して一夏は彼女のおでこに手を当てて顔を真近まで近づけてきたのだ。そのときに感じた一夏の手の温もりや息遣いなどが頭から離れないのだ。何より顔があそこまで接近することなど今までなかったし男らしく成長した一夏の顔を真近で見ですっかり魅了されていたのだから。

「——ッ——！」

今思い出しても恥ずかしくて顔を赤くする。胸に手を当てるとドキ

ドキと早鐘を打っている。

（やっぱり僕は、一夏の事が・・・）

シャルロットは改めてこの気持ちを実感していた。

一夏と初めて出会ったのは9年前の春だった。母と逸れて泣いていた自分に彼は話しかけてくれて一緒に母を探してくれた。探している間彼はずっと手を握ってくれていた。その時の手の感触をシャルロットは忘れていない。

（思えばあのときから僕は一夏の事が・・・）

カーテンを開けて窓を開ける。

ちちち、と小鳥のさえずりが聞こえてくる。

良い天気だ。ポカポカ陽気が窓から差し込む。

十人に聞けば十人がそう返してくれるであろう空模様。

「ん」

伸びをひとつする。

夢の内容はもう少し見ていたかったがいつまでも引きずっていても仕方が無いので割り切ることにした。

そう思っていたらふと窓の外に見える織斑家が目に映る。

彼女の部屋は織斑家が見える位置にありちょうど一夏の部屋の窓が見えるのだ。

見ると一夏の部屋のカーテンが開いていて窓も開いていた。もう一夏も起床しているようだ。

（何だろう？無性に一夏に会いたくなっちゃったなあ）

一度そんな衝動に駆られてしまっではもうシャルロット自身にも止められなかった。

それほどまでに今朝の彼女は一夏が恋しくなっていた。

「よし！」

決意を新たにシャルロットは朝の準備をはじめたのだった。

アイキャッチしりとり

シャル「うゝ、やっぱり照れちゃうよゝ」

一夏「よし、味噌汁完成！」

AM7:15

シャルロットは織斑家の前にいた。

起きてからシャワーを浴びてスッキリし、髪を整えて制服に身を包

んで自室をあとにするとシャルロットは迷わずに織斑家を目指した。少々早めの時間だが一夏はもう起きていると思われるのでシャルロットは織斑家を訪れることにしたのだが一夏以外のことは完全に彼女の頭から抜け落ちてしている。それほどまでに今朝の彼女は一夏が恋しいのだ。

（こんな朝早くに迷惑じゃないかな？でも再会してから毎朝一緒に登校してるし、一夏も早めに来たときは上がって待っていてくれてもいいって言ってたし。多分大丈夫だよな。よし！）

意を決して織斑家のチャイムを押す。

（ピンポーン）

少し緊張しているシャルロットの心とは裏腹に鳴り響く耳慣れた軽い音。

そして受話器を取った証拠であるガチャツという音がそこから響いた。

『はい』

インターホンから聞こえてきたのは一夏の声だった。

インターホン越しではあるもののシャルロットは一夏の声が聞けて嬉しくなってしまう。

「お、おはよう一夏！」

『あれ、シャルか？どうしたんだこんな朝早くに』

「あ、あのね、今朝はちょっと早く目が覚めちゃってね。迷惑じゃ

なければお邪魔できないかなあと思って・・・」

『そうか。ああ、今玄関開けるからちよっと待ってる』

「うん」

ガチャツと受話器を置いた音が響いた。

すると、トトトと小走りの音が奥から聞こえてきて玄関が開かれた。

「おはようシャル」

「おはよう一夏」

現れた一夏はエプロン姿であった。恐らく朝食を作っていたのである。制服の上にエプロンを身に着けた一夏の姿をシャルロットは思わず可愛いと思ってしまった。何はともあれ恋しくてたまなかった一夏に会えたので彼女は嬉しくてしょうがなかった。

「ゴメンね、こんな朝早くに」

「気にすんなって。もう全員起きてるし早めに来たときは上がっていいって言っただろ」

「あ、うん。そ、そうだね」

ココに来てようやくシャルロットは千冬達の事をまったく頭に入れていなかった事に気付いた。本当に一夏の事しか考えていなかったのだ。ちよつと罪悪感に駆られる。

（うう、考えればわかることじゃないか……。僕のバカ・・・）

「まあここで立ち話もなんだ、入れよ」

「うん、お邪魔します」

玄関を潜り、一夏について行く形でリビングへと足を運ぶ。

「シャルが来たぞ」

「お、おはようございます」

リビングでは千冬達がテーブルに着いて朝食を取っていた。テーブルにはご飯に大根の味噌汁、玉子焼きとアジの開きと和食で揃えられていた。

千冬は新聞読んでいて、百春はほうじ茶をズズツと啜り、千秋は鼻歌まじりにご飯をよそっていた。

「うむ、おはよう」

「おはよう」

「おはようシャルロットちゃん」

千冬は新聞から目を離し、百春は無愛想に、千秋はにこやかに挨拶をする。

「すみません、こんな朝早くに」

「気にするな。こっちは気にしていない」

「そうだな」

「うんうん、うちとシャルロットちゃんの仲じゃない」

「はい、ありがとうございます」

先ほどまで一夏の事しか頭になくてちょっと罪悪感を覚えていたが温かく迎えられるとシャルロットも嬉しくなる。シャルロットは一夏だけではなくてこの家の人達の事も自分は好きなんだと改めて実感した。

「そつえばシャル、お前朝飯は食ったのか？」

「え？・・・あ、そつえば食べてないや」

一夏に会いたい一心でシャルロットは朝食を取るのを忘れていた。ちよつとシャルロットは恥ずかしくなる。そつえば味噌汁のいい香りが鼻腔を擦つて食欲を刺激してくる。

「そつか。よし、ちよつと待ってる。今お前の分用意するから」

「え？いいの？」

「遠慮すんなつて。朝はちゃんと食べないと1日元氣が出ないんだぞ。それに今日の味噌汁は自信作なんだよ。シャルにも飲んで感想聞かせて欲しい」

「そ、そつなんだ？せつかくだし、お願いしよつかなつ」

「おう！ほらそこに座つてろつて。今用意するからさ」

「うん、じゃあ、失礼して」

織斑家の食卓に入るシャルロット。

一夏は意気揚々とシャルロットの分の朝食の用意に取り掛かる。

「アジはもう残ってないから用意できないけどゴメンな。ご飯と味噌汁と玉子焼きだけになっちまうけどいいか？」

「それで充分だよ、ありがとう」

お邪魔しているのは自分の方なのに何かと気を回してくれる一夏にシャルロットは嬉しくなってしまう。手馴れた手つきで新しい玉子焼き作っている一夏の姿は何やら主婦然としていて変に見えるがそんなところも正直好きなのだ。

「一夏あ、今日のお味噌汁って前のと少し違うけど白味噌と赤味噌の配合比率変えたの？」

「ああ、もう春になったしちょっとさっぱりした味噌汁が美味い時期になってきたから赤味噌の分量少し増やしたんだ」

味噌汁を飲んでいた十秋が一夏に問いかけ、一夏は玉子焼きを作りながら答える。

「そっか。これから温かくなるもんね。夏場なんかはお味噌汁はさっぱりした味のほうが美味しいよね」

「そうそう。さすが十秋姉、わかっているっしょ」

「出汁もいい味出てるし」

「そうか？よかった」

織斑家の家事を任されている2人の会話にシャルロットは素朴な疑問をぶつけてみた。

「ねえ一夏。お味噌の配合ってそんなに季節で変えるものなの？」

「ああ、一般的には1年中同じ味噌を同じ濃度で作ってる家が多いと思うけど、うちは結構変えるんだ。冬はこっくりとした味のものを美味いと感じ、夏はさっぱりした味のものを美味いと思うのが人の自然な味覚なのだよ。冬は甘味の強い白味噌だけの汁を、春に向って陽気があたたかくなるにつれて辛味のまさらした赤味噌を混ぜていくんだ。真夏には三州味噌（八丁味噌の別称）だけのさっぱりした味噌汁が特にいいんだぜ」

「へえ」

感心したように声を漏らすシャルロット。味噌の配合を季節ごとに変えるなんて思いもしなかったしそれによってそんなにも味が変わるものなんだと驚いていたのもある。そして改めて一夏の料理スキルの高さを思い知らされる。

（一夏ってやっぱりいい旦那さんになるなあ。でもそんな一夏に負けないように僕も料理の腕を上げなきゃ！この間日本料理に挑戦するって言ったし！）

料理への意欲をさらに高めたシャルロットであった。

「ほい、お待たせ」

「うん、ありがとう」

決意を新たにしているとシャルロットの朝食が運ばれてきた。ご飯に大根の味噌汁に一夏特製玉子焼き。

「玉子焼きは甘みを少し抑えてあるけどよかったか？」

「大丈夫だよ。いただきます」

一夏お手製の朝食に舌鼓を打つ。これだけでも今日織斑家にお邪魔してよかったと思えるシャルロットだった。

AM 8:00

千冬と百春2人は30分ほど前に家を出て、十秋も日直だからと言って先ほど1人で家を出て行ったので一夏とシャルロットは2人きりで登校することになった。

「よし、行くか」

「うん」

玄関の鍵を閉めて学校への道を歩き出す2人。他愛のない会話をしながら学校への道を歩く。いつも通りの朝なのだがシャルロットは少し思うことがあった。

（あんな夢見ちゃった所為かな？いつもと同じようにしてるつもりなのに何か一夏の事意識しちゃうなあ。）

肩が触れ合いそんなほどに距離は近い。この距離さえ今朝のシャルロットは物足りなさを感じていた。夢とはいえ一夏に抱き締めてもらったあの感覚はまだほんの少しだけシャルロットには残っていた。その事を思うと少しだけ大胆になってみようと考えるシャルロットだった。

「え、えいつ！」

「なっ！！」

シャルロットは一夏の腕に抱きついた。ようするに腕を組んできたのだ。

「え！？シャ、シャル！？」

「何？」

「突然何を！？」

「何をつて、腕を組んでるだよ」

しれっと言ってくるシャルロットだが一夏は動揺を隠し切れず狼狽える。

「そ、それはわかるんだが・・・」

「一夏はイヤかなあ？」

少し頬を赤く染めて上目使いで一夏を見つめるシャルロット。上目使いで見つめられて一夏の動揺はさらに増した。

「イヤじゃないぞ。イヤじゃないし、むしろそのお・・・」

「むしろなあに？」

あたふたとする一夏が段々と面白くなってきたシャルロットは組んでいる腕をさらにきつく絡ませる。

「あ、あのその、えっとな、シャル」

「なあに？」

「あのお・・・、む、胸が、当たってるんだけど・・・」

「あっ！！」

言われてやっと一夏がどきまぎしている理由を理解したシャルロットだったが、一夏から離れることはしなかった。もちろんシャルロットも恥ずかしいと思って飛び退こうと一瞬思ったのだがせっかく勇気を出して一夏と腕を組んだのだから勿体無くて離したりしかなかった。そして何か意地の悪い笑みを浮かべ、胸を意識する一夏に鉄槌を喰らわす。

「もう。一夏のえっち」

「なあっ!？」

一夏は固まった。少年ハートがガラスのように割れた瞬間であった。傍からみれば自分の方から腕を組んできておいて冤罪もいいところなのだが一夏は気付かない。

「ふふっ」

それでもシャルロットは幸せそうであった。一夏が自分を意識してくれているのがたまらく嬉しかった。

「ほら、固まってないで早く行こう」

「え？あ、お、おう・・・」

腕を組んだまま歩き出す。

一夏は相変わらずどきまぎしていたがシャルロットはものすごいご機嫌だ。このままスキップでもはじめそうなほどに上機嫌だった。

一夏もそんなシャルロットを見て自然と笑みがこぼれてきた。元々腕を組まれたのがイヤだったわけではないしむしろ何か落ち着くのだ。だから2人はそのまま腕を組んだ状態で通学路を歩いていった。

再現とまではいかないものの、夢見た内容を少しだけ現^{うつ}にできたシャルロットだった

「あああつ！！なつ、なつ、何をしている貴様ら！？」

途中で筭に見つかってしまって弾劾を受けたのは言うまでもない。

第九話 夢、現（うつつ）（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

少しだけ大胆に攻めたシャルロットはいかがでしたでしょうか？何度も言っていますが一夏とシャルロットはまだ付き合っていないません。一夏はまだ自覚していないしシャルロットも一夏が気付いてくれるのを待っている状態です。原作ほど唐変木ではないつもりですがどうですか？

ではこれにてさいならです。

よかったら感想もくださーい。

第十話 体育の時間 男子編（前書き）

今さら思ったのですがこの作品は学園モノだったことを思い出しました。

ここ数話はまったく学園関係なくなっていたので今回の話を書いてみました。

今回は短めです。

第十話 体育の時間 男子編

体育。

それは、運動が得意な者にとっては嬉しい授業のひとつ。

体育。

それは、運動が苦手な者にとっては苦行以外の何でもない授業のひとつ。

体育。

それは、学園生活には欠かせない青春の1ページを彩る授業のひとつ。

織斑一夏。彼も運動は得意な方だ。小学校のときは剣道をやっていた。中学に入ってから織斑家の事情からバイトなどをするために部活動はしていなかったがために姉達から体術を教わっていたので身体が鈍ってしまうことはなかった。むしろ彼の身体能力は同世代の男子と比べれば高い方である。

しかし、運動が得意な者でも体育が煩わしく思うときがある。

それは、疲れている時などがそうであろう。

今朝の彼は登校時にシャルロットと腕を組んで歩いているのを箒に見られて彼女から執拗な弾劾を受け、最後には竹刀を振り回して追いかけてまわされたおかげで疲れていた。何で箒があんなにも怒っていたのかは一夏は相変わらずわかってはいないが疲れているには事実なのだ。それでいて1限目から体育なのだから煩わしいと思っても仕方がない事であろう。

「何だよ一夏、体育はじめる前から疲れた顔して」

「まるで人生に疲れたサラリーマンのように哀愁が漂ってるぞ」

話しかけてきたのは弾と数馬であった。いつものように軽い感じで話しかけてくる。

「実際に疲れてるんだよ」

「それって朝から篠ノ之がめっちゃ機嫌悪そうにしてたのと同関係があるのか？」

「傍から見てるだけで機嫌悪そうだったしな。さっき鈴が必死で宥めてたぞ」

「まあ、あるの、かなあ・・・」

一夏は今朝の出来事を説明した。今朝シャルロットと一緒に登校してたらいきなり腕を組まれてそれを箒に見られたら箒が怒り出して竹刀で追い掛け回されたと。

「なるほどねえ」

「そついう訳か」

「ん？箒が怒ってる理由がわかったのか？」

「「まあな」」

弾と数馬の言葉がユニゾンした。

「理由はなんなんだ？」

「いいや、それは俺達の口からは言えんな」

「自分で考えてくれ」

弾と数馬は教えてはくれなかった。

「ん」

一夏も腕を組んで考えるが思い当たる節はなさそうだった。

「篠ノ之不憫だなあ」

そう思わずにはいられない弾と数馬だった。

今日の体育は男子はハンドボールをやることになった。

体育は二組が合同で行うのでこの時間は1組と2組の合同で行っている。一組2チームを作って自分とは違う組の片方のチームと対戦だ。試合時間は1試合20分で行われる。これを2試合行う予定。

「よし、じゃあ男子は適当にチーム分けして試合をはじめろ」

体育教師が号令をかけるとともに適当にチームを作る。一夏、弾、数馬も同じチームに入っている。代表者のジャンケンの結果、第1試合は一夏達のチームが出ることになった。

「ふっふっふ、この『藍越の白い弾丸』と呼ばれたこの俺の実力を
見せてくれるわ！」

「誰も呼んでねえよ。それにこの前は『赤い弾丸』だっただろ。普
通の3倍のスピードで玉を外したあの時の」

「ふんっ、一夏。あこの頃の俺と同じだと思うなよ。俺は生まれ変
わったんだぜ」

「はいはいそうかよ」

「信じてないなあ？よし、見てろよ！華麗にシュートを決めてやる
ぜ！」

「おー、頑張つてなー」

張り切る弾に疲れているの適当にやるつもりの一夏。かなりの温度
差が2人にはあった。

「ふっふっふっ、女子も見ている事だしここで大活躍して女子の視
線を独り占めしてやるぜ。ふっふっふっ。」

下心丸出しの眩きを漏らす弾。

「お前がそんなに活躍するわけないだろ。見当違いな妄想はほどほ
どにしとけ」

数馬がツツコミを入れる。彼も弾がそこまで活躍できる訳がないと
思っているのだ。

「数馬、お前にも生まれ変わった俺の姿を見せてやるぜ！そして試合が終わった頃には俺はこの学園一のモテ男に！」

「おーい一夏、アホが壊れたぞ」

「アホって言うな！」

「元からだろ」

「否定しろよ！」

わいのわいのと3人が馬鹿話をしていると試合が始まった。

一夏はやる気があまりないのでディフェンスに回って敵が攻めてきたら相手をするといった感じだ。

数馬は中盤で動き回っていて積極的にボールを追っている。

弾も執拗にボールを追ってはいるもののなかなかボールをキープできずにいた。味方がボールを取ると「パスパスッ！」と言ってボールを要求するがパスが通らなかつたり、すぐさま敵に奪われてしまつたりと散々である。

数馬なんかは弾の要求をガン無視して別の奴にパスを出したりしてゐるくらいだ。

弾のヒーローへの道は険しいようだ。

アイキャッチしりとり

数馬「いいからあいつ無視しようぜ」

弾「絶対にヒーローになってやるから!!」

あつと言つ間に残り時間は1分。

点数は12対12で接戦であつた。

ちなみに弾はまだ一度もボールに触っていない。

ヒーローどころか空気だつた。

いや、動き回つてゼエゼエ息を吐いているのでこういう場合は無駄に二酸化炭素を撒き散らす害悪かもしれない。

「数馬パス!」

相手チームからボールを奪つた一夏が数馬にボールをパスする。

「任せろ!」

ディフェンスの薄くなっていた左サイドからドリブルで切り込んでいく数馬。相手もこれに対応しきれずに数馬を自陣地の深いところまで行くのを許してしまう。

しかしゴール前には1人ディフェンスが残っていてこのままシュートに持ち込めそうにはなかった。

するとディフェンス1人が数馬の方に向かってきてゴール前にずつと張付いていた弾がから空きになった。

「弾!」

数馬は初めて弾にパスを出した。相手のディフェンスとキーパーが驚いた顔をしている。弾はほぼ空気扱いだったので相手チームも気付いていなかったらしい。憐れなやつだ。

「遂にこの俺の出番が来たな！」

ボールを受け止めて相手キーパーと対峙する弾。

「残り時間はあと僅か。点数は同点。ゴール前でノーマーク。舞台は整った」

いちいち格好付けようとする弾。正直見ててウザイ。

「さあ！この俺の華麗なシュートを受けてみる！」

助走を付けて弾は跳躍した。

ジャンプシュートの体勢に入る。

「うおりやあああああ……！！！！！！！！！！！！」

そして力の限り腕を振り下ろしてシュートした。

そしてボールはまるでそこに行く意思を見せるように飛んでいった。

1m以上離れたゴールの外に・・・。

(ピーッ)

「試合終了」。じゃあ、別チームの試合するから準備しろ」

体育教師が笛を吹いて試合終了を告げ、試合をしていた2チームはコートの外へ出て次のチームにコートを明け渡す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

弾はゴール前で固まっていた。

「「なあ弾」」

一夏と数馬が声をかけると弾は首だけ動かして2人を見る。その顔は引きつった笑顔を浮かべていた。

「「お前、超ダセエ!!!!!!」」

第十話 体育の時間 男子編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

体育の授業、これはやはり学園モノには欠かせないでしょ？

ハンドボールを選んだのは作者である僕が学生時代に一番体育で燃えたのがハンドボールだったのでこれになりました。

弾の扱いがなんかCLANNADの春原みたいになってしまいましたが扱的に似たようなものでよしとしましょう。いいですね？

次回は女子の体育をお届けします。

第十一話 体育の時間 女子編（前書き）

女子の体育編です。

男子より話がちょい長めです。

第十一話 体育の時間 女子編

男子がハンドボールの試合を行っているその裏では女子がソフトボールを行っていた。

チーム決めは男子と同じで適当に分かれて2チーム作るといったものだった。

女子の場合は1組と2組の生徒が入り混じった混合チームを作っている形になっていて、シャルロットと篤が同じチームで鈴は別チームになっていた。

鈴が別チームになった理由は「アンタ達と戦った方が面白そうだから」という理由からだ。

「では試合始めるぞー。守りのチームは守備につけー」

体育教師がアンパイアとなって号令を出す。

1回表はシャルロットと篤がいるチームの攻撃だ。こっちのチームをAチームと位置づけよう。

対するBチームの投手としてマウンドに上がったのは鈴であった。パンパンッとボールを2回ほどグローブに叩きつけて馴染ませる。

小柄な体格ながらも大きな威圧感を放っていた。勝負事に関しては結構ムキになるのが鈴なのである。

「プレイボール」

アンパイアの一声で試合開始だ。

「ふっ、打てるモンなら打ってみなさいよ!」

(ズバンッ)

「ストライク！」

ウィンドミル投法と呼ばれる投げ方で鈴は1球目を見事と真ん中ストライクを奪う。

ウィンドミル投法とは、投球腕の回る様が風車（windmill）に似ていることからこの名前がついたソフトボールでは最もポピュラーで球速の早い投げ方だ。

あまりの速さにバッターは手が出せなかったようだった。

「この調子でドンドン行くわよ！」

そのあと1番バッターは全部と真ん中で勝負して三振を奪った。バッターも振りにいったのだがまったくタイミングが合わずに三球三振だ。

続く2番もコースを散らしてのを絞らせずにまたしても三球三振だ。小さくガッツポーズを見せる鈴。先ほども言いましたが勝負事に関しては結構ムキになるのが鈴なのである。

3番バッターはシャルロット。ヘルメットを被って右打席に立つ。

「ふっふっふー、シャルロットか。相手にとって不足なしね」

「うん。鈴、勝負だよ」

火花を散らす両者。珍しくシャルロットも熱くなっているようだ。シャルロットはバットを構え、鈴も投球の体勢に入る。

「はあああー！」

第1球目を鈴が投げる。

（ズバンッ）

「ストライク！」

真ん中の低めに決まった投球はストライクとなった。

様子見で手を出さなかったシャルロットは球速に少しビックリしていた。

「速いね。ざつと90km/hくらいは出てるかな」

「あら、褒めても何も出ないわよ」

ソフトボールは女子で100km/h前後が一流選手の一般的な球速であるので鈴の90km/hは女子高生としてはなかなか速い方である。これも鈴の身体能力の高さ故の球速なのだ。

2球目は内角の低め。これを打ち損じてファールになり追い込まれる。3球目は外角の高め。ここは微妙なコースだったので振つてくると思っていた鈴だったがシャルロットは冷静に見極めてボールを見送ってボール。

「やるじゃないシャルロット。今を見極めるなんて」

「でもちよつと手を出しそうになったよ。僕の勘が正しかったようだね」

「でもね、追い込まれてるのは変わらないわよ！」

両者が火花を散らす中、4球目が放たれた。

コースは真ん中の少し低め。

シャルロットは打ちに行った。

しかし、打つ損じとなりボテボテのセカンドゴロ。セカンドが問題なくさばいて一塁へ送球しスリーアウトとなりチェンジとなった。

「残念だったわねシャルロット」

「次は負けないよ」

言葉を交わす両者は宿敵と書いて『とも』と言った感じであった。

1回裏Bチームの攻撃。

Aチームの投手はソフトボール部員である女子生徒で、1番バッターを三球三振に仕留めて見せた。

しかし2番3番は味方のエラーが続き1アウト一二塁となってしまう。

此処に来てバッターは4番。しかも鈴だ。

「ふふふつ、早くも見せ場がやって来たわね」

不敵な笑みを浮かべてバッターボックスに立つ。

しかし相手ピッチャーもさすがはソフトボール部なだけあってこのピンチの状況でも冷静だった。

息を整えて鈴に第1球目を投げた。

コースは真ん中の高め。鈴はバットを振り抜いた。

「はああああ！！」

（カキーン！）

金属バットがボールを叩く音がして、ボールはピッチャーの足元をバウンドし、二遊間へ向かう。ややセカンドより打球が駆け抜け、二遊間を貫かんとするがそうはさせまいと走る影があった。

「抜かせないよ！」

セカンドを守っていたシャルロットが打球に追いつき捕球した。が、捕った頃にはその身体の反動でセカンドベースを通り過ぎてしまう。

「箒！」

「任せろ！」

ショートを守っていた箒がすかさずセカンドのベースカバーに入った。シャルロットは箒にバックスでボールを渡し、箒はセカンドベースを踏みつけすぐさまファーストへ送球。一塁手がそれをしっかり受け止めた。

「ダ、ダブルプレー！？」

一塁に間に合わなかった鈴が叫んだ。

セカンドとショートの、シャルロットと箒の見事なゲッツーだった。これでスリーアウトチェンジだ。

「やったね！」

「うむ、いいコンビネーションだったな！」

ハイタッチを交わすシャルロットと箒。他の女子ともハイタッチを

交わす。チームの士気が一気に高まった。

「やってくれるじゃない。そうこなくちゃ面白くないわよね」

ダブルプレーを喰らった鈴は相手のスーパープレイにより闘志を滾らせるのであった。

アイキャッチしりとり

鈴「ライズボールなんてどう？」

第「打ち損じなければどうということはない」

「あつちは盛り上がってるねえ」

「なかなかの接戦みたいだな」

試合を終えた一夏と数馬が女子の試合を眺めていた。男子の方も別チームが熱戦を繰り広げているがはつきり言って女子の試合を眺めていた方が楽しかったのだ。

「鈴の奴、なかなかいい球放るよなあ。直球のみだけど速いし的確に上手いコースをついてる」

「鈴の運動能力は凄まじく高いからな。アレとまともに勝負できるやつはそういないだろ」

「シャル達のチームのピッチャーもなかなかいいピッチャーだぜ。上手い事手が出しにくいコーナーをついてきてるし」

「ソフトボール部の部員らしいからな。スポーツ推薦で入ってきたやつらしいぞ」

接戦が続いていて両チームともまだ得点は入っていない。いわゆる投手戦というやつで両チームのピッチャーが牙城を崩されていない状態なのでこれをどう崩すかが勝負の分かれ目だ。鈴は先ほど第にヒットを許したがそれ以外はすべて打ち取っているし、Aチームのピッチャーもうまくコーナーをついてバッターを凡打に打ち取っている。

打順は2順目に入っていて今はAチームが攻撃中だ。

「お、次のバッターはデユノアさんみたいだな」

「さて、シャルは鈴を打ち崩せるかな？」

先ほどはセカンドゴロに終わったシャルロットが再び鈴と対峙する。

「今度も打ち取ってやるわよ！」

「それはどうかな？」

キャッチャーに返された球をミットの中で遊び、鈴は投球フォームに入る。シャルロットも構える。

「はあああ!!」

鈴が第1球目を投げた。

コースは内角やや高め。

普通なら手は出さないようなコースだった。
しかし

「!!!!」

(カキン!)

シャルロットが振ったバットはボールを真芯で捕らえた。ジャストミートした打球はライナーとなって三遊間を貫いた。

レフトが捕球したときにはシャルロットはもう一塁にたどり着いていた。

「えへへ♪」

チームメイトにピースサインを送るシャルロット。

そんなシャルロットをマウンドから少し悔しそうに睨んでいる鈴だった。

続くバッターは4番の篤だ。先ほどはセンター前にヒットを打っている。チームメイトの期待が集まる。

「さつきはよくもあたしの打席をダブルプレーにしてくれたわね。
借りは返させてもらっわよ」

「ふん、そんなも返してもらわずともお前にくれてやる」

「さっきはヒット打たれたけどいい気にならない事ね。今度はあっけなく打ち取ってやるわ」

「御託はいらん。早く来い」

熱い舌戦を繰り広げる両者。軽い挑発も何のそのだ。

「・・・」

「・・・」

暫しの沈黙のあとに投球モーションに入る鈴。箒も構える。

「おらあ！」

華の10代女子とは思えない気合のこもった声で鈴は投球した。
今日1番の剛速球。球速は100km/h以上は出ているだろう。
コースはど真ん中だ。

「はああああ！！！」

箒は迷わず振りに行った。

剛速球とスイングしたバットが交錯する。

（カキン！）

球はバットに当たった。

真芯を捕らえて打球は痛烈なライナーとなってある箇所へ一直線に

向かって行った。

一夏達のいる方へと。

「おい、一夏、数馬」

「ん？おう弾、戻ってきたか」

振り向くと弾が手を振って一夏達の方へ向かってきていた。どうやら先ほどのダメージから回復したようだ。

「何処行つてたんだよ？もうすぐ授業終わる時間だぞ」

「悪い悪い。でももう大丈夫だ。俺も回復したからさ」

「そうか？それはよかったけど――」

「一夏っ！危ないっ！伏せろっ！！」

「へ？」

突然数馬が叫んだので後ろを振り向くと箒の打った打球が一直線に一夏に向けて飛んできていた。

「うおわっ!!」

慌てて伏せると脳天の先1cmほどの所をボールが過ぎ去っていった。

間一髪で一夏は避けた。

しかし

「へ?何——どうあつ!!」

「「あ」」

避けた先には弾がいたのだ。

しかも一夏が影になっていて迫り来るボールが見えていなかったよ
うで避ける間もなくボールは弾の顔面に直撃した。
そのまま派手に転がってぶっ倒れる弾。

「お、おい!弾!」

「弾!大丈夫か!」

慌てて駆け寄る一夏と数馬。

しかし弾は鼻血を出して漫画のように目をグルグル回してノビてしまっていた。

「こいつ、せつかく回復したのに・・・」

「またダメージ受けちまったな・・・」

「しかもこれは」

「重症だな」

ソフトボールが鼻っ柱を直撃したのだ。下手をすれば鼻が折れていくかもしれない。そうなのは一大事だ。弾はそのまま保健室の百春の元へ運ばれていった。

結局これが騒ぎとなって女子のソフトボールは雌雄を決しないまま引き分けとなったのであった。

第十一話 体育の時間 女子編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

ソフトボールのほうが描写的に書きやすいので男子のハンドボールより長くなってしまいました。

つくづく弾が可哀想なキャラになってしまっていますがこれが弾つてことで納得してくれたら幸いです。

ではまた次回に～。感想もよかったらください

第十二話 お昼休みは有意義に 前編（前書き）

最近1話に纏めることができなくなっちゃったなあ・・・。

今回は「あの方」が初登場です。僕は個人的にシャルロットの次に好きなキャラです。

ではどうぞ

第十二話 お昼休みは有意義に 前編

4月の頭の入学式から少しの時が流れて4月の中盤を過ぎたころ、この間に新入生は着実に新しい学校とクラスに慣れはじめ何かと浮ついた気持ちも落ち着く頃合だ。

そんなこんなで、現在太陽が真上に立とうかという時間帯。

場所は藍越学園1年1組の教室。

「『西ローマ帝国』と『東ローマ帝国』というのは共に、後世の人間による呼称で、当時の政府や住民は自らの国を単にローマ帝国と称しており」

ただいま4限目の授業中。科目は世界史で担当は千冬だ。

「この観点からいうならば、西ローマ帝国・東ローマ帝国というふたつの国家は存在せず、それらは、ひとつのローマ帝国の西方領土と東方領土だったということになる」

これぐらいの時期になればそれぞれの科目担当の教師がどういった教師なのかを理解してくる頃合いで、寝ていても大丈夫な教師、話の脱線が多い教師、宿題をドーンと出す教師などそれぞれの教師の特色がわかってくる頃だ。

現在1年1組の授業を行っている織斑千冬教諭は居眠りする生徒を見つけようものなら容赦無く出席簿を寝ている生徒の頭に叩きつけて起こすという、『学校では教師は生徒への体罰を禁止する』というこのご時世を省みずに行う恐怖の教師だ。どこからも文句が出ないのは千冬の教師としての信頼やこれでいて生徒から好かれているという要因があればこそなのである。

それでもやはり出席簿アタックの恐怖はあるようで1年1組の生徒

は誰ひとり居眠りなどせず、千冬の授業を聞いている。

しかし今は4限目だ。疲れが出て睡魔に襲われ、今にも夢の中へ召されそうな者や空腹でノートもまともに取れていない者も何名かいる。早く授業が終わる時間になれと願ってやまないものであった。

「西ローマ帝国が滅亡した後、東ローマ帝国は滅亡の1453年にいたるまで自らの国家をローマ帝国と自称したのである」

そしてそのときは訪れた。

（キーンコーンカーンコーン）

授業の終わりを告げるチャイム。

「では今回の授業はこれまで。日直」

「きりーっ、れい」

「……ありがとうございます」……

挨拶を済ませると授業という責め苦から解放され、教室が一気に騒がしくなる。

友達と輪を作って弁当を食べる者、学食や購買に向かう者、人それぞれ昼休みの行動に出る。

（さて、と）

で、本作の主人公たる織斑一夏の昼休みはいつもなら前述の友達と輪を作って弁当を食べる者に分類される。しかし今日はちよつと違った。

「一夏、お昼にしようよ」

いつもの優しい笑顔でシャルロットが話しかけてきた。この2人は大体いつも一緒に昼食を取っていて、2人の他にもいつもの面々がグループとなって昼食を取っている。彼らのグループは一夏、シャルロット、篝、鈴、弾、数馬といつもの6人だ。ちなみにたまにだ誰かが欠けたりいたり他のグループと混ざって食べる時もある。

「悪いシャル。俺今日は購買行かないといけないんだ」

「そうなの？珍しいね、一夏が購買に行くなんて」

シャルロットが意外そうに言った。普段の彼は弁当を持参してくるのでいつもなら購買には行かないのだ。

「アンタっていつも弁当じゃない？今日はどうしたのよ？」

「今日はちょっと起きるの遅くなっちゃってさ。弁当作る時間なかつたんだよ」

「ふーん、一夏でも寝坊することってあるのね」

「まあ、俺だつてたまにはな」

そばでいた鈴も一夏が弁当がない理由を聞いて意外そうに言葉を紡ぐ。彼が寝坊するのは本当に珍しいことで1年に1、2回あるか無いかだ。一夏が寝坊すれば必然的に朝食と弁当の用意をする者は織斑家にはいなくなる。百春は朝は別に食べなくてもいいと医者とは思えないことを言ってるし、十秋は寝起きがあまり良くないので朝はあまり時間がとれない。千冬は論外である。

「弛んでいるから寝坊などするのだ」

相変わらず筈が辛辣に言葉を投げてくる。

しかし一夏も今回はその通りだと思つので反論できない。

「というわけだから購買行つて来るよ」

「いつてらしゃい」

「早く戻つてきなさいよ」

「ふん」

3人に行つて来ると言葉を告げて一夏は購買へと向かった。
ちなみに弾と数馬も購買組だが授業が終わつたと同時に教室から居なくなっている。

購買組に必要なのは迅速な行動なのだ。出遅れた者は残り物を甘んじて食べるしかなくなる。一夏はすでに遅れている。

（うちの教室は4階で購買は1階にあるから面倒だよなあ。しかもうちの教室は端っこだから余計に距離が長いし・・・）

心の中で毒づくもそれで購買までの距離が変わるわけではないので一夏は購買へと急いだ。

アイキャッチしりとり

「夏」「一番星みいーつけた！」

真耶「た、太陽は罪な奴！」

「ん？」

2階に差し掛かったあたりで一夏足を止めた。

何やら大きなダンボールを2つ抱えて歩いているひとりの女性がいるのだ。その女性はフラフラした足取りで非常に危なっかしく今にもダンボールを落としそうだった。

「大丈夫ですか？山田先生」

「ふえ？ああ、織斑君ですか？」

ダンボールの横から顔を出したその女性は1年1組の副担任の山田真耶だった。今年から教師になったばかりの新米教師で担当は現代国語。身長は低めで、髪は少し色の薄い緑色のショートヘア。黒縁眼鏡をかけていてサイズが合っていないくて大きめなのか若干ずれている。格好はスーツ姿なのだが本人が傷付くので絶対に言わないがスーツがあまり似合っていない。なんとというか、『子供が背伸びをしてスーツを着ている』という感じがおり、顔も一夏と同じ歳だと言っても何の疑いもなく信じてしまいそうなほど童顔である。まあ、一夏と同じ歳の者では稀有なほどの大きいモノを彼女はもちです

がね。

「どうしたんですかそのダンボール？なんか凄いいっぱい書類みたいなのが入ってますけど」

「実は、他の先生からこれを資料室に運んでおいてくれと頼まれたんですが・・・」

「つまり、新人だから押し付けられたんですね？」

「はうっ！そんなハッキリ言わないでくださいっ！」

瞳を潤ませて若干の涙声で一夏に言葉を返す。その姿はやはり教師には見えないのであった。恐らくこのおどおどした態度のせいであろうやって雑務を押し付けられたに違いないと一夏は思った。資料室も3階の端っこにあるのでここからなら距離も結構ある。お人好しである一夏がこんな困っている女性を放っておけるはずもない。

「女性にはこの量はツライでしょう？何なら俺が手伝いますよ」

「ほ、本当ですか織斑君！？」

一夏の手伝いの申し出に顔をがばつと上げてキラキラした瞳で一夏に詰め寄る。やはりこの量は辛かったようで一夏の申し出を聞いて先ほどの泣き顔はどこへやらだ。が、嬉しそうにしていた顔が一瞬であつと表情になり

「そ、そんな悪いですよ！これは私が任された仕事ですし。織斑君これから購買に行くんですよね？私の手伝いなんてしてたら購買の商品が売り切れちゃうかもしれませんし・・・」

この時間に一夏がこの場にいた理由を察したのか彼女は一夏の申し出を断った。

「大丈夫ですって。万が一売り切れちゃってたら友達に何か分けて貰いますから。そんなことより今の山田先生の方が心配ですよ。足取りをフラフラしてて危なっかしかったし」

一夏もここは譲らない。目の前に困っている女性がいるから助ける。それが一夏の信条でシャルロットと初めて出会ったときもそれが理由でシャルロットに話しかけたのだ。

「で、でも・・・」

「一人で持つのツライでしょう？ほら、遠慮しないでいいですから！」

そういつて一夏は2つあるダンボールのうちの1つをひょいっと受け取り歩き出す。

「す、すみません・・・」

「そんなに気にしないでくださいって。それにほら、俺と真耶さんの仲でしょう？」

「え！？ちよつと、一夏くん！ここは学校ですからその呼び名はやめてください！」

突如下の名前で呼ばれた真耶が驚きの声を上げる。

その会話はどこか親しげで2人がただの教師と生徒という関係では

ないことがわかる。

実はこの2人は一夏が藍越学園に入学する以前の顔見知りなのだ。

彼女、山田真耶はこの藍越学園のOGで千冬とは中学時代から付き合いがあり、彼女は千冬が最も可愛がっていた後輩だったのだ。よく織斑家にも遊びに来ていたので一夏ともその時に親しくなったのである。一夏にとって真耶は『ちよつと頼りないけど可愛い年上のお姉さん』といった認識だ。

「今俺のことも下の名前で呼んだよね？」

「そ、それは一夏くんが先に私を真耶さんって呼ぶから」

「ほらまた呼んだ」

「あう！これはその・・・」

「織斑先生に言いつけちゃおうかな」

「はううう！それだけはやめてくださいっ！」

「ハハハハッ、ウソウソ冗談ですって」

あたふたとする真耶の反応が面白くてついからかってしまう一夏。それを察したのか真耶の顔がふくれっ面になる。

「もう！教師をからかうんじゃないありません！」

「はいはい、わかりましたよ。すみませんでした。もうしませんか

ら」

一応謝罪と了解の返事をした一夏だが、心の内では「そんなふくれっ面になっただって可愛いだけなんだけどなあ」と思っていた。

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

「はい、山田先生！」

「そ、それならいいですよ。許してあげます」

「はいはい。それじゃ、これをさっさと運んじやいましょう」

「あう、ちょ、ちょっと待ってくださいっ！」

歩き出した一夏に真耶が慌てて付いてくる。バタバタした子犬のようでも可愛いなあと思う一夏だった。

資料室にダンボールを運び終え、真耶からお礼を言われると共にもう一度学校では真耶さんと呼ばないようにと念を押されてから一夏は再び購買を目指した。

もう昼休みは10分は経過しているのもう購買には碌なものは残っていないである。しかし腹は減っているので何か調達しなければならぬので購買には一応向かう。

購買に到着するとやはり碌なものは残っておらず、あんぱんが1個とラスクが1枚しか残っていなかった。背に腹は代えられないので

一夏そのあんぱんとラスクを購入して教室へと戻るのであった。

第十二話 お昼休みは有意義に 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

山田先生登場の回、いかがでしたでしょうか？

彼女の可愛さをちゃんと表現できているか凄く不安ですが頑張って書きました。それにしても山田先生って可愛いですよえ〜。

さて今回は「お昼休みは有意義に 後編」をお送りします。

ではまた。感想もお待ちしています。

第十三話 お昼休みは有意義に 後編（前書き）

今回は難産でした。

うまくまとまらなくて2日間悩みぬいて投稿となりました。しかもあまり時間が取れないで眠いときに執筆してたせいか頭が痛い・・・。

第十三話 お昼休みは有意義に 後編

「おそくいつ！」

購買から戻ってきた一夏は鈴のその一言で出迎えられた。

「購買行つて帰ってくるにしちゃ時間掛かり過ぎよ、何してたのよアンタ？」

「確かに時間が掛かり過ぎだ。何をしていたのだ？」

「一夏、何かあったの？」

帰ってくるのが遅かった理由が気になるのか3人はその理由を尋ねてきた。

「購買行く途中で山田先生に会ったんだけどさ、何か大きなダンボール抱えてフラフラしながら歩いてたから放っておけなくて手伝ってたんだよ。だから少し遅くなった」

一夏は遅くなった理由を説明した。そうすると鈴は少し呆れた顔になる。

「アンタってホントにお人好しよねえ。人助けしてたから遅くなったって、そんな事してたら購買売り切れちゃうじゃない」

「売り切れはしなかったがこれしか買えなかったけどな」

そう言つて一夏は購買で買ったあんぱん1個とラスク1枚を全員に

見せた。

「シヨボツ！何だこれ？碌なものじゃないな」

「こんなものじゃ成長期の男子の腹なんか膨れねえだろ？」

「これしか残ってなかったんだからしょうがないだろ」

弾と数馬も一夏が買ってきたパンを見て驚いている。確かにこれでは腹は膨れない。

「食わないよりマシだろ？午後の授業だつてあるんだし」

一夏は椅子に座ってグループの輪に合流する。

「ん？シャル、箒、何でお前ら弁当に手を付けてないんだ？」

シャルロットと箒の弁当は一切手が付けられていない状態で机の上に置かれていた。

「僕は一夏を待ってたんだよ」

シャルロットはにつこりと笑って一夏に言った。

「わ、私は、アレだ。シャルロットが待つと言うから・・・」

箒は少しそっぽ向いて言った。

「でも別に先に食べてくれててもよかったのに」

真耶の事は放っておけなかったので後悔はしていないが健気に待っていてくれた2人に一夏は嬉しさと同時にちよつと罪悪感も覚える。

「私はシャルロットがひとりだけ待つと言って聞かないから私が付き合っただけだ！ひとりで待つのは可哀想だろ！別にお前の為じゃない！か、勘違いするなっ！」

本当は箒も一夏を待っていたのだがやっぱり素直になれず一氣にまくし立てる。何やら言い訳じみて聞こえるのは気のせいではない。

「それでも待つてくれたんだろ？ありがとうな箒」

「ふ、ふんっ！」

箒は顔を赤くして再びそっぽ向く。それ見て一夏は「箒も可愛いところあるよなあ」と思うのだった。

「それにくらべて・・・」

一夏は鈴、弾、数馬の方を見る。

「むぐ？」

「あ？」

「何よ？」

弾はやきそばパンを頬張って、数馬はジュースを飲みながら、鈴は弁当のチャーハンをスプーンで掬いながら一夏に視線をやる。

「お前らは少しでも待とうという気はないのか？」

「「「ない」」」

即答する3人。

「即答すんなよ……。薄情な奴らだな」

「昼休みは有限なんだよ」

「そうそう」

「遅れてきたアンタが悪い」

「はいはい、俺が悪かったよ」

薄情な友人を半目で睨むも非は自分にあるので一夏はそれ以上何も言わなかった。

「コホン。与太話はこのくらいにして我々も昼食にしよう。もう昼休みも半分ほど過ぎている」

「うん」

「おう」

藍越学園の昼休みは40分と少し長めだが、もう15分は経過してしまっているので残り時間は半分ほどしかない。そんな時間まで自分を待っていてくれたシャルロットと箒の2人に心の中で感謝をしつつ一夏はあんばんを口にするのだった。

アイキャッチしりとり

一夏「つまらんものを食ってしまったな」

第「泣かぬなら殺してしまえホトトギス」

(さて、どーしたのか・・・)

食べ始めてから5分もしないうちにあんぱんとラスクを食べ終えてしまった一夏は手持ち無沙汰になっていた。他のメンバーはそれぞれの昼食を食べながら談笑に華を咲かせている。一夏は中途半端に食べ物を口にしたせいか胃袋が活性化し、ぐうぐうという音を立て「もっと食い物寄せよ」と言ってくる。

「むう」

一夏の腹の虫は治まってはくれずしきりに食べ物を要求するように

暴れている。

「一夏、すごいお腹鳴ってるね？」

「そりゃあ、空腹な上にこれだけ美味そうな弁当が目の前であればなあ・・・」

一夏の目の前にあるのはシャルロットの弁当。シャルロット自身は小食なので量はそれほど多くないがグリーンピースご飯にミニハンバーグ、玉子焼きにプチトマトにブロッコリーなど見た目に美味しそうな弁当が一夏の腹を刺激する。

それに視線を巡らせれば箸の弁当にも目がつく。箸の弁当はシャルロットより豪華で鶏肉の唐揚げに鮭の塩焼き、蒟蒻と牛蒡の唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えとなんともバランスの取れた献立の数々がそこにはあった。

今の一夏にとってこの状況は生殺しもいいところだった。

「い、一夏、何だったらおかずを少し分けてやるがどうだ？」

「マジか!？」

箸の申し出に一夏キラキラした眼をして飛びつく。いきなり一夏の顔が真近に迫って箸は驚く。

「なあ!こ、コラ!顔が近い!」

「ああ悪い悪い。つい嬉しくってさ」

怒られたので顔を離す一夏。すると箸は一夏には気付かれぬように少し残念そうな顔をする。

「べ、別にイヤだったわけじゃ・・・」(ボソッ)

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもない！」

「そうか？ならいいけど。しかしこれはすごいな！どれも手が込んでそうだ」

「これぐらいはできて当然だ」

「そっか。でも本当に貰ってもいいのか？」

「いいと言っている。ほら好きなやつを取れ」

箒は弁当箱を差し出してきた。一夏はどれにするか悩んだが鶏の唐揚げを貰うことにした。

「じゃあまあ、いただきます」

貰った唐揚げを頬張った。

「おお、美味しい！」

「そ、そうか？ならよかった。おいしかったなら、いい」

一夏は正直に感想を言った。箒も褒められて嬉しかったのか少し表情をゆるませる。

「味付けは生姜と醤油とおろしニンニクだな。あとちょっと胡椒も混ぜてあるな。あとは何だ？何か隠し味みたいなものが入ってそうんだが？」

「隠し味は大根おろしが適量だ。そうすることで冷めても衣がベタつかない」

「おお、それはいいな。今度俺もやってみよう」

にこにこしながら唐揚げの味付け確認をする一夏。ひとしきりうんうん唸ってから一夏は箒に向かって言った。

「これなら金が取れるぞ」

「そんなに感動するほどのものじゃない。大げさだ」

「いやいや、それほど美味しかったんだって。しかしあれだな。箒はいい嫁さんになるな」

「なっ！よ、嫁！！」

いきなりのトンデモ発言に顔をボツと赤くする。

「これだけ料理上手なんだしな。お前の手料理を毎日食えるなんて男としては幸せだぞ」

「そ、そうなのか？う、うん、そうかそうか」

「おう。自信持っていぞ」

何かブツブツと言っている筈に一夏は首を傾げるが料理の腕は間違いないので自信を持つように言葉を投げかけた。

「・・・・・・・・」

「ん？どうしたシャル？そんなふくれっ面で俺を睨んで？」

「ふえっ！？な、何でもないよ、気にしないで！」

ふくれっ面になって一夏を睨んでいたシャルロットだったが一夏に指摘されると慌てた様子で手をブンブンと振った。
彼女がふくれっ面になっていた理由は簡単だ。
しかし一夏が気付くはずはない。

「ね、ねえ一夏！」

「ん？」

意を決したような顔をしてシャルロットが一夏を呼んだ。

「よ、よかったら僕のおかずも食べる？」

「マジか！？それは助かる！あつ、でも量がかなり少ないぞ。本当にいいのか？」

「僕は平気だよ。うん。そ、それじゃね・・・」

「？」

何やら緊張した面持ち弁当箱から玉子焼きを箸でつまんでおもむろ

に一夏の方へ差し出す。

「はい、あーん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、へ？」

あまりに唐突に起こった事態に一夏は呆けてしまう。

「むっ」

「あらあら」

「ほう」

「へえ」

4対の視線が一夏に突き刺さる。箒はムスツと、鈴、弾、数馬の3人はニヤニヤしている。

「え、えーつとっ・・・」

「はい、食べて一夏」

どうしていいかわからないで若干パニック状態の一夏に、少し頬を染めてにつこりしながらシャルロットが玉子焼きを差し出す。

（こ、これはいったいどうした事だ！？何故シャルは俺に玉子焼きを差し出して「はい、あーん」なんて！？）

心の中もパニック状態の一夏。

一方、シャルロットは

（さ、さすがにこれは恥ずかしいなあ。で、でも僕だって頑張ってお料理してるんだしこれくらいしてもバチは当たらないよね）

勇気を総動員して一夏に『はい、あーん』を実行したのであった。

そして絶賛パニック中の一夏は

（べ、別にシャルにこうされるのがイヤとかそういうことはないんだが、横で見てる4人の視線が果てしなく痛い……。しかも昼休みもそろそろ終わりが近いからクラスにも人が溢れかえっているわけで、……って見られてる！クラスメイト全員から見られてる！！）

「うううう……」

「どうしたの一夏？」

「いや、どうしたのって、そのお……」

「もしかして、迷惑だったかな？」

「え？イヤそういうわけじゃ……」

「一夏が迷惑だっていうなら……、やめるね？」

勇気を振り絞ったシャルロットだったなかなか一夏が食べてくれないので不安に陥ってしまい箸を引っ込めようとする。その表情は少

し陰りが映っていた。

「うわ、一夏サイテー」

「女の敵だな」

「一夏がこんなやつだったとは」

「失望したな」

4人がよつてたかつて一夏を非難する。そしてそれをみていたクラスメイトも一夏に非難の眼差しを向けている。

（えーっ！？俺が悪いのか！？俺にどうしろってんだ！？ああ、なんだかシャルがすげえ落ち込んでる！シャルにこんな顔させたくないし、ええーい！ままよー！）

「シャ、シャル！た、食べるから。そんな顔しないでくれって！なあ。そのお、あ、あーん」

シャルロットに向かって口を開ける。

「うん！はい、あーん」

「パクッ」

差し出された玉子焼きを一夏は口にした。

「ど、どうかな？おいしいかな？」

「う、うん、美味しいよ」

実際一夏は恥ずかしさのせいで味なんかわかっていなかった。
何だかわからないけど恥ずかしさの中にも嬉しさがあってそれがまた一夏の味覚を狂わせていた。

「そう、よかった!」

「あ、ああ」

シャルロットの明るいスマイルに一夏は羞恥に顔を赤くする。

「ねえ、これってさあ」

「ああ、アレだな」

「うん。アレだ」

「『間接キス』」

さきほどから気になっていた事を鈴、弾、数馬が口にした。

シャルロットが使っていた箸で「はい、あーん」をしたのだからそれを一夏が口にした時点で間接キスの成立だ。

「『!』」

ようやくそのことを理解したのか2人はバツと自分の口に手を当てる。顔なんかもう完熟トマトですら真っ青に見えるくらいに真っ赤になっていてしまっていた。

口に手を当てたままお互いに少し距離を取る。まるで本当にキスし

てたところを誰かに見られたかのような動揺しっぷりだった。
離れたあとはお互いを見る事が出来なくなってしまう背中合わせの
状態だ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が2人を支配していた。相手の顔を見る事もできずただ真っ赤
になっているだけだ。

「お、俺ちよつとトイレ行つて来るよ!!」

「ぼ、僕もちよつと頭を冷やして来るね!!」

居た堪れなくなった一夏とシャルロットはビューツと教室から出て
行ってしまった。

「って、もうすぐ昼休み終わりの時間じゃない」

「あいつら時間までに戻ってくんのか？」

「さあな。多分戻つてこないんじゃない？」

結局2人が戻ってきたのは昼休みが終わって5分を過ぎた頃で2人
揃って5限目の担当教師に怒られたのであった。

「何故いつもシャルロットばかり・・・」

2人が去ったあとにそう篤が呟いていたのであった。

第十三話 お昼休みは有意義に 後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます

今回は何か捗りなかつたなあ・・・。

いつも以上に出来がヒドイ気がしてならない・・・。

修正がチヨコチヨコ入る話になりかもしれませんが

ではこのへんで

第十四話 部活をやろう 前編（前書き）

僕は中学は野球部、高校は柔道部でした。
皆さんはどんな部活動をしていましたか？

今回は弾&数馬、そして算の話です。

第十四話 部活をやるう 前編

「これにてSHRを終了する。では諸君、さようなら」

「「「「「さようならっ!!」「」「」」」」

午後の授業もつつがなく終わり、たった今SHRも終了し生徒たちの待ち望んだ放課後を迎えた。

ある者は帰宅をし、ある者は友人と駄弁り、ある者は部活に向かう。そして今回は部活についてのお話だ。

ここ私立藍越学園は自由な校風をモットーとしており、部活動も割かし自由にさせてくれている。

学校によつては絶対どこかの部に入部しないといけなかったりするがこの学園ではそういうことは無く帰宅部となる生徒もいたりする。しかし、帰宅部になる生徒は生徒全体から見ると10%をきつていない。これはこの学園が部活動に対する力の入れ方が半端ではないからだ。支援が大きく、部費は破格の高さで各部活動にはちゃんと専用の部室がある。

例えば吹奏楽部には音楽室、美術部には美術室といった特別教室で活動を行ったりするのが一般的だろう。

しかし、それはあくまで一般的な学校の話だ。

運動系の部活動にはグラウンドや体育館のそばに第一部室棟というものがあり、そこに運動系の部活動の専用の部室がある。

部室には各部屋にシャワーやトイレが備え付いていていつでも生徒が使用できるようにしてある。

部活によつてはクーラーや冷蔵庫といった家電までもが完備されていたりもする。

文化系の部活動は校舎の裏側にあり渡り廊下を渡って行く第二部室棟というのがある。

こちらの部室棟には美術部が活動するのには十分な広い美術部専用の美術室があったり、茶道部にはこれまた広い和室が設備され、演劇部にはちよつとしたステージが設備されていていつでも舞台に立つ練習ができたりする。入学式のあとに行われた部活動勧誘も文化系の部活はこの部室棟で様々な催しを行っていたのだ。

何故この学園がこうにも部活動に対して大盤振る舞いをするのかというと、理事長である轡木十蔵氏による力が大きい。

齢80になろうという彼は学生時代に戦争を経験しており時代と言う波に翻弄され満足な学生生活を送る事ができなかったのだ。

彼はそのことから生徒達にはそんな時代と言う波翻弄された自分のようにはなずらに自由に楽しく学園生活を送ってもらおうという考えを持って部活動に対する支援を行っているのだ。その一環として例があげられるのが部活動勧誘であろう。出展やゲームや簡易試合など生徒のやりたいようにやらせてみる。そうすることによって新入生は部活動に興味を持ちより部活動が活性化するといったところだ。これだけで学校の偏差値もそれなりに高い方だが決してお堅い進学校というわけではなく、卒業生の進学率、就職率の高さも半端ではないのがこの学園の売りなのだ。まさに理想の学園と言ってもいいかもしれない。

五反田弾&御手洗数馬の場合

彼ら2人は軽音楽部に所属している。部長がいうにはこの日は『学

園祭に向けて』のミーティングを行うとのことだ。

何故まだ一学期の4月なのにもう学園祭の話をするのかといえば、二学期になってから学園祭をどうするよ的な話をしてそこからスタートしていいは遅いすぎるのだ。軽音楽部は演奏をしつかりとアピールできる場がそうそうなく、部活勧誘と学園祭が唯一のお披露目の場と言っている。

学園祭はその数少ない場の中でも最も軽音楽部がスポットライトを浴びることのできる時と言えるだろう。加えて軽音楽部に対する期待も大きく生徒達からは毎年毎年楽しみにされているほどである。

「軽音はイベントの華といってもいい。その期待に応えるようにより多くのミュージックを届けようと自分は思う」

軽音楽部部長の言う事に部員誰もが納得をし部員全員が学園祭に向けて走り出したのである。

「今日はそれぞれの担当楽器とグループ分けを決めるって部長が言ってたな」

「そうそう。担当が重複したりもするから結構早く決めないと後々切羽詰ってくるみたいだぜ」

弾と数馬が部室へ向かいながら今日のミーティングについて話している。

「俺はやっぱりエレキギターをやりたいな。あのビックウェーブが来るような衝撃を是非とも披露したい」

数馬のギターの腕はプロ級で中学時代にも軽音楽部に所属しておりその演奏は中学の文化祭のときも冴え渡りステージを熱狂の渦と

化したのだった。

「俺もベースに立候補するけど俺の場合は腕がなあ・・・」

弾も一応ベース弾きが趣味だが腕が立つわけではなくまだまだ趣味の領域だ。

「これからうまくなるんだろ？なりたいたから軽音楽部に入っただろ？そう気落ちすんなって！」

「そうだな。これからうまくなっていけばいいよな！」

弾を励まし奮い立たせる数馬。それに後押しされるようにやる気を出す弾。といっても音楽への情熱を滾らせる数馬とは違い、弾はただ楽器が弾ければ女にモテルだろうという不純な考えを持っているのだ。数馬も薄々気付いてはいるが上手くなりたいのは本気らしいので弾を後押しすることにしたのだ。

「よし！ならさっさと行こうぜ！」

「おう！」

そして2人は部室へと急いだ。

アイキャッチしりとり

弾&数馬「すばらしき新世界ー！」

箒「一心不乱に、打つべし！」

箒ノ之箒の場合

箒は剣道部に所属している。実家が剣道場であり中学では全国大会で準優勝をした経験をしているので剣道部にとってはまさに逸材であろう。だが、箒自身はあまり剣道部には顔を出しておらず週に2回ほどだ。実家が剣道場なので鍛錬をするなら実家でする方がいいので剣道部にはあまり実用性を感じていないのだ。週2で出ているのはより多くの人と試合をしたりした方が身になるからである。そして今日はその週2で出ている1日だった。

「めええええええん！！」

（ズバ——ン！！）

甲高い音が空間にこだました。

「面あり一本！ それまで！」

正眼に竹刀を構えた箒の前には、尻餅をつくようにして倒れる人物

がいた。剣道部の2年生で剣道部の中では実力者と呼べる男子だ。その男子を箒はものの見事に打ち倒したのだった。

そうして互いに姿勢を正し中央で竹刀を納め数歩下がると、互いに礼をして白線から出た。

面を取るとふあさりとまとめていた長い黒髪が落ち、珠のような汗が箒から零れ落ちる。その様子は惚れ惚れするほど様になっており、箒の顔立ちの良さもあっつか見ている周りの部員達にはとても神々しくみえた。

「篠ノ之さん、お疲れ」

「ああ、部長。どうも」

「はい、これタオル」

「ありがとうございます」

部長からタオルを受けてって顔をうずめる。

「さすがは全国大会で準優勝しただけのことはあるわね。うちの男子の実力者をこうもあっさり倒すなんて」

「いえ、実家が剣道場ですからね。幼い頃から剣道に触れていたというだけです」

「そう謙遜しないの。それだけの人が全国大会で準優勝なんかできないでしょ？」

「は、はあ」

全国大会準優勝というのはなかなか凄い肩書きなのだが箒にとっては少し違うのだ。

中学3年の秋に行われた全国大会。実は箒はこの大会で優勝したらあることをしようと誓っていた。

そう。それは『優勝したら一夏に告白する』だった。鈴も応援してくれていた。弾も数馬も、そして一夏も

実家が剣道場である箒はそのキャリアから優勝を有力視されていた。事実、実力的にも箒はズバ抜けていて、優勝は間違いないとも言われていた。

が、現実はそのはいかなかった。

決勝戦、相手は無名の女子だったがストレートで決勝まで勝ちあがってきておりその太刀筋は箒も一目を置くほどで立ち振る舞いも剣士と呼ぶに相応しいと箒は思っていた。最高の舞台で最高の好敵手との戦い、そしてそれを越えてこの想いを一夏に伝えようと箒も燃えていた。

しかし、試合は呆気なく終わりを告げた。

試合形式は三本勝負。一本目は開始と同時に素早い動きで突進してきた相手に面を貰ってしまい一本を取られてしまう。二本目は自分から攻めに行き、渾身の一撃を面に放とうとしたが相手の竹刀がそれを弾き返した。身体が反れて箒の胸が空になり相手がすれ違うように足を踏み出し、その胸に竹刀を叩き込み二本目を取られて敗北した。

惨敗だった。何も出来ずに終わってしまった。

一夏は「残念だったな。でも準優勝だって凄いぞ。よくやったぞ箒」と言ってくれたが箒の心は晴れなかった。

優勝できなかったから一夏への告白も断念しなければならなかった。でも、落ち込んだ理由はそのことだけではなかった。

箒はこう思っていた。

（自分は心の何処かで優勝するのは当たり前だと思っていたのでは

ないか？幼い頃から剣道を嗜んでいて実家も剣道場だからと。それが慢心となり心に隙が出来ていたからあんな無様な試合になってしまったのではないか？私は今まで何をしていたんだ・・・）

思考に埋没していた箒は頭を振るった。

あれからの箒は変わった。己の慢心に踊らされぬように鍛錬を積み、今では父であり師匠でもある篠ノ之柳韻りゅういんをあいてにしても食い下がるところまで腕を磨いたのだ。

（今度こそ、私は・・・、己の慢心に打ち勝ってみせる！次に行われる全国高等学校総合体育大会剣道競技大会（インターハイ）の個人戦に出場し優勝してみせる！そして、そのときはこの想いを一夏に！）

箒はまた己の慢心と向き合うため、再び一夏への想いを貫き通すために走り出すのだった。

第十四話 部活をやろう 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回は箒の心情を描くのに苦労しました。原作とは構想を変えているので全国大会は準優勝という形になりました。箒も実はいい娘なんですよね。

次回は「部活をやろう 中編」となります。鈴のお話です。

第十五話 部活をやろう 中編（前書き）

また長くなっってしまったので中編になってしまいました・・・。

今回は鈴が大活躍します。

あとちょっとだけオリキャラ出しました。名前は僕の中3と高3の時の担任の名前です。

第十五話 部活をやるう 中編

鳳鈴音の場合

鈴は今ソフトボール部の練習に参加していたのだった。

何故鈴がそんなものに参加しているかというと、先日の子育の授業で行われたソフトボールの試合で鈴と激しい投手戦を見せた女子生徒がいたのを覚えていたのだろうか？その女子が鈴の投球を見てその投手のセンスに惚れ込みソフトボール部への入部を勧めてきたのだ。最初は放課後は実家の手伝いがあるからと断っていたがそれでも熱心に入部を勧めてくるので鈴はある条件を出した。それはこういったものだった。

「あたしとアンタでソフトボール部のメンバーを相手にして打ち取った人数が多い方が勝ち、あたしがアンタより打ち取った人数が少なければ入部してやるわよ。」

かくして鈴はソフトボール部の1年生ルーキーの『奈良原遼子』と投手戦をすることになったのだ。

鈴としてもあの時の決着をつけることができると思い闘志を滾らせていた。

負けず嫌いで勝負事にはムキになるのが鈴なのだ。この勝負を申し込まれたのはある意味僥倖だったと言えるだろう。

「それでは、はじめますよー」

勝負形式は簡単だ。投手は9人のバッターを相手にしてバッターを打ち取った数の多い方が勝ちだ。先に投手を務めるのは奈良原だ。鈴は三塁側のベンチに座って相手の投球練習を眺めている。

「ねえ一夏、あの奈良原って娘どう思う?」

「ん? そうだなあ」

鈴の隣には一夏が座っていた。彼も部活には所属していないので鈴の応援に駆けつけたという訳だ。鈴に意見を求められたので一夏は自分の意見を述べた。

「体育の授業で少し見た程度だけだなかないピッチャーだと思
うぜ。投球ホームにも一切乱れが無いし、球速もざつと85〜90
km/hくらいは出てるだろ。この前の授業ではあまり本気を出し
ていなかったようだし出塁を許したのも味方のエラーだったしな」

「そう。真つ当な意見ね」

一夏の述べた意見は鈴も同意見だった。体育の授業でしかも素人相
手に本気で投げるほど相手も馬鹿ではないということだ。

「プレイボール!」

審判が試合開始を告げる。

鈴と奈良原の投手戦が幕を開けた

(ズバンッ)

「ストライク、バッターアウト!」

「上手い事手が出しにくいコーナーについてきてるわね。あれじゃ
バッターも的が絞りきれないわね」

「ストレートとチェンジアップの使い分けも上手いし球種も豊富だな。カーブ、ライズ、ドロップもすべて1級品だな」

やはりスポーツ推薦で入学してきたのは伊達ではない。相手ピッチャーは次々とバッターを打ち取り、8人目が終わった時点で被安打は0だ。

次は最後の9人目。バッターはソフトボール部の主将の『松本栄子』だ。

相手も主将の登場に緊張感が増しており何と云えない空気感が漂う。結果主将は甘いコースに来たストレートを見逃さずに打ち返し三遊間を破るヒットを放ったのだった。

奈良原の結果は被安打1だ。

続いては鈴が投手を務める番だ。鈴は今投球練習をしている。

（ズバンッ）

ウィンドミル投法で鈴の腕から放たれたボールは90km/hほどの球速でキャッチャーのミットに吸い込まれた。

「うーむ、調子は上々ね」

そう言いながら鈴はキャッチャーから返球された球をグローブの中で遊ばせる。

鈴は先ほどの奈良原のように豊富な球種を持っているわけではなく投げる球は殆どがストレートだ。しかしストレートだけと言って侮ってはいけない。鈴は速球派なので調子に乗ってくれば100km/h以上の球速を叩き出すことが出来る。おまけにそれだけの速球を放る鈴だがこれでいてコントロールがいいのだ。これは女子高生

レベルとはいいがたいレベルだ。

「さて、はじめますか」

グローブの中で遊ばせていた球を鈴が握り締める。その瞳には闘志が湧き上がっていた。

「りん！頑張れよ！！」

一夏の激励に鈴は手を上げて応える。

「わーかってるわよ！全員打ち取ってやるわ！！」

相手方は被安打が1だったので全員打ち取れば鈴の勝ちという事になる。

鈴の試合が幕を開けた。

アイキャッチしりとり

奈良原「シュートってどう投げるの？」

松本「のんびりと考えればわかるわよ」

「ふっふっふー、遂に此処まで来たわね」

不敵な笑みを浮かべて鈴が目をキラッと光らせる。

球速にものをいわせてここまで8人をすべて三振に打ち取るという快進撃で鈴はここまで来た。

これにはソフトボール部員達も驚きの表情を隠せないでいた。

それはそうだ。8連続奪三振なんてそうそうにできることではないのだ。

日本プロ野球の1試合最多連続奪三振記録は9と記録されている。それに迫る勢いなのだ。

そして最後のバッターはあのソフトボール部主将の松本だ。

「あなた、物凄い良いピッチャーね」

主将がバッターボックスに立ちながら鈴に話しかけてきた。

「それはどうも」

「それだけの才能を持て余すのは勿体無いでしょう？勝負に関係無しで本気でうちの部に入ってくれないかしら」

「褒めてくれるのは嬉しいけどそれはお断りするわ」

「そう、残念ね。でも、こっちもこのまま引き下がるつもりは無いわ。9連続奪三振を奪われるなんてこっちのプライドが許さないからね！」

「さすがは主将。言うじゃない。ならこっちもそのプライドへし折ってやるわ！」

鈴が投球フォームに入る。主将もバットを構えて応戦の構えだ。

「らっ！」

鈴が第一球目を投げた。コースは外角高めで僅かに外れてボール。

「良いコースね。ちょっと手を出しそうになったわ」

「褒めたって何もでないし入部もしないわよ」

「そうね。じゃあ次どうぞ」

「言われなくても！」

第二球目。真ん中低め。相手はバッドをスイングしたが、ファール。

第三球目。内角やや高め。冷静に見極めてボール。

第四球目。内角低め。これも見送ってボール。

第五球目。外角やや高め。バットがボールを捕らえたがレフト線にボールがきれてファール。

追い込んでカウントはツーエンドスリー。

「これで最後ね」

「ええ、これで最後よ」

「最後に一言だけ言っておくわ」

「何かしら？」

「楽しかったわよ！」

「こっちもね！」

鈴が投球フォームに入り、主将もバットを構え

「オラアアッ！！」

渾身の一投を鈴が投げた。

コースはど真ん中。球速は100km/h以上は出ているだろう。

「はあああっ！！」

主将も振りにいった。

球が高速なら、そのバットのスイングもまた高速。
剛速球とスイングしたバットが交錯する。

その一瞬前に

ボールが落ちた。

（ズバンッ）

ボールはキャッチャーのミットに吸い込まれた。

鈴が最後に投げたのはドロップボールだった。

今までストレートのみ投げていた鈴だったがこの局面で隠していた球種であるドロップボールを投げたのだ。所謂「切り札は最後まで取っておく」こういうやつだ。

「ストライク！バッターアウト！」

「っしやあああ！！！」

鈴がガッツポーズと共に歓喜の声を上げる。勝負結果は鈴の勝利。しかもソフトボール部員を相手にバッター全員を三振に打ち取るという快挙だった。

「くくくくわあああああつ！！！！」「くくく」

いつの間にかできていたギャラリーが沸き立った。見るとサッカー部や野球部やバスケット部といった他の部活の生徒達までもがギャラリーに混じっていた。

「凄い！」「本当に勝ったぞ！」「9連続三振だつて！！」

ギャラリーからそんな声が聞こえてくる。鈴の活躍に興奮を隠しきれないようだ。

「鈴！」

一夏が駆け寄ってきた。

「やったな！凄かったぜ！！」

「ふつ、当然よ！」

「「イエーイ！！」」

ハイタッチを交わす2人。

「それにしても、いつの間にか凄いギャラリー数になったわね」

「ああ、お前が6人目を打ち取った辺りからすげえ増え始めたぜ。お前明日から学校中から注目的になるぞ」

「それはちよつと勘弁願いたいわね。疲れるしさあ」

「そんなときや箒やシャルや俺がお前を守ってやるって」

「へえー、カツコイイこと言っちゃってるけどアンタは頼りになるのかしらねえ？箒やシャルロットは頼りになるからいいけどさあ」

「何を！馬鹿にすんなよ！」

「はいはい」

「・・・」

「・・・」

「「プツ」」

「「あははははっ！！」」

爆笑する2人の声が夕焼けに染まったグラウンドに響いたのだった。そして鈴は主将の松本と奈良原の元へ歩み寄った。

「ありがとう。楽しい時間だったわ！」

「こちらこそ。いい経験になったわ」

「負けたのは悔しいけど、受け止めなきゃね」

「まあ、入部はしないけど、あなた達を応援はするからね。大会とかがあつたら観に行くから頑張つてね」

「ええ、そのときは応援よろしくね」

「絶対に勝つてみせるから」

「うん！」

鈴は2人と握手を交わす。するとギャラリィから盛大な拍手が起こった。健闘を称える気持ちのいい拍手だった。鳴り止まぬ拍手が暫くの間グラウンドに響いていたのだった。

第十五話 部活をやろう 中編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

なんか青春って感じになってしまってます……。プロットではもっと簡単に勝負が決まってシャルロットと一夏の話も入れたかったのですが書いてたらこうしてみたくなくなってしまいました。

なんかCLANNADの3ON3戦に影響された感じが自分です。途中から見ながら書いてたし。

では次回こそシャルロットと一夏のお話にします。
今度こそ「部活をやろう 後編」です。

ではで〜

第十六話 部活をやろう 後編（前書き）

後編です。シャルロットと一夏のお話です。

あと山田先生には料理部の顧問になってもらいました。

ではどうぞ。

第十六話 部活をやるう 後編

シャルロット・デュノアの場合

シャルロットが所属する部活は料理部である。

入学式の日に行われた部活動勧誘の際に彼女の興味を最も引いたのが料理部なのであった。

幼い頃から織斑家を通じて日本の料理に触れたことはあったので全く無知という訳ではなかったのだが自分で作ってみるというのは今までしたことがなかった。彼女自身はフランスにいた頃から母親の手伝いなどで料理はしていたし幼いころに一夏に自分の手料理をこ馳走した事だつてある。

このことがキツカケでシャルロットは料理に目覚め、今現在はフランス料理は母親からお墨付きを貰うほどまでに上達していた。が、日本料理はまだ手付かずであった。

織斑家に遊びに来ていた時は四季や十秋や一夏が料理をしていて「シャルロットはお客様だから」という理由で手伝わせてはもらえなかったし、フランスに戻って勉強しようにも情報が少なかったり材料が日本にいるときほど充分に用意できなかったりしたのであまり手出しがでしなかつたのが現実だった。

部活動勧誘時に料理部の出店で肉じゃがを食べたときにシャルロットはこんなことを考えていた。

（確か肉じゃがって昔の日本では女性の必須スキルだったって小さい頃に聞いたことがあったっけ。肉じゃがを作るのがうまい女性と結婚すれば男性は幸せとなるだったかな。あの時はよくわからなかったけどなんだかわかる気がするなあ。僕がこれをうまく作れたら一夏は食べてくれるかな？ポトフの時みたいに笑顔で美味しいって言うってくれるのかな？）

自分が肉じゃがを作ったら一夏はどんな反応をするのだろうかとそれだけを考えていた。

あの日の下校の際にも一夏から日本料理に挑戦することを薦められ、たし作ったら食べさせるという約束もした。箒から師事を受けることにもなったが彼女はそれだけで満足はせず、もっと色んな料理を勉強するために料理部への入部を決めたのだった。

すべては一夏のために。

一夏に自分が作った料理を食べて欲しいために。

一夏に笑顔で美味しいと言ってもらうために。

「では、今日は肉じゃがを作るに当たって色々役に立つ豆知識を紹介します。皆さんよろしいですか？」

「……はい……」

料理部の顧問である山田真耶教諭が部員達を相手に教鞭を振るっていた。部員の中にはもちろんシャルロットの姿もある。

「まずジャガイモの選び方についてですが、日本では一般的に男爵^{だんしゃ}薯^{くも}とメークインの二種類が使われるのがポピュラーです。丸形でゴロツとした男爵を使うのと丸みを帯びた俵形のメークインを使うのとでは仕上がりに大きな差ができます。まず初心者には煮崩れの心配がないメークインを使用することをお勧めします。メークインは男爵に比べて長い形状で、でこぼこもそれほどひどくなく、皮はむきやすいということもあって初心者には最適です。煮崩れを起こしにくいのは男爵よりも少しねっとりしているためでカレーやシチューなど煮込み料理にはメークインが使用されることが多いです」

見事な知識を疲労する真耶にシャルロットは質問を投げかけた。

「先生、質問いいですか？」

「はい、デュノアさん。質問をどうぞ」

「肉じゃがを作る時ジャガイモは男爵薯よりもメークインを選んだ方が美味しく作れると言う事ですか？」

シャルロットの質問に真耶が丁寧に答える。

「いいえ、決してそういう訳ではないですよ。メークインはあくまで初心者には最適と言うだけで男爵を使っても美味しい肉じゃがを作る事はできます。男爵の場合はちよつと煮すぎたり、乱暴に鍋返しをしたりすると煮くずれる危険性が大きいので初心者にはちよつと難しいんですよ。だから慣れていないうちはメークインを使用することを勧めします。もちろん両者には違った魅力があります。男爵はなんといってもホクホクした食感が得られるが最大の魅力で、このホクホク感が肉じゃがを美味しく感じさせます。一方メークインにも男爵に比べて少しねつとりした歯ざわりがあつてこの歯ざわりが好きだと言う人も多いので日本人には好まれています。初めはメークイン、上達したら男爵、そこからは自分の好みでどちらを使うか決めるのがいいでしょう」

につこり笑顔で真耶が説明をする。その姿はいつもバタバタとした子犬のような雰囲気とは違っていつもの5倍くらいは頼りになる先生の姿だった。新米とはいえやはり真耶も教師で料理部の顧問なのだ。これくらいの知識は当然持っているのだ。

「山ちゃん詳しい!」

「山ピー見直した!」

「一応先生ですし、顧問ですから。……って、や、山ちゃん?や、山ピー?」

少し照れた仕草を見せながらずれた眼鏡を両手で直していた真耶だったが突然あだ名で呼ばれて雰囲気が一変する。

「あのー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃないじゃん」

「まーさんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーさんって……」

「あれ?マヤマヤの方が良かった?マヤマヤ」

「そ、それもちよっと……」

「もー、じゃあ呼びやすいからマヤなんてどう?」

「そ、それだけはやめてください!」

珍しく語尾を強くして拒絶の意思を示す。彼女の反応を見るにそのあだ名にはトラウマがあるのかもしれない。

ちよっと真耶が可哀想になってきたシャルロットは救いの一声をかける。

「先生、説明の続きをお願いします」

「は、はいっ、そうですね！ではお話の続きを――、って、わ
きゃああ――！」

真耶は慌てて教壇戻ったが途中でこけた。

「うー、いたたた・・・」

[illegible]

こけた真耶を見て部員達が一斉に笑い始める。真耶は羞恥に顔を赤くする。

「はうううっ」

「山ちゃん可愛いつ！」

「天性のドジっ娘ね！」

「涙目で真つ赤になる山ピー萌え〜！」

「も、もうやめてください」

次々と噓し立てる部員達に弱々しく訴える真耶。
さすがにシャルロットももうフオーできずに苦笑いをするしか
なかったのだった。

アイキャッチしりとり

真耶「よってたかっていじめないで」

シャル「デフォルトでそういうキャラなんですネ・・・」

「美味しい肉じゃがを作るには野菜の保存法も重要つと」

部活も終わりシャルロットは下駄箱に向かいながら今日習った知識を復習していた。

「ジャガイモは芽が出てしまうとグンと味が落ちてしまう。通常5以下の冷暗所で保存するといつまでも芽は伸びないので、そのような場所で保存することが最も重要で、一度高温にさらして芽が伸び始めたものは長い期間の保存には適さないのもともと芽が伸びていないジャガイモを選ぶことがこつである。この保存法はジャガイモだけでなく、牛蒡や葱、玉葱なども冷暗所ですで保存するのが最適である。それにしても、僕も結構料理はしてきたけどこんな知識があるなんて知らなかったなあ」

顧問の真耶からご教授を受けた内容を余すところ無く復習する。
この料理に対する姿勢が彼女の本気と一夏への想いを感じさせる。

「料理は愛だ！」という言葉があるように彼女の料理は一夏への愛がたっぷり詰まっていることであろう。

「料理部での活動と筭からの教えがあれば絶対に美味しい肉じゃがが作れるようになるよね。来週に実習があるって先生も言ってたし。一夏にも美味しいって言って欲しい！よし、頑張ろう！」

確固たる決意を胸にシャルロットは校舎をあとにした。

織斑一夏の場合

一夏は鈴と同様に何か部活に所属している訳ではない。

放課後は姉の十秋と分担している買い物やら夕飯作りやらがあつたりするので部活をやる時間があまり取れないのが理由だ。だから一夏の放課後は少しの間クラスメイトと談笑してシャルロット達が部活がない日は彼女達と一緒に帰るとというのが日常的だ。

しかし、買い物や夕飯作りが無い日の彼は結構フリーダムに行動することが多く、ある時は筭の家の道場まで赴いて剣道や体術の鍛錬を行い、ある時は鈴や弾や数馬と共に街のゲーセンに行ったり、ある時はシャルロットと肩を並べて一緒に帰ったりしている。まあ帰宅部というのはそういうものであるう。

彼自身も現状に不満なんて無いのだ。やりたい事も今はまだ見つかっていないが焦る必要もない。シャルロットや筭、鈴、弾、数馬達と学園生活を楽しむ。それが今の彼にとって居心地の良い時間なのだ。

「ふう、鈴の奴、上手く逃げ延びたかねえ」

ソフトボール部との投手戦が終わると詰め掛けたギャラリー達が騒ぎ出して生活指導の先生が怒鳴り込んで来たので散り散りに逃げるギャラリー達に紛れて鈴と一夏も退散を決め込んだ。

鈴とは途中の逃げ道で分かれたのでその安否を確認することはできないがフットワークが軽い鈴のことだからうまく逃げ延びただろうと一夏は確信していた。

「さて、俺もそろそろ帰るとしますか」

騒ぎから逃げ延びたので家に帰ることにした一夏は一旦鞆を取りに教室に戻った。

鈴の机を確認すると鈴の鞆はもうなかった。

「あいつもう帰ったのか。相変わらず身軽な奴だなあ」

ひと笑いしながら一夏は誰もいない教室をあとにして下駄箱に向かった。

「それにしても明日から鈴の奴大変だなあ。この分じゃ明日には学校中の噂になつてるの間違いないぞ」

上履きから登下校用の革靴に履き替えて外に出る。

「ちょっと対策考えておくか」

明日は噂の張本人である鈴の元に生徒達が殺到するだろう。鈴は別に人気取りのためにやったわけではないので周りに騒がれるのは結構キツイだろう。何か手を打っておくべきであろうと一夏は思った

のであった。

「お、あの後ろ姿は？」

下駄箱を出ると先の方に綺麗な金髪を首の後ろで束ねている見覚えのある女子生徒がいた。間違いなくシャルロットだった。

「おい、シャル！」

その背中に声をかけた。

「あ、一夏っ」

一夏の姿を見つけたシャルロットが手を振る。一夏それに軽く手を上げて応えながらシャルロットの元へ走り寄った。

「料理部はもう終わったのか？」

「うん。今日は実習がないからちよつとした座学をやって終わったんだ。5月には実習があるって聞いてるけど」

「そっか。今度の実習って何作るんだ？」

「肉じゃがだよ。だから今日はジャガイモの選び方を教わったんだけど。ジャガイモの品種で結構好みが分かれるものなんだね」

さきほど真耶から教えられた内容を歩きながら一夏にも掻い摘んで教えるシャルロット。

一夏も料理ができるので一夏の意見も聞いておこうとシャルロットは思ったのだ。

「ホクホク感を出したいなら男爵で、ねっとり感を出したいならメークインか。山田先生もなかなか分かつてるなあ」

「一夏は肉じゃがを作るときはどっちにしているの？」

「俺は結構まちまちに作るぞ。男爵は煮崩れしやすいけど味が染み込んだときのあのホクホク感はずっとたまらないし、メークインのあの歯ざわりも捨てがたいからな。だからうちの肉じゃがは作るとき気分とか買い物したときの値段とかで決めるから結構まちまちだぜ」

「そうなんだ。ちなみに一夏はどっちの方が好みかな？」

「俺はどっちも好きだけど、どっちかっていうと男爵の方が好きかなあ？ やっぱあのホクホク感は何にも変えがたい味わいがあるしなあ。ああ、そういえば筍が作ってたのも男爵だったなあ」

「そつかあ。今度筍にも教えてもらおうし、実習は男爵でいってみようかな？」

「煮崩れさせないで作るのは結構大変だけど頑張れよ！ シャルならきつとできるからさ！」

「うん！ 僕頑張ってみるよ！ 応援ありがとう一夏！」

親指をグツと立てて見せる一夏にシャルロットも同じように親指をグツと立ててにつこり笑ってみせる。

そして夕焼けの空の下、一夏とシャルロットは他愛のない会話をしながら一緒に下校するのであった。

2人の距離はやはり肩が触れ合いそうなほどに近かった。

第十六話 部活をやるう 後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

なんか自分の文才の無さが身に染みる今日この頃・・・。

頭の中で描いていた描写がうまく文章で表現できなくて執筆する度に苦悩しております。途中で原作からの引用という逃げに入ってしまったておりますた・・・。

心折れずにやっていけるかどうかちょっと不安になっております。書き出した以上はやれるとこまでやってみたいのがんばりますがね！

ではまた次回で

第十七話 噂を鎮め方（前書き）

「部活をやるう 前・中・後編」の翌日に起こったちよつとした出来事です。

メインは鈴です。

そしてあの人が初登場です

第十七話 噂を鎮め方

「はあく、ちよつと鬱ね．．．」

鳳鈴音は自室で制服に着替えながら溜め息を漏らしていた。

4月も終わりにに差し掛かったある日。

外は相変わらずの快晴で天気予報でも降水確率は0%と報じられていたが、鈴の周囲だけは曇天とも言っていないほどどんよりしていた。その理由はこの日の前日に行ったソフトボール部との投手戦が原因であった。

試合自体は鈴も楽しめたし9連続奪三振という気持ちの良い達成感もあって彼女は満足だった。

問題はその後だ。

試合終了の直後に何処からか詰め掛けたギャラリー達が鈴の勝利に大騒ぎをしてグラウンドが騒然となった。

騒ぎを聞きつけた生活指導の教師が怒鳴り込んできてもう大パニックになった。

その場にいた鈴は逃げるギャラリーに混じって逃げ延びたのだが、あれだけギャラリーが出ていたのだからきつと今日には学園中に噂が広まっているだろう。

噂の対象となる自分に降りかかるであろう事態が彼女の気持ちを沈ませる。

「沈んでも仕方ないし、学校行こっ」

フォンファン

鞆を手にして家の裏手にある両親が経営する『中華料理店・鳳凰』で仕込をしていた両親に一言告げて鈴は家も玄関を潜った。

すると、そこにはちよつとした驚きが鈴を待っていた。

「鈴、おはよう」

「おはよう、鈴」

「うむ、おはよう」

「よお、鈴」

「ういつす、おはよーさん」

玄関の外には一夏、シャルロット、箒、弾、数馬の5人が待っていた。

「へ？あ、うん、おはよー」

何故こんな朝っぱらからいつものメンバーが自分の家の前にいるのかわからなかったので鈴はちょっとポカンとしてしまう。

「アンタ達、何でこんなところに？」

「ほら、昨日の騒ぎがあっただろ。今日はお前の周りには野次馬が群がって大変だろうから俺達がお前を守るようにと思っただけ」

鈴の問いに一夏が答える。

「僕も昨日一夏から聞いたよ。鈴凄かったんだってね。でも鈴が困る事になるなら友達として助けないとね」

「私は昨日剣道部に顔を出していたのだが話だけは聞いていた。親

友を困らせる輩は見逃せないのな。今日はこうして参上した訳だ」

「お前相当派手にやらかしたみたいだな。俺も手を貸せるなら貸すぜ」

「うちの部も練習放り出して見に行つた先輩とかいたくらいだしな。まあ何はともあれ、友人のピンチには駆けつけないとな」

5人からの温かい言葉を貰つた鈴は感激しているのかちょっと瞳を潤ませている。

が、筈ほどではないにしろ彼女も性格が若干素直じゃないところがあるので

「ふ、ふんだ。アンタ達も暇ね・・・」

そつぽ向きながら鈴は素っ気無く言うが、頬を赤らめていて顔も少し嬉しそうにしているので5人に感謝しているのが丸わかりだった。5人も鈴の反応を見て顔を見合わせて笑う。

「では、そろそろ行こう。時間もあまり無い」

「そうだね。ほら鈴、行こう！」

女子2名が側によつて鈴を促す。

「う、うん。みんな、その・・・」

シャルロットは鈴の手を引き、筈が鈴の背中を押すと鈴は何やらぼそぼそと声を出したが最後は全員に聞こえるように言った。

「あ、ありがと・・・」

学校周辺に着くと噂を知った生徒達が声をかけてきたり、遠巻きから興味あり気な視線を向けてきたりとなかなか鬱陶しい状況になりつつあった。

声をかけてきた者には人当たりのいいシャルロットがやんわりと断りを入れてその場は引いてもらい、遠巻きから不躰な視線を向けてくる者には箒が睨みをきかせ、男子3人は鈴の周りを固めていた。校門にたどり着く頃には声をかけてくる者はだいぶ減ったが遠巻きからアイドルでも見るかのような視線を送ってくる者は増えていった。

昇降口で下駄箱を開けると大量の手紙が詰め込まれている事態になっていた。昨日の投手戦を見た生徒からのファンレターや部活勧誘の手紙、あげくにはラブレターまで入っていたりした。

「こりゃあ予想以上の大人気だな」

「はあゝ・・・、鬱陶しいなゝ、もうゝ・・・」

鈴は少し苛立たしげに声を漏らした。

あまりにも好奇の視線やら何やらを向けられて登校時も何度か鈴はキレそうになったりもしたが5人がなんとか宥めていた状態だった。こんな状態が続けば心が辟易としてしまうのは必然であろう。

「今回は心配かけてごめん。けど、乗り切って見せるから心配しないで」

さつきまで苛立ちのせいか疲れた顔をしていた鈴だったが力強く5人に答えて見せた。5人もそんな鈴を見てわかったと頷いてみせた。教室に入る頃にはもう本鈴になる5分前でクラスの周りには野次馬はいなかったが、クラスメイトの何名かは鈴の元へ詰め掛ける。

「鳳さん昨日凄かったんだってね！」

「私も見たかった！」

「結構やるんだなお前！」

「詳しく説明してくれ！」

そこに意外な救世主が登場した。

「諸君、おはよう！」

本鈴が鳴る少し前だが担任の千冬が教室に入ってきた。

「…………お、おはようございます！」…………

千冬の登場で生徒達は慌てて席に着く。さすがに千冬がいる前では騒げないので大人しく席に着くしかないのであった。

（サンキュー、千冬姉）

一夏は心の中で千冬に感謝した。昨日の事は一夏から千冬に話してあったので多分気を回してくれたのだろう。

（キンコーンカーンコーン）

本鈴が鳴り響いた。

「では、朝のSHRを開始する」

SHRは簡単な連絡事項を告げられて終わりだった。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉強に励めよ」

そして最後に千冬はこうクラスに言った。

「あと、つまらぬ噂に現など抜かさぬようにな。ではな」

クラスに一言釘を刺してから教室を後にした。

その後、クラス内では千冬の言葉と一夏達の尽力もあってクラスメイト達は鈴にあの話題は振らずに普通に接するようになったが、クラス外はまだそうもいかなかった。

休み時間ごとにクラス外の生徒が引つ切り無しに鈴に昨日の事を聞きに来るので鈴は休み時間になると何処かで適当に時間を潰すと言って教室を出て行ってしまふ。シャルロットと篤も付き添っている。

（まったく連中のあのエネルギーはどこから来るんだ？）

減らない野次馬に内心毒づく一夏。

しかしこのままではあまりにも鈴が気の毒で仕方が無い。

何か手はうたないとは思っているが妙案は浮かんでは来ない
どうしたもんかと思案していると

(ピリリリリ〜)

突然一夏の携帯が鳴った。

「メールか？」

メールの受信画面を開く。

そこにはある人物から、この騒ぎを鎮める策が記されていた。

「これはありがたい。皆にも伝えておこう」

時は進み、昼休み。

授業から一時解放され教師が教室を出たのを合図に生徒たちは各々格好を崩していく。

待ちに待った者もいるだろう、昼食タイムだ。

そしてそれは鈴にとっては今日の峠であろう時間だった。

「さて、と」

鈴は弁当を持って早々に教室を出ようとする。

「鈴、ちょっと」

「ん？」

一夏が鈴を呼び止めた。

「何よ？早くしないと野次馬が押し寄せてきちゃうんだけど？」

「わかってるって。静かに昼飯食えるところに案内してやるから付いて来い」

「え？それって何処よ？」

「説明は後だ。とにかく急ぐぞ！」

「へ？あ、ちよつと！」

説明してる暇はないと目で言いながら一夏は鈴の手を取るとそのまま走って教室を出た。

「他の奴らは後から合流するから俺達は先に隠れ場所に急ぐぞ」

「わ、わかったわよ。だから手え放しなさいよ！」

「ああ、悪い悪い」

一夏は鈴の手を放す。
すると鈴は少しだけ顔を赤くする。

（い、いきなり手を握ってくるじゃないわよ！ちよつとドキツとしたじゃない！）

どうやらいきなり手を握られた事で恥ずかしさと驚きの両方が鈴を襲っていたようだ。

鈴は普段は自分から男子にちよつかいを出す事が多い。一夏の背中にタックルをかましたり、弾の頭をグーで殴ったり、数馬に蹴りを

入れたり結構男子との接触は多い。

しかし、それはあくまで自分からやっていることで男子の方から接触された事はほとんどないので先ほど一夏に手を握られて変にドキドキしてしまったのだ。

そして、そんな事など露ほどにも知らない一夏は

「どうしたソワソワして、トイレか？」

「なっ！違うわよバカッ！！」

突然のデリカシーの無い問いに鈴は怒って一夏の肩をグーで殴った。

「痛え！肩殴るなよ！」

「うるさい！女の子に変な質問するな！！」

「わ、わかったよ。謝るから怒るなよ」

「フンッ！！」

「はぁ、とにかく今は急ごう」

「う、うん」

2人は一夏の言う『隠れ場所』へと急いだ。

アイキヤッチしりとり

鈴「猫」

一夏「子犬」

「うゝむ、どうやら追手はいないみたいだな」

廊下の柱の影に隠れながら少し顔を出して一夏が追手がいないかどうかを確認する。確認したところいないようだった。

「で、アンタの言う隠れ場所っていうのは何処よ？」

「もう少しで着くよ。ほれ、ここだ」

2人はある一つの部屋の前に立った。

「ここって・・・」

「そう、生徒会室だ」

そう言つと一夏は生徒会室の扉を開けた。

「やあ、一夏、鈴ちゃん」

笑顔で2人を出迎えたのは藍越学園生徒会長で一夏の姉の十秋だった。

「と、十秋さん？」

「うん、いらつしゃい鈴ちゃん♪」

笑顔のまま十秋は鈴に近づいて彼女の頭を撫でる。

鈴も一瞬^{くすぐ}撫^なったような態度をしたがそのまま大人しく撫でられていた。

が、やはり訳がわからないといった顔をしているので

「さっきの休み時間に十秋姉からメールが来たんだよ。野次馬に困ってるんだったら昼休みは生徒会室使っていいよってな」

「うん。ここなら一般生徒は滅多に寄り付かないからね。静かにご飯を食べるには最適でしょ」

生徒会室はまず生徒会役員でもないかぎり立ち寄る事はまずないの
で一般生徒が来る事はまずない。ゆえに隠れ場所にはもってこいな
のだ。これも生徒会長の姉を持つ者とその友人の特権なのであった。

「十秋さん、ありがとうございます」

「いえいえ、どういたしまして♪」

鈴のお礼に十秋も笑顔のまま答える。

「失礼しまーす」

「待たせてしまったな」

「ちわーっす」

「こ、こんにちは!」

シャルロット、箒、弾、数馬の4人が生徒会室に入ってきた。

「はい、シャルロットちゃん、箒ちゃん、弾くん、数馬くん、いらつしやい」

遅れてきた4人にも笑顔でお出迎えする十秋。

この人当たりの良さが生徒会長となった理由のひとつであろう。

「と、十秋さん!!この度は昼食にお招きいただいてありがとうございます!」

数馬が何やら緊張した面持ちで十秋に挨拶をする。

キャラ紹介に書きましたが数馬は十秋に惚れています

「弟の友人達のためだからね。これぐらいはお安い御用だよ」

「は、はい!ありがとうございます!」

この場で数馬がお礼を言うのは何か少し変ではあるが全員気にしない。

「お腹空いちゃったね。さ、ご飯にしようか?」

「……はい」「」

「は、はい！」↑数馬です

この日は十秋を交えて昼食となったのだった。

今日の騒ぎが嘘だったかのように平穩に昼食が進み、食事中の会話も弾んでいた。今日の弁当の話、部活の話、授業の話など話題も絶えず生徒会室には笑い声が響いていた。

（コンコン）

すると全員が食べ終わったのを見計らったかのようなタイミングでドアがノックされた。

一瞬、一夏達がハッと身を固くする。

「ああ、大丈夫だよ。はい、どうぞ」

「失礼します」

十秋は来客を招き入れた。入ってきたのは2年生の女子だった。胸の黄色いリボンがその証だ。ちなみに一夏達1年生は青、十秋は3年生なので赤だ。

「はいはい、はじめまして。私は2年の黛薰子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

現れたのは新聞部副部長でエースの黛薰子だった。彼女は自己紹介を済ますと素早く全員に名刺を配った。

「で、その新聞部副部長が何でここに？」

「あたしが呼んだんだよ。噂の鈴ちゃんを取材したいなら生徒会室に来てってね」

「そういうこと。噂の凰さんにインタビューしに来ました」

皆が「えっ!？」という顔で十秋を見る。

それはそうだ。匿ってくれたのに何故か新聞部を呼んだのだから行動が理解できないのだ。これでは鈴を新聞部に売るようなものだ。

「いやね、この手の噂って変に隠そうとすると尾ひれが付いたりして長引くんだよ。だったら新聞部の力を使って記事にしてみたらの方が收拾も早いと思うだよ。鈴ちゃんも変に逃げ回るより早めに收拾してくれた方がいいでしょ？だから今日は薫子ちゃんに来てもらっただよ」

「そ、そうなんですか？」

「そうそう、それにもうすぐゴールデンウィークだからその前に記事を作って掲示すればゴールデンウィークが明ける頃にはもう收拾してると思うよ。ね、薫子ちゃん」

「はい。生徒達がゴールデンウィーク明けで浮かれていると思うからその頃にはもうすっかり落ち着いていると思います」

そう言われるとなんだかそんな気がしてきた鈴は取材を受けることを了承した。

この事態が早めに收拾するならこうした方が得策と判断したからだ。

しかし、鈴にはひとつ気になることがあった。

「あ、あのー、取材受けるのはいいんだけど、ソフトボール部の事でちょっと・・・」

「あー、その辺は心配しないで。ソフトボール部の沽券に係わるような事は書かないし、そもそも私が書きたい記事はあの投手戦のことだけじゃなくて鳳さんがどういう人物なのかって事だけだから」

「そ、それだったらいいわ」

「じゃあ、インタビュー始めます」

こうしてインタビューは始まった。

インタビューの内容はシンプルで名前や生年月日、好きな教科や好きな食べ物や趣味と言った簡単なプロフィールを紹介するようなものだ。

あとは件の投手戦に関してはどうして勝負をすることになったのかとか勝負の感想はとか簡単な質問で終わりを告げた。

「最後に写真を1枚撮らせてもらいます。ああ、どうせだから君達も一緒に入ってくれるかな？」

薫子はカメラを取り出すと一夏達に写真に写ってくれと言ってきた。

「え？俺達ですか？」

「そうそう、鳳さんとその友人達という名目で記事に載せるからね、お願い」

一夏達は顔を合わせてどうしたものかと思考するが、鈴ひとりで写るよりは皆で写った方が鈴も喜ぶだろうと全員OKした。

「はい、じゃあ並んで並んで」

薫子はテキパキと立ち位置を指示してカメラを構える。

「みんな、ありがとう！」

鈴が全員を見渡して笑顔でお礼を言った。

そんな鈴に全員も笑顔を返す。

そして全員カメラの方を向いた。

「それじゃあ撮りまーす。はい、1+1は？」

「「「「「に」」」」」

パシャッとデジカメのシャッターが切られた。

「ご協力感謝します。いい記事が書けそうだね。では、私はこれで」

そついうと薫子は生徒会室から出て行った。

やたらとテンションが高くてまるで嵐のようだったと一夏達は思った。

「ご苦勞様。薫子ちゃんが変な記事を書かないって事はあたしが保証するから。心配しないでね」

「十秋姉がこう言ってるなら大丈夫だろ」

「そうね。十秋さんが言うなら」

そして十秋と薫子の言うとおり記事はその日の翌日にはもう出来上がって学校のあらゆる掲示板に掲示されていた。

掲示された記事を見た生徒達は鈴の元へ殺到する事はなくなり鈴の周りは平穏となった。

そしてゴールドンウィークが明けるところには本当に噂が鎮火することになるのであった。

第十七話 噂を鎮め方（後書き）

駄文にお付き合いくださっておりがとうございます。

執筆スピードがかなり鈍足化しました……。色々ありまして……。

一夏と鈴が手を繋ぐ件は原作2巻でシャルロットとしていた部分をちよつと変えてやってみました。

しかし、鈴は一夏にフラグ立てられていない設定なのにあの展開は良かったのかとちよつと思っています。

今回はゴールデンウィークに入ります

第十八話 シャルロットの膝枕 前編（前書き）

ゴールデンウィーク編です。

ゴールデンウィーク初日の織斑家でのお話です。

第十八話 シャルロットの膝枕 前編

ゴールデンウィーク。

誰もが待ち望んでいたほのかな連休。

パーッと買い物に行くもよし。友人や恋人と遊ぶのもよし。何もせずのんびりするもよし。

5月3日。火曜日。憲法記念日。

現在の時刻はもうすぐ太陽が真上に立とうかという午前11時。

主人公たる織斑一夏はこの大型連休を心行くまで満喫――

「やっぱ天気の良い休みの日は掃除と洗濯が気持ち良くていいなあ」

訂正。

いつも通りの休日だった。

朝は6時半に起床して朝食の用意。朝食の片付けが終わったら掃除と洗濯という完全に主婦の行動であった。

「毎度毎度思うが、お前は手を抜くって事を知らないのか？」

リビングでソファア―に座って苦笑いしながら百春が一夏に尋ねた。

「お前もたまには家事とか忘れてのんびりしてもいいんじゃないか。お前だってまだ15の若者なんだしな」

「何言っただよ百春兄、こんな天気の良い日に掃除と洗濯が出来る気持ち良さが何とも言えないんじゃないか。それ以外に何があるっただ？」

「まあ・・・、お前がそれでいいんだつたらそれでいいがな・・・」

15の健康な男子の発想とは思えない発言に百春は少し引きつった顔で笑う。

別にそれが悪い事とは思わないがまだ15歳という年齢でこんな発想が出る時点ですでに変である。

といってもこれが昔からの一夏の役割であり趣味といっても良い。年長者の千冬は家事がまるでダメで、百春自身も医者になる為に勉強一筋だったためにそこまで家事はできないし、十秋は朝がダメなので休日の午前中はやっぱり一夏任せになってしまいがちなのだ。

「ふー、掃除と洗濯終了」

いつも通り掃除と洗濯を終わらせた一夏はちょっと一息。

「この間外務省の佐々木さんから送られてきた玉露があつたからそれを入れようかな。百春兄も飲むか？」

「ああ、じゃあ貰おう」

そう言つて一夏は玉露を入れ始める。

百春も結局こうやつて一夏に甘えてしまうのは一夏の人柄ゆえか。

一夏自身も別に苦には思っていないので良しとしておこう。

ちなみに外務省の佐々木さんとは生前の両親にお世話になったという方でよく織斑家の贈り物を与える人の1人だ。

「んゝむ、やっぱり玉露はこの甘みがいいなあ」

目を細めて玉露を啜る一夏。

先ほど家事をしていた姿は主婦然としていたがお茶を飲む姿はとも爺くさい。

「そつえば、うちの女性陣はまだ寝てるのか？」

「ああ、さつき掃除してるときにちよつと確認したけどまだ寝てた」

千冬と千秋はまだ起きてきていない。

寝起きが悪い織斑家の女性陣はすっかりゴールデンウィークの魔力にやられている。

「千秋姉はドアをノックしたら返事してたからまどろみタイムを絶賛延長中だと思う。千冬姉はノックしても返事なかったからまだぐっすりみたいけど」

千秋はもう半覚醒状態なのであるがベッドの中でまどろみを享受しているようで、千冬は休みの日という事で前日は酒盛りしていたので未だぐっすりと惰眠を貪っている。

普段ならだらしないと叩き起こすのだが今はGWだ。それも許してやってもいいだろう。

「百春兄、昼飯なんだけど、うどんにしようかと思うんだけどいいかな？」

「ああ、俺はそれでいいぞ。麺類ならそれほど手間は掛からないし作り終わったらお前は今日はゆっくりしろ」

「でも午後は買い物に行くつもりなんだけど。今日は3丁目のスーパーで特売やってるんからそれに行こうかと思ってる。あと風呂掃除と庭の草むしりも」

「そんなものは後で俺と十秋でやっておくからお前は今日のはんびりしてろ。いいな」

「う、うん。わかったよ」

ちよつと納得がいかなそうに一夏が頷く。
家事は彼の趣味と言ってもいいものだからいきなりそれを禁止されてもやることがないのだ。
のんびりしようにも何をしたらいいのかわからない。

「ふあゝ、おはよう」

そこに十秋が起きてきた。

「十秋姉、おはよう」

「おはようと言ってももう昼前だがな」

「千冬姉さんは？」

「千冬姉はまだ寝てる。昨日酒飲んでたみたいだからさ」

「そうなんだ。じゃあまだ起きてこないね。ああ一夏、掃除と洗濯やっておいてくれてありがとだね。お昼の用意はあたしがするから」

「え、いいの？でも十秋姉今起きたばかりだろ？」

「目はずいぶん前に覚めてたから平気だよ。ちよつと布団の誘惑に負けて起きられなかったただけだから」

「十秋もこう言ってる。お前はゆっくりしてる」

「お、おう」

キッチンから追い出されてしまった。

ポツンと突っ立てもしょうがないので一夏はリビングで百春と一緒にテレビを見ながら昼食が出来るのを待つことにした。

アイキャッチしりとり

百春「糠付けうまい」

十秋「真心こめて漬けましたから」

時間はお昼を過ぎた。

昼食の冷やしうどんを食べ終えてやる事がなくなってしまった一夏は一旦自室に戻ってきた。

「のんびりしろって言われてもなあ」

途方に暮れてしまっていた。

普段の休日は家事をする事で時間が潰れていたし、気が向いたらお菓子作りとかしていたくらいだった。この間も一夏は自分でブラウニー（ナッツ入りチョコレートケーキ）を作って夕食のデザートに出したほどで味も兄弟達を唸らせるほどの出来だった。

千冬にも「これならいつでもパティシエになれるな」と言われたが一夏は別にパティシエになりたいわけではなくあくまで趣味で作っただけだ。

が、それも先ほど百春に禁止を言い渡されてしまい本当に手持ち無沙汰だ。

「どうしたもんかなあ」

することもないので絨毯の上に寝そべっていると来客を告げるチャイムが鳴った。一瞬起き上がった客を出迎えようとするが1階には百春と十秋がいるのでどちらかが出るだろうと思って一夏は再び寝そべった。

すると、なんだか眠気が湧いてきてしまう。

（そっぴえば、こんな風に寝そべってボーっとするのが結構久しぶりだなあ。天気も良くてなんだか気持ち良い風が窓から入ってくるし。もうこのまま寝てしまおう。うん、それがいい）

というわけで一夏はこのまま昼寝を決め込んだ。もうベットに行くことすら億劫になり近くにあったクッションを頭の下に持ってきてそのまま一夏は夢の中へ落ちていった。

「なあ、シャルロット」

「ん？なあにイチカ？」

「僕たちが知り合ってもう1年近くになるだろ。そろそろおまえのことをあだ名で呼びたいんだけどいいかな？」

「ん？アダナ？」

「ニックネームっていうやつかな。すぐく仲良しの人にはそういうのをつけるんだって十秋姉が言ってたんだ。ほら、シャルロットってちょっと長いから何か別の呼び方を考えてもいいかなと思ったんだ。どうかな？」

「う、うんつ。イチカがそうしたいならいいよ。」

「そうか！じゃあちよつと待って。今考えるから」

「う、うん」

「そうだなあ。『シャル』なんてどうだ？呼びやすいし、こつ呼ぶと仲良さそうじゃないか？」

「シャル、しゃる、char—— Oui！ C'est très bon！（うん！凄く良いよー！）」

「お、その反応はOKかな？」

「うん、これからイチ力はそう呼んで！」

「わかったよ、シャル！」

「うん！イチ力！」

懐かしい夢を見ていた気がする。

それはまだ一夏がシャルロットと出会ってまだ1年くらいの事。

シャルロットを『シャル』という愛称で呼びはじめた頃の夢。

「う・・・？」

ふと差し込んだ光が目に入り顔をしかめる。

そしてうつすら目を開けると

「一夏、目が覚めた？」

「シャ・・・ル・・・？」

シャルロットが窓から差し込んだ光を遮るように一夏の顔を覗き込んでいた。

「どうしてシャルがここに？」

「せっかく遊びに来たのに一夏ったら寝ちゃってたんだよ」

少し頬を膨らませるシャルロット。

「そ、そっか。それはスマン」

「いいよ。許してあげる。えへへ」

イタズラが成功した子供のようにシャルロットが笑う。

一夏の目にはそれが逆光越しになってなんだかとても美しく見えてしまう。

「ん？どうしたの？」

「い、いや、別に」

まさか見惚れてたなんて恥ずかしく言えないので一夏は目を逸らす。

（ん？待てよ・・・）

そこで一夏はある事に気付く。

（なぜこんなにもシャルの顔が近い？しかも何か頭の下に妙に柔らかくて心地良くて良い匂いする何かが・・・。————って！！！！）

ふと体勢に気付いた一夏はがばりと起き上がった。

「シャ、シャル！お前、何してんだ！？」

「何って、膝枕だよ？」

「いやいや、そんな『おかしなことを訊くね』って顔されても・・・

」

「一夏は嫌だったかな？僕の膝枕？」

ちよつとだけ顔を赤くして上目使いでシャルロットが聞いてくる。

一夏はうつと言つて言葉に詰まる。

先ほどの逆光越しの顔を見た所為が一夏の目にはシャルロットがい
つも以上に可愛く見えてしまいドキドキしてしまう。

膝枕自体は柔らかくて心地よかったし、おまけに良い匂いもしたの
で嫌とは思わなかった。むしろもうちよつとして欲しいとすら思え
てきた一夏だが今は恥ずかしさが先行していてそれを口にはできな
い。

「嫌つて訳じゃないさ。そのお・・・き、気持ち良かったし・・・

」

「そつか、良かった。えへへ」

邪気のない笑顔だった。

その笑顔を見て一夏の胸は高鳴った。

初めてフランスで出会った頃のように一夏はシャルロットから目が
離せずに見つめる。

「ねえ一夏。もうちよつとしてあげよつか？膝枕」

「へ？」

笑顔に見惚れていると不意にシャルロットがそんなことを言つてく

る。

ポーツとしていた一夏は一瞬理解できなかった。

「ほら、遠慮しないで」

シャルロットは正座になって自分の膝の上をポンポンと叩く。

「でも俺もう起きちゃったし、眠くないぞ?」

「いいから。僕が一夏にそうしてあげたいの。ね?」

「……。本当に、いいのか?」

「うん、いいよ!」

「じゃ、じゃあ、お願いします」

押しの強いシャルロットの提案に一夏は根負けしてしまう。

かくいう一夏ももうちょっと膝枕をして欲しいと思っていたのでこの提案はありがたかった。

ただやっぱりちよつと恥ずかしい。

「じゃあ、頭乗せるぞ?」

「うん」

ゴロンと横になって再び膝枕状態になる。

「辛くなったらすぐ言えよ」

「大丈夫。心配いらないよ。何ならまた寝ちやってもいいよ」

「そ、それはさすがに・・・」

とは言ったもののシャルロットの膝枕はふかふかで本当に睡魔が戻ってきそうなほど心地良い。

良い匂いがするし何故かわからないが凄く落ち着く。

一夏はシャルロットの膝枕にすっかり魅了されていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

暫し無言の時間が流れた。それは決して居心地の悪い沈黙ではなく落ち着いた心地良い静寂だった。

一夏はポーツと天井を見つめていてシャルロットも窓の外に視線をやっている。

傍から見ると新婚の2人がゆったりとした休日を過ごしていると言った感じに見えなくもない。

それほどまでに心地良い空間がこの部屋を支配していた。

ふと一夏はシャルロットに目をやる。

穏やかな顔で窓の外を眺めるシャルロットの顔はとても魅力的で母性を感じさせるほど美しかった。

一夏の視線に気付いたシャルロットは目で「何かな？」と言って顔を覗き込んでくる。

一夏も目で「なんでもない」と言って視線を元に戻す。

シャルロットもにつこりと笑って再び視線を窓の外に移した。

そんな心地良い空間を満喫しながら2人は暫くの間膝枕状態を続け

ていたのだった。

この不思議と落ち着く空気に身を委ねながら。

第十八話 シャルロットの膝枕 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

途中の夢の件

あとこのころは一夏の一人称もまだ『僕』だったのです。『俺』になつた経緯はそのうち書きます。

では次回は「GW（？）」となります。

では

第十九話 シャルロットの膝枕 後編（前書き）

またちょっと間が空いてしまいました…。

前話のシャルロット側のお話です。

第十九話 シャルロットの膝枕 後編

時間は一夏が部屋で眠りこけてしまった時間まで遡る。

（ピンポン）

「はい。あら、シャルロットちゃん」

「こんにちは、十秋さん」

お昼を過ぎた13時ごろ、シャルロットが織斑家を訪ねてきた。

「一夏に会いに来たの？お約束？」

「いえ、別に約束してたというわけじゃないんですけど、せっかくのお休みですので遊びに来ました」

「そうなの。まあとりあえず上がって」

「はい、お邪魔します」

織斑家に上がったシャルロットは十秋に連れられて一度リビングへ移動した。

「こんにちは、百春さん」

「シャルロットか。よお」

リビングでテレビを見ていた百春にも挨拶する。

「一夏に会いに来たのか？」

「それもあるんですけど、せつかくのお休みですからね。織斑家の皆さんと一緒に過ごそうかと思ひまして」

「そうか。まあ、ゆっくりしていけ」

「はい」

相変わらずぶつきらばうな百春だがシャルロットは気の許せる相手なので自然体で接している。これが百春の地なのだ。

「それで、一夏はどこに？」

「一夏なら自分の部屋にいるぞ」

「わかりました」

「シャルロットちゃん、ゆっくりしてってね」

「はい、ありがとうございます」

十秋と百春にお礼を言ってからシャルロットは2階へと上がっていった。

「ICHIIKA」と書かれたネームプレートの掛けられているドアの前でシャルロットはドキドキしながらそのネームプレートを見つめていた。

（考えてみれば一夏の部屋にお邪魔するのって子供の頃以来なんだよね・・・）

これまでに何度も織斑家にお邪魔した事はあるシャルロットだが一夏の部屋を訪ねるといのはあまりしたことがない。

子供の頃は遊ぶなら基本外だったし、寝るのも客室か千冬か千秋の部屋だったので一夏の部屋を訪れる経験が数えるほどしかないのだ。ましてや今はお互いに15歳。年ごろでしかも意中の異性の部屋。緊張してしまうのも仕方がないことであろう。

「大丈夫、大丈夫・・・。一夏は迷惑がったりしない・・・よね、たぶん。あ、でもいきなり押しかけちゃうのもやっぱりよくないかな？部屋に見られたくないものとかあるかもしれないし・・・」

心を落ち着かせようと自分に言い聞かせていたのだが、いきなり押しかけるのはよくないかという考えてしまう。が、見られたくないものという思考に達したときにシャルロットは目を見開いてハツとなった。

（男の子の見られたくないものって、やっぱりそのお、え、ええ、えええ、エッチな本とかなのかな！？だ、駄目だよ一夏そんなの！年ごろの男の子ならしょうがないのかもしれないけど・・・、とにかくそんなの駄目！！で、でも、一夏が言ってくれば僕が見せてあげても・・・。って僕は何を考えて！！で、でも一夏がちゃんと望んでくれれば僕は別に・・・）

突如ピンクな妄想を始めるシャルロット。

心は落ち着くどころか逆にオーバーヒートしてしまいそうなほどに

暴れてしまっている。

ちよつとの間、シャルロットは一夏の部屋の前で顔を赤らめながらブツブツとつぶやいていた。

「そんなところで何をブツブツ言っている」

（べしっ）

「はうつ！？」

脳天に軽い衝撃が走った。

振り返ると寝起きなのかラフな格好をした千冬が立っていた。先ほどの衝撃は千冬がシャルロットの脳天にチョップをかましたからであつた。

「ち、千冬さん！？こ、こんにちは！」

「まったく、何をしているか馬鹿者が」

「す、すみません・・・」

呆れたようにため息をつく千冬にぺこりと頭を下げるシャルロット。人の家で何を考えていたんだとちよつと自己嫌悪に陥ってしゅんっとなる。

「では、私は下に降りる」

「は、はい」

千冬はくるりと背中を向けて廊下を歩いて階段の方へ歩いていった。

シャルロットは千冬の姿が見えなくなるまでその背中を見送った。

アイキャッチしりとり

千冬「楽にしてやる」

シャル「留守番電話サービスに接続します」

「ええつと。じゃあ、改めて」

(コンコンッ)

ドアをノックする。

「一夏、僕だよ。今平気かな？」

なるべく自然に声を掛ける。変なことは考えずに平常心。これがシャルロットの結論だった。

(しゅん)

「？」

ノックもして声も掛けたのだが部屋の中から一夏の返事がなかった。

(コンコンコンッ)

「一夏？いないの？」

もう一度ノックして呼びかけるがやはり返事はない。

「一夏？入るよ？」

ちよつと悪いとは思ったがシャルロットは一夏の部屋のドアを開けた。

部屋に入ると絨毯の上でゴロンと横になっている一夏を見つける。

「一夏？」

側に寄ってみると一夏は頭の下にクッションを敷いて寝息をたてていた。

「ね、寝てる・・・」

ちよつとがっかりとするシャルロット。

そつえば部屋の前でちよつと騒いでいたのに一夏の部屋から反応がなかったのはこのためだったのかとシャルロットは今気付いた。

「ま、まったく一夏つてば僕の気も知らないで」

呆れたように言葉を漏らす。

これでは部屋に入る事に緊張していた自分がバカみただった。
そう思うとほんのちよつとだけ腹が立った。

「そんな一夏には、こうしちゃうからね！」

シャルロットは一夏の頬に指を当てて突つつく。

(ツンツン)

「ん」

一夏が少しだけ顔をしかめて声を漏らす。
しかしまた何もなかったかのように寝息を立てる。

(ツンツンツンツン)

「ん、ん」

先ほどは2回突ついたので今度は4回突つつく。
そうすると一夏も先ほどは1回だった「ん」を2回言った。

(ツンツンツンツンツンツン)

「ん、ん、ん」

6回突つつくと一夏は3回「ん」と言った。
シャルロットは一夏の反応が段々と面白くなってきたのでしばらく
一夏の頬を突つついて遊んでいたのだった。

「ぷつ、あははっ！一夏ってばおかしいなあ」

おもちゃみたいないな反応を返してくる一夏に堪らず笑ってしまう。
その反応があまりにも面白いのでシャルロットも頬プニを30連射
するまでに至った。

当然一夏は「ん〜」と15回言っただった。

「さすがにそろそろかわいそうかな」

シャルロットは頬プニを止めて穏やかな笑みを浮かべる。

先ほどのちよつとしたご立腹は何処へやらだ。

しかし一夏が寝ていては特にする事がない。

一夏が起きるまで時間を持て余してしまうのでどうしたものかと思
っている

「あ」

何かが閃いたような声を出すシャルロット。その頭上で豆電球がパ
ツと光った。

思い立ったが吉日。シャルロットは早速行動に移す。

「一夏、ちよつとゴメンね」

そう言っで一夏の頭の下に敷いてあるクッションを取り除いて自分
の足をその下に滑り込ませる。

膝枕状態の完成だ。

「えへへ。一夏が起きたら驚くかな」

満面の笑みを浮かべてシャルロットが一夏の顔を覗き込む。

「一夏の寝顔可愛いなあ」

今にもポワポワと音が聞こえてきそうなハッピースマイルのシャルロット。

寝ている意中の相手に膝枕をする事がこんなにも幸せなことだとは思いつかなかった。

ハッピースマイルを浮かべたまま一夏の頭を撫でる。

「うにゅ……シャルウ……」

「え？」

ボソツとした声だったがシャルロットの耳には確かに聞こえた。今一夏が自分の名前を言ったのを。

「僕の夢を見てくれてるのかな？」

シャルロットは心なしか嬉しそうにした。

自分の好きな異性が自分の夢を見てくれているのだ。大多数の者は嬉しいだろう。

「……シャル、これからはそう呼ぶ……」

「あ、もしかして、あの時の……」

それは今から8年前の春。

一夏とシャルロットが知り合って1年が過ぎた頃。

お互いにすっかり打ち解けあって生まれたときから一緒にいるかのように仲良くなった2人。

シャルロットも拙いながらも日本語が少し喋れるようになり言葉の壁さえも問題が無くなってきた頃だ。

一夏が自分の事を愛称で呼びたいと言ってきたのだ。

そこで付けられた愛称が『シャル』だった。

この世界で唯1人、一夏だけが使っている自分の愛称。

他の織斑家の者や箒、鈴、ましてや両親でさえも使っていない。

そう呼ぶのは一夏だけ。

子供心にシャルロットは『自分は一夏にとって特別な存在』と感じられて凄く嬉しかった。

だからこそこの愛称は一夏しか使っていないのだ。

「ズルイよねえ、一夏は。こんなにも僕の心を揺り動かすんだもん」

自分の膝の上で安らかに眠る一夏に愛しさがこみ上げてきてシャルロットの胸の高鳴りは一段と強くなる。

今もこうして膝枕をして彼の寝顔を独占している。

今はその事が彼女には何よりも幸せだった。

シャルロットは一夏を見つめ、そして、彼の顔に自分の顔を寄せ

(CHU)

寝ている彼の頬にそっとキスをした。

「大好きだよ、一夏・・・」

そして、一夏が起きるまでの暫くの間、シャルロットは彼の寝顔を見つめ続けたのだった。

第十九話 シャルロットの膝枕 後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

シャルロットの一夏への想いをうまく描けているかどうか不安でいっぱいです。そして最後のシーンは自分で書いててむず痒くなったW
ほぼ原作2巻を参考にしてたんですがねW

では次回は「GW（？）」です。

ではでは

第二十話 昔のようにな（前書き）

今回は一夏とシャルロットがちょっと昔を語ります。

第二十話 昔のように

「悪いなシャル。長時間膝枕させちまって」

「気にしないで。僕がそうしたかっただけなんだから」

あれから1時間ほど膝枕状態が続き、一夏も悪いとは思っていたのだがシャルロットの膝枕があまりにも心地良かったためつい甘えてしまいちよつととうとうとしてしまったのだった。

今は2人は簡易テーブルの前に並んで座って十秋が入れてくれたダージリンのストレートティーを飲んでいる。

「それにしたって退屈だったんじゃないか？話をするわけでもなくただのんびりしてただけだったし」

「大丈夫だよ。あんな風に何もしないで静かにボーっとしてるのも結構好きだからね。それにいいものを見せてもらったしね」

「いいものって？」

「一夏の寝顔」

「ブッ！」

紅茶を噴出す一夏。

「一夏の寝顔すごく可愛かったよ」

「で、できれば忘れてくれ・・・」

「寝言も言つてたけど聞きたい？」

「い、いや、いいーやめてくれー！」

「うふふっ」

恥ずかしげにワタワタとする一夏が面白くてシャルロットは笑みを溢す。

「まったく、シャルには敵わないなあ・・・」

頭をポリポリ搔く一夏。

こういうときに口ではシャルロットには勝てないのだった。

「そういえば、ちっちゃい頃はよく一緒にお昼寝とかしたよね」

「ああ、言われてみればそうだな。うちの縁側とかシャルの家のリビングとかでよく一緒に寝てたっけな」

「それを見てよくお父さん達が写真撮ってたんだよね」

「そうだったなあ。あとで写真見せられて凄く恥ずかしかったのを思い出した」

「十秋さん達もその写真見てからかっってきたりしたよね」

あの親達の意地の悪いニヤニヤした表情を2人は思い出して少し苦笑い。

ぴったり寄り添って手を握り合って寝ている2人の姿が親たちには

とても愛らしく見えたようでもう何十枚と写真を撮っていたくらいだった。

それから2人は子供の頃の思い出話に花を咲かせていた。

例えば、シャルロットが初めて日本の織斑家を訪れたときの話

『イチカ、ヒサシブリ、アイタカッタ!』

「そう言つて僕は一夏に抱きついたんだよね」

「突然抱きつかれたから驚いたし凄く照れたぞ」

「でもちゃんと抱きとめてくれたよね?」

「ま、まあ、俺もシャルに会えて嬉しかったし……」

「そうなんだ。えへへ」

例えば、春に桜が咲き誇る中でした花見の話

「桜をちゃんと見たのはあれが初めてだったかな」

「そつえばフランスつて花見の習慣無いんだよな」

「桜自体は咲いてるんだけどね。あんな風に桜を見ながら食事をする事はしてなかったから結構新鮮だったよ。花もフランスの桜より綺麗だったし」

「そんな綺麗な桜の下で親達はドンチャン騒ぎしてたわけだけどな・

・・・」

「あはは、あれは凄かったね……。結局皆酔いつぶれちゃって千冬さんと百春さんが介抱してたし」

「おかげで帰るのが凄く遅くなったけどな」

例えば、夏に海水浴に行ったときの話

「母さんの水着姿を父さんは鼻の下伸ばしながら褒めちぎってたな。母さんもまんざらじゃなさそうにしてて、父さんの身体も格好良いって褒めてたし・・・」

「お互いに褒め殺し、と言うよりイチヤついてるって感じだったよね。さすがにあれは僕も見てて苦笑い出ちゃったなあ・・・」

「あの2人の周りだけは気温が5度は上がっていただろうな」

「千冬さん達も呆れてたしね」

「万年新婚夫婦だったからなあうちの両親は・・・」

「その後に一夏僕の水着姿ちゃんと褒めてくれたよね」

「まあ、その、なんだ。シャルの水着姿可愛かったし・・・」

「えへへ、ありがとうっ」

「散々十秋姉達にからかわれたけどな・・・」

例えば、秋の穏やかな空気の中でのピクニックの話

「僕が虫を怖がってたら一夏わざわざ捕まえて突きつけてくるし」

「あれはコミュニケーションだって。気にするなって」

「気にするよ。僕をいじめて楽しかったの？」

「だってシャルのリアクションが可愛くってさ。．．．いや、待てよ。確かその後千冬姉に殴られた覚えが．．．」

「『女の子の嫌がることをするな馬鹿者！』って拳骨貰ってたよね。でもその後十秋さんが悪ノリして千冬さんの背中に虫入れたんだよね」

「千冬姉も虫が苦手だったけど十秋姉は平気な顔して虫に触ってたからな。あのとき千冬姉が珍しく大慌てして百春兄に虫を取ってて言ってたっけ」

「あははっ、そうだったね」

例えば、冬に雪が降り積もる中でのかまくら作りの話

「突然父さんがシャルに『日本の雪国のわびさびを教えてやるっ』なんて言い出したんだよね」

「それでみんながかまくら作り始めたんだよね」

「全員で張りきって作った結果、全員が余裕で入れるような巨大なかまくらが庭に出来上がったんだよね」

「初めて入ったかまくらの中は意外と暖かったな。その後全員そ
の中でお茶飲んだんだよね」

「あれこそ団欒って感じだったよな」

「こうやって子供の頃の話をするのって初めてだね」

「そうだな。3年間顔合わせてなかったってのもあるけど、やっぱりあれだな……。父さんと母さんの事思い出しまうからな……」

一夏の顔に少し陰りが映る。

「一夏……」

シャルロットもなんとも言えない顔をする。

「ゴメンね。僕はそんなつもりじゃ……」

「気にしないでくれ。確かに父さんと母さんの事はまだ思い出すと悲しくはなるけど、俺は独りじゃないからさ。千冬姉達家族がいる。箒や鈴のように友達がいる。そして何より、シャルがいてくれるだろ」

「うん、そうだね。一夏さえよければ僕は一夏の側にいるよ」

「シャルは覚えてるか？父さんと母さんが亡くなってから俺はしば

らく塞ぎ込んでいた時期があっただろ？あるときシャルが必死で俺のこと慰めてくれたんだよな」

「僕にはそれぐらいしかできなかったから」

「それぐらいなんかじゃないさ。電話だつて週に1回は必ずくれただろ？国際電話つて凄く高いのに。手紙だつて小まめにくれたし、うちに来たときはずっと俺の側にいてくれただろ？俺はそれが凄く嬉しかったんだ。俺が今こうしてられるのはシャルのおかげなんだ。感謝してもきれないくらい助けてもらったさ。だから――」

「あつ・・・」

一夏はシャルロットを優しく抱きしめた。

「ありがとう、シャル」

精一杯の感謝の気持ちを込めて一夏はシャルロットにお礼を言う。シャルロットは顔を赤くして少し身体を強張らせていたが離れようとはしなかった。

「うん、僕が一夏の力になれたなら嬉しいよ」

シャルロットは手を一夏の背中に回して優しく抱きしめ返した。その温かさに一夏は少しだけ涙をこぼしそうになる。何故涙がこぼれそうになるのかは一夏自身にもわからなかった。

「一夏、大丈夫だよ・・・、大丈夫だから」

シャルロットが優しくに眩き、何度も背を叩く。

宥めるような感覚に一夏は身を委ね、抱きしめる腕に少しでも力を込めた。

アイキャッチしりとり

シャル「すっかり委ねちゃったな」

一夏「なんか恥ずかしい・・・」

しばらくの間抱きしめあった2人は名残惜しむかのように身体を離れた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに顔を赤く染めて視線を逸らす。

今になって抱きしめあった事が恥ずかしくなったらしくドギマギしてしまっている。

照れ臭さからか、暫しの静寂が部屋を支配していた。

(コンコンッ)

「「!?!」」

「一夏あゝ、そろそろ夕飯の準備するから手伝ってくれる?」

十秋のノックと呼びかけに一瞬だけ身を竦ませる2人。

どうやら昔話や抱きしめあっているうちに結構な時間が経っていたらしくもう夕飯の準備をする時間になっていた。

「お、おう。わかった!今行くよ!」

「うん。ああ、シャルロットちゃんも今日は夕飯食べて行ってね」

「あ、はい!それじゃいただきます!」

「じゃあ、下に降りてるね」

パタパタと十秋の足音が遠ざかっていった。
足音が聞こえなくなると2人は顔を見合わせて小さく笑う。

「行こうぜ」

「うん」

一夏が先に立ち上がりシャルロットの手を取り立たせる。
そして手を繋いだまま2人は部屋をあとにした。

夕食時の会話もそこそこにしていた時に十秋がこんな提案をした。

「そうだ！シャルロットちゃん、今日泊まっていったら？」

「え？」

「子供の頃みたいにうちに泊まっていつて。ね？」

「で、でも寮はすぐ近くだから迷惑にならないように帰りますよ？」

「迷惑なんかじゃないよ。ね、皆」

「私は構わんぞ」

「俺も構わない。部屋は客間が空いているし、寝る所は困らんだろ」

「なんなら一夏の部屋にお布団用意するけど」

「な、何言つてんだよ！十秋姉！」

「馬鹿者！そんな事私が許さん！」

「あら、残念」

「ま、まったく何考えてんだよ・・・」

「あ、あははははっ・・・」

「客間が空いているんだからそこに寝てもらえばいいだろう」

「そうだね。あとで客間を整えておくよ」

「本当に、いいんですか？」

「そうさせてもらえよシャル。皆こう言ってる事だしさ」

「う、うん」

「決まりだな」

「大歓迎だよ」

「じゃあ、お世話になります！」

嬉しそうに微笑んだあとシャルロットはぺこりと頭を下げた。

織斑家の面々も顔を見合わせて笑みを浮かべた。

こうしていると何か昔に戻ったようでとても楽しくなってきた5人だった。

「5のダブルだ」

「俺は7のダブル」

「ぬあつ！7は俺が出そうと思ってたのに！」

「えっと、パスで」

「あたしの番だね。Aのダブルで」

全員風呂に入り終わったあとは皆で大貧民？nリビンゲ。

順番は千冬、百春、一夏、シャルロット、十秋の順だ。

「2のダブル誰が行く？行かないなら流しちゃうよ」

そういつて山になったトランプを流す。

「じゃあ、あたしからね。4一枚」

「私は9だ」

「Kだ」

「ちょ、また俺出せない!？」

「Aです」

「あたしが2。ジョーカー誰が行く？」

また十秋の順番で場が流れる。一夏以外は着実に手札を減らしている。

「3一枚」

「5だ」

「6で柄も数字も縛りだ」

「激縛り!?!だからねえって!?!」

「7」

「8つと」

再三十秋の所で場が流れる。流れが完全に十秋のペースだった。ちなみに一夏はまだ全然手札を捨てていない。

「4のダブル」

「6のダブルだ」

「9のダブル」

「何で皆俺が出せない奴出すの・・・」

「Jのダブルでバックします。で、柄も縛ります」

「8ダブルで切っちゃうね」

また十秋だ。リアルラックがあり過ぎとも言える。ちなみに一夏はリアルラック皆無と言える。

「あたしはこれで上がりね。はい、5一枚。流すよ」

「次は私だな。3のダブル」

「俺は10のダブルだ」

「・・・、パス」

「えっと、Qのダブルで」

「2のダブルだ。流すぞ」

千冬の番で場が流れる。ちなみに一夏は以下同文。

「私はこれで上がりだ。Q一枚。流すぞ」

「俺もQ一枚だ」

「・・・、パス」

「Kで縛ります」

「A」

「・・・、パス」

「2。流します」

この場はシャルロットの所で場が流れる。一夏は以下同文。

「2とジョーカーでダブルです。流してからJ一枚で上がりです！これは流しますね」

「K2枚とジョーカーでトリプル」

「も、百春兄い、何か俺に恨みでも・・・」

「Jのダブルで上がりだ」

「だあああーーーー！！全然捨てられずに負けたあああーーーー！！！！」

一夏手札をほとんど捨てられずに惨敗。

「シャルの番だぞ。・・・、シャル？」

「すう・・・、すう・・・」

何戦が大貧民を続けているとシャルロットが寝息を立てて寝てしまっていた。

「あらら、シャルロットちゃん寝ちゃったね」

「そういえば昔から大体最初に寝落ちするのってシャルだったよな」

「もついい時間だ。俺たちもそろそろ寝るとしよう」

「そうだな。おい一夏、シャルロットを客間のベッドに運んでやれ」

「え？お、おう」

千冬の指示で一夏はシャルロットを抱えて客間へと運ぶ。抱き方はもちろんお姫様抱っこだ。

客間に着くとベッドの上にシャルロットをそつと降ろす。そして掛け布団を掛けようとすると

「いちか・・・」

「ん？」

名前を呼ばれてシャルロットの顔を見るがシャルロットは再び規則正しく寝息を立てていた。

「寝言か」

掛け布団を掛けてやりそれからシャルロットの顔を覗き込む。

「これでお互い寝顔を見られてあいこつてとこだな」

一夏はシャルロットの寝顔を見ながら彼女の頭を撫でた。

「おやすみ、シャル」

寝ているシャルロットにそう告げると一夏は客間を後にした。こうして織斑家のゴールデンウィーク初日は終わりを告げた。

第二十話 昔のように（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回も難産だったぜ……。しかしやはり駄文だ……。ホント自分の文才の無さに絶望するぜ……。

大貧民の所は結構捨て札を考えながら執筆してたけど途中で面倒になったのでちよつと省きました。

次回は「GW（？）」となります。

ではで〜

第二十一話 お目覚めはいかが？（前書き）

GW2日目です。

シャルロットと一夏の朝のイチャつきをご覧ください。

第二十一話 お目覚めはいかが？

「おはよ、一夏。ほら、起きて」

「ん・・・？」

遠くから聞こえてくる優しい声に一夏の意識は少し覚醒する。

「起きて、一夏。朝だよ」

一夏の身体を優しく揺する。
まどろみの中、一夏は目を開けた。

「おはよう、目が覚めた？」

「うゝ？・・・シャル？」

一夏が目を開けると、シャルロットが優しい笑顔で顔を覗き込んでいた。

「ん・・・、ふあああ・・・」

むくりと起き上がってからあくびをひとつ。

「起きたみたいだね。おはよう、一夏」

「・・・おはよう、シャル」

朝の挨拶を交わして一夏は部屋を見渡す。

ここは織斑家の自室。今いるのは自分のベッド。そして目の前には優しい表情を浮かべたシャルロット。時計を見ると現在6時半。いつも起きる時間だった。

「何故シャルがここに？」

「やだなあ一夏。僕昨日ここに泊まったんじゃない？」

「いや、聞きたいのはそういう事じゃなくてだな」

「？」

可愛らしく首を傾げるシャルロット。一夏は不覚にもちよつと見惚れた。

「何でシャルが俺を起こしに？」

「ああ、実はこの前弾が言ってたんだけど、日本の男の子は幼馴染の女の子に起こしてもらう事がとても嬉しい事なんだって言うててね。だから僕が一夏を起こしてみたら一夏は喜ぶのかなと思って」

「弾の奴、そんな事シャルに吹聴してやがったのか・・・」

おかげで朝からちよつとしたサプライズに出会った一夏だった。

次に弾に会ったときは蹴りを入れてやろうと心に誓った一夏だった。

「でね、その、一夏、どうだったかな？僕に起こされて嬉しかったかな？」

照れた表情で両手の人差し指同士をつんつんしているシャルロット。

一夏にとってその仕草は破壊力抜群でとんでもなく可愛く見えた。

「あ、ああ、悪くない……。むしろ……。嬉しいよ」

直視できずそっぽ向いてぶつきらばうな感じに言ってしまったがそれが一夏の本心だった。朝目を覚ましたらシャルロットのような美少女が自分を起こしに来てくれたと言うのだから不満なんてあろうはずがなかった。

「そつか。それはよかったよ」

満面の笑みを返すシャルロット。

朝からこの笑顔が見ただけでも起こされてよかったと思えた。今度弾に昼飯でも奢ってやろうと心に誓った一夏だった。

5月4日。水曜日。みどりの日。

いつものように歯を磨き、寝癖を直してスッキリしたところで一夏はキッチンへ向かう。

「お？」

キッチンに入るとコンロの前で鍋をお玉でかき回しているシャルロットの姿があった。

「なんだ？朝飯作ってくれてたのか？」

「うん。泊めてもらったお礼も兼ねてね。冷蔵庫の中身勝手に使っちゃってゴメンね」

「それぐらいは構わないぞ。買い物は昨日十秋姉達が行ってくれたみたいだしな。あ、俺ちよつと朝刊取ってくる」

「わかったよ。もうちよつとで出来るから一夏は座って待っててね」

「お、おう」

一夏は朝刊を取りに玄関へシャルロットも調理に戻った。

（何かこういうの新婚さんみたいで妙な感じだなあ）

朝刊を取りに行った一夏はそんな事を思っていた。

「ん〜んん〜ん〜ん」

楽しそうに鼻歌を歌いながら味噌汁を作っているシャルロットを一夏は朝刊を見ながら盗み見る。

その後姿は家庭的で顔は見えないが明るい笑顔を浮かべていることが想像できた。

先ほど新婚さんみたいと思ったせいとその後姿に一夏はドキドキしていた。

「そついえば、シャルは今日何時に起きたんだ？」

胸のドキドキを振り払うように一夏は質問を投げかけた。

「6時くらいかな。なんだか目が覚めちゃったんだよね。昨日みんなでトランプしてるところまでは憶えてるんだけどそのあと気が付

いたらベットの上だったよ」

「シャルは途中で寝落ちしちゃったからな。俺が客間のベッドに運んだ」

「そ、そうなんだ……。ねえ、一夏」

「ん？」

「運んでたとき、僕重くなかったかな？」

女性なら気になるであろう体重。運んでいるときにもしかしたら重かったのではないかと不安そうに尋ねてくる。

「全然。シャルはどう見たって重い体型じゃないだろ」

「そんなことないよ！最近体重計乗るの凄く勇氣いるんだもん！」

「そうなのか？」

「世の中にはね、標準体重と美容体重と言うものがあるんだよ」

「へえ〜。でも細けりゃいいってもんでもないと思うけどな」

「一夏が言うほど、僕は細くないよ。お風呂で鏡見ると溜め息出るもの。もう少しここのお肉がなくならないかなーって」

「じじって何処？」

「ど、何処って……、もう、一夏のエッチ!!」

「え！？なんでえ！？何ゆえそこでエッチ！？」

「そういう情報は知らなくていいの！」

「わかったよ・・・、悪かったって・・・」

「わかればいいよ」

シャルロットはちょっとだけ頬を膨らませて怒っている。その姿がなんだか微笑ましくて一夏は笑顔を浮かべる。

「・・・なんで笑ってるの？」

「ん？そうだなー。シャルと一緒にいるのが楽しいからかな」

「えっ！？」

不意打ち気味の胸キュン発言を一夏は無自覚にシャルロットに食らわす。

それを食らったシャルロットは驚いた表情で固まる。

「どうした？」

「ふえっ！？な、何でもないよ！」

シャルロットは慌てて手をブンブンと振った。

（ぼ、僕と一緒にいると楽しいって、それって、わ、わ、わわわ、顔がにやけてきちゃうよ）。で、でも僕と一緒にいると楽しい、か

あ。そつかあ。うふふっ♪

ただいま心の中のお花畑では喜色満面の大勢のシャルロット達が手を繋いで踊っている。もしテロップ機能があるとすれば『しばらくお待ちください』と出ているに違いない。

「っておいシャル！フライパンフライパン！玉子焼きが焦げてるって！！」

幸福感に浸っているシャルロットは焦げている玉子焼きにしばらく気付かないのであった。

アイキャッチしりとり

シャル「一夏のエッチー！」

一夏「違っって！何でそうなるんだ！！」

「うっっっ……」

「気にすんなって。失敗は誰にだってあるだろ」

結局玉子焼きは焦がしてしまった。

そのことで自己嫌悪に陥るシャルロットを一夏は励ます。今は一夏がキッチンに立って玉子焼きを作り直している。シャルロットはしゅんっとなつて椅子に座っている。

「おはよう」

そこに百春が起きて来た。

「おはよう、百春兄」

「おはようございます、百春さん」

「ああ、おはよう」

百春は朝の挨拶を素っ気無く交わすと席に着いた。

「朝から一緒に朝食の準備か？」

「まあな。味噌汁はシャルが作ったやつだ。玉子焼きは今出来るから少し待っててくれ」

「百春さん、ご飯よそいますね」

「ああ、すまん」

今朝の朝食は3人で取ることになった。

「千冬さんと十秋さんはまだ起きてないんですか？」

「あの2人はまだまだ起きてこないと思うぞ」

「うちの女性陣は朝が極めて駄目だからな」

「おまけに今はGWだからな。すっかり魔力にやられちゃって」

「僕が起こしてきましようか？」

「いや、それはやめておけ」

「そうだな。十秋姉はいいとしても千冬姉はちょっと・・・」

天井を見上げる兄と弟。シャルロットもつられて上を見る。

「とにかく、あの2人は放っておいてかまわん」

「そうですか。でも、それだと味噌汁余っちゃいますね。一応全員分作ったので」

「それならあの2人が起きてきたら温めなおして食わせればいい。そうすれば無駄にもならんだろ」

「そうだな。じゃあこのままコンロの上に置いておくな」

とろ火にかけていた味噌汁の火を止めて鍋に蓋をする。

「そつえば百春兄、今日の予定は？」

「ああ、実は世話になった教授の命令でな。今日はちょっと都心の病院まで行つて来る」

「何時に出かけるんだ？」

「9時には出る。今日中に帰ってくるつもりだったが、長引きそうなんだ。帰りは明日になるかもしれないな」

「そうか。夕飯は用意しなくていい？」

「構わん。多分それまでには帰ってこれないだろうからな」

「わかった。十秋姉にも言っておくよ」

「頼んだぞ。それで、お前達は今日どうするんだ？」

「俺はいつも通り掃除と洗濯して、その後は昼飯を食ったら久しぶりに篠ノ之道場に行つて鍛錬してこようかと思つてる」

「僕は一夏のお手伝いをします。僕も久しぶりに一夏が剣道してるところ見てみたいので篠ノ之道場には僕も付いていきます」

「そうか。お前達も大概仲が良いな」

「そりや当然だろ。幼馴染だし。なあ、シャル」

「う、うん。そうだね」

シャルロットは少し複雑そうな顔をする。仲が良いと言われて一夏は当然と即答したがそれは幼馴染だからという返答だった。その答

えがシャルロットの心には複雑だった。

「ふむ、そうか・・・、なるほどな」

「？」

何か一人で納得している百春に一夏は訝しげな視線を向ける。シャルロットは一夏の横で苦笑いしている。

「まあいい。俺が首を突っ込むようなことでもないしな」

そう言う朝食を食べ終えた百春は席を立った。

「ご馳走様。では俺は出掛ける準備をしてくる」

「お、おう」

百春は自室へ戻っていった。

キッチンに残されたのはまだ少し訝しげな顔をしている一夏と苦笑いのシャルロットだった。

朝食を終えた一夏とシャルロットはそのまま掃除と洗濯に取り掛かり、それも問題なく終わり今はリビングでちょっと一息中。

「ふう」。やっぱり緑茶はいい。この渋みと苦みが心を落ち着かせてくれる」

緑茶を啜りながら一夏がいつもの爺くさい姿を晒す。

「もう、一夏何だかお爺さんみたいだよ」

年寄りっぽいことを言い出す一夏にシャルロットは苦笑いしながら言った。

「緑茶には人間の健康に良い影響を与えるとされる成分が多く含まれてるから健康にもいいんだぞ」

「僕達まだ15歳だよ？健康に気を使うの早すぎない？」

「何を言うかシャル君。若いうちから不摂生してたらいかんだぞ。クセになるからな。あとで泣くのは自分と自分の家族だ」

「やっぱり一夏ってちょっと変わってるね」

「うっさい」

「で、でも、そんな一夏も僕は嫌いじゃないよ！」

「そうか。ありがとう」

「……（ムスツ）」

「どうした？」

ちよつと頑張つて言ってみた台詞を軽く流されてしまい、シャルロットは少しムスツとする。一夏は首を傾げてハテナ顔だ。それが何だか少し悔しいシャルロット。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「さっき僕と一緒にいると楽しいって言ってくれたよね？」

「ああ、言ったぞ」

「それって、こうして一緒にお茶を飲んでお話してるだけでもかな？」

「そうだな。それだけのこともシャルと一緒にだと楽しいな」

「そうなんだ。えへへ」

急にムスツとしたと思ったら今度は上機嫌になったシャルロットに一夏は先ほど以上にハテナ顔をする。

そんな一夏にシャルロットは一夏の顔を見つめてにっこり笑う。

「僕も一夏と一緒にいるとそれだけで楽しいよ」

（ドキッ！）

「・・・ま、まあ、そりゃ、嬉しいね」

間近で極上の笑顔を目の当たりにしたおかげかシャルロットは一夏の顔を赤くする事に成功した。

（僕だけがあんな不意打ちを食らってドキドキするなんて不公平だもんね）

朝食時にもらった不意打ちの仕返しが成功してシャルロットはさらに上機嫌になった。

その後、一夏とシャルロットはリビングのソファで肩を並べて他愛のないおしゃべりをしながら午前中を過ごしていた。肩と肩の距離はやはり触れ合いそうなほどに近かった。

第二十一話 お目覚めはいかが？（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

一夏とシャルロットの朝のイチヤつきはいかがでしたでしょうか？

しかしGW編も今回で4話目。もうちょっと短くまとめたかったのですが無理だった…。

今考えてる案を入れるとあと3話くらい続くことになりそうのでGW編だけで7話も費やしそうです。

これでいいのか不安です…。

さて次回は篠ノ之道場に舞台が移ります。第も登場予定です。

あ！あとできれば感想をくださると嬉しいです。まだ感想4件しか来てないので…。

ではでは

第二十二話 篠ノ之道場とその帰り道（前書き）

GW（？）を1話にまとめました。

篠ノ之道場でのお話とその帰り道で一夏とシャルロットはある約束を

第二十二話 篠ノ之道場とその帰り道

場所は篠ノ之道場。

剣道着一式を身に纏った一夏は箒と対峙していた。

「一夏、お前とこうして対峙するのも久しぶりだな」

「ああ。最近ここには来てなかったからな。だからちょっと手加減してもらいたいんだが」

「断る。勝負事で手加減の文字は私の辞書にはない。お前とて手加減されるのは嫌いであろう？」

「さすが幼馴染。よくわかってるじゃないの」

「御託はいらん。そろそろ始めるぞ」

「はいはい」

試合場に入り二歩進んでお互いに礼をし、三歩進んで白のラインテープの上で蹲踞する。

その際に板張りの道場の床が少しミシツと音を立てる。

試合形式は簡単に一本勝負。先に一本取った方が勝ちだ。

主審と副審が立ちあとは試合開始の声を待つのみ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

2人の集中力が増していく。

実力はお互い充分知っている。
少しの油断が命取りとなる。

「始めっ！」

主審の口から試合開始の合図が放たれた。

「はぁ！」

気合一閃。

「ダン！」という床を蹴る快音と共に箒が一夏に接近し上から振り下ろされる高速の面を放つ。

「うおっと」

一夏はそれを竹刀で受け止めた。
常人ならそれで一本間違いないであろうタイミングでの一撃。しかし一夏はそれを防いだ。

「はぁぁー!!」

掛け声と共に箒の竹刀を弾き返す。その際に身体が反れた箒は胴がから空きとなる。

「胴おおー!!」

一夏はがら空きとなったその胴に竹刀を叩き込んだ。

「・・・」

が、審判からは一本の宣言が出なかった。

剣道の胴はなにも胴に当てればそれで良いというわけではない。

竹刀の先端と中央に白いものがあり、その間で敵を打たねば有効打突とは判定されないのだ。

箒は胴を受ける際に反射的に一夏に身体を近づけた。これにより有効打のエリアじゃないところを竹刀が打ったので一本にはならなかったのだ。

（さすがは箒だ。あの体勢から身体を近づけて一本を防ぐとはな）

（やはり一夏は凄い。私の初手をいとも簡単に防いだのだからな）

幼少期からお互いこの道場で実力を研鑽し合った間柄。実力は伯仲だった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

互いに無言ですり足で横に移動する。だが距離は一定を保っている
ので、上から見れば円を描いているように動いているのがわかるだ
ろう。

不気味な静寂が剣道場を支配する。

一夏も箒も互いに集中力を最大まで高めていた。

そして

「はああああ！！！！」

箒が突っ込んだ。

そして流れるような動作で竹刀が突き出される。

狙いは突きだ。

生半可な技は一夏には通用しない。

故に自信のある速度を生かす技で勝負に出る。

「はあああ！突きいい！！」

足で床を叩き、最高速での一撃。

タイミングからして万全の、最高の一撃だ。
しかし

「はっ！」

一夏はそれに反応し、箒の突きを自身の竹刀で横に弾いた。
すると今度は箒の面ががら空きとなる。しかも今度は先ほどより体勢が崩れている。

「めええええええん！！」

一夏の一撃が箒の面を捉えた。

「面あり一本！ それまで！」

主審、副審二人の旗がそれぞれ上がった。

勝負は一夏の勝利であった。

「一夏、お疲れ様」

道場の隅で勝負を見守っていたシャルロットが労いの言葉と共に一夏の側に寄って来た。

「はい、タオルと飲み物。スポーツドリンクでよかったかな？」
「おー、サンキューなシャル」

防具の面を外して汗まみれの顔をタオルで拭く。そして一夏好みの少しぬるめのドリンクを身体に流し込む。これは運動後熱を持った身体に冷たい液体を流し込む事で身体にダメージを与えることを一夏は嫌っているからである。

幼馴染であるシャルロットは一夏のその辺はよく理解していた。

「ふゝ、生き返る・・・」

一気に煽ることもせず、少量のドリンクを飲み込んだところで一夏はペットボトルから口を離す。彼はがぶ飲みもしない主義だ。

「箒もお疲れ様。はい、タオルと飲み物」

「すまないな。ありがとうシャルロット」

箒にもタオルと飲み物を渡すシャルロット。この辺りの気配りは彼女の得意とするところだ。

「一夏、やはり強いなお前は」

タオルで汗を拭いながら箒が一夏に声を掛ける。
試合に負けたにもかかわらずその表情は清々しいものであった。

「なあに、俺なんてまだまださ。千冬姉とかはもつと凄えしな」

千冬の実力はもはや師範である柳韻すらも越えるほどだ。教師とな

った今でもその腕は一切錆を見せてはいない。一夏自身もこの道場で剣道をするのは久しぶりなのだが実力は落ちてはいなかった。

「第って中学の全国大会で準優勝したんでしょ？その第に勝っちゃうんだからやっぱり一夏は凄いのと思うよ」

「そうだな。一夏、やはりもう一度ここで剣道をやってはみないか？それほどの才能を持て余しておくのは勿体無いであろう」

「嬉しい誘いだがやっぱり俺はいいよ。家の事もあるし、剣道は趣味のひとつみたいなもんだからさ。たまにこうやってこの道場で鍛錬ができればさ」

「そうか・・・」

第が少し残念そうな顔をする。

一夏がこの道場を去ったのは中学生になってからだった。

両親の死後、1人で家族4人を養っていた千冬を助けるために一夏はアルバイトをはじめた。

そのために剣道をやっている時間が取れなくなってしまい篠ノ之道場を辞めたしまった。

今でこそ藍越学園に入学してアルバイトもしていないが、一夏はこの道場に戻るつもりはないらしい。

あくまで剣道は趣味としてやっていくようだ。

「そんな顔するなよ。確かにここに帰るつもりはないけど、お前と一緒に剣道をやった事は俺にとっては大事な思い出だ。忘れるつもりなんてない。だからさ、たまにこうやって鍛錬の相手してくれよ。そうしてくれると俺は嬉しい」

「わかった。私でよければ相手になろう」

力強い笑顔と共に、一夏と箒は拳をコツンと合わせた。
普段は一夏に対しては素直になれない箒も剣道を通じてなら素直になれるのであった。

アイキャッチしりとり

主審「誰か私に名前をください・・・」

箒「一夏、強かったなあ。ポッ」

「あ、あのね一夏！」

篠ノ之道場からの帰り道の途中でシャルロットが何か意を決したように口を開いた。

「ん？どうしたシャル？」

「えーっと、あ、あのね・・・」

並んで歩きモジモジと指を弄びながら横目で問う。

「一夏は明日って何か予定があるのかな？」

「明日の予定？」

「う、うん」

「そうだな、1日中盆栽いじりに精を出すつもりだ」

「……………」

「いや、冗談だからな！俺に盆栽いじりの趣味なんて無いからな！」

「一夏、真面目に答えてよ！」

「わかったって……。そんなに怒るなよ……………」

一夏としてはちょっとした冗談のつもりで言ったのだがシャルロットには通じなかったようだ。

一夏はプンプンといった感じで怒るシャルロットを宥める。

「明日は特に予定は無いな」

「じゃ、じゃあさ、僕と一緒にこれに行かない？」

そう言っただけシャルロットは何か紙切れを2枚一夏の目前に突き出した。

「ん？これって、映画館のチケットか？」

出された紙は映画館のチケットだった。

『レゾナンスシネマフロンティア御招待券』という文字が見える。

「実はさつき一夏の家を出る前に十秋さんから貰ったんだ」

「今ってどんな映画やってるんだ？」

「さあ？僕もわからないんだけど何かこのチケット期限が明日までらしいんだ。十秋さんは行けないらしいから僕にくれたんだよ」

「映画かあ。たまにはいいかもな。よし、わかった。2人で観に行くか？」

「ほ、本当！？じゃあ決まりだね！！」

「おう。明日待ち合わせはどうする？」

「10時に駅前のモニュメントでいいかな？映画館行く前にちよつと駅前をぶらつくのもいいと思うんだけど？」

「ああ、いいぜ。明日の10時に駅前のモニュメントな」

「うん！えへへ。明日が楽しみだなあ」

ニコニコと本当に楽しみにしてるのが伝わってくるほどにシャルロツトは笑顔だった。

その笑顔につられてか一夏も自然と笑顔になる。

「ねえ一夏」

「おう？」

「これってさ、デート、かなあ？」

シャルロットは顔を赤らめて両手の人差し指をツンツンさせながらそう言った。

目は少し上目遣いでちょっとだけ瞳を潤ませて一夏を見つめる。

「そ、そうだな。デート、かもしれないな」

一夏が頭を掻きながら照れ臭そうに口を開く。

「そっか。そうだね。一夏と僕のデート、だね？」

「あ、ああ」

「一夏はどうか？楽しみかな？僕とのデートは？」

「うん、シャルと一緒にいるのは楽しいしな。楽しみだよ」

「うん。ありがとう、一夏」

シャルロットは風に流れる髪を軽やかきあげてふわりと微笑む。トクンと一夏の鼓動は大きく跳ねる。

その笑顔は一夏にとって今日一番の笑顔だったのかもしれない

「
・・・」

気恥ずかしい空気が流れる。

夕焼けに染まる町並みの中、ゆっくりと歩く。

長くなった影を引きずるように、いつものように肩と肩が触れ合い
そんな距離で2人は並んで家へと向かった。

第二十二話 篠ノ之道場とその帰り道（後書き）

駄文にお付き合いくださっておりがとつございます。

剣道ですが一夏はああ見えて強いんですよ。箒と肩を並べるほどに最強は千冬ですがねw

次回は「GW（？）」「一夏とシャルロットのデートです。

ではでは

第二十三話 デートの待ち合わせで（前書き）

GWだけでもう6話か……。偉く長くなってしまった……。

一応学園モノなのですが調べてみたら話数の半分近くが休日の話なんですよね……。

GW最終日。一夏とシャルロットのデート日です。

第二十三話 デートの待ち合わせで

5月5日。木曜日。こどもの日。

この日は一夏とシャルロットのデートの日。

待ち合わせは10時なので早起きが習慣の一夏に遅刻の心配はない。彼はいつものように6時半には起床して朝食の準備を始めていた。しかし、いつもの休日と違う事がひとつ起きた。

「一夏、おはよ〜」

「えっ!？」

「ん?どうしたの?」

一夏は時計を見た。現在AM7:00
そして一夏の前には織斑家の次女の十秋。

「十秋姉、熱でもあるのか?」

「え?熱なんか無いけど?」

「それともあれか?俺がまだ寝てるのか?」

「どうしたの一夏?」

「十秋姉が休日にこんな朝早くに起きてくるなんて・・・」

「失礼だなあ。あたしだってたまには休日でも早起きするよ」

休日なのに朝に弱い十秋がまだ7時なのに起きてきたことが一夏にとってはとても意外だった。

いつもなら昼前まで寝ている。ちなみに千冬はヒドイ時はおやつの時間を過ぎても寝ている。

「一夏は今日シャルロットちゃんと映画を観に行くんでしょ」

「何で十秋姉が知ってるんだよ？」

「だってシャルロットちゃんにチケット渡したのはあたしだからね。シャルロットちゃんが誰かを誘うとしたらやっぱり一夏だと思っからね。それに一夏昨日帰ってきてからちよつとソワソワしてたからね。誘われたのは想像ついたよ」

「そ、そうですか」

「準備とか色々しなきゃいけないから大変でしょ？だから今日は早起きしてあたしが家事をやろうと思ってるね」

「まあ、そうしてくれるならありがたいけど・・・」

「そうそう。今日は家のことはお姉さんに任せなさい」

そう言うのと十秋は一夏を椅子に座らせて朝食の用意を始めた。その背中を一夏はただぼんやりと見ているしかなかった。

朝食を終えると一夏は十秋に自室に押し込まれて今日の準備しろと言われた。

準備も何も一夏は昨日のうちに着て行く服も持っていく物も準備してあるので準備らしい準備はもう終えている。あとはせいぜい忘れ物はないかチェックするくらいだ。

することも特になくなってしまい一夏は暇を持て余す。

「することもねえし、ちょっとレゾナンスのことでも調べておくか」

一夏はPCを起動させて『レゾナンス』の事を少し調べることにした。

『ショッピングモール・レゾナンス』

地元住民からは『駅前』と呼ばれている施設で完全に駅とくっついているのでそう呼ばれている。

交通網でもあるここは電車に地下鉄、バスにタクシーと何でも揃い踏みで、市のどこからでもアクセス可能、そして市のどこへでもアクセス可能だ。

駅舎を含み周囲の地下街すべてと繋がっており、食べ物欧・中・和を問わずに完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく、子供からお年寄りまで幅広く対応が可能。とにかくバカデカくて便利なショッピングモール。それが『レゾナンス』なのだ。

（『ここで無ければ市内のどこにも無い』って言われるほどだからな。地味に——いや、派手にすぎんだよな此処）

かくいう一夏も中学時代には鈴や弾といったメンバーと放課後ここに繰り出したものだった。

といっても施設内をすべて把握している訳ではない。

下調べは大事だ。

レゾナンスの公式HPを開いて目ぼしい場所をチェックする。

「へー、ここってこんな施設があったのか。意外と知らないところが多いなあ」

HPを見ながら一夏は少しデートプランを思案していたのであった。

時は少し進みAM9:00。

レゾナンスは織斑家からはバスで10分ほどの所にあり、大して移動に時間も掛からない。レゾナンス行きのバス停も織斑家のすぐそばにあるので乗り遅れの心配も無い。

一夏は洗面所の鏡の前で身だしなみの最終チェック中だ。

（歯も磨いたし、鼻毛も出てないな。寝癖は今朝のうちに直しておいたから大丈夫だろう）

前髪をいじりながら身だしなみのチェックを終えると洗面所をあとにする。

「じゃあ行ってくるな」

「うん。シャルロットちゃんとのデート、楽しんできてね」

「お、おう」

ニコニコ笑顔の十秋に見送られて一夏は家の玄関を潜った。

（髪、変じゃないかな？もう1回見ておこうかな？）

AM9:20

待ち合わせ場所の駅前モニUMENTにはすでにシャルロットの姿があった。

そわそわと一夏を待ちながら手鏡を取り出して本日12回目になる前髪チェックを始める。

「ん・・・」

前髪を右に左にちょんちょんといじる。

「決まらないなあ」と思いつつ前髪を何度もいじる。

そんな仕草さえ様になって見えるフランス美少女を行き交う男たちがチラチラと彼女を窺っていたりする。

だが当の本人であるシャルロットはその視線に気付くことはない。今彼女の頭は一夏の事で埋め尽くされていて他の男の視線など気にはならない。

一夏に100%の自分を見てもらいたいという想いだけが今の彼女を支配している。

（でもさすがに早く来すぎたかなあ）

手鏡を仕舞い腕時計で時間を確認する。

AM9:25。

約束の時間までまだ35分もあった。

実はシャルロットは今より10分前にこの場所に到着していて、それからずっとそわそわしっぱなしなのだ。

（ふう・・・。ちょっと気合入れすぎかな。ちょっとリラックスしよっと）

ふつと息を吐いてリラックスして笑顔を浮かべるシャルロット。

「はい、その彼女」

「いま暇あ？どっか遊びに行かない？」

横から見た目に軽そうな男2人組がやって来て時代遅れのナンパ定例句でシャルロットに話しかけてきた。

「……………」

シャルロットは無表情だった。

「マジで可愛いよな」

「ね。暇でしょ？ 暇なら俺たちと一緒に遊びに行かない？」

「約束がありますから」

一応丁寧に断りを入れるシャルロット。

しかし、この手の輩はこんな事では引かないのがセオリーだった。

「えー？ いいじゃん、いいじゃん、遊び行こうよ」

「俺、車向こうに駐めてあるからさあ。どっかパーツと遠く行こうよ！ フランス車のいいところいっぱい教えてあげるから！」

フランスの——というところで、ぴくりとシャルロットが反応した。

「日本の公道で燃費の悪いフランス車ですか。ふうん」

拒絶100%の無表情でシャルロットが毒を吐く。

それに若干たじろぐ男2人組だがまだ引かないつもりらしく

「心配しなくても、俺たちが奢るからさあ」

「損はさせないからさあ。いいだろ、行こうよ！なあ！」

遂に片方の男がシャルロットの腕を掴んだ。

シャルロットは力チンときた。

（気安く触らないで欲しいな！その香水のキツイ匂い移されると困るし！）

シャルロットは十秋直伝の体術で男を投げ飛ばそうと手首を掴もうとする。

するとそこに

「俺の連れに何してんだ？」

突然乱入してきた男がシャルロットの腕を掴んでいたナンパ男をシャルロットから引っぺがした。

「イテっ！？ なんだよ！」

そこにいたのはシャルロットが待ち焦がれた今日のデートの相手だった。

アイキャッチしりとり

ナンパ男A「ポツチャリには興味ねえんだよ！」

ナンパ男B「夜道には気をつけな」

「一夏っ！」

「よ、シャル。待たせたか？」

シャルロットを助けたのは一夏だった。

一夏は不自然じゃない動作でそつと男たちに身体を割って入らせシャルロットを引き離した。

「あんたら、悪いんだけどこの娘は俺の連れなんだ。だからナンパは遠慮してくれないかな？」

シャルロットを守るように背中に庇ってナンパ男達と対峙する。

（凄い！王子様みたい！）

颯爽と現れた一夏は、悪の魔の手から自分を守ってくれた！

・・・というのはまあ、多少言い過ぎかもしれないが、シャルロットの瞳には自分を背中に庇ってナンパ男2人と向き合う一夏の姿が

とてつもなく格好良く見え、ぱーっと見惚れる。

「残念だけど、この娘は俺の連れだ。ナンパするなら他を当たってくれ。な？」

「「うつ・・・」」

一夏はニコニコ笑ってはいるが身体から凄まじい迫力を滲み出している。

その迫力に男たちの動きが止まった。

まるで蛇に睨まれた蛙のように立ちすくむ男たち。

一夏は男たちの肩をポンと叩いた。

「二度は言わないぜ。とつとと失せな」

「「ちつ・・・！」」

その凄みに当てられて、男たちは早足でその場から去っていった。

「・・・・・・・・」

「あ、あの、一夏？」

「わりい！遅れちまって！」

「う、うつんまだ時間前だし・・・。その、助けてくれてありがとう」

「そんなのは当然だろ。シャルが困ってたら助けるのはさ」

「やっぱり一夏は優しいね」

「そんなことないだろ。誰だって知り合いがナンパされて困ってたら助けるだろ」

「うっん、そんなことないよ。それが自然に出来るのは一夏が優しいからだよ。僕はすごく嬉しかったよ」

「そうか。まあ、何にしてもシャルが無事でよかったよ」

「う、うん。ありがとう」

笑って言う一夏の顔をシャルロットは直視できず俯いた。髪の間から覗く耳はこれでもかと言わんばかりに真っ赤になっている。

「さて、まだ少し時間早いけど行こうか」

「う、うん。そうだね！」

一夏に促されて我に返ったシャルロットは勢いよく首を縦に振った。せつかく今日は一夏と2人きりでデートなのだ。シャルロットも勿体無い時間の使い方はしたくはなかった。

「はい」

「ん？」

シャルロットは一夏に手を差し出した。

しかし、一夏にはその意図がわからなかったらしく、首を傾げている。

「一夏、これってデートだよな？」

「あ、ああ。今日はそうだったよな」

「な、ならね！」

ぐいっとシャルロットは一夏に迫る。

一夏は若干たじろぐ。

「手をね、繋いでくれたら嬉しいんだけど・・・」

迫ったはいいがちよつと恥ずかしくなったシャルロットは言葉が少しボロボロつとなつてしまった。

が、その言葉は一夏の耳にはちゃんと届いていた。

「そうだな。せつかくのデートなんだしな。ほい」

差し出されたシャルロットの手を一夏はきゅつと握る。

「これなら逸れる心配もないよな」

「そ、そうだね。じゃ、じゃあ、行こうか」

「おう」

シャルロットにつられて、一夏も駅前へと進む。

手を握り合つて並んで歩くその姿は立派な恋人同士のように見える2人だった。

「ねえ、一夏」

「ん？」

立ち止まってシャルロットは顔を赤くして俯いている。

「あのね……、さっき僕がナンパされてるのを助けてくれたとき
なんだけど……」

「うん」

「あのときの一夏……、す、すごく格好良かったよ……!!」

シャルロットは顔を上げて一夏を見つめる。

予想外の褒め言葉が出てきて一夏は一瞬惚けてしまう。
それを理解すると顔の紅潮が自分でもわかるくらいに顔から熱を放
つ。

「しゃ、シャルにそう思われたのなら嬉しいよ……」

空いている方の手で頭を掻き照れ臭そうに一夏が口を開いた。

「うん!」

太陽のような笑顔でシャルロットは一夏の手をきゅっと握り直す。
そつすると一夏の方もきゅっと握り直してきた。

「行いっぜ」

「うん」

2人は再び駅前へと歩き出した。
いつもは肩が触れ合いそんな距離の2人だが、今日はお互いの手を
きゅっと握り並んで歩く。
まるで、本物の恋人同士のように。

こうして、2人のデートは幕を開けた。

「・・・・・・・・なあ」

「なあに？」

「・・・・・・・・あれ、手え握ってないか？」

「んー？握ってるわねえ」

「そうか、やはりそうか。私の見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やはりそうなのか。ふふふふ……」

「ねえ」

「何だ？」

「これからどうするの？」

「決まっている。後をつけるぞ」

追跡者が2人ほどいることを一夏とシャルロットは知らなかった。

第二十三話 デートの待ち合わせで（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

大体は原作3巻と6巻を参考にしていますが僕の執筆だどこまで駄文化するとは・・・。

追跡者2名は多分わかりますよね？

今回は「GW（？）」「」です。一夏とシャルロットの本格的なデート場面となります。

ではでは

第二十四話 2人のデートと2人の追跡者（前書き）

一夏とシャルロットのデートです。

時間はお昼前までです。

GWだけでもう7話も費やしている……。おまけに今回でもまだ
終わりません……。

いい加減にしろとか言わないで……

第二十四話 2人のデートと2人の追跡者

仲良く手を繋いで駅前を歩く一夏とシャルロット。

駅前には多種多様な店がずらりと並んでおり、GWということもあり若干であるが開店を早める店があるので10時前というこの時間でも開いている店は少しはある。

「さて、映画は14時からだからまだ時間たっぷりあるし、どこから回るか？」

「う、うん。一夏はどこか行きたいところとかない？」

「そうだなあ。一応下調べはしてきたけどこの時間じゃまだ開いてない店もあるだろうから、まずは適当にぶらついてみるか？」

「そうだね。じゃあ行こうか」

「おう」

まずはアテもなくぶらつく事になり2人は手を繋いだまま駅前をゆつくりと歩いていく。

「むむむ、なんだかいい雰囲気だな・・・」

追跡者の片割れである少女が物陰から顔を出しポニーテールを揺らして一夏とシャルロットの背中を見つめる。
言わずもがな、篠ノ之箒である。

「そうみたいねえ」

気だるそうに箒の後ろからツインテールの小柄な少女が顔を出す。
言わずもがな、凰鈴音だ。

「何がどうしてこういうことになってしまったのやら」

深々と鈴はため息をひとつ。

そうして横を見れば真剣な表情で一夏とシャルロットが歩いていった方を見つめる親友の少女。

「ね、箒」

「なんだ、鈴」

「・・・ん〜ん、なんでもなーい」

もう一度ため息をひとつ。

「今日も良い天気ねえ」

見上げれば快晴の空。

現実逃避にはうってつけ？の空模様だった。

何故箒と鈴が一夏とシャルロットのデートを尾行しているかと言うと、この2人は今日は買い物に行こうという約束をしていたのだ。本当はシャルロットも誘って女子3人でGW最終日ということもあり夏服でも見に行こうと計画していたのだがシャルロットには「明

日はちよつと用があるから」と言つて断られたので仕方なくシャルロット抜きで行こうということになったのだが、一夏とシャルロットが2人で仲良く手を繋いで歩いているのを箒が発見。今日の予定はすべてキャンセルして尾行することになったのだ。鈴は反対したのだが箒に半ば強引に引つ張られてきたというわけだ。

「とにかく気付かれないように後を追うぞ」

「ラジャー……。夏服、見たかつたのになあ……」

買い物に未練たらたら鈴は仕方なく箒に従つて尾行に参加するのであつた。

「ん〜？」

一夏とシャルロットはある店を覗いていた。
覗いている店はどうやら雑貨屋のようだ。

「小学校の頃に木工でこんなの作つてる奴がいたような……」

一夏がそう言つて手にしたのは木彫りの像だつた。
何やら動物のようだが何の動物かはわからない。
よく見ると顔はキリンで角はシカ、足がウシで尾はトラと名称もわからない動物だつた。

「木彫りでこの完成度……」

「ねえ一夏、ちよつとこつち来て」

シャルロットが手招きして一夏を呼ぶ。

一夏は木彫りの像を元の位置に置いてシャルロットの方へ向かう。

「ほら、見てこれ」

そう言つてシャルロットが指差したのはぬいぐるみだった。ぬいぐるみなのだが……

「デカイな」

「うん、大きいねえ」

そのぬいぐるみはとにかくデカかった。

高校生の平均身長を上回る一夏の身長よりも高く、横幅も一般家庭の冷蔵庫並にある。

「これって何のぬいぐるみだ？」

「さあ？」

世間一般の可愛いから逸脱した変なぬいぐるみがそこにはあった。

そのぬいぐるみは何やら熊っぽいのだが目と目の間が妙に近くて鼻が異常にデカイ。口も大きく開いていて欠伸でもしてるかのようにだらしなく開いていた。

胴体の腹の部分にハート型のワッペンが縫い付けてあった。

それはもう何だかわからない何かとしか言いようがないぬいぐるみだった。

（何かデートで来るような店じゃないよな此処。まだ時間が早いから適当に開いてる店に入っただけで失敗だったかな……）

2人が入った雑貨屋は変なアンティークがこれでもかと陳列された店だった。

一夏は内心この店に入った事を後悔していた。

こんな可笑しな物ばかりが並んでいる店では雰囲気もあつたもんじやない。

しかし

「あはははっ！一夏、このぬいぐるみすっごく可笑しな顔してるよ！」

シャルロットは可笑しそうに笑っていた。

「ほら、こつちには妙な形の像があるよ！」

「見て見てこれ。花瓶みたいだけど本当はティーカップらしいよ」

「あ、あつちには変な絵があるよ。ちよつと見に行こうよ」

一夏の手をぐいぐい引つ張ってシャルロットは店の奥へと進んでいく。

どうやらシャルロットはこのお店を自分なりに楽しむ事にしたようで、目に付いた物を可笑しそうに見たり触ったりしている。

（何か店選び失敗したっばいけどシャルが楽しんでるみたいだし、いっか）

一夏もあれこれ考えることは止めにして楽しむ事にした。

気付けばシャルロットと一緒に店に並べられた風変わりな商品を見ながらシャルロットと一緒に笑っていたのだった。

一方、追跡コンビは

「うゝむ、デートにしては店のチョイスが悪いのでは・・・」

「あのさあ、もう夏服見に行かない？」

「いやまだだ！ここは追跡ののち、2人の関係がどのような状態なのかを見極めるまでは行かんぞ！」

「そう。はあ・・・」

追跡はまだ続くようである。

「悪いな、何か変な店入っちゃって」

「ううん。結構面白かったよ」

10時を少し回ったところで一夏とシャルロットは雑貨屋を出た。

「もうそろそろどの店も開店してる頃だろう。シャルはどこか行きたい店とかあるか？」

「特に決めてはいないかな？こうやって適当にぶらつくのも結構楽しいよ」

「そうか。じゃあまた適当にぶらつくか」

「うん」

まだ若干クシャクはしていたものの、2人は自然と手を握り合う。そしてまたアテもなく歩き出した。

アイキャッチしりとり

一夏&シャル「仲良く手を繋ごう」

第&鈴「鬱陶しい奴らだ・・・」

その後の2人は本当にアテもなく適当に駅前をぶらついていたのであった。

例えば、ぶらりと駅前の通りの一角にあるアロマショップに入ってみたり

「こついう店は男は入りづらいんだけど・・・」

「今は男性用のアロマグッズもあるから大丈夫だよ」

一夏はちよつと入るのを渋ったがシャルロットに促されて観念して入る事にしたのだった。

店内に入ってからアロマテラピーに関するちよつとした雑学を教わりながら店内を物色する。

「そういえば、『アロマテラピー』の発祥地ってフランスなんだよな？」

「うん。20世紀初頭に南フランスのプロヴァンス地方で香料の研究者が提唱したのが始まりなんだよ。その後は美容方面に活用できる技術として研究されてイギリスに伝わっていったんだ。現在のアロマテラピーには大きく分けてフランス系とイギリス系の二つの流れがあつて、フランス系のアロマテラピーは医師の指導のもと精油を内服するとか医療分野で活用されているんだ。イギリス系のアロマテラピーはアロマセラピストと呼ばれる専門家によつて施されて、心身のリラックスやスキンケアに活用されているんだよ」

「アロマテラピーって聞くと美容のイメージがあつたけどフランスでは医療で使われるのか」

「日本にはイギリスから伝わっていったから美容イメージが強いんだと思うよ。といつてもフランスでも100%医療で使われてるわけでもないから美容のためにアロマテラピーをするフランス人もいるんだよ」

「へえ」

こういったものにさほど興味がない一夏だがシャルロットの説明は聞いていてなかなか面白いと感じていた。シャルロットが説明をしながら2人は店内を色々と見て回ったのであつた。

例えば、ぶらりとレゾナンスの一角にあるメガネショップに入ってみたり

「どうかな？」

「おお、似合うなあ」

シャルロットはシンプルなデザインの赤縁のメガネをかけてみせた。

「なんか一気に大人っぽく見えるな」

「メガネかけただけで？」

「ああ、それかけてスーツ着てたら立派なキャリアウーマンに見えると思うぞ」

「そうなんだ。じゃあ、一夏はこれをかけてみて」

「お、おう」

一夏はシャルロットに渡された銀縁のメガネをかける。

「兄弟だからかな。ちょっと百春さんに似てるね」

「そうかあ？俺は百春兄ほど目つき悪くないと思うぞ？」

「あはははっ……。目つきじゃなくて雰囲気っていうのかな？うまく説明できなけどなんか似てると思うよ」

「ふうん、まあいいや。よし、シャル。次はこれかけてみてくれ」

一夏が手にしたのはサングラスだった。

「それってサングラスだね？僕に似合うかな？」

「いいからかけてみてくれって」

「うん」

シャルロットは渡されたサングラスをかけた。

「一夏、どう？」

「Une jeune dame, les lunettes de soleil sont bien convenables (よくお似合いですよ、お嬢さん)」

「あ・・・、C'est agréable (それはどうも)」

ユーモアを交えてフランス語でやりとりする2人。

その後も2人は色々なメガネをかけて遊んでいたのだった。

例えば、ぶらりとレゾナンスの一角にあるペットショップに入ってみたり

「うわっ」

シャルロットは目を輝かせていた。

「シャルって猫とか好きだったよな？　こういう所も悪くないと思うぞ」

「Oui！C'est tres bon！（うん！凄く良いよ！）」

興奮のあまりかフランス語で返答してきた。

シャルロットの顔はずっと小動物達に釘付けで子供のように目を輝かせていた。

そんなシャルロットの反応が可愛くって一夏もにこやかに笑っていた。

「そういえば、シャルの家って猫飼ってたよな」

「うん！『シャルトリユー』ってフランス原産の猫をね！」

「名前は確か、『コレット』だったっけ？」

「そう！よく覚えてるね！」

「よくシャルがコレットの事を話してくれたからな。実際に俺もシャルの家に行ったときに会ってるしな。まだ飼ってるのか？」

「うん！あの子はもう高齢期に入ってるんだけどまだ元気だよ！」

いつになく饒舌なシャルロットだった。

色んな小動物に目移りしながらはしゃいでいる。

一夏もシャルロットと一緒に小動物達を愛でるのであった。

一方、追跡コンビは

「・・・むう」

「あいつらはいいわねえ楽しそうで・・・」

相変わらず不機嫌そうな篤と疲れきった表情の鈴がいた。

「しかし本当にあの2人・・・、その・・・。つ、付き合っているのだろうか？」

「さあ？そこまでは・・・。でもあいつらの仲の良さは普段から目の当たりにしてるし、もしかしたらもしかするかもよ？」

「もしかしたら・・・」

「ここからは篤の妄想です。」

『シャル、俺は初めて会ったときからお前の事が好きだ』

『僕も一夏と初めて会ったときからずっと好きだよ』

『シャル、嬉しいよ』

『ちよつと、一夏。いきなり抱きしめるなんて』

『俺はもうお前を一生離さない』

『でも、本当に僕でいいの？』

『何を言っているんだシャル。俺の運命の女性はお前しか考えられない』

『一夏……』

『シャル……』

「だあああつ！破廉恥だつ！不埒者共めえええ！！」

「ちよつと落ち着いて箒！あんたどんな妄想走らせてるのよ！？」

暴れる箒を必死で押さえる鈴。

その様子は周囲の視線を一手に集めているが2人は往來の視線に晒されながらも騒ぎ続けていた。

「まったく、突然取り乱さないでよ……」

「すまん……」

鈴は何とか箒を落ち着かせた。

箒も取り乱した事を反省したのかしょぼんとする。
ため息をつきながら2人は一夏達が居た方へ視線を戻すが、

「「あれ？」」

視線の先にはすでに2人の姿はなかった。
慌てて周囲を見やるがどこにも見当たらない。

「見失った……！？」

「まああれだけ騒いでたし、気付かれた可能性もあるわね……」

鈴の言葉に箒は愕然とするしかなかった。

「えーっと、どんまい？」

鈴の言葉も慰めにはならなかった。

「どうしたんだシャル？いきなり慌てて店を出ようなんて」

一夏とシャルロットは先ほどのペットショップを後にしてレゾナスから駅前通りに出ていた。

「いやその、そろそろお昼ご飯の時間だから何か食べに行こうと思
って」

「そんなに慌てるほど腹が減ってたのか？」

「ふえっ！？ち、違うよ！ほら、あんまり時間が遅いとどのお店も混んじゃうから」

「ああ、そういうことか。悪い。気付かなかった」

「う、うん」

シャルロットが慌ててペットショップを出てきたのは箒と鈴の存在に気付いたからである。

先ほど追跡コンビが店先で騒いでいるのをシャルロットが偶然見つけたのであった。

一夏は気付かなかったようで突然手を引いて店をあとにするシャルロットにハテナ顔だったのだ。

「じゃあ飯食いに行くか。俺ちよつと良い店知ってるんだけどそこでいいか？」

「う、うん。それじゃ行こう」

「おう」

一夏の方からシャルロットの手をそつと取るとそのまま一夏はシャルロットの手を引いて歩き出した。

（箒達には悪いけど、やっぱりこれはデートだから一夏と2人だけでいたいよね）

繋いだ手を見ながらシャルロットは心の内でそんなことを思ってい

た。

甘えるように少し強めに握ってみれば一夏もそれに応えるように強く優しく握り返してくる。

ふと目を一夏の顔に向けてみると恥ずかしそうにしながらも笑顔をシャルロットに向けている。

（だって、こんなにも一夏が僕のことを見ていてくれるんだから）

一夏とシャルロットは互いの手のぬくもりにドキドキしながら目的地へと歩き出すのであった。

第二十四話 2人のデートと2人の追跡者（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

作者の僕はデート自体の経験薄いのでうまくデートを執筆できているか超不安です……。故に今回は投稿するのに1週間もかかってしまいました……。

次回は「GW（?）」です。次回を本当にGW編最後にしたいなあ・・。

では～

第二十五話 デートには下調べが必須です。でも終わりよければ・・・(前書き

やっとGW編完結です！

ー夏とシャルロットのデート後編です。

第二十五話 デートには下調べが必須です。でも終わりよければ・・・

一夏とシャルロットが訪れたのは駅前通りにあるちよっとお洒落な感じのオープンカフェだった。

普段の一夏なら滅多に寄り付かないような店だが今日はデートということもあってこの店を選んだ。

この店は前に千冬と十秋の買い物に付き合わされた時に3人で入ったことがあり、そのときから洒落ていて良い店だなと一夏も思っていた。

「今度はデートの時にでもここに来るといい」と千冬に言われたのを思い出し、実際今デート中なので一夏はこの店に来ることにしたのだった。

「へえ、お洒落だねここ。内装もすごく綺麗だし」

「綺麗だけじゃないぞ。うまくてリーズナブルだ」

「至れり尽くせりだね」

席に案内されてから注文までは結構スピーディに行われた。

もともと外食といえば弾の家の定食屋と鈴の家の中華料理店くらいしか行かないのだが、注文はなるべく迷わずにすらすらとするのが織斑家の決まりなのだ。

「ふう、食後の紅茶はうまい・・・」

ランチを済ませた2人は優雅に食後の紅茶を飲んでいた。

「すごく美味しかったね。生パスタってメニューに書いてあったよね」

2人が注文したのは本日のオススメランチの蟹クリームスパゲッティとデザートの梨のタルト。

それは2人を充分に満足させるものだった。

トマトクリームと蟹の身が絶妙に絡んで香りも良好。おまけに価格がデザートとアフタードリンク付きで一人700円というカフェ飯としては破格の安さだ。

「あの安さでこれだけの料理が食べられるんだね。僕ここ気に入ったよ」

「雰囲気もいいからデートには最適だな」

「昼食ラッシユの時間帯なのに意外と空いてたのもラッキーだったね」

「そうだな。結構俺達運がいいのかもな」

「うん、そうだね」

シャルロットは嬉しそうに笑みを浮かべて紅茶の香りを楽しんでいった。

そんな彼女を一夏はじっと見つめる。

「ん？どうしたの一夏、じっと見て」

「ああ。なんかいいなって思って、シャルを見てた」

「そ、そう・・・、もう、ちょっと恥ずかしいよ」

「あはは、ゴメンな」

頬を赤く染めて少しモジモジするシャルロット。

ちよつとクサかったかなと頬を搔く一夏。

初々しいカップルのような雰囲気か2人を包んでいた。

それでいて幸せそうな表情で2人は昼下がりのランチを楽しんだのであった。

「さて。そろそろ時間もいいころだし、映画観に行こうぜ」

オープンカフェを出ると一夏は携帯の時計で時間を確認する。

「そうだね。行こうか」

時刻はPM13:03

チケットに書かれた映画の時間は14時なのでもう映画館に向かってもいい頃合いだ。

自然と互いの手を取って2人は歩き出した。

「そういえば、結局映画は今何やってるのか調べてなかったんだけど、シャルは何やってるのか知ってるか？」

「実は僕も知らないんだ。このチケットも一昨日千秋さんが商店街の福引きで当てた物らしいから」

「一昨日福引きで当てて期限が今日までとは詐欺もいいところだな」

「そうだね。だから十秋さんも用事があって行けないから僕にくれ
たらしいんだけど」

「調べてくればよかったな。変な映画やってないといいけど」

「行ってみればわかるし、大丈夫だと思うよ」

2人はレゾナンス内の映画館へ向かった。

しかし、2人は今この映画館で上映している映画を調べてこなか
ったのを若干後悔する事となるのである。

下調べ した しらべ「名」^{スル}

1 あらかじめ調査しておくこと。「ロケ地を――しに行く」

2 学習をする部分をあらかじめ勉強しておくこと。予習。

これが意味する通り事前に確認することはとても大事な事である。
例えば、今日向かう映画館ではどんな映画が上映されているのかな
ど。

映画館の掲示板に今上映されている映画のポスターがデカデカと張
られていた。

タイトルにはこう書かれていた。

『死霊たちに捧げるゾンビの歌　～恐怖と混沌の宴～』

簡単に言えば、ホラー映画だ。

「おいおい、これってメチャクチャ恐いって評判のやつじゃないか・
・。失神した客が何人もいるとか、上映禁止になった映画館があるとか・・。」

「・・・・。」

一夏は横目でシャルロットを見た。
青ざめた顔をしたまま固まっていた。

「なあシャル」

「な、何かな・・？」

ブリキ人形みたいにギギギッとゆっくり一夏の方へと顔を向けるシャルロット。

「お前もしかしてホラー映画苦手なのか？」

「ななな、何を言ってるのかな！？べべべ、別に恐くなんてないんだからね！！」

「そう言いながら目が泳いでるぞ」

「幻覚だよ！錯覚だよ！気のせいだよ！」

「・・・・。」

あからさまに恐がっているのを隠しているシャルロットに一夏は少し呆れる。

こんなときまで優等生にならなくてもいいと思うのだが。

「しかし今日上映してるのってこれしかないみたいだけど」

「そ、そうみたいだね・・・」

「本当にこれでいいのか？」

「うう・・・」

「なあ、映画はやっぱり止めるか？どつか別のところで」

「い、いや、せつかくのチケットが無駄になっちゃうし・・・、これを、観よう・・・」

「本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ。ほ、ほら行こう・・・」

シャルロットは顔を引きつらせながらぎこちない歩き方で映画館へ入っていった。

一夏も不安を覚えつつもあとに続いた。

「ほらシャル。ポップコーンとジュースだ」

「あ、ありがとう」

間接照明に照らされた、かすかなざわめきと熱気に満ちた館内に一夏とシャルロットはポップコーンと飲み物を手に上映時間が訪れるのを待っていた。

「あ、あのさー夏」

「ん？」

「一夏は映画館にはよく来るの？」

「いや、俺はそんなに映画館には来ないぞ。観たいやつが公開されてもDVDとか出るの待つし。映画館に来るのも久しぶりだ」

「そうなんだ。前はいつ来たの？」

「中二の夏に筈や鈴達と来て以来かな。たしかあのときはアクション映画観ただけど」

「ジャンルはアクションが好きなのかな？」

「そうだな、好きなジャンルはやっぱりアクションかな。ハリウッドヒーローが主人公のアクション映画とか見ててスカッとするからな」

「そうなんだ。アクション映画が好きなんてやっぱり男の子だね」

そこへ上演ブザーが鳴り響いた。

「あ・・・」

「始まるみたいだな」

「話していれば気が紛れると思ったのに・・・（ボソッ）」

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもないよ！ほら、始まるよ！」

「お、おう」

2人はスクリーンに目を向けて予告CMなどを観ながら本編が始まるのを待つのであった。

上映開始から30分ほどが経過した。

「思ってたより恐くないな」

「そ、そうだね」

「お、ゾンビが爆発した」

「そ、そうだね」

「嫌そうにしてた割りに結構冷静だな」

「そ、そうだね」

「って、シャルちゃんと聞いてるか？」

「そ、そうだね」

「おーい、シャル？」

「そ、そうだね」

「ダメだこりゃ」と肩を竦ませる一夏。
するとそのタイミングで

『ギヤアアアアアアアアア！！！！！！！』

けたたましい悲鳴とスプラッターな展開が不意打ち気味に流れる。

「ひゃあああああ！！！」

耐えられなくなったシャルロットは悲鳴を上げて一夏に抱き付いた。

「お、おい、シャル！？！」

「だだだだだだだ、大丈夫だよ一夏！あ、足元にゴキブリが居ただけだから！」

「こんな暗いのにゴキブリなんか見つけれられるのか？」

「ぼ、僕は目がいいからね・・・あははは・・・」

「声が震えてるぞ」

「ふ、震えてないよ！」

「いや、凄く震えて——」

『グギヤアアアアアアアアア！！！！！！！！！！』

「きゃあああああ！！」

シャルロットはさらに一夏に強く抱き付く。

「お、おいちよつとシャル！く、苦しいって！」

「うぐう．．．やっぱりこつこつなのは苦手だよ．．．」

こつして映画館での時間は過ぎていった。

アイキャッチしりとり

シャル「ダメえ、こんなところじゃ．．．」

一夏「じゃあ、どこならいいの？」

映画館を出た一夏とシャルロットはレゾナンス内部のフードコートにあるテーブル席に腰掛けていた。

「大丈夫かシャル？」

「う、うん。結構落ち着いた・・・」

あのあとフラフラになって一人で歩く事もままならなくなったシャルロットを一夏が支えながら今居るフードコートまでやってきたのであった。

「ホラーが苦手ならあんなに無理しなくてよかったんじゃないのか？」

「だって、誘ったのは僕だしチケットも勿体無いから。それにこれはデートだから一夏と一緒に映画を観たかったんだよ・・・」

半分涙目になりながらも真摯に気持ちを口にするシャルロットに一夏も何も言えなくなってしまう。

なので、少し身を乗り出してシャルロットの頭に手を伸ばす。

（なでなで）

「はわっ！？一夏！？」

（なでなで）

「え〜っと・・・」

（なでなで）

「なんで僕頭撫でられてるのかな？」

「いや、なんか今のシャルを見てたらこうしてやりたくなくて」

（なでなで）

「あうう……」

シャルロットの髪は中々に触り心地の良く一夏は撫でて悪くない気分だった。

見ればシャルロットも恥ずかしそうにはしているが気持ちよさそう目を細めて大人しく撫でられている。

「落ち着いたか？」

「うん、もう平気だよ」

少しの間、シャルロットの頭を撫でた一夏は気遣うように聞くとシャルロットも笑顔で答える。

本当はホラー映画の時のドキドキとは違い、一夏に頭を撫でられたドキドキが今のシャルロットを支配していた。

もつと撫でていて欲しいと言いたかったが人目もあるのでその言葉は飲み込んだシャルロットであった。

（やっぱり一夏はズルイなあ。この状況でそんな事されたら僕はますます一夏の事が——）

一夏の行動はシャルロットの胸を一杯にしていた。

胸に抱いた淡い想いと嬉しさがシャルロットの胸をときめかせていた。

「さて、もう時間も夕方になるな。シャル、この後はどうする？まだどっか適当にぶらつくか？」

「うん、そうだね。まだ一夏とのデート終わらせたくないかな」

「そうだな。せっかくのデートだしな」

「うん！」

シャルロットはいつもの明るい笑顔で一夏に微笑んだ。

一夏も彼女の手を取ってフードコートをあとにしたのであった。

デートの最後に2人が訪れたのは駅前から少し足を伸ばした所にある城址公園だった。

この城址公園は春は桜が咲き誇り、夏は海が見渡せ、秋は紅葉に彩られ、冬は雪化粧した街並みを見る事ができるのでカップルには人気のスポットだ。

「着いたぞ」

「いい眺め」

「だろ？」

城址公園内の小高い丘の上にある何の変哲もない踊り場のような場所。

そこから見渡す海の景色がよく映える。

うーんと背伸びをしてみせるシャルロット。

風でシャルロットの髪がゆれる。

彼女は手を添えて抑えていた。

「風、気持ちいいね」

「ああ」

海辺はすでに赤く染まり、太陽が水平線に差し掛かろうとしていた。その光はまぶしく、空を、雲を、そして大地を綺麗な橙色へ染めて上げてゆく。

「シャル、今日は楽しかったか？」

「うん、凄く楽しかったよ。何より一夏と2人でデート出来たことがよかったよ」

笑顔で答えるシャルに一夏は満足そうにうなずく。

「ねえ、一夏はどうだった？ 僕と一緒に今日一日いろいろなところ回ってデートして楽しかった？」

「ああ、俺も今日シャルとデート出来て楽しかったよ」

そういうとシャルロットはこそばゆそうに笑った。それからしばらくの間、2人は水平線に沈んでいく夕日を手を繋いで寄り添いながら静かに眺めていたのだった。

「今日はありがとう、一夏」

「いや、こちらこそ。楽しかったよ、シャル」

途中で映画の内容がホラーだったというちょっとしたハプニングも起こったが、それも含めて充分に楽しい一日だったと言えるだろう。

夕日が沈み空が藍色に染まる頃、一夏とシャルロットは家路につき今は織斑家の前だ。

十字路の対角線上にシャルロットが暮らす藍越学園の寮がある。ここまで来れば今日のデートはもう終了だ。

後はそれぞれ家や寮の部屋に戻るだけ。

ちょっとした寂しさを一夏もシャルロットも感じていた。

「あつ、そうだ。シャル、コレ・・・」

一夏が思い出したようにポケットから包みを取り出す。

「え？」

「開けてみて」

「う、うん・・・」

シャルロットは緊張に胸をドキドキさせながら包みを解いていく。

「あつ、これって・・・」

手に収まるぐらいの四角い箱から出てきたのは銀色に輝くブレスレットだった。

「シャルに似合うと思ってな」

「僕のために？」

「そついうことになる」

照れ臭さそうに一夏は笑う。

「あんま高い物じゃないけどな。ほら今日のデート記念ってことで貰ってくれないか？」

一夏いつこれを買ったのかといえ、デート開始直後に入ったあの雑貨屋の事であった。

2人が入ったあの雑貨屋は変なアンティークがこれでもかと陳列された店だったのだが、一夏はあの雑貨屋の中で希少ともいえるまともなアクセサリを偶然見つけたのだ。

「シャルに似合うかも」と思ったら即決して購入した。もちろん彼女にはこっそり内緒で買った代物だ。

シャルロットは正直、「やっぱり一夏ってズルイ」と思っていた。デート出来ただけでも嬉しかったのに別れ際でのこのサプライズ。今のシャルロットの心は嬉しさで溢れていた。こんなことをされたら嬉しくないハズがない。だから、その感情がそのまま表に出てしまった。

「ありがとう、一夏！」

嬉しげな満面の、シャルロットが今日一番の笑顔を見せたのだった

「え・・・あつ・・・う、うん」

シャルロットの笑顔に完全に見惚れていた一夏であった。

「~~~~」

寮のシャルロットの部屋。

シャルロットはベットに横になりながら左の手首にはめられたそれをにこにこしながら眺めていた。

「えへへ」

見つめる先には一夏からプレゼントされた銀色に輝くブレスレット。彼女はそれを愛しそくに眺めるのであった。

「2人のデート記念かあ。ふふふ」

彼女の上機嫌は一晩中続いたのであった。

第二十五話 デートには下調べが必須です。でも終わりよければ・・・（後書き

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

8話も費やしたGW編もやっと完結です。

考えてたより凄く長くなってしまった・・・。

わかる人にはわかると思いますが今回のデートの話は色んなゲームやアニメの話を参考にして執筆しています。

参考にした作品はいい作品なのに僕が執筆するところまで・・・

まあ何はともあれGW編も無事終了しました。

読んでくださってありがとうございます。

次回はそろそろ出てきていない「あの方」を登場させたいと思っています。誰かは今は言えません。

では次回もよろしくです。

第二十六話 新しい風（前書き）

舞台は学園に移ります・・・とはいい難いかなあ？

登校からSHRの途中までですし・・・

第二十六話 新しい風

「おはよう、シャル」

「おはよう、一夏」

GW最終日のデートから一夜が明けた。

朝の登校時に顔を合わせた2人はいつものように挨拶を交わす。

「行こうか」

「おう」

肩を並べて歩き出す。

入学してから約1ヶ月通った道をゆっくり歩いていく。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

2人の間に会話はなかった。

昨日デートしたという事もあり互いを意識してしまっているのだ。

「えーっと・・・・・・・・だな」

「う、うん・・・・」

意識を極力しないようにしながら話をしだす。

「デート、楽しかったな」

「う、うん。楽しかったね。あ、プレゼントも凄く嬉しかったよ。ありがとう」

「俺が贈りたかったただだから。気に入ってくれたなら嬉しい」

「うん、凄く気に入ったよ！今日だって学校がなかったら1日中着けていたくらいだよ！」

「藍越学園はアクセサリーの着用禁止だもんな」

徐々にはあるが2人は意識せずに他愛のない話に花を咲かせていった。

「そこで千冬姉と十秋姉が店に押し入ってきた強盗を2人でボコボコしてさ」

「凄いね。何か話だけ聞いていると映画とかドラマみたいだね」

「だよなあ。犯人達は銃とか持ってたらしいぜ」

話しているのは千冬と十秋の武勇伝。

1年ほど前に千冬と十秋が2人でとある喫茶店でお茶を満喫していた時の事。

そこに銀行を襲撃してきた後の強盗が逃亡途中に乱入。店に立て籠もって客を人質にしたのだ。

人質として店の中にいた千冬と十秋であったが大人しく人質になっている2人ではなかった。

犯人達の隙を突いて大立ち回り、そのまま合計5人の強盗犯を見事に撃退したのだった。

この事は新聞にも掲載されて『美人姉妹！強盗犯を見事撃退！！』と一面にデカデカと載せられていたほどだ。

「あの事件のあと家にマスコミが押し寄せてきて凄え大変だったんだぜ」

「そうなんだ。大変だったね」

そうこう話しているうちに箒と鈴いつも合流する路地に差し掛かる。

「おっはよー！一夏、シャルロット！」

鈴が手を大きく振りながら挨拶をする。
今日も鈴は元気いっぱいだ。

「おっす」

「おはよう」

一夏とシャルロットも挨拶を交わす。

「箒もおはよう」

「うむ、おはよう」

鈴の後ろに控えていた箒に気付き挨拶をするシャルロット。

「おつす、箒」

一夏も続いて挨拶をする
が

「・・・・・・・・（ギロリ）」

何故か睨まれる。

いきなり睨まれたので一夏も困惑する。

「えゝつとつ・・・・」

「何だ!？」

「え? いや、おはよう・・・・」

「ふんっ!」

「?」

普通に挨拶しようとしただけに箒のこの態度に一夏はハテナ顔だ。

「さっさと行くぞ」

そついうと箒は1人でスタスタと歩いていつてしまった。

「あ、おい、待てよ。1人で行くなって」

慌てて箒の後を追う一夏。

鈴とシャルロットもそれに従って歩き出す。

そんな2人を見て鈴はやれやれという感じでため息を漏らし、シャルロットは苦笑いしていた。

「なあ、箒……」

「……」

一夏は歩きながら箒に話しかけてみるが箒はただ不機嫌そうにしているだけだった。

「なあって、何でそんなに怒ってるんだよ……」

「怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもなく言われる。

箒がここまで不機嫌な理由がわからない一夏はただ首を傾げるのみだ。

「——うは、——しかったか」

「え？何だって？」

「昨日は楽しかったかと聞いている」

「昨日って・・・？ああ、シャルとのデートの事——」

「わぁ！一夏っ！—！」

「むぐっ！—！」

恥ずかしさと今の筈の状態を見てこの発言はマズイと悟ったシャルロットが慌てて一夏の口を塞ごうとするがデートという単語はしっかりと筈の耳に届いてしまった。

「ほう、デートか。さぞ楽しかったろうな」

「まあ、楽しかったぞ。なあ、シャル」

「え！？あゝ、その、うん・・・」

「そうか、よかったな！」

ケンカを売るかのように刺々しい口調で筈は嫌味を言ってくる。そしてまたスタスタと一人で歩いていってしまう。

「？何なんだよ・・・」

訳がわからないと言いたげな顔をする一夏。

「てゆうか、何で筈が俺とシャルが昨日デートしてたの知ってるんだ？」

「それは昨日あたしと筈が駅前で買い物してたらアンタらを見かけたからよ」

見かねた鈴が口を挟んでくる。

「何だよ、それなら声ぐらいかけろよ」

「デート中にそんなことするのも無粋でしょ」

「別に気にしないぞ。なあシャル」

「え！？う、うん・・・」

「ん？どうしたんだ、暗い顔して？」

「何でもないよ・・・」

「はぁ・・・、唐変木（ボソツ）」

「？」

訳がわからないと以下同文。

「とにかく、早いトコ箒のご機嫌取りなさいよ。ああピリピリされてたらこっちが気疲れしちゃうから」

「お、おう」

鈴に促されて一夏は数m先に行く箒に歩み寄っていった。

「あの様子から察するに、アンタ達はまだ付き合ってる訳じゃないさそうね」

「う、うん。まだそういうのじゃないね」

そのまま鈴はシャルロットと話しはじめる。その会話は前に行く――夏達には聞こえてはいない。

「でも、何だか箒に悪い事しちゃった気が・・・」

「平気よ。恋愛に卑怯もへったくれないし、シャルロットを責める気は全然無いわよ。むしろ箒ももっと素直になったらいいのには思っけど・・・」

「そうだね・・・」

「まあ、一夏も一夏だけどねえ・・・」

「あははっ・・・」

苦笑いして数m先に行く箒と一夏に視線をやる鈴とシャルロット。どうやらまだ箒のご機嫌取りは成功していないらしい。

「・・・」

「・・・」

沈黙が一夏と箒の間に流れる。

（い、いかん。何か間が持たない・・・。ご機嫌を取れなかったとど

うすりゃいいんだ？)

いざご機嫌を取ろうにもどうしたらいいのかわからずに四苦八苦し
ていた一夏だった。

箒も仏頂面でスタスタと歩いているのみだ。

(少しきつく言い過ぎただろうか・・・)

仏頂面の裏で箒は先ほどの自分の態度を少し後悔していた。

意中の相手が他の女とデートをしたという事実に腹を立てるあまり
に冷淡な態度をとってしまったが素直になれない箒はただ仏頂面で
いるしかなかった。

今は自分のこの性格が恨めしい箒であつたがどうにも素直にはなれ
ない。

「なあ、箒・・・」

「何だ・・・」

頭ではダメだとわかっているのに口調がどうにも刺々しくなっ
てしまふ。

「えーとつ、今日してるそのリボンって新しいやつか？」

「えっ!？」

一夏の指摘に箒の足が止まった。

「な、何だ？もしかして違つたか？」

「い、いや、そうではない。確かにこれは新しいやつだが」

今簞がしているリボンは昨日一夏とシャルロットを見失った後に鈴と約束通り夏服を見に行った際に購入したものでせっかく新しいのを買ったので今日着けていくことにしたやつなのだ。

「よ、よく気付いたな」

着けているリボンを少し弄りながら簞が言う。

「いや、色も模様も見たことないやつだし、簞の事は毎日のように見てるからな」

さっきまでの刺々しさが無くなったような気がした一夏は首を傾げながらもそう告げた。

「そ、そうか。私を見ている・・・か。そうかそうか」

うんうんと上機嫌で頷いてみせる簞。
先ほどの仏頂面はどこへやら。

「よし！では学園へ行くでしょう！」

「お、おう」

急にテンションの上がった簞に一夏は置いてけぼりになる。

（よくわからないけど、ご機嫌取りには成功したっぽいな）

安堵の息を漏らす一夏であった。

(じーっ)

「ん？」

なにやら視線を感じて振り向くとそこにはシャルロットがいた。

「にこっ」

「に、にこっ」

笑顔で微笑むシャルロットにつられて一夏もにこつと笑って見せるが、何故だか背中に一筋の汗が通った。

「毎日のように箒を見てるんだ。へえ」

「え？シャル、もしかしてなんか怒ってるか？」

「どうして？そんなことないよ。僕は全然怒ってないよ」

確かに顔は笑っている。

しかし、シャルロットの背後には絶対零度の冷気が放たれていた。まるで十秋が見せる「ブリザードスマイル」のようであった。

「ほら、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

「あ、ああ」

(何だあ！？今度は急にシャルがこんな状態に！？何故だ！？何故なんだシャル！？)

第の次はシャルロットが機嫌を損ねてしまっていた。
原因が自分であることを理解していない一夏は狼狽するばかりだった。

「あー・・・」

やれやれといった様子で鈴は腕を広げる。

「一夏」

「なんだ？」

「・・・、唐変木」

「何でだよ！」

今度はシャルロットのご機嫌取りに必死になる一夏であった。

アイキャッチしりとり

第「のぼせてしまっではないか・・・」

シャル「カリカリなんてしてないもん！！ベーっだ！！」

教室に着いた一行はそれぞれ席へ向かった。

「あー、シャルロット。ちょっといいか？」

箒がシャルロットを呼び止めた。

「何、箒？」

「いや、あのな・・・」

何やら言い難そうにおどおどしている箒。

しかし、意を決したように口を開く。

「さっきはすまなかった」

登校中の態度の事で謝ってきたのであろうとシャルロットは理解した。

謝る相手は自分ではなくて一夏にはないかと思ったがここは素直に謝罪を受け取っておく。

「大丈夫だよ。気にしてないから」

先ほどの絶対零度の冷気を感じさせない太陽のような笑みでシャルロットは箒に答える。

箒も何処か安心したように表情を和らげる。

「あ、あと、もうひとつ・・・」

「ん？」

「い、一夏の事。・・・ま、負けないからな！」

少しきよんとするシャルロットだったがすぐに笑顔に戻って

「うん。僕も負けないよ」

笑ってお互いにライバル宣言する2人に遠目から見守るように笑みを零す鈴であった。

「うーっす、一夏！」

教室に入って席に着いた一夏を迎えたのは弾の元気のいい声であった。

「・・・・・・・・」

「ん？どうした一夏」

（げしっ）

「あでっ！」

一夏は問答無用で弾に蹴りを入れた。

「何でいきなり蹴るんだよ!？」

「いや、目の前に敵が現れたら攻撃するのが定石だろ」

「俺はRPGの敵キャラか!？」

「いや、お前って倒せば薬草くらいは落としてくれそうじゃん」

「しかも雑魚かよ!？」

「わかったよ。薬草2つにしといてやるよ」

「薬草の数の問題じゃねえよ!！」

「わかったわかった。3つにしといてやるから落ち着け」

「お前は朝から俺にケンカを売ってるのか・・・」

「まあまあ2人とも、とりあえず落ち着け」

そこに数馬が入ってきた。

いつもの男子3人がこれで集合である。

「で、お前らは何があつて揉めてたんだ？」

「一夏がいきなり俺に蹴りを入れやがったんだよ・・・」

「だって倒せば薬草が手に入るんだぜ」

「だから落とさねえよ!！」

「そつだぞ。弾は薬草を落とすほどのキャラでもないだろ」

「そつちかよ！つてかお前も敵か！」

「冗談だよ、冗談」

「そつだぞ。冗談だつて」

「まったく朝から俺で遊ぶなよなあ・・・」

男3人で朝からバカをする。

これも学園生活の醍醐味であろう。

「ね、ね、ねえー。おりむー達」

3人でバカをしているとろーんとした声で話しかけてくる女子がいた。

話しかけてきたのは「布仏本音」という女子で3人のクラスメイトだ。

制服の袖がダボダボでいつも眠そうな顔をしているのが特徴だ。

ちなみに「おりむー」というのは彼女が使っている一夏の渾名だ。

補足だが弾の事は「ごつたん」、数馬のことは「みつたん」呼んでいる。

その彼女に連れられて数名の女子も会話に参加する。

入学から1ヶ月経つのでクラスメイトの顔と名前も一致してもうお互いに気軽に話せる時期だ。

「ねえ聞いた？何か今日うちのクラスに新しい留学生が転入してくるらしいよ！」

二つに縛った明るい色の髪が特徴の谷本癒子が明るい調子で言う。

「留学生？今の時期に？」

「うん。なんでも女の子らしいよ」

クラスのしつかり者で1年1組の女子のクラス委員でもある「鷹月静寐」が一夏の疑問に答える。

「留学生ということはデュノアさんみたい日本語も上手なのかな？」

ショートカットの活発そうな女子、「相川清香」が答える。

「そりゃ日本の学校に来るくらいだし、日本語は話せるんじゃないか」

「それしたって時期が入学してから1ヶ月で転入とは変わってるな」

弾と数馬も違和感無く会話に参加する。

この2人も人当たりはいい方なので普通に女子とは話せるのだ。

「どこの国から来てえ〜、どんな娘だろうねえ〜？」

のほほんとした口調で本音が喋る。

彼女のクラス内の愛称は「のほほんさん」である。
正にピッタリの愛称だ。

（キーンコーンカーンコーン）

「諸君、おはようー！」

「「「「おはようございます！」「「「「」

本鈴と同時に担任の千冬が教室に入ってくる。

「席に着け。朝のSHRを開始する」

バタバタと席に着く生徒達。

一切の無駄の無い統率は担任である千冬の業の成せるところだ。

「今日のSHRは留学生としてこのクラスに転入する事になった生徒を紹介する」

おおーとクラスから声が漏れる。

入学から1ヶ月というこんな時期に転入してくるのだ。
興味をそえられるのも不思議ではない。

「では転入生、入って来い！」

「はい」

透き通るようなソプラノボイスがクラスに響いて教室のドアが開いた。

ざわめきがぴたりと止まる。

「あ」

一夏はその転入生を見て声を漏らす。
それはそうであろう。

教室に入ってきた転入生は一夏の知っている顔で、『フォース幼馴

染
『 だっ
たの
だか
ら。

第二十六話 新しい風（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回は色んなキャラを初登場させました。のほんさん、谷本さん、鷹月さん、相川さんと取り分け原作でも登場した人達です。

そして遂にやって来ました！フォース幼馴染が！！

次回は自己紹介から入ります。

ではまた次回で～

第二十七話 フォース幼馴染（前書き）

セシリアが本格的に登場します。

第二十七話 フォース幼馴染

「初めまして、セシリア・オルコットと申します。イギリスからの学園に留学しに参りました。皆様、どうぞよろしくお願いします」

白人特有のブルーの瞳と煌びやかな地毛の金髪が映える転入生の少女。

優雅という感じが彼女からは窺い知れ、その立ち振る舞いは英国淑女という言葉がよく似合う。

クラスの大半の生徒が彼女の高貴なオーラに見惚れていた。

「オルコットはデユノアに続いて我がクラス2人目の留学生だ。この時期に転入となったのは家庭の事情だそうだ」

千冬が簡潔にセシリアを紹介する。

その間もセシリアは英国淑女の姿勢を保ちながら微笑んでいる。

「オルコットの席は後ろの空いている席だ。そこに座るように」

「わかりましたわ」

頷いてからセシリアは後方の空いている席に移動した。

「えー、GWも明け、新しいクラスメイトもやって来た。全員気持ちを新たに勉学に励むようにしろ。では、朝のSHRが終わる」

ホームルームが終わったあと

「案の定、質問攻めか」

遠巻きに眺める一夏の言うとおり、セシリアの周囲には人ばかりができていた。まあ定番と言えば定番だが。

「転入生の宿命だな。まあ、話なら後でもできるしな」

そういつて一夏は視線を戻して1限目の授業の準備を始める。

「ちょっと、よろしくて？」

「ん？」

授業の準備をしていた一夏に話しかけてきたのはさっきまでクラスメイトに質問攻めにされていたセシリアだった。

いつの間にか包囲網を突破して一夏の席に近づいてきたようだ。

「お久しぶりですわね、一夏さん」

「ああ、久しぶり、セシリア」

どちらからともなく手を差し出して握手をする両者。

2人の会話から両者には面識があることが窺い知れる。

それもかなり親しげだ。

周りのクラスメイトが少しざわつく。

「驚いたぞ。いきなり転入してくるなんてさ。言ってくれば空港まで迎えに行つたのに」

「あら？先月の終盤に織斑家にはお電話をしてお知らせしましたのに聞いていらつしやらないんですの？」

「初耳なんだが？」

「おかしいですわね？その時に電話に出た十秋さんが皆様にお伝えしておくと言っていたのですが」

「ああ、なるほど。そういう事か」

「？どうしましたの？」

「十秋姉はわざと俺には教えなかったみたいだな」

「まあ、何故ですの？」

「大方、セシリアが転入生だってわかったときに俺がビックリすると思って黙ってたんだと思うぞ」

「そのようなサプライズを演出なさるとは、十秋さんも随分お茶目ですわね」

「実際ちよつと驚いたからな。しかし、会つのはこれで何年ぶりだ？」

「およそ3年ぶりですわね。あの頃はわたくしもまだ身体が弱かったのですが」

「そうだったな。でも、もう大丈夫なくらいに快復したんだろ？」

「はい。だから飛行機に乗ってもヘツチャラですわ」

ははははっと互いに声に出して笑いあう。

まるで3年間の空白を埋めるかのように会話に花が咲いている。

が、会話に花を咲かせる2人を尻目に心中穏やかではない者達もいた。

（あの娘誰だろう？一夏と随分親しそうだけど・・・）

一人目はシャルロット・デュノア。

幼少期から一夏に想いを寄せるフランス少女。

その一夏が自分の知らない女子と親しげに会話をしているので心中は穏やかではない。

（なんなのだ、あいつは！）

二人目は篠ノ之箒。

シャルロット同様、一夏に好意を抱いている剣道少女。
その一夏が以下同文。

「積もる話もあるが、そろそろ授業が始まるぞ」

「そうですね。では、続きはまた後で」

「おう」

セシリアは自分の席に戻って行き、一夏も手を振ってそれを見送った。

「・・・一夏、なんなのだあいつは？知り合いか？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏！？あの娘とどういう関係なの！？」

セシリアが一夏の席から離れるとシャルロットと箒は怒涛の勢いで一夏の元へ殺到する。

「ど、どうした2人とも？」

凄い剣幕で詰め寄ってきた2人に一夏はたじろぐ。

「ってゆーかもつ授業始まるぞ。席に着いた方がいいぞ」

「そんな事より質問に答えてよ！」

「そうだ！質問に答えろ！」

「いや、だから1限目は——」

「「一夏っ！！」」

（バシンバシン——！）

「いっ——！」

「だっ——！」

「——織斑先生の世界史だぞ」と一夏は言おうとしたが遅かった。

「席に着け、馬鹿者ども」

千冬の出席簿アタックが火を吹いた。

頭を押さえながら渋々といった感じで2人は席に戻って行った。

「では、授業を始める。日直、号令」

日直の号令と共に今日の授業が始まりましたとき。

アイキャッチしりとり

千冬「だから席に着けと言っているだろ！」

セシリア「ロイヤルミルクティーが欲しいですわ」

「うう・・・」

1 限目が終わり休み時間となった。

頭を押さえて机に突っ伏しているのはシャルロット。

結局授業中でも一夏とセシリアの事が気になって授業に集中できなかった。だったので再び千冬に出席簿アタックを食らってしまったのだ。

ちなみに篝さんも授業中に1発食らいました。

「痛そうだったな……。シャル大丈夫か？」

一夏が痛々しげな表情でシャルロットの席に近づいてくる。

「誰のせいでこうなったと思ってるのさ……」

「え？何だって？」

「な、何でもないよっ！」

思わずボソツと恨み言を言い放ってしまいが一夏が聞き返してくと即座に手をブンブンと振る。

頭がまだちよつとズキズキするのでシャルロットの目はまだ少し涙目だ。

「頭、瘤コブになってないか？大丈夫か？」

一夏はシャルロットの頭を優しく撫でた。

（なでなで）

「瘤にはなつてなさそうだな」

「う……。あう……」

「ん？どうした？痛かったか？」

「い、いや、平気だよ！大丈夫！」

僅かに頬に赤みが差しているシャルロット。
大人しく撫でられる表情はどこか嬉しそうだった。

（何でだろう？一夏に撫でられたら不思議と痛みが引いちゃったなあ）

不思議と痛みも引いてニコニコ笑顔のシャルロット。

一夏はさきほど涙目だったシャルロットがもうニコニコ笑顔になっている事に首を傾げていたがもう大丈夫だと思い安堵の表情をする。

「一夏・・・」

「おう箒。お前も大丈夫か？」

箒も頭を押さえながら側に寄って来た。

「大丈夫なものか。まだ頭がズキズキするぞ・・・」

「そつか。千冬姉の一撃は強烈だからな。今度から千冬姉の授業はちゃんと聞いてた方がいいぞ」

「・・・」

「ん？何だよそんなに睨んで？」

「何でもない！・・・何故私の頭は撫でないんだ（ボソツ）」

「？」

シャルロットが頭を撫でられているの見て羨ましくなった箒は不器用にまだ頭が痛むから撫でて欲しいのをアピールしようとしたが素直じゃない彼女の意図は鈍感な一夏には伝わらなかった。

一夏も箒は頭を撫でられるなんて子供扱いされたみたいで嫌がるだろうという配慮をしたのだがそれも箒には伝わっていない。

ちなみにシャルロットの頭を撫でたのは子供扱いしている訳ではなくこの前のデートのときに頭を撫でて嬉しそうにしていたからである。

「あら、何やら楽しそうですね」

髪を後ろに流しながら噂の転入生、セシリア・オルコット嬢が穏やかな笑みを浮かべてやってきた。

「おう、セシリア。そんなに楽しそうに見えたか？」

「ええ、とても」

いかにもお嬢様という感じでそれでいて嫌味を感じさせない笑みでセシリアが一夏をからかう。

一夏もこれには苦笑いだ。

「ねえ一夏、そろそろその娘とどういう関係なのか教えて欲しいんだけど」

「そうだぞ！一夏、まさかこの転入生と付き合っているなんてことはないだろうな！？」

シャルロットと箒は一夏に詰め寄る。

他のクラスメイトも興味津々とばかりに聞き耳を立てている。

「おいおい、何でそんな話になるんだよ。セシリアはただの幼馴染だよ」

「うふふ、わたくしと一夏さんが。それは面白い冗談ですわね」

一夏は少し驚いたような、セシリアは心底愉快といった感じの顔をしていた。

「「幼馴染・・・？」」

怪訝そうに聞き返すシャルロットと箒の2人。

「あー、話したこと無かったかな。イギリスに住んでる病弱な女の子の事。イギリスに行くときは必ずその娘のお見舞いするのが習慣で、その病弱な女の子がこのセシリアだ」

「あの頃は織斑家の皆様には大変お世話になりましたが、今はもう病気も快復してこうして留学に来れるほど元気になりましたわ」

「まあ、早い話が俺のフォース幼馴染ってやつだな。ファーストがシャルでセカンドが箒、サードが鈴だな」

表現がまるで野球のポジションのようだが一夏はこのように幼馴染にファーストやセカンドといったものを付ける習性がある。

「・・・、ファースト」

はつきり言って喜ぶ所ではないのだが、少し嬉しそうにそう呟いたシャルロット。

「・・・、セカンドか・・・」

箒は少しがっかりしたようにそう呟いた。
何か2番目の女って感じがして凄く嫌だった。

「で、セシリア。前に話したけどこっちの金髪の娘がシャル。フランス出身で俺の1番最初の幼馴染だ。この学園にはお前と同じで留学生として来てるんだ」

「シャルロット・デュノアです。よろしくねオルコットさん」

「こちらこそよろしくお願いしますわ。それと、わたくしの事はセシリアとお呼びください」

「うん、よろしくセシリア。僕のことシャルロットでいいよ」

「はい、シャルロットさん」

お互い同時に手を差し出して握手を交わす留学生の2人。
国は違えど同じ欧州から来た者同士。
日本人ではない2人の握手する様は実に華があるものであった。

「ンンンッ！私を忘れてもらっては困る。私は篠ノ之箒だ。よろしくな」

大げさに咳き込んだ箒がセシリアに自己紹介した。

「もちろん忘れてなどいませんわ。よろしくお願いしますわ篠ノ之さん」

「私も箒で構わない」

「はい、箒さん」

箒とセシリアも握手を交わす。

「あ、そうだ。おい、鈴！」

一夏は鈴を呼んだ。

「んー？何よ？」

身軽な動きで鈴は一夏達のいる場所に寄ってきてシュタツといった感じで一夏達の前に着地する。

「セシリアに紹介しようと思ってな。セシリア、こいつが俺の3番目の幼馴染の鈴だ」

「凰鈴音よ。よろしくねセシリア。あたしの事は鈴って呼んで」

「はい、よろしく願いしますわ鈴さん」

セシリアは鈴とも握手を交わす。

ここに今一組に在籍する一夏の幼馴染が全員集まった。

仏・日・中・英の4ヶ国の少女と幼馴染。

しかも全員が誰もが羨むほどの美少女だ。

世界中の男を敵に回してもおかしくない状態の一夏であった。

現に心なし男子の中には一夏に嫉妬の眼差しを向けている者もいる。

「仲が良いのはいいことだなあ」

そんな嫉妬の視線に気付きもしないで一夏は目を細めて爺臭い笑みを浮かべていた。

まるで、孫が庭で遊んでいるのを縁側で見ながら微笑んでいるかのようだった。

「「「一夏（さん）」「「「」

「ん？」

「「「爺臭いよ（ぞ）（わよ）（ですわよ）」「「「」

「んぐ・・・」

幼馴染4人から総ツッコミが入りましたとき。

こうして新たに一夏のフォース幼馴染、セシリア・オルコットが一年一組の仲間に加わったのであった。

第二十七話 フォース幼馴染（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

セシリア嬢が本格的に登場しました。

彼女は一夏にフラグ立てられてはいませんが別の方と・・・

ではまた次回に～

第二十八話 仏英同盟？（前書き）

ちよつと間が空いてしまいました・・・。

これから更新はドンドン鈍足化するかもしれません。

第二十八話 仏英同盟？

昼休み。

いつものメンバー＋セシリアで昼食を取りながら一夏はセシリアと初めて出会った頃の話をしていた。

「セシリアの両親とうちの両親はとても親しい間柄だったらしくてな。俺や千冬姉達がイギリスに赴いたときにセシリアの両親から入院中のセシリアの話し相手になってあげて欲しいって言われたんだ」

「今から7年前の8月の事でしたわ。わたくしはその頃ちょっと重い病に罹っておりまして、入院中は誰もいない個室で過ごしておりましたので少し寂しい想いをしておりましたの。そこに来てくださったのが織斑家の皆様という訳です」

「それからイギリスに行くときはセシリアを見舞うのが習慣になってな。でも次の年にうちの両親は亡くなっちゃまってセシリアとは会う機会は減っちゃったんだ」

「わたくしは病弱の身でしたので日本へ赴く事もできませんでした。ですからわたくしは両親に頼んで手紙を書くようになりました。わたくしも病氣と闘って絶対元気になりますから一夏さん達もどうか負けないでくださいと」

「セシリアの両親は俺達兄弟の事を凄いい気に掛けてくれたから両親が亡くなったあとも何かと世話になってたんだ。手紙の遣り取りもその一環だったな。シャルや箒や鈴みたいになんか長い時間を一緒に過ごしたわけじゃないけどさ、セシリアは俺達兄弟の恩人の娘で俺のフォース幼馴染という訳だ」

一通り説明が終わり一夏はぐるっといつものメンバーを見渡した。

「これで一通り俺とセシリアの関係は説明したけどわかってくれたか？」

確認するように一夏は全員に説いた。

特にシャルロットと箒はやたらとセシリアとの関係を聞いてきたので2人には念を押す。

「う、うん、わかったよ・・・」

「い、一応な・・・」

なんだか歯切れが悪いシャルロットと箒だが一応わかってくれたようなので一夏はよしとしておいた。

何で2人がそこまでセシリアとの関係を知りたがったのかは一夏は微塵も理解はしていないが。

「しかし、お前ってスゲーよな」

「ん？何が？」

「これだけの面々と幼馴染なんだからさ」

弾が少し呆れたように口を開く。

「確かに、デュノアさんに篠ノ之に鈴。これだけでも多いのにさらにはオルコットさんまで加わったからな。お前はこれから夜道を歩くときは背中に気をつけた方がいいかもな」

からかいの笑みを浮かべて数馬がそんなことを言ってくる。

「背中に気をつける？何で？」

一夏はハテナ顔で数馬に問う。

「はあ、これだから一夏は」

鈴が呆れたようにため息を漏らす。

「あんたねえ、これだけの美少女4人を侍らせておいたら男子だって嫉妬くらいするわよ。しかも全員あんたとは幼馴染なんだから余計だよ」

「侍らせるって、人聞きの悪い事言っなよ」

「あんたはそんなつもりなくても周りからはそう見えるってことよ。おぼえておきなさい」

「ってゆーか何気に自分を美少女だって言いやがったぞ鈴の奴」

「うるさいわよ弾」

（ゲシッ）

弾の向こう脛に蹴りを入れる鈴。

弾はしばらくの間、悶絶していた。

「でも、シャルロットさんも篝さんもお安心して下さい。わたくし

と一夏さんはそういうものではありませんので」

「う、うん。 そうだね・・・」

「それなら、別にいい・・・」

一夏とセシリアの間に恋愛関係がないことにようやく納得したシャルロットと箒であつた。

時は少し進んで6限目。

一年一組の授業は体育だ。

男子はグラウンドでサッカー、女子は体育館でバスケットをやっている。今回は女子にスポットを当ててみよう。

「箒、パス！」

「任せろ！」

「おーっと！そうはいかないわよ！」

いつぞやのソフトボールのようにシャルロットと箒は同じチームで鈴が別チームになって試合を行っている。

試合は一進一退の攻防が続いて同点のまま試合時間は残り1分。

鈴のチームのボールで試合が再開する。

「よし、もらつたわ！」

チームメイトからのパスを受けて鈴がシュート体勢に入る。しかしそれを遮る様に影が2つ鈴の前に現れる。

「させるか！」

「打たせないよ！」

シャルロットと箒が鈴のシュートをブロックしようと立ち塞がる。小柄な鈴では平均並みに身長のある2人の頭上を越すシュート打つのは少し難しい。

そこで鈴は一瞬の判断をする。

シュート体勢を止めて後ろを振り向く。

「何っ!？」

「フェイント!？」

シュートをすると思っていた2人はブロックするべくジャンプをしていたので瞬時に身動きが取れない。

そこに鈴はフェイントを仕掛けて2人を引き付けてる。

そして、フリーだったチームメイトにボールを投げる。

「セシリアッ！」

「はいっ！」

セシリアだ。

彼女は元々病弱だったが決して運動音痴であつた訳ではない。

ここ数年で体力もある程度はついたのでこうして体育にも参加している。

最近では自ら率先してスポーツに取り組むようにもしているのである。

鈴から絶好のパスを受けたセシリアはフリーのままゴール下へ。
そしてそのまま跳躍してレイアップシュート。
するとボールは綺麗にゴールのリングに吸い込まれた。

（ピーッ）

試合終了の笛が鳴った。

「やりましたわ！」

「ナイス！セシリア！！」

ハイタッチを交わす鈴とセシリア。

「やられたな」

「いい連携だったね」

敵チームの箒とシャルロットも鈴とセシリアの連携に賛辞を送る。

「ふふっ、今回はあたしのチームの勝ちね」

勝負事にはムキになる鈴が今回の勝ちに気を良くしたのか上機嫌に胸を張る。

「今回は負けだ」

「うん、今回はね」

鈴に感化されたのか最近ではシャルロットと箒にも負けん気が出て

きたようで体育で何かの試合をするたびに何かと競い合っている。

「ふん、返り討ちにしてやるわ」

「「「あははははっ」「」」

笑い合う3人。

傍から見るととても仲の良い親友が笑い合っとても微笑ましい光景だ。

セシリアも3人の傍らで微笑んでいた

が、不意にセシリアの身体が揺れる。
よろっといった感じで体勢が崩れかける。

「セシリア、どうしたの？大丈夫？」

素早くシャルロットがセシリアの身体を支えた。

「ええ、大丈夫です。ただの貧血ですわ・・・」

「しかし、ちょっと顔色が優れないようだが」

箒もセシリアを支える。

「わたくしは元々病弱だった為か激しい運動後に貧血を起こす事がよくあるのです。病気が快復してからは体力もそれなりに付けたのですがなかなか・・・」

「まあ、バスケは絶えず動き回るからねえ。結構身体にこたえたのかもしれないわね」

鈴もセシリアの顔を覗き込む。

「保健室行こう」

「だ、大丈夫ですね。今日の授業はこれで終わりですし、これくらいなら少し安静にしていれば……」

「こういうときは無理しちゃダメだよ」

「そうした方がいい」

「ここは素直に従っておきなさい」

「うう、わかりましたわ……」

3人に説得されてセシリアも観念したのか保健室に行くことに従った。

「僕が付き添うよ。箒と鈴は先に教室に戻ってて」

「うむ。織斑先生には私達から言っておく」

「気をつけて行って来なさいよ」

箒と鈴に見送られてシャルロットが付き添いながらセシリアは保健室に向かうのであった。

「申し訳ありません……」

「いいよ。これくらい気にしないで」

「しかし、ご迷惑では・・・」

「全然迷惑なんかじゃないよ。それに同じ一夏の幼馴染のよしみだし」

シャルロットはにっこりとセシリアに微笑みかける。

セシリアは少しだけきょとんとするがすぐに顔を綻ばせる。

「本当に、一夏さんの言うとおりですわね」

「え？」

「シャルロットさんが一夏さんが仰っていた通りのお人なので」

「それってどういう事なのかな？」

「ええ、一夏さんは病弱で入院していたわたくしによく話してくれましたの。自分にはとても仲の良いフランス人の幼馴染がいます。その子と自分はとても仲が良くてまるで生まれた国が違うとは思えない程だと」

「一夏はセシリアに僕の事を何て言ってたの？」

「自然と相手を気遣い気持ちを落ち着かせることに長けていて、笑顔が素敵な方だと仰っていましたわ」

「へ！？」

シャルロットは驚いた顔でボワッと赤くなる。

「今日初めてお会いして、接してみてわかりましたわ。やはり貴方は一夏さんが仰っていた通りの方だと思いましたわ」

「そ、そうなんだ。一夏がそんな事を」

「一夏さんは他にも篤さんや鈴さんの話もしてくれましたわ。篤さんと一緒に剣道をしていた事や鈴さんが小学校のときに男子に混じってドッジボールで大暴れた事なんかも話してくれましたわ。ですから、話で聞いていた皆さんとこうして同じクラスになって共に学校に通えるのが夢のようすわ」

「夢なんかじゃないよ。セシリアはもうこの学園の生徒で僕達の仲間だよ」

優しい笑顔でシャルロットはセシリアに声を掛ける。
こういう優しさが一夏が語ったシャルロットの魅力の1つと言えるであろう。

「そんなセシリアに言うておくことがあるんだ」

「まあ、なんですか?」

「ようこそ藍越学園へ!!」

かつて一夏が言ってくれた台詞をシャルロットはセシリアに送った。
あのときに一夏が見せてくれた笑顔に負けぬ程の笑顔で。

「はい！！」

セシリアもそんなシャルロットに負けないほどの笑顔であった。

アイキャッチしりとり

シャル「割れ物注意！」

セシリア「如何ともし難いですね・・・」

「失礼しまーす」

保健室にやって来たシャルロットとセシリアは声を掛けて入室する。

「百春先生いますか？」

「ん？どうした？怪我人か？」

相変わらずの仏頂面で保険医の百春が2人を出迎えた。

「セシリアが体育のあとに貧血を起こしてしまったらしくて」

「そうか。とりあえず診て見よう。こっちに座らせる」

「はい。セシリア、行くよ。――セシリア？」

支えながら移動しようとするシャルロットだがセシリアはその場に固まったまま動こうとしなかった。

ふとセシリアの顔を見ると驚いた表情で固まっていた。

「どうした？」

百春も怪訝そうにセシリアを見る。

「も、も、も・・・」

「も？」

「・・・百春さまっ!？」

いきなり素っ頓狂な声を上げるセシリア。

「うわっ!どうしたの突然!?!・・・って、モモハルサマ？」

これにはシャルロットも驚いてしまう。

「ななななな、何で百春さまがここにいらっしやりますの!?!」

「何でも何も、俺はこの学園の保険医だぞ。保健室にいてもおかしくないだろ」

「そ、そんなのわたくしは聞いておりませんわ!!--」

セシリアは急にオロオロし始める。

「おい。あまり保健室で騒ぐんじゃない。それより貧血を起こしたんだろ。診てやるから早く来い」

「わ、わかりましたわ・・・」

セシリアは顔を真っ赤に染めながら百春が指示した椅子に座る。百春は保健室の奥で何やら棚を弄っている。

その間、セシリアはモジモジと落ち着かない様子で百春をじーっと見つめていた。

「ねえ、セシリア」

「な、何ですのシャルロットさん？」

「セシリアって、もしかして百春さんのことす——」

「きゃああああっ！それ以上言つてはダメですわ！！」

超特急の勢いでセシリアはシャルロットの口を押さえ込む。

急に口を封じられてシャルロットは苦しそうにもがく。

ここまで来れば察しの悪い方でもわかると思うが、セシリアは百春に惚れています。

イギリスでセシリアが病床に着いていた際、彼女の相手を最もしていたのは百春であった。

彼はその頃から医者を目指していたので病床に着くセシリアを放っておくことができなかったのだ。

セシリアもそんな百春と接している内にいつの間にか彼を好きになつていたのだった。

「おいお前達。騒ぐんじゃないと言つただろう。追い出されたいのか？」

「も、申し訳ありません。静かにしますわ・・・」

じろりと睨まれて大人しくなる。

「さっきの時間は体育だったようだな。授業は何をやっていた？」

「バ、バスケットボールですわ」

「バスケか。絶えず動き回るスポーツだからな。お前の身体には堪えたのかもしれない」

「す、すみません・・・」

「別に謝らなくていいが。顔色はそんなに悪くはないようだし少し安静にしていればいいだろう。そのベッドを使え」

「い、いえっ！もう大丈夫ですわ！そ、それに汗を掻いたままの体操着で百春さまの前にいるのも・・・（ボソッ）」

「こういうときは無理をしない方がいい。それと、何だか顔が赤いようだが熱でも出たか？どれ？」

百春はいきなりセシリアのおでこに手を当てた。

「ひゃあー!!」

セシリアはいきなりおでこを触られて心臓が飛び跳ねるのを感じた。しかも顔が凄く近い。

距離にしておよそ5cmほど。

（何だろう、ちょっとデジャヴが・・・）

シャルロットが感じたデジャヴは以前に似たようなことを一夏にされたからであった。

それを今、一夏の実兄である百春がやっている。

このときにシャルロットは百春はやっぱり『あの』一夏の兄なんだなあと改めて実感した。

「熱はなさそうだが、念のために測っておこう。体温計持ってくるベッドに横になっている」

百春はセシリアのおでこから手を離して体温計を取りに行ってしまった。

「あっ・・・」

心残りがあるような声を漏らすセシリア。

恥ずかしがっていたが好きな男性が真近に感じられていたのにそれが去ってしまって寂しいのであろう。

「セシリア、ベッドに行きなよ。何なら手を貸すよ」

「いえ、もう支えは大丈夫ですわ」

セシリアは自分の足でちゃんとベッドに向かった。
セシリアがベッドに横になるとシャルロットは横にあったパイプ椅子に座る。

「すまないがちょっと出なきゃいけなくなった。すぐに戻ってくるが、それまでは大人しくしている。ほら、体温計だ」

「あ、はい」

「セシリアには僕が付いていますので」

「悪いな。では行ってくる」

百春は保健室を出て行った。

「はい、これ体温計」

「ありがとうございます」

シャルロットから体温計を受け取るとセシリアは自身の脇に体温計を挟む。

「ねえ、セシリア」

「何ですか？」

「さっきは聞き損ねちゃったけど、やっぱりセシリアって百春さんのこと好きなの？」

「はうっ！え、ええ・・・、その通りですわ」

「そっか。やっぱりね」

「そういうシャルロットさんこそ、一夏さんの事好きでいらっやるのでしょうか？」

「ふえっ！え〜っと、う、うん……。そうだよ」

「そうですか。お互いに厄介な相手に懸想したものですわね」

「そ、そうだね」

互いの懸想人のことを考えると苦笑いが出た。

想いを届けるには一筋縄ではいかない相手であるのは間違いないであろう。

でも、それでもやはり好きなのだからしょうがないのだ。

「シャルロットさん」

「何？」

「お互い頑張りましょうね」

「うん」

エールを送りあう2人。

この時2人は同時にこう思った。

（（僕（わたくし）達は凄く仲良くやれそう）ですわ（！！）（（

仏英間で少し可笑しな友情が芽生えたのであった。

第二十八話 仏英同盟？（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

シャルロットとセシリアの間で芽生えた友情。想い人が兄弟だからこそ芽生えたものだと思います。

箒には鈴が着いているのでシャルロットにはセシリアを着かせました。

ではでは

第二十九話 英国淑女と無愛想保険医（前書き）

百春とセシリアの話です

あとお気に入り件数が100件を越えました。こんな幼稚な拙い作品を気に入ってくださった方が100人近くいる事に感謝感激です！

第二十九話 英国淑女と無愛想保険医

「36.9 か。日本人だと微熱だがイギリス人のお前なら平均くらいだろう」

セシリアの計った体温計の表示を見ながら百春がそう口にした。一般的なイギリス人の平均体温は日本人よりも1度高い37 なのだ。

イギリス人にしてみれば38 はまだ微熱で、いわゆる「熱がある」という状態は38.5 ㄱ39 ぐらいからということになる。

「運動直後で少し体温が上がっているはずなのだが、お前はそれで平均並みだな。おそらくお前自身の平均体温が少し低めなのだろう」

「そ、そのようですわね・・・」

「しかし、体温の割りに顔が赤いな。熱が原因じゃないようだが？」

「い、いや、それはほら！運動直後なので顔が少し紅潮しているだけですよ！..」

「んー、それもそうか。まあ、念のため少し横になって休んでいくといい。シャルロットはもう戻っていいぞ。あとは俺がついていればいい」

「わかりました。じゃあセシリア、またあとでセシリアの抱持って来るからね」

「ありがとうございますシャルロットさん」

セシリアがお礼を言うとシャルロットは保健室を出て行った。

そして保健室はセシリアと百春の2人だけとなる。

「体育の後でのどが渴いてるだろう？ほら、これでも飲め」

百春が持っていたのは500mlペットボトルのミネラルウォーターだった。

「ありがとうございます。いただきますわ」

ペットボトルを受け取るとそのままキャップを空けてミネラルウォーターを口にする。

「気にするな。具合が悪い生徒の面倒を見るのが俺の仕事だ」

ぶっきらぼうにものを言う百春だが、セシリアはイギリスで病床に着いていたころからこのぶっきらぼうさで接しられていたのでこのぶっきらぼうさにはもう慣れている。

「百春さま、相変わらずその、無愛想というか、もうちょっと笑って接してみてはいいかですか？」

「俺が笑いかけてやれば病気や怪我がすぐに治るならそうするが、そんなことをしても意味なんて大してないだろう」

一夏や千冬からも似たようなことを言われたが百春自身は改める気はなく、普段からこんな感じなのだ。

「本当に相変わらずですわね。何だか昔を思い出しますわ」

「そうか。あの頃もこうやって俺がお前の相手をしていたからな」

「あの頃から織斑家の皆さんには色々とお世話になりましたわ」

「こちらとしてもオルコット家には色々とお世話になっている。特にうちの両親が亡くなってからはな」

百春が少しだけ遠い目をする。

その瞳には少しだけ陰りが見える。

「あ、申し訳ありません。わたくしはそんなつもりじゃ」

失言だと思ったのかセシリアは慌てて謝罪する。

普段はぶっきらぼうで無愛想な百春とて両親の死に悲しみに暮れた事もある。

セシリアもそれはわかっているつもりだった。

「気にするな。両親は亡くなってしまったが俺にはまだ家族がいる。一夏や十秋がな」

「あの、千冬さんは入っていませんか?」

「あの姉はもう少し家でしっかりしてくれれば考える。休日昼過ぎまで寝てるし、部屋も散らかり放題で家事が一切できんからなの姉は」

「そうなんですか? 千冬さんは結構しっかりしたイメージがありますけど」

「そんなのは上っ面だけだ。はつきり言って家庭内の事で一番頼りになるのは一夏だからな」

「一夏さんが？何故ですか？」

「あいつは家事のスキルが高い上に剣道をやっていた事もあって腕っ節もそれなりにあるし朝にも強い。十秋も家事は万端で体術を会得してはいるのだが、如何せん朝に弱いから一夏より早くは絶対に起きんしな。あの姉は論外だな。あれは家ではずばりで困る」

セシリアは百春を見つめながら彼の話に耳を傾けていた。

憎まれ口を叩きながらも百春は珍しくどこか楽しい表情を浮かべていた。

いつもはぶっきらぼうで無愛想な彼だが家族に対する愛情は深い。千冬のことだって口で言うほど嫌っているわけではなくただ単に家ではもっとしっかりして欲しいという愛情の裏返しなのである。

「あの、ひとつ聞いてもよろしいですか？」

「何だ？」

セシリアはひとつ疑問に思っていることを百春に訪ねた。

「百春様はどうしてこの学園の保険医になられたのですか？百春様はお医者様になる為に今まで勉強をしてきたのではありませんの？」

「ああ、そのことか」

百春は少し可笑しそうな顔をしたがすぐにいつもの顔に戻るとポツ

ポツと語り始めた。

「俺がここで保険医している理由はただ単に頼まれたからだな」

「頼まれたとは誰にですか？」

「この学園の理事長だ」

セシリアはそこで絶句した。

まさか学園のトップである理事長から依頼されたとはさすがに想定外だったらしい。

「あれは大学4年のちょうど今ぐらいの季節だったんだが、ある学会に出席する機会があつてな。そのときにこの学園の理事長の轡木十蔵氏がその学会に出席していたな。なんでも全国保険医団体連合会のスポンサーとして来賓していたそうだな」

全国保険医団体連合会とは、「保険医の経営、生活ならびに権利を守り、国民医療の向上、医療保障の充実、国民の健康をはかること」を目的として結成された団体である。

「その学会で俺はちょっと揉め事を起こしてしまつてな」

「揉め事？」

「学会に出席してたある教授が酷く気に食わん奴でな。言つてるとは医学と向き合う事や患者の事より自分の出世と保身ばかりを気にするような奴だったから我慢できずに言つてやつたんだ。『あんたは医学をなんだと思つてるんだ。そんな自分の出世や保身ばかりしか頭にないならあんたは医学を語るんじゃない』ってな。そう言

「つたらその教授が激怒して俺はその学会から追い出された。俺としてもあんな愚図のいる学会なんかいても何の為にもならんと思っていたからよかったんだが、学会が終わったあとに来賓で来ていた轡木氏が俺のところに来てな。『あの場であのような毅然とした態度で目上の者にはつきりと意見ができる者はなかなか居ない。私は君が気に入ったよ』って言われてな。それで後にこの学園の保険医をやってくれないかって頼まれて、気が付いたら俺はこの保険医になっていたってわけだ。あのじいさんが俺の母校であるこの学園の理事長だって知ったときはさすがに驚いたけどな」

「そんな経緯があつたんですか？何だか凄いですわね」

「まあ、俺としてもこうして母校で保険医をしているのも悪くはないと思っている。ちゃんとした医者になること諦めたわけではないがな。今は保険医という立場も気に入っているし仕事もやりがいがある。理事長への恩もあるのでこの仕事を辞めるつもりはないが、いつかは小さいながらも自分の診療所を開くことが俺の夢だからな。その夢の実現まではこの学園で保険医やっていくつもりだ」

「いつもはぶっきらぼうで無愛想の百春だが夢の話をするときの百春は少しだけ少年のような目をしていた。」

「セシリアも百春のそんな目を自分だけが見れたことに嬉しさを感じていた。」

「おっと、つい話し込んでしまったな。俺は仕事に戻る。あまり長く仕事を放り出しておくわけにはいけないのでな」

「百春が時計を見ながら口にする。」

「そ、そうですか。わたくしつたら楽しくってついついおしゃべり

を。忙しいのに申し訳ありません」

「気にするな。忙しいのは嫌いじゃない」

きつぱり言って百春は仕事に戻って行つた。

セシリアも百春と話が出来て嬉しかったのか顔を綻ばせてベッドに潜り込んだのであった。

アイキャッチしりとり

セシリア「寝込みを襲われたら・・・キャー!!」

百春「脚立どこやったっけな？」

数十分後

「失礼しまーす。セシリア、着替えと鞆持ってきたよー」

帰りのSHRを終えたシャルロットがセシリアの荷物を持ってきてくれた。

「わざわざすみませんねシャルロットさん」

「気にしないで。僕達はもう友達でしょ」

生来の優しさ故か、シャルロットは邪気の無い笑顔でセシリアに答えた。

セシリアも彼女の笑顔を見て自然と顔が綻ぶのを感じていた。

「気分はどうだ？」

百春もセシリアの様子を見にベッドの側に寄ってきた。

「はい。もう大分落ち着きましたわ。もう動き回っても大丈夫そうですわ」

「そうか。顔の紅潮も引いたようだし、もう問題はないだろう。もう帰るといい。着替えはベッドのカーテンを使って着替えてくれ」

「わかりましたわ」

シャルロットから荷物を受け取って手早く着替えを済ませてから百春に退室の声を掛ける。

「お世話になりました」

「別に大した事はしていない。礼なんていい。それと体調が優れないようだったらいつでも保健室に来て構わん」

「よ、よろしいんですの？」

「ある程度体力が付いたとはいえ、お前はまだ油断はできないだろう？その場合は頼ってくれて構わない」

「は、はい！わかりましたわ！！」

「そのかわり仮病のときは容赦せんぞ」

「わ、わかっていますわ！べ、別に仮病を使ってまで百春様の側に居ようなんて思っていないせんわ・・・（ボソッ）」

「？」

少し本音がボソッと出たセシリアだったが小声だったせいで聞こえなかったようで百春は首を少し傾げる。

「まあいい。それとここは学校だ。ここでは俺の事は先生と呼べ」

「わかりましたわ百春さ・・・、百春先生」

「うむ。では、お大事にな」

「はい」

「失礼しました」

シャルロットとセシリアは保健室をあとにした。

「はあ、百春様あ」

久しぶりの想い人との対面にセシリアは恍惚と言った表情で言葉を漏らした。

すると不意に隣を歩いていたシャルロットが身を乗り出してこっち

を覗き込んできた。

「どうしましたの？」

「ん〜、なんていうか、百春さんのことよっぽど好きなんだなあと
思っ」

「そ、そういう事はあまりストレートに言っはダメですわ――
――！」

「なんだか見ていて微笑ましいからつい応援したくなっちゃうなあ」

「ほ、本当ですよ？」

「うん。僕はセシリアの事を応援するよ」

セシリアの真摯な想いに感銘を受けたシャルロットは彼女の恋路の
応援をする事を決意した。

「ありがとうございます！ではわたくしも一夏さんの事でシャルロ
ットさんを応援させていただきますわね！」

「へっ！？」

「応援してくださるならこっち応援するのが礼儀ですわ。だからわ
たくしにもシャルロットさんのことを応援させてくださいな」

「う、うん。ありがとうございます」

「では、握手をしましょう。それがわたくし達の盟友の証ですわ」

「そうだね。うん、握手しよう」

2人は互いの手をしっかりと握って握手した。
2人の盟友としての証。

ここに仏英同盟が完全に樹立した。

「では、参りましょう」

「そうだね。帰ろうか」

2人は並んで昇降口へと歩き始めた。

第二十九話 英国淑女と無愛想保険医（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

8月15日の13時の段階で総合PVが161881アクセス、ユ
ニークが27324人と多くの方にこの作品に触れられて頂いた
ことに感謝が尽きません！

セシリアの恋情をうまく表現できているか不安ですが仏英同盟がこ
れからは頑張っていくきます。

箒と鈴の日中コンビもお見逃しなく。

ではまた次回に～

第三十話 増・改・築！！（前書き）

思ってたより凄い早く更新できた！

第三十話 増・改・築！！

「おいシャル、セシリア」

談笑をしながら昇降口に向かっていたシャルロットとセシリアを呼ぶ声が廊下に響いた。

「あ、一夏っ」

声の主は一夏だった。

手を振っている一夏にシャルロットも手を振って彼の元へ駆け寄る。今のシャルロットには犬耳と尻尾が生えていても不思議ではないかもしれない。

現に隣を歩いていたセシリアにはシャルロットに犬のような耳と尻尾が生えていたように見えた。

「セシリア、体調はもう平気か？」

「ええ。保健室にはシャルロットが同行してくれましたし。保健室でも百春様が付いていてくれましたしね」

「そっか。百春兄とも会えたんだよな。で、どうだった？久しぶりに会ってみて」

「っ」

セシリアは顔を少し赤くしてモジモジする。

一夏もセシリアが百春に恋心を抱いている事は知っているので久しぶりに会ってどうだったかを聞きたいらしい。

「す、素敵な男性になっていましたわ。無愛想なのは相変わらずでしたけど」

「あれが百春兄の地だからな。あれはもう直んないだろうな。まあでも、百春兄はあれでいて優しいときもあるからな。そんな百春兄だから好きになったんだろ？」

「え、ええ」

さらに顔を赤くしてモジモジする。

その純情さが見てて微笑ましく感じて一夏もシャルロットも顔が綻ぶ。

「そついえば一夏、ずっと待っててくれたの？」

「ああ。箒と弾と数馬は部活で鈴は家の手伝いがあるって先に帰っちゃったけど、俺は特に用事もないから2人を待とうと思ってな」

「一夏って本当に優しいよね」

「そんなことないだろ。ただ幼馴染と一緒に帰ろうと思って待ってただけだぜ？」

「そついう気遣いができるところが一夏さんの優しいところですね。少なくともわたくしとシャルロットさんはそう思っていますわよ」

一夏としては別段特別なことをしているわけではないのだが幼馴染2人は熱心に一夏が優しいと褒めてくるので少し照れてしまう。

「まあそれはもういいよ。とりあえず帰ろうぜ」

照れ隠しか一夏はそそくさと昇降口を出て行ってしまふ。

シャルロットとセシリアは顔を見合わせて笑うと一夏のあとを追いかけた。

帰り道、3人は並んで談笑しながら家路へとついていた。

「そういえばセシリアってこっちでの住まいはどうしてるんだ？やっぱ寮に入ってるのか？」

「ええ。お父様達が日本での住まいの都合をつけてくれるという話もありましたけど留学生は基本寮で生活することになっていますし、わたくしも一度親元を離れて生活する事に挑戦してみようと思いましたが。だからこっちは寮に住まわせてもらっていますわ」

「そういえば、新しい寮生が来るって寮内で噂になってたんだけどセシリアのことだったんだね」

「昨日まではホテルに宿泊していましたが今日からは寮で生活する予定ですわ。荷物ももう寮に届いているはずですし」

「それなら部屋の整理手伝ってあげようか？ひとりだと大変でしょう？僕も寮に住んでるから遠慮なく頼ってくれていいからね」

「まあ、よろしいんですの？」

「うん」

荷解きの手伝いを買って出たシャルロットにセシリアは感謝の言葉と改めて荷解きの手伝いをお願いをした。
シャルロットも快く了承する。

場所は変わって藍越学園寮前。

一夏、シャルロット、セシリアの3人は寮の前にいた。
が、一夏とシャルロットは口を開けて啞然としていた。
文字で表すとしたらポカーンというのが最適であろう。
何故なら寮の前には白いロールスロイスが1台とトラックが3台ほど止まっていてそのトラックの中にはこれでもかというほどの高級家具などが並んでいたからだ。

「お嬢様、お帰りなさいませ」

白いロールスロイスからメイドの格好をした女性が姿を見せる。
丁寧で一切の無駄がないお辞儀をするそのメイド姿の女性は「チエルシー・ブランケット」といい、セシリアの専属メイドで彼女はセシリアの姉のような存在である。

「ご苦勞様ですチエルシー。申し訳ありませんね。あなたにこのような事をお願いしてしまつて」

「いえ、私はお嬢様に仕える者ですのでどのような事も喜んでお受けいたします」

優しい微笑みを浮かべながらチエルシーが頭を垂れる。
18歳という年齢ながらチエルシーのその微笑みはとても大人っぽく見えるものであった。

そんなチエルシーはセシリアにとって姉のような存在であると同時に憧れであり、目標でもある。

「えっと、チエルシーさんお久しぶりです」

啞然状態から復活した一夏がチエルシーに軽く会釈しながら挨拶をする。

彼もイギリスに赴いた際に何度かチエルシーとは顔を合わせているので顔見知りだ。

チエルシーもメイド服のスカートの裾を軽く持ち上げお辞儀をする。

「お久しぶりですー夏様。一夏様も壮健そうで何よりです」

「まあ、これでも剣道で鍛えてますからね」

「そのようですね。久しぶりにお会いして少々驚きました。一夏様が想像していたより男らしくなっていましたので」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

「はい」

につこりと柔らかな笑みを向けるチエルシーに一夏は照れながら頭をポリポリ掻く。

「.....」

（ぎりっ）

「痛い！な、何だよシャル！？いきなり腕抓って!？」

「一夏、デレデレしてた」

嫉妬心が湧いたシャルロットは、一夏の腕を思いつきり抓った。好意を持つ異性が自分の目の前で他の女性にデレデレしているのは見ていて面白くないのであった。

「別にデレデレなんてしてねえって」

「ふんっ、どうだか」

ぷいっつと横を向いてしまふシャルロットに一夏は困惑する。何故彼女がそのような態度を取るのかまるでわかっていないのであった。

「うふふっ。お2人とも仲が良ろしいですね」

愉快そうにチエルシーが微笑んでいる。そこにはほんの少しだけ茶目つ気が見え隠れしていた。

「そちらのお方は初めてお会いますね。お初にお目にかかります。セシリアお嬢様にお仕えするメイドで、チエルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

チエルシーがシャルロットに丁寧にお辞儀して自己紹介する。

「初めまして、シャルロット・デュノアです。よろしく願います」

シャルロットもお辞儀を返す。

嫉妬心に駆られていたとはいえこついうところは律儀なのがシャルロットなのであった。

「つかぬことをお聞きしますが、一夏様とシャルロット様は恋人同士でいらつしやいますか？」

「「えっ!？」」

唐突な質問に一夏とシャルロットは素っ頓狂な声を上げる。

「お2人ともとても仲が良さそうなのでもしかしたら恋人同士なのではないかと思ひまして」

「チエ、チエルシーさん！俺とシャルは幼馴染であつて『まだ』恋人というわけじゃ!！」

「そ、そうですね！僕と一夏は『まだ』そういうのじゃなくて!！」

「『まだ』ですか。うふふっ」

イタズラっぽい笑みを浮かべてチエルシー微笑む。

俯いてモジモジするシャルロットに顔を逸らして頬をポリポリかく一夏。

確か前にも2度ほどこんなことがあつたなあと思う一夏とシャルロットであった。

「チエルシー、もうそのへんにしておいてあげなさい」

「わかりました。それでは、お荷物の方は私がお部屋まで運んでおきますので」

「わかりましたわ。ありがとうチエルシー」

荷物を受け取りぺこりとお辞儀をしてチエルシーは去っていった。

「お2人とも申し訳ありません。チエルシーはちょっとからかいが過ぎたようですわね」

「いや、いいって。俺は気にしてないから」

「う、うん、僕も気にしてないから大丈夫だよ」

一夏もシャルロットもまだ若干顔が赤いが気を取り直したようであった。

「しかし、こりや凄いな……。これ全部イギリスから持ってきたのか？」

トラックに積まれた特注の調度品の数々に一夏は驚嘆の声を漏らす。

「はい。やはり家具などは気に入ったものを置いておきたいので」

「で、でもこれ全部は寮の部屋には入らないと思うんだけど……」

寮に住んでいるシャルロットは部屋の広さを知っているのでこの調度品の家具達がすべて部屋の中に納まるとは到底思えなかった。

「その点は問題ありませんわ。昼間の間にお部屋を増改築してもらっておりますのでこれは全部部屋に入りますわ」

「はあ!？」

凄いことをのたまうセシリアに驚いてしまう。

「それではお嬢様。搬入を開始いたします」

「はい。お願いしますわ」

「では、取り掛かってください」

チエルシーの号令とともに調度品の家具達の搬入が開始された。業者さんのテキパキとした動きで次々と搬入されていき10分もしないうちに搬入は終了した。

「お疲れさまでした」

仕事を終えた業者さん達は素早く撤収していった。

まるで一陣の風が通り過ぎたようにすべての作業は終わったようだ。

「お嬢様、すべて滞りなく終わりました」

「わかりましたわ。では、部屋に参りましょう。あ、よろしければ一夏さんとシャルロットさんもいらしてください。お茶をお出ししますわ」

「お、おう。じゃあお邪魔しようかな?」

「うん。僕もお邪魔するね」

「はい。皆さんで優雅なアフタヌーン・ティーと参りましょう」

ウキウキと言った状態でセシリアはチエルシーと共に寮内へ入っていった。

一夏とシャルロットもそれに続いた。

アイキャッチしりとり

チエルシー「なせば成るはず」

セシリア「ズッキーニ」

「さあさあ、上がってくださいませ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

『呆然ってどんな状態の事？』と言われたら今の一夏とシャルロットみたいな状態を指すのかもしれない。
それはそうだ。

間取りが明らかにおかしい。

どう考えても一室分の間取りじゃないのだ。
明らかに一軒家に近い間取りだった。

どう見ても上と両隣の部屋をぶち抜いているとしか思えない構造で、高い天井にはゴージャスなシャンデリアが吊るされていた。

部屋の奥にはキングサイズのベッドがどかと置いてあり、洋服棚や化粧台のドレッサーもとにかくデカイ。

というより一夏達が学校に言っている間にここまで増改築できるものなのかと疑問が湧き出てくる。

こんな短時間に劇的ビフォーアフターをしでかすんでもない財力を持っているのがオルコット家なのである。

まあ、それを容認しているセシリアの父親が一番の問題かもしれないが。

『ジェームズ・オルコット』。それがオルコット家の現当主でセシリアの父である。

妻である『レイチエル・オルコット』と共にオルコット家を一代で築き上げた男。

何せ『セシリアのセシリアによるセシリアのための財力』と公言しているほどの親ばかつぶりだ。

そんな親が何故セシリアが百春を好きでいる事を容認しているのかは謎である。

「お2人とも何をボーっとしていらっしゃいますの？早く上がってくださいな」

「お、おう」

「お、お邪魔します」

上がるのを少し躊躇ってしまうがセシリアに促されるままに部屋に上がる2人。

部屋の構造にただただ驚かされてばかりの2人だった。

その後はチエルシーが用意した紅茶とクッキーを楽しみながら一夏達はアフタヌーン・ティーを優雅に満喫したのであった。

おまけ

それは一夏とシャルロットとの楽しいお茶会も終わり2人が帰ったあとの事であった。

「お嬢様、少しよろしいでしょうか？」

「どうしましたのチエルシー？」

「実は、一つ確認しておくことを恥ずかしながら失念しておりました」

「まあ、何ですか？」

「あの白いレースの下着は百春様用ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、え？」

「お嬢様、派手すぎる下着は却って逆効果とされます」

「えっ、ええっ！？あ、あ、あれはー！？」

「では、これで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

日本行きが決まったときに両親にも内緒でこっそり買っておいて二重底のスーツケースに隠しておいたのに何故かバレていたのだった。

「——ッ！！！」

声にならない叫びを上げながら顔を真っ赤に燃え上がらせるセシリア。

その日の彼女は恥ずかしさのあまり落ち着く事が出来なかったとき。

第三十話 増・改・築!! (後書き)

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

セシリアならあれくらいするでしょ？

ではまた次回に～

キャラ紹介2（前書き）

3名ほど紹介します

キャラ紹介2

セシリア・オルコット 15歳

GW明けにイギリスからの留学生として藍越学園に転入してきた少女で一夏のフォース幼馴染。縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼を持つ。家はイギリスの名家で超金持ちのお嬢様。原作とは違い両親は存命で父親は『情けない男』ではない。

幼少期は病弱であったために入退院を繰り返す日々を送っていた。その時に両親の知り合いである織斑家の面々と知り合いになり、いつも自分の相手をしてくれていた百春に好意を抱くようになった。シャルロットが好意を抱く一夏が百春と兄弟である為か彼女とは盟友の契りを交わし、互いの恋路を応援している。

現在体力もある程度付いたので日本に留学に来れるほどに快復したが、まだ油断はできない状態らしく激しい運動の後は貧血を起こしてしまう事がある。

親元を離れて寮で生活を送っているが部屋を物凄い増改築して家具も特注の調度品ばかりを揃えているなど突飛な事をしかす事もある。

チエルシー・ブランケット 18歳

セシリアの専属メイドにして彼女の姉のような存在。人の心の機微に鋭く、落ち着いた雰囲気身を纏っていてセシリアの憧れであり目標の人物でもある。

18歳という年齢ながら大人っぽい振る舞いを見せメイドとしても優秀だが、一夏とシャルロットの仲をからかったり、派手な下着をこっそり購入していたセシリアを嗜めるなど意外と茶目っ気のある人物でもある。

山田 真耶 22歳

藍越学園の新米教師で一夏達のクラスである1年1組の副担任。担当科目は現代国語。料理部の顧問をしている。かなりの巨乳の持ち主で眼鏡が似合う優しい先生なのだが、他の先生から色んな雑務を押し付けられたり生徒から多くのニツクネームを付けられるなど教師としての威厳があまりない。

藍越学園のOGで千冬とは中学時代から付き合いがあり、彼女は千冬が最も可愛がっていた後輩でもある。よく織斑家にも遊びに来ていたので一夏ともその時に親しくなっていて、一夏にとっては『ちよっと頼りないけど可愛い年上のお姉さん』と認識されている。

キャラ紹介2（後書き）

さて、まだ出てないラウラをどうすつかねえ・・・

第三十一話 五反田さんち（前書き）

今回は五反田さんの家でのお話です。

あの妹キャラが初登場。

第三十一話 五反田さんち

「うおおおっ！いきなり俺の目の前にリオレ。スгааー！！」

「ああ、俺は秘境からスタートだからちょっとピッセルしてから行くわ」

「俺もエリア10からスタートだからピッセルで掘ってるわ。弾、しばらくひとりで相手よろしく」

「ふざけんなっ！俺の装備は火に弱いんだよ！！プレス食らったらヤバイんだって！！」

5月も中盤に差し掛かったとある休日のお昼時。場所は五反田弾の家。

一夏、弾、数馬の3人はたまには男同士で遊ぼうという事になり、弾の家に集まり携帯ゲームで絶賛狩り中だった。

「あ、俺報酬で紅玉出たわ」

「俺も逆鱗と紅玉1個ずつ出たぜ」

「マジかよ！？何で俺だけ逆鱗も紅玉も出ないんだよ！？」

「弾だからだろ？」

「理由になってねえよ！！」

1クエスト終了し、報酬画面を見ながら一喜一憂する。

このゲームをプレイした事のある読者の方々も経験された方は多いのではなからうか。

ちなみにそれぞれの武器だが一夏は太刀、弾はハンマー、数馬は狩猟笛だ。

「俺ちよつとトイレ行ってくるわ。次のクエストはお前らで適当に決めてくれ」

「「おう」」

数馬はトイレに行くために部屋を出て行った。

「次は2頭クエ行こうぜ。何かターゲットが単体だと物足りない」

「俺はレ。スの紅玉が欲しいからレ。スがいればいい」

次に行くクエストを考えているといきなり部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「お兄いっ！さっきからお昼出来たって言ってるじゃんっ！さっさと食べに——」

ドアを蹴破って入ってきたのは弾の妹の「五反田蘭」だった。年齢は一夏達より1個下で中学3年生だ。

「よお、蘭。邪魔してる」

一夏は携帯ゲーム機から目を離して手を上げて気さくに挨拶する。

「い、一夏さん……っ！」

驚きの声を上げる蘭。

そして自分が髪をヘアクリップで纏め上げタンクトップとショートパンツというラフな姿をしている事に気付きドアの影に隠れる。

「い、いらしてたんですか・・・っ?」

「おう。数馬と一緒に遊びに来た。ちょっと狩りしてたんだ」

恥ずかしそうにドアの影から顔を出している蘭に一夏は携帯ゲーム機を掲げてみせる。

一夏は千冬や十秋のおかげでラフな格好の女性を見慣れているので大した動揺もしない。

「蘭、お前なあ、ノックぐらいしろよ。恥知らずな女だと思われ――」

蘭の

にらみつける 攻撃!

(キッっ!!)

弾は萎縮した!

「・・・なんで言わないのよ・・・」

「い、いや、言ってなかったか?そうか、そりゃ悪かった。ハハハ・・」

この兄妹の力関係は見ていて実に分かりやすい。

「あ、あのよかったら一夏さん達もお昼どうぞ・・・まだでしたよね・・・?」

「ああ、頂こうかな。ありがとう」

「い、いえ・・・ではこれで・・・」

蘭はそそくさと部屋を出て行った。

「んじゃ、数馬が戻ってきたら一階に下りるか」

「そうだな」

そういつて2人は携帯ゲーム機の電源をオフにした。

「しかしあれだな。蘭と知り合ってからもう3年になるけどまだ俺に対して妙にたどたどしいんだよな。俺的にはもうちょっと懐いてくれてもいいんだけどなあ」

「は?」

そんなことをたまう一夏に弾は呆れた声を上げてしまう。

「いや、だってさ、蘭って数馬とは結構くだけて話してるじゃん。でも俺の時はなんか余所余所しさを感じるんだよ。ちよつと寂しいぜ。もしかして俺って嫌われてる?」

「ん?何の話だ?」

そこへ数馬がトイレから戻ってきた。

「いやな、今蘭と一緒に昼飯でもどうかって誘ってきたんだけどさ、何か未だに俺への態度が余所余所しいからちよっと寂しいなあって」

「一夏つてわざとやっているのかと思う時があるよな」

「言うな。これが一夏だ。お前も分かるだろ？」

「そうだな。これが一夏だよな」

「ん？俺が何？」

「気にすんな。俺もこんな年の近い弟はいらん」

「は？オトウト？」

「まあまあ。とりあえず下降りようぜ」

「ああ、そうだな。昼飯サンキュ」

「気にするな。どうせ売れ残った定食だろうし」

3人は部屋を出て1階の「五反田食堂」へ向かった。

「げ」

食堂に着くと同時に弾がそんな声を漏らして立ち止まる。

「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとりで外で食べてもいいよ」

「聞いたか2人とも。今の優しさに溢れた言葉。泣けてきちまうぜ」
「どうやら先客として蘭が居た所為らしい。」

「みんなで食べればいいだろ。とにかく座ろうぜ」

「数馬さんの言う通りよ。さっさと座れバカ兄」

「へいへい・・・」

渋々といった感じで弾が席に着く。
ちなみに席順は数馬が気を遣ったおかげで一夏の隣に蘭が座り、向かい側に弾と数馬が座った。

4人掛けテーブルの上に4人前の定食が置かれていた。この五反田食堂ではいつも売れ残ることで有名な「かぼちゃ煮定食」だ。かぼちゃ煮が甘すぎてご飯に合うかと聞かれたら首を捻るような定食なのでいつも売れ残るのだ。かぼちゃ煮自体はうまいのだが。

「なあ、蘭」

「は、はひっ!？」

出された定食を食べながら一夏が蘭に声を掛けると蘭はちょっと驚いた様子で返事をする。

「声を掛けたくらいでそんなに驚かなくても」と内心傷付く一夏だ

った。

「着替えたんだ？どつか出かける予定？」

「あつ、いえ、これは、その、ですねっ」

蘭は先ほど部屋を訪ねてきたときと格好が違いオシャレな服装に着替えていた。

「凄くいいじゃん。似合ってるぞ」

「ほ、ホントですか!？」

目を輝かせて一夏に詰め寄る。

いきなりの事に一夏はちよっとビックリする。

「お、おう。可愛いと思うぞ」

そういつてニコツと微笑む一夏に、蘭は顔を赤くする。

「か、かわいい・・・、一夏さんに可愛いって言われた・・・。えへへへ」

蘭は嬉しそうにはにかんで笑った。

「懐いてない相手に褒められても嬉しくないかなあ？」と思っっていた一夏だったが蘭は喜んでくれたようなのでよしとした。

「・・・、このスケコマシ」

弾がそんな事を小声で言ったのは一夏は知る由もない。

「しかし、出かける予定もないのにおしゃれするなんてやっぱり女の子だな。やっぱり男とは違うわ」

「こ、これは・・・、その・・・」

「もしかしたらデートかと思ったくらいだぞ」

「ち、違いますっ！！い、今はそういう相手はいませんよ・・・」

「ふーん、そうなんだ？それはスマン。悪かったよ」

「い、一夏さんと以外はする気もないですし・・・（ボソッ）」

「え？何だつて？」

「な、何でもないですっ！！」

「まあ、兄としてはデートであつて欲しいけどな。何せこいつがこんな気合入ったオシャレするとか実に数ヶ月ぶ——」

（ドゴオッ！！）

「ぶわっ！！」

蘭の

マッハパンチ！

効果はバツグンだ！！

「あ、お兄の事は気にしないでください」

「お、おう」

人中にパンチを見舞われてのたうち回っている弾を尻目にこれも五反田兄妹間のコミュニケーションの一種なのだろうと一夏は割り切ることにした。

「賑やかだなあ」

ひとりセルフの水を飲みながら数馬がそんなことを呟いていた。

アイキャッチしりとり

蘭「二進も三進もいかないよ」

弾「よ、弱気・・・」

それから食べながらもうるさくならない程度に雑談を交わす。あまり騒ぐと五反田食堂の大将をしている弾と蘭の祖父である『五反田巖』によって制裁が下される（蘭以外に）。

「あ、あのお一夏さん。藍越学園に通ってみてどうですか？」

蘭は一夏に藍越学園についての質問を試みた。
まずは当たり障りの無い話で一夏との距離を縮めようという作戦である。

「ああ、藍越はいいところだぞ。進学校の割りに結構自由な校風だしな。入学式の後にあった部活勧誘なんかちょっとした文化祭みたいな騒ぎだったぞ」

「そうなんですか。藍越の部活勧誘の噂はよく耳にしますけど本当だったんですね」

「俺達も中学時代から噂は聞いてたけど、あれは正直予想以上だったな」

「なんか藍越って楽しそうですね。私も高校は藍越に行こうかなあ」

ふっとそんな事を漏らす蘭に弾が反応した。

「な、何言ってたんだ蘭！何そんな勝手な――！！」

蘭は

こわいかおをした！

（キツッ！！）

弾は口を閉ざした！

「蘭のところって大学までエスカレーター式だろ？面接だけで進学できるんだからもったいないじゃないか？それに藍越は一応進学校

だぞ？」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です。その気になれば推薦だって取れます」

蘭はこの地域では有名な私立女子校で生徒会長を務めるほどの優等生なので藍越の偏差値にも余裕で手が届く。さらには自分の想い人が通っているともなればエスカレーター式の学校を蹴ってでも行く価値は蘭自身にはあるのだ。

「そうか。受験頑張つてな。蘭が後輩になるの楽しみにしてるぞ」

「は、はい！入学した折には是非先輩としてご指導をお願いします
！！」

「まあ、俺が何をしてやれるかはわからないけどな。箒や鈴に数馬もいるし、存分に俺たちを頼ってくれ」

「はいっ！！」

この遣り取りの裏では弾がものすごい勢いで反論を投じていたのだが、祖父の厳と五反田兄妹の母親である蓮にバツサリと切り捨てられていたのであった。

「そ、そういえば一夏！この間のGWなんだけどよあ！」

反論を諦めた弾が少し自棄っぱちに一夏に言葉を投げる。

「GWがどうした？」

「お前、最終日にデュノアとデートしてたろ？」

「な——！？」

「デ、デートオツ！！」

一夏が驚いた声を出す但那れは一夏の隣の人物によつて遮られた。

「うおお！？どうした蘭！？いきなり大声出して！？」

「へ？い、いや、何でもないです・・・」

一夏が蘭の大声に驚いていると蘭は気まずそうに首を横に振つた。

「一夏、ネタは拳がつてるんだぞ。GW最終日にお前とデュノアが仲良く手を繋いで駅前を歩いてるのを俺は見たんだからな！」

「つてゆーか見てたなら声くらい掛けるよ・・・」

「んなこたあどーでもいいんだよ！それで、デートしてたってことはお前もデュノアと付き合ってるんだろ！？」

「はあ！？ちょ、ちょっと待てよ！？俺とシャルは『まだ』そういう関係じゃ——」

「『まだ』だとお！ならすぐに付き合え！なあ！！」

「なんでだよ！？つか話が見えないんだけど・・・」

「なんでもいいから！今月中・・・いや、今週中に付き合え！！」

そうすれば全て解決だ！！ってゆーかなんてお前ばかりそんなにモテるんだよ！中学時代からお前はっかりモテやがってこのモテスリム野郎が！！」

「意味が分らんことを言っな！！ってゆーかお前何でキレてんだよ！？」

「キレてねえよ！！」

「キレてるじゃねえか！！」

「だからキレてねえよ！！！！！！」

（キュピーンッ！）

「はっ！」

突如、何かを感じ取った一夏はニュータイプばりの反応速度で頭を伏せる。

（ギュンッ！！）

その瞬間、今まで一夏の頭があったところを高速で何かが通り過ぎた。

（ゴォンッ！！）

「ぶへらっ！」

弾の頭に何か直撃した。

「おいガキども！静かにしねえところから追い出すぞ！」

それは大将の敵が投げたものであった。ちなみに一夏にはおたま、弾には鍋を投擲したのである。

「す、すみません・・・」

一夏は理不尽だと思いながらも項垂れてながら謝った。
弾は頭に鍋が直撃したおかげでのびてしまっていた。

「すみません一夏さん。うちのお兄がご迷惑を・・・」

「蘭が謝ることじゃないだろ。気にしないでいい」

「わかりました。あとでお兄にはキツく言うておきますので」

「ま、まあほどほどにな」

「はい。あ、あのおところで一夏さん・・・」

「ん？」

「その、GWにデートをしたというのは本当なんですか・・・？」

「あ、ああ、本当だけど」

「そ、その方とは、お、お付き合いを・・・？」

「え？いや、俺とシャルは付き合ってるわけではないけど」

「ほ、本当ですか!？」

「お、おう」

「そつか。ならまだ私にもチャンスが・・・（ボソッ）」

「ん？何だつて？」

「何でもないですう！では、私はお兄を家に置いてくるのでこれで失礼しますね！一夏さんはどうぞこゆっくり！」

「おほほほ・・・」と笑って弾を引きずりながら蘭は去っていったのだった。

「ふいー、食後のお茶が美味い」

我関せずとしていた数馬の声が食堂内に響いたのであった。
『君子危つきに近寄らず』それが数馬であった。

第三十一話 五反田さんち（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回はメインヒロイン達を出さずにお送りしました。凄く難産だったぜ・・・。

蘭を可愛く書けてるか自信ないです。

あと今回は数馬をどう扱うかで凄く困りました。だからあんな立ち位置になってしまいました。

冒頭で一夏達がやってたゲームは御分かりだと思っています。

僕の武器のイメージ

一夏は太刀or片手剣、シャルロットはライトボウガン、箒は弓or太刀、鈴は双剣、セシリアはヘビィボウガン、弾はハンマー、数馬は狩猟笛といった感じですかね？

ではまた次回に！

第三十二話 ある日の生徒会長（前書き）

今回は最近出番があまりなかった織斑家の次女の十秋の話です。

彼女の周りにも色々と色恋沙汰があるのですよ。

あと3年生、生徒会ということで「あの人」が初登場します。

第三十二話 ある日の生徒会長

「ずっとあなたが好きでした!」

夕暮れの放課後。

屋上に呼び出された藍越学園生徒会長、織斑十秋は今年度通算5回目の告白を今まさにひとりの男子生徒からされていた。

告白してきた相手は校内でも結構人気がある男子で十秋も何度か話したことがある生徒だった。

が、十秋自身は相手の事はそこまではよく知らないのであった。

告白された次の日

「……ふあゝ、ねむ……ん……」

欠伸をひとつして布団から抜けだした十秋は寝惚け眼のまま部屋を出て1階へと降りていく。

危なっかしい足取りとその怠惰な姿は学園で生徒会長を務める姿とは懸け離れたものであった。

「おはよう、十秋」

「おはよう、十秋姉」

ダイニングに出ると兄の百春と弟の一夏が朝の挨拶をしながらお出

迎えた。

キッチンでは織斑家の末弟である一夏が朝食の用意をしている。

「おはよ〜」

まだ寝惚け状態の十秋はふらふらと心許ない足取りで洗面所に向かう。

冷たい水で顔を洗えば目も覚めるであろう。

顔を洗い終えた十秋が戻ってくるといつの間にか起きてきていた千冬が席に着いていた。しかし、起き抜けのせいか顔は先ほどの十秋と同様にだらしない。

「だらしないな・・・、飯にもこの家の家長なんだから、ちゃんとしたらどうなんだ」

だらしなく机に突っ伏していた千冬にコーヒーを飲んでいた百春が苦言を呈す。

「家の中でくらいリラックスしてもいいだろう・・・。それにこの方が下の者がしっかりするだろう・・・」

『親がだらしない方が子供がしっかりする』的なことを千冬は言いたいらしい。

「あんたはそういう意図があつてだらしないわけじゃないだろうが」
その意見を百春が突っぱねる。

「相変わらず細かい男だな・・・」

鬱陶しげに再びテーブルに突っ伏す千冬。

「はいはい。千冬姉も百春兄も朝から喧嘩しないの」

この2人は嫌い合っているわけではないのだがちょっとしたことがキツカケで口論になることが多いのでその度に一夏と十秋が仲裁に入るのである。

「ほら、朝飯できたから。早く食べないと遅れるよ」

「うむ。では頂こう」

「ああ。いただきます」

「あたしもいただきますっ」と

「おう。召し上がれ」

織斑家4人のいつもの朝がそこにはあった。

いつも通り一夏の作った朝食を食べて学校へ向かう。

十秋は基本的にひとりで学校へ向かうことが多い。

一緒の学校なのだし十秋もかわいい弟である一夏と一緒に学校へ向かうのも吝かではないのだが、恋する乙女達の邪魔をするのも気が引けるということで十秋は一夏よりも数分早く家を出ているのである。

「おはようございます、会長！」

「織斑さん、おはよう！」

が、文武両道で才色兼備と言われる十秋には絶えず人の輪があり登校途中であっても声を掛けてくる生徒は大勢いる。

「うん。おはようございます」

十秋も笑顔で生徒一人一人に対応する。これこそが新聞部調査によってわかった現生徒会の生徒からの支持率90%以上という結果を叩き出した理由である。現在の内閣よりよっぽど支持率が高いのだ。

「あ、虚ちゃん。おはよう」

登校中に見慣れた後姿を見つけ声を掛ける。

「おはようございます。十秋さん」

十秋が声を掛けた相手は「布のほとけ仏うつほ 虚」。

藍越学園の3年生で十秋とは同じクラス。眼鏡に三つ編みといういかにもお堅い感じのしっかり者で生徒会会計を務めている。ちなみに一夏のクラスメイトである布仏本音の実姉である。

「相変わらず生真面目だね。もうちょっと和やかにしても罰は当たらないんじゃない？」

「する理由がありませんから」

「またそんなこと言って。人生損するよ」

「私は損をするとは思っていませんので」

「あれ、何を言っても無駄かあ」

くすくすと笑う十秋とクールに微笑む虚。この2人のコンビは藍越学園では有名だ。性格が真反対に近いこの2人だが仲は良好で「学年主席と次席」、「生徒会長と会計」、「藍越学園3年の二大美女」と云われてる2人なのだ。

「あ、あの、織斑さん！」

校門付近にたどり着いた十秋達を出迎えるひとりの男子生徒がいた。3年のネクタイをして緊張した面持ちをしていた。

「おはよう、二宮くん」

「あ、うん、おはよう」

その3年生は「二宮修吾」といってこの日の前日に十秋に告白した男子生徒である。

「昨日はゴメン。驚かせちゃったよね・・・」

「ううん。そんなことはないよ」

「そ、そう？それならよかった・・・。そ、それじゃ！」

安心したそしてどこか気恥ずかしそうな様子で二宮は去って行った。十秋もその姿を黙って見送った。

「二宮さんと何かありましたね？」

眼鏡をくいつと上げて虚が聞いてくる。

「まあね。昨日の放課後に・・・」

少し苦笑い気味に十秋は答えた。

虚も十秋との付き合いは長いので今の反応で何があったかは大体想像が付いていた。

二宮修吾。藍越学園3年生。身長は180cmを越える長身で、学力も定期テストの学年順位が常に50位以内で、顔もイケメンといっている。サッカー部所属でキャプテンを務めている。背番号は9番。ポジションはセンターフォワード。身体能力が高くリーダーシップがあり、2年生時には藍越学園サッカー部を全国3位へと導いた存在。3年生になった今年はプロからスカウトの話が来ているという噂もある。

だもんで、彼は藍越学園3年の1、2位を争うほどのモテ男なのだ。

「で、どうするのですか？」

「ん？どうって？」

昼休みの生徒会室。十秋は一夏の手作り弁当を、虚は自作の弁当を広げて昼食を取っていた。

話題はやはり十秋に告白してきた彼、「二宮修吾」の事だ。

「二宮さんの事です。もう学校中の噂になってますよ。あの色んな女子に言い寄られても靡かなかった二宮修吾が才色兼備で名高い生徒会長、織斑十秋に告白したと」

「うーん。でもさ、告白されたあとに返事は少し経ってからでいいからって言ってさっさと帰っちゃったんだよね」

「彼も女子に騒がれている割には案外ヘタレですね。言った後で臆病風に吹かれたというか」

「まあまあ、そう言わないで。あ、このだし巻き貰っていい？」

「ええ、どうぞ。そのかわり唐揚げを1個貰います」

おかずを交換しながらいつしか話題は逸れていき、十秋の頭からは二宮修吾の話は抜けていった。

時間は過ぎて放課後。

十秋はこの日も生徒会のお仕事だ。

「予算報告は以上です。理事会への報告書はできていますか？」

「それならこれだよ」

「確かに。では会長、私は委員会の視察に行つて参ります」

「わかった。よろしくね」

「はい。では」

「いつてらっしゃーい」

出て行く虚を明るく見送って十秋は山と積まれた書類との格闘に戻る。

「あのおー、会長。ちょっといいですか？」

「どうしたの？」

役員の1人が声を掛けてきた。

「この資料なんですけど、どこに返したらいいですか？」

「ああこれは職員室に返さなきゃいけないやつだね。わかった、あたしが返してくるよ」

「ええ！？でも会長はまだ他の仕事が、それに結構量もありますし・・・」

「大丈夫大丈夫。あたしは結構鍛えてるからね。これぐらいなら余裕だよ」

「でも・・・」

「ほらほら、あなたも早く自分の仕事に戻りなさい。あんまり作業が遅れると虚ちゃんが怒っちゃうからね」

「わかりました。すみません、お願いします・・・」

「うん。じゃあ行ってくるね」

資料の入ったダンボールを2つ抱えて十秋は生徒会室をあとにした。

アイキャッチしりとり

二宮「君が好きだと叫びたい」

虚「一度頭を冷やしましょうか？」

「失礼しましたー」

資料を届け終えた十秋は職員室を出る。
ぎっしりと書類が詰まったダンボール2箱を苦もなく運び終え、少し伸びをする。

「ん〜。さて、早く戻らなくちゃ虚ちゃんに怒られちゃうかな」

「あ、あの！織斑さん！」

「え？」

生徒会室に戻ろうとした十秋だったが、それ呼び止めるひとりの男子生徒。

「あ、二宮くん。こんにちは」

「え？あ、ああ、こんにちは」

そこには二宮修吾がいた。

放課後なのでサッカーユニフォームを着ているかと思えば二宮は制服姿であった。

「今日はサッカー部は部活ないのかな？」

「あ、いや、今日はミーティングだけだったんだ。一応、終わったって顧問の先生に報告をしに来たんだ」

「そうなんだ。これからお帰りかな？」

「ま、まあね・・・」

相変わらず二宮は十秋と話すときはどこか気恥ずかしそうにしている。

校内でも随一の人気を誇るモテ男も好きな女子の前では初心な少年なのであった。

場所は変わって屋上。

夕焼けに彩られたそこは二宮が十秋に告白したときと同じで、時間帯もほぼ同じだった。

よって十秋も二宮が何を話そうとしているのかもわかっていた。

「ゴメンな。忙しいのに・・・」

「うっん。気にしないで。書類の山と格闘しててうんざりしてたところだったし」

ちよっとおどけてみせる十秋に二宮も少しだけ笑顔を見せる。

「それで・・・、話なんだけど・・・」

「わかってる。返事でしょ？」

「う、うん！」

十秋の言葉に二宮は覚悟を決めたように顔を引き締める。

「その前にひとつ訊いていいかな？」

「え？な、何だい？」

「どうして、二宮くんはあたしの事を好きになったの？」

「あ、ああ、それは・・・」

質問の内容に少し戸惑いながらも二宮は語った。

二宮は小学校の頃からサッカー一筋の少年であったという。中学時代も周りの男子が異性に興味を持ち始める頃になっても二宮の頭にはサッカーしかなかった。言い寄ってくる女子がいても自分にはサッカーがあるから付き合えないとさえ言っただほどの男であったという。

そんな二宮が十秋に好きになったのは2年の全国大会が終わった後の事。全国3位は藍越学園サッカー部創設以来の快挙であると全校集会で発表され、そのときにある選手が代表して表彰を受けた。

その選手が二宮で表彰を行ったのが生徒会長である十秋であった。表彰の際に十秋と二宮は握手をした。今までサッカー一筋の生活で女子と手を握ったことすらなかった二宮はその時身体中に電気が走ったような感覚に襲われたという。握手をしながら笑いかけてくれる十秋に顔が紅潮するのを感じた。気付けばその日以来、十秋を目で追うようになり、気が付けば好きになっていたという。

「我ながら単純な惚れ方だと思ったけど、俺は本気だよ。織斑さん、俺はあなたのことが好きです！俺と付き合ってください！！」

覚悟を決めた瞳で十秋を見つめながら二宮は今一度想いをぶつけた。十秋も彼から目を逸らすことなく見つめる。そして十秋はその告白に答えを出す。

「ごめんなさい」

頭うきを垂れてたった一言、シンプルかつ丁寧に十秋は二宮に告げた。

「.....」

二宮の顔がほんの少し俯く。

生まれて初めての告白の返事は「NO」だったのだ。胸中は悲しみでいっぱいであろう。

「その気持ちは凄く嬉しいよ。二宮くん事だって嫌いじゃない。でもね、あたしは二宮くんのこととはあまりよくは知らない。酷い事言うようだけど好きになる理由もあたしには無いんだ。そんな状態で付き合っても絶対上手くはいかないと思うし、あたし自身がそんなのは嫌だから」

それが十秋の正直な気持ちだった。

今まで男子から告白はされることは何度もあった。

が、そのほとんどが自分はよく知らない人ばかりで十秋の外見や生徒会長としての顔や学年主席という付属物に釣れて告白してくる男子も多かった。

十秋は恋愛はどちらかといえば外見より内面を重視するタイプでまだ会って間もない人やよく知らない人から告白されてもOKは出せない人なのだ。

何故二宮にこんな話をしたのかは十秋にもわからない。しかし、何故か自然と二宮には喋れたのであった。

「それは・・・、俺のことをよくは知らないから付き合えないって事・・・？」

「一言で言えばそうね。だから、ごめんなさい」

十秋は振り返って屋上を出ようと扉の方へと歩き出す。

二宮の方へは振り返らずにただ真っ直ぐと出口へ歩を進めていき、とうとう二宮の方へ振り返る事はなく屋上を去っていった。

翌日。

二宮と屋上で話した後生徒会室に戻ると虚から帰りが遅かった事の小言とさらに増えた書類の山に辟易とした十秋はさすがに疲れを見せながら登校していた。

完璧超人だの何だのと言われている十秋も疲れない訳ではないのだ。

「はあ〜」

自然とため息が漏れる。

肩もちょっと下がり気味だ。

そうして校門を抜けようとすると

「おはよう、織斑さん」

「に、二宮くん!？」

そこには二宮が待っていた。

昨日つけた相手が普通に話しかけてきたので十秋も面食らった。

「ちょっと時間いいかな？」

「え、う、うん」

朝のSHR前。場所は屋上。

そこに十秋と二宮の姿はあった。

「それで話んだけどさ・・・」

「うん」

「俺、諦めないから!」

「え？」

「俺の事をよく知らないから付き合い合えないって言ったよね。よーするに、これから俺の事を知ってもらえば可能性はあるって事だよね?」

「え、あ、う、うん、そーなるのかなあ？」

「なら諦めたくないんだ。まだロスタイムが残ってる。その時間がどれだけ残ってるかはわからないけど試合終了がまだなら精一杯足掻きたいんだ！だから俺に君の事を好きでいさせて欲しい！」

「えーっと・・・」

「話はそれだけだから！じゃあ！！」

それだけ告げると二宮は物凄い勢いで屋上を出ていった。
屋上には少し呆気に取りられたような十秋だけが残されていた。

「——うふふっ」

十秋は少しだけ声を出して笑った。

（告白したと思ったら返事も聞かずに去って、そのくせ次の日になったら返事を聞かせてくれと言ってきて、フッタ翌日に勝手に好きでいると一方的に宣言だけして顔を真っ赤にして去る。まったく、臆病なんだか強引なんだかよくわからないんだから）

二宮の陳腐とも思える行動に妙な可笑しさが込み上げてきて十秋は笑ってしまった。

（でも、なんだろう？不思議と嫌な感じはしなかったなあ。何だろ
うこの気持ち）

十秋の中に二宮に対する「ある感情」が少しだけ芽生えていた。

その感情が何を意味するのかはまだ十秋自身にもわからないのであった。

数日後、十秋と二宮が仲良さそうに2人で話しているのを目撃した生徒が続出したという。

おまけ

十秋が二宮から最初に告白された次の日。

「一夏あつ！と、十秋さんが3年のモテ男で有名な二宮修吾に告白されたって本当か！！？まさか十秋さんはOKをしたのかあああ！！？」

皆さんお忘れかもしれませんが一夏の悪友の1人の御手洗数馬は十秋に惚れています。

「か、数馬落ち着け！告白されたって噂は流れてるけどフラれたって噂も流れてるんだよ」

一夏は胸倉を掴んでガクガクとしてくる数馬を落ち着かせようと必死で宥める。

「本当か！？嘘じゃないよな！？嘘だったらぶっ殺すぞ！！」

「本当だって！さつき谷本さん達が話してたんだよ！今朝の十秋姉だって普通にしてたし！！」

第三十二話 ある日の生徒会長（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます

十秋の色恋沙汰的一幕はいかがでしたか？

彼女もまだ17歳なのでこういう事があってもいいと思ったわけですよ。でも、そうなるとそのうち千冬の事も作らないといけないかなあ？鈴の恋愛フラグはちょっと考えてることがあるんだけど・・・

あと正直に話しますがおまけの数馬は完全に設定を忘れていたのでネタとしてねじ込みました。もうぶっちゃけますが彼の想いは報われることは無いと断言しておきます。

ではまた～

第三十三話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪ 前編（前書き）

今回は久しぶりにあの方が登場します。

あと今までずっと第三者視点で話を書いていましたが、今回は一部を一夏視点で執筆してみました。

モゾモゾと布団が動きそこから目覚まし時計を止めようと手が伸びる。

（スカッ）

「あれ？」

いつもの感覚で目覚まし時計に手を伸ばした一夏だったがその手は目覚まし時計に触れる事もなく空振りした。また手を伸ばすがその手は空振りを続ける。

（昨日の夜にいつもの場所に置いたよな？こんなに遠くに置いてないはずだけど・・・）

仕方なく一夏はベッドに手をついて起き上がってから目覚まし時計を止めようと再び手を伸ばそうとしたがその手がピタッと止まる。

「な、なんだこれ！？」

一夏は自分の手を見るとパジャマの袖から手が出ておらずダボダボだった。

反対の手を見てみるとこっちもダボダボで、足にも目をやるとやはりダボダボ状態だった。

（何だこれ！？俺こんなサイズの合っていないパジャマなんて着た憶えないぞ！！？）

困惑の色を隠せない一夏はとにかく着替えようとベッドから降りようとする。

が、

「おわっ！！」

（ボタンッ！）

一夏はダボダボのパジャマの裾が足に引っかけてコケてしまう。

「いててっ」

痛さに耐えながらも起き上がろうと一夏は顔を上げた。

すると視線の先には窓が映る。

朝の澄んだ空気のお蔭か窓は一夏の姿をハッキリと映していた。

そう今の一夏の姿を。

「へ？」

そこには6、7歳くらいの子供が映っていた。

そして冒頭のシーンへ。

side 一夏

朝起きると6〜7歳くらいの姿になっていた。・・・なんていうのはいい冗談とは言えないであろう。言える奴がいたらすぐに言ってくれ。代わってやるから。

「な、何で！？何コレ！？もしかして何か変な病気か！！？」

窓に手をついて自分の姿を今一度確認する。

そこには俺が映っているのだがその姿は高校1年生の自分ではなく、明らかに小学校低学年くらいの子供が映っていた。

「いやいやいやいやいや！！朝起きたら6〜7歳になっていたってどんな奇病だよ！？事實は小説より奇なりとか言うけど実際ありえないだろ！！どうなんだ、どうする俺！？」

もうパニック状態に陥っている俺はあるはずも無いのに胸ポケット探ってライ。カードを出そうとするなどもう意味不明な行動を取ってしまった。ちなみに俺が着ているパジャマには胸ポケットは無い。

「一夏、朝から何を大声で騒いでいる？近所迷惑だろう」

俺がパニック状態のスパイラルから抜け出せないでいると百春兄が部屋に入ってきた。この家では俺の次に寝起きがいいので恐らくさ

っきの大声を聞いて何事かと思って俺の部屋に入ってきたのである。
う。

「も、百春兄い・・・」

「っ!？」

珍しく、というか今まで15年間兄弟をやってきたけど一度も見たことないほど百春兄が驚いた顔をしていた。

「い、一夏、か？」

呆然とした感じで言葉を搾り出したように百春兄が聞いてくる。

後々になって思い出すと百春兄の表情は普段の無愛想な顔とは違って凄く間抜けな顔をしていたのだがこの時の俺はそれどころじゃなかった。

「そ、そうだよ!一夏だよ!何か朝起きたらこんな事になってたんだ!!どうしよう百春兄!!」

今は学園の保険医をしているとはいえ百春兄は医者だ。これがもし変な病気とかだったら百春兄が何とかしてくれるかもしれない。俺は縋る様に百春兄に助けを求めた。

「・・・・・・・・」

しかし、百春兄は絶句してしまっていてとてもじゃないけど解決策を見つけてくれるようには見えなかった。

「ふぁゝ、何い?どうしたのお?朝からあんな大声出してえ?」

百春兄に続いて寝惚け眼の十秋姉が部屋に入ってくる。
その胸には枕が抱かれていて十秋姉の腕の中で窮屈そうに潰れていた。

「十秋姉え！」

「ふぁいいい？」

まだ寝惚けている十秋姉が俺の姿を捉える。

「聞いてくれよ！何か朝起きたら縮んでたんだよ！！！」

「縮むう？一夏あ、それはお姉さん感心しないなあ。いくら姉弟と
はいえ男性の朝の生理現しよ——」

「縮んだってのはそういう意味じゃねえよ！！ってゆーかそんな報告
するかあ！！ちゃんと目を覚まして俺の姿を見てくれよ！！！」

「んうゝ？」

目をゴシゴシと擦る十秋姉。

擦るのは目に良くないんだぞといつも言うのだがやっぱり今の
俺にはそれどころじゃなかった。

やがて覚醒してきたのか十秋姉の目がハッキリとしてきた。

「あれ？一夏随分と背が小さくない？それに何か声もいつもより高
いような・・・」

「そうなんだよ！朝起きたら何かこんな状態になってたんだよ！！！」

どうしよう百春兄！十秋姉！」

俺はほとんど涙声に近い声で十秋姉と未だに呆然としている百春兄に訴えかける。

「十秋、とりあえずお前は姉を起こして来い。一夏、とりあえず下に降りるぞ。話はそれからだ」

いつの間にか復活した百春兄の指示で十秋姉が千冬姉を起こしに行き、俺は百春兄と一緒に1階に降りることとなった。

どうしたらいいのかわからない俺は黙ってそれに従うしかなかった。

side out

アイキヤッチしりとり

一夏（幼少化）「代わってくれ！！」

????「レッツゴー陰陽師」

「うむ、しかしこれはまた随分と懐かしい姿になったものだな」

織斑家が全員集合したリビング。

長女の千冬はボサボサのままの髪とタンクトップにショートパンツというラフな格好で腕を組んで一夏を見やる。

最初こそ少し動揺を見せた千冬であったが今は落ち着きを払っている。

「なあ、ひとつ聞いていいか？」

「何だ？」

「何で俺こんな格好してるんだ？」

一夏は今身体が小さくなった事もあってサイズの合う服が無い状態だったのだが千冬が何処からか子供用の服を持ってきて、今の一夏は白のＴシャツに黒の半ズボンという身体に合った服を着ている。

「安心しろ。それはお前が子供の頃に着ていた服だ。懐かしいだろう？」

「いや、確かに見覚えもあるし懐かしいんだけどさ、何でこんなもの取ってあったんだ？」

「それは私にもわからん。大方、母さんあたりが取っておいたのだろっ」

何か納得できないものもあるが一夏はとりあえず納得することにした。

「朝ごはんできたよっ」

今日の朝食は一夏の身体のことと十秋が起きているということもあって十秋が準備をした。

トーストにベーコンエッグに簡単なサラダと洋食で揃えられていた。

「まさか、朝飯に十秋の用意したものを食うときが来るとはな」

「まあ、一夏がこの状態じゃな」

「うう・・・、ゴメン・・・」

「一夏が謝ることじゃないよ。気にしない気にしない」

ニコニコしながら十秋は少し申し訳なさそうな顔をした一夏の頭を撫でる。

「十秋姉、俺はもう子供じゃないんだから頭撫でるのやめてくれって」

「あれれ？今の一夏は子供の姿じゃない？」

「ぐう・・・」

十秋に弄ばれてる感が否めない一夏は自棄気味にコーヒーカップを手にとつてぐいっとコーヒーを飲み込む。

がしかし

「むう！！」

一夏の顔が歪んだ。

「どうした一夏？」

同じくコーヒーを飲んでいた百春が訊いてくる。

「に、に、に・・・」

「二？」（↑十秋）

「荷？」（↑千冬）

「2人とも、そのボケは文字にせんとわからんぞ」

女性陣のわかりにくいボケ？に的確にツツコミを入れる百春だった。

「苦い・・・。凄く苦い・・・。」

それを尻目に一夏はコーヒーの苦味に悶絶していた。

「苦い？いつも入れてるコーヒーと変わらないよ？」

試しに十秋が一夏のカップのコーヒーに口を付けるがいつも入れているコーヒーと変わらなかった。

付け加えて言うなら、織斑家の面々は皆コーヒーは結構苦めにブレンドする。これはいつも寝起きが悪い女性陣が苦いコーヒーを飲む事によって目を覚まさせるという要因があるからだ。

「とりあえず一夏、ほれ」

悶絶している一夏に千冬がコップに入った牛乳を差し出す。一夏は

バツとそれを取るとグビグビと飲み干す。がぶ飲みはしない主義の一夏にしては珍しい事だった。

「ふう……」

「どうやら味覚まで子供に戻っているようだな」

「マジかよ……。これぐらいの時にコーヒー飲むとこんなに苦く感じるのか……」

「激辛カレーとか食べたらどうなるかな？」

「よし、今晚はカレーだな」

「ちょ、待ってくださいよ！なんでそうなるんだよ！？ってゆーか何？人結託して俺を苛めるんだよ！？」

「いや、何か今のお前を見ているとな」

「何か苛めなくなっちゃって」

千冬は真顔で、十秋はてへっという感じでそんなことをのたまう。

「も、百春兄い」

最後の砦である百春に泣きつく一夏。

「2人とも、その辺にしておいてやれ……」

結局解決策も出ないまま朝食の時間は過ぎていった。

「さて、朝食も食べ終えたし、そろそろ肝心な話をするか」

「まるで今まで真剣に考えてなかったみたいない言分だな・・・」

「細かい事は気にするな」

家長の千冬がきりつとした表情でこの場を鎮める。

一夏も渋々とそれに従った。

「一夏がこうなってしまった原因だが、私にひとつ心当たりがある」

「ほ、本当か千冬姉!？」

「と言うより、こんな馬鹿げた事をしでかす人物が我々の身近にひ
とりいるだろう」

「誰の事だよ？」

「本人に直接聞いてみるか？」

「へ？」

「東!いるのはわかっているぞ!出て来い!」

「いやゝ、やっぱりちーちゃんにはバレちゃったねゝ」

突如、織斑家のリビングに底抜けに明るい声が響いた。

「やあやあ！お久しぶりに登場の束さんだよん。ぶいぶいつ」

声の発生源は天井から。

上を見ると部屋の真ん中の天井から束の頭がによきつと生えていた。

「た、束さん・・・？」

いつからそこに居たのかとか、どうやって家に入ったのかとか、何でそんなところにいるのかとか色々ツツコミドコロがあり過ぎて一夏はただ束の名前を言うことしかできなかった。

「束、いいから降りて来い」

「おーけいーちーちゃん」とうっ

千冬に降りて来い言われた束は素直に了解の返事をする。
くるりんと空中で一回転して見事に着地――。

「ふぎやつ」

――とはいかずに顔面からリビングに敷かれた絨毯に落ちた。

「てへへ・・・、失敗しちゃった・・・」

鼻っ柱を赤くしながらも束は何事も無かったように起き上がった。

「ほら、絆創膏貼るから大人しくしてください」

百春がすかさず束の鼻に絆創膏を貼る。

「おゝ！さすがもつくん！！お医者様志望は違っね。私のお婿さんにならない？」

「なりません」

「ツレナイなあ。でもそこがもつくんらしい。そこにシビれる！あこがれるウ！」

（ベシッ！）

「いい加減話を進めたいんだが」

「マジゲンコツはやめてよ。ちーちゃんのお愛が痛い・・・」

「その台詞は前にも聞いた。それと愛など無いと言っているだろう」

「そんな・・・、酷いちーちゃん、あの深く愛し合った夜は何だったの！！？」

「そんな夜など一度も過ごしとらん」

「あれは中学校の修学旅行の時、寝惚けたちーちゃんが私の布団に潜り込んできてそれから――」

「死ね」

（パァーンッ）

「ちょ！いつの間にハリセンなんて用意してたの！？今で束さんの脳細胞は1万個は死んだよ！！？」

「安心しろ。お前は馬鹿だから脳細胞も死んだと気付かずに活動しているだろう」

「おお！そっか！ちーちゃん相変わらず頭いいー！！」

「だからいちいち抱きついてこようとするな、暑苦しい」

「もー、ちーちゃんったら照れ屋さん」

「いい加減にせんと本気で地獄みせるぞ」

相変わらず息の合った漫才を披露する千冬と束。

百春は無言でコーヒーを飲み、十秋はニコニコしながら漫才を眺め、一夏はただ哑然とするのみだった。

side 一夏

千冬姉と束さんの漫才も終わり、束さんをリビングのソファに着席させて話を進めることになった。

「で、束さん。どういうことなんですか？何で俺は突然子供の姿に？」

俺は恐る恐るといった風に束さん尋ねる。

それを聞いて束さんの目がキラーンと光った・・・ような気がする。

「うつふつふつ。よくぞ聞いてくれました。さあ、これを見よ！」

すると束さんはポケットをまさぐってその中からあるものを取り出

した。

それは薬を入れるようなビンで中にはカプセルが入っていた。

「じゃじゃーん！これこそ束さんが夜も寝て昼寝もして暇潰しに作った特製内服薬。その名もアポ。キシン48——」

「ストップ束さん！それ以上言っちゃダメです！！」

それ以上言つとこの作品の作者が色んな大人から怒られます。

というより暇潰しでそれ作ったのかよ……——つて、ちよつと待てよ？

「その薬があのだ某探偵の漫画の毒薬と同じものだとしたら俺はずつとこのままって事ですか！？」

そんなのは冗談じゃない。

俺はれっきとした高校1年生でシャルや篤達と同じ学校に通う15歳だ。

今さら小学生には戻りたくはない。

「その点はこの天才である束さんにぬかりはないよ。この薬は1日経てば効果が切れるから明日の朝にはいつくんは元の姿に戻ってるよ」

「そ、そうですね。それはよかった」

本気でよかったと思う。名前を偽って小学生からやり直すとかしないで済む。

「ってゆーか何で俺にその薬飲ませたんですか？」

「いやね、せっかく作ったんだから誰かに試そうと思ってね。そこでいっくんに白羽の矢を立てたのです」

俺は実験動物ですか・・・。

「でもお、いっくんは優しいから束さんのこと怒らないよね？ね？うるうる」

うぐっ。

束さんが上目遣いでうるうるとしながら俺を見つめてくるので若干たじろいしてしまう。

というよりあなたの歳を考えてください。

千冬姉と同じ歳だから今にじゅう――

（パァーンッ）

「貴様今失礼な事を考えていただろう」

いきなりハリセンでどつかれた・・・。

ってゆーかお姉さん、まだそのハリセン持ってたんですね・・・。

「おおーつとおっ！！それじゃ用も済んだしそろそろ束さんはお暇させてもらうよ。じゃあねばいはいきくん」

「あつ、ちよつと束さん」

止める間もなく束さんは織斑家から姿を消してしまった。
毎度の事ながら本当に台風みたいな人だ。

「どうしろってんだよ・・・」

俺は今一度自分の身体を見直す。

やっぱり身体は7歳くらいの身体だ。

身体は7歳、頭脳は15歳、その名も名探偵イチカ！——ってさぶっ！！ってゆーか俺別に名探偵じゃないし語呂も少し悪い気が！！

（パーンツ）

「何をくだらん事を考えている」

またハリセンでどつかれた・・・。

つっ！か何で俺の考えてることわかるんだよ？

千冬姉って実はエスパーなんじゃ・・・？

「まあまあ、一夏のくだらない考えは置いておいて」

十秋姉さん、あなたも敵ですか・・・。

「1日経てば元に戻るらしいし、今日はこのまま過ごすしかないんじゃないかな？」

「それしかあるまい」

「そうだな。一夏、今日1日は我慢しろ」

「わ、わかったよ・・・。今日は我慢してこの姿でいるよ・・・」

もうどうにでもなれと思いながら俺のこの日の一日は始まったの

s
i
d
e

o
u
t

だ
っ
た。

第三十三話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪ 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださっておりがとうございます。

まさかの一夏が幼少化の回でした。東を科学者の設定にした時点でやろうと思っていた話でした。薬名はもちろんあの某名探偵からです。

あと最近前からやりたかったアイキャッチしりとりを導入しました。書いてて文字だけだとしっくり感はありませんなあと思いつつもやり続けようと思っています。

ちなみに今回のアイキャッチの???の人物は東です。

あとよかったらアイキャッチしりとりでこのキャラにこの台詞を言っ
て欲しいっていうのがあったら感想と一緒に送ってください。
ちなみに次回は「じ」から始まる言葉です。キャラは一夏とシャル
を予定しています。

ではまた〜

第三十四話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪

中編（前書き）

中編です。

ちよつとあるキャラに壊れ入っちゃったかも・・・

第三十四話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪

中編

「ふう・・・、今日が日曜日でホントよかったよ・・・」

身体が幼少化するという事態が発生してから少しの時間が過ぎてお昼前。

もし平日だったら学校に行っていなければならない時間だ。

さすがにこの姿で学校に行く勇氣は一夏は持ち合わせていない。

「まあ、制服も着れないし・・・」

身体が小さくなくても一夏はいつものように午前中は洗濯と掃除に精を出した。

知らない人が見たら一夏は家事を手伝う立派な おりこうさんな小學生に見えたことだろう。

「んゝむ、お茶が美味しい」

幼少化した事でコーヒーは飲めなくなつたがお茶だけは普通に飲めることに一夏は物凄く安堵していた。

いつも爺臭いとか言われるがコレだけは一夏は何としても譲れないのである。

恐らく、酒やたばこをやめられない人の感覚に近いのかもしれない。

「しかしあれだな。小さくなつた所為かこの家も普段より広く見えるんだよなあ」

いつもより視線が低い位置にある所為かはわからないが一夏はそう

感じていた。

普段は身長172cmの一夏だが、今はおよそ125cmくらいの背丈なのでそう感じてもおかしくはないのかもしれない。約50cmの差とはそれほどまでに大きいのである。

（ピンポーン）

「お？」

来客を告げる軽い音のチャイムが織斑家に響いた。

ちなみに今1階のリビングには一夏しかない。

他の3人はというと千冬は自室に戻っていて、百春は残っている仕事があるとの事で学園に行き、十秋は先ほど洗濯と掃除を終えてから友人宅へ遊びに行っている。

なので、客を出迎えるのは必然的に一夏が一番早い。

「はい」

故に一夏は今の自分が幼少化してしまっていることをすっかり忘れて客を出迎えに行き、玄関を開けてしまう。

side シャルロット

5月も半ばを過ぎたとある日曜日。

僕は最近の休日では習慣になっている織斑家に遊びに行く事にしたのだけれどその織斑家に到着するとんでもない事態が待っていた。玄関のチャイムを押して「はい」という声と共にトトトと小走りの音が奥から聞こえてきて玄関が開かれてからそこにいた人物に僕

は絶句してしまった。

「こんにちは、わ……」

「おお、シャルか。どうした？」

何故なら僕を出迎えてくれたのは7歳くらいの小さな男の子で、その男の子は僕の大事な記憶となっている初めて出会った頃の一夏に非常によく似ていた。

えっ？あれっ？今この子僕の事を「シャル」って呼んだ？

その愛称で僕の事を呼ぶのは一夏唯一人のはず……。

えっ、ええっ？ちよつと待って？

この子本当に僕が一夏と初めて出会った頃にそっくりなんだけど？
どうみてもこの子7歳くらいだよな？

一夏は僕と同じ歳だから15歳のはずだし、一夏の身長はこんなに低くないはず。

僕の身長は154cmだから一夏よりもおよそ20cmくらい低いはずなのにこの子は見た目125cmほどしかない。

だからこの子は一夏ではないはずなのに何故か僕の心は予感がする。

「この子は一夏だ」と。

「？どうしたんだシャル？」

ああっ！この子首を傾げてハテナ顔してるっ！！

やばいよ！凄く可愛い！！——って、違う違う！そうじゃないよ！
！落ち着け僕！！！！

「い、いち、か……なの？」

やっこの思いで僕の口から絞り出た言葉がそれだった。

「へ？俺以外の誰に見え—— あっ！！」

その男の子は僕に「何言ってるの？」と言いたげな表情から一変して「やべえ！やっちゃまった！！」みたいな顔をした。

「しまった……。遅かったか……」

廊下の先に目を向けると千冬さんが頭に手を置いて困ったような顔をしていた。

千冬さんがあんな顔するのは凄く珍しい。

「ち、千冬姉……」

まるで助けを求めるかのように男の子が千冬さんに視線を向けていた。

ん？今この子、千冬さんを「千冬姉」って……。

「まあ、なんだ。とにかく、せっかく遊びに来たのだろう？シャルロットを上がらせる。事情も説明してやらんな」

千冬さんがその男の子に指示した。

「わ、わかった。えっつとつ、とりあえず……。いらっしやい、シャル」

そこで、僕の予感……確信に変わった。間違いなく、この男の子は……。一夏だと。

「……っ……」

「えっ？」

「ええええええええええええええええええええええつ
!!!!!!!!!!」

僕の叫び声が織斑家の中に木霊した。

Side out

「という訳だ。理解できたか？」

「はい、あの束さんがすることですし……」

シャルロットを家に招き入れた千冬は今朝起こった事を彼女に説明した。

にわかには信じがたい内容だが、あの篠ノ之束のする事だとシャルロットは納得した。

シャルロット自身も幼少期に織斑家と簞を通じて束とは何度か会ったことがあるのでその辺の理解は早い方だ。

一夏達がまだ小学校2年生の冬の頃、年末休みを利用してシャルロットが日本に遊びに来ていたときに一夏を通じて仲良くなった筈の家に招待された日があった。

そこでシャルロットは東に初めて会ったのだがその時に起こった出来事が強烈なインパクトを残していた。

篠ノ之神社の庭先で一夏、シャルロット、箒の3人で遊んでいたところ、束がやってきて

「じゃじゃーん！！見て見て！！これぞ束さんが作った泥棒対策用ロケットランチャー！その名も「怪盗キ。ドモデストロイ！」だよー！！」

当時まだ高校生だった束だがこの頃から意味不明な発明品を作っていて周りからは変わり者扱いされていた。

そのロケットランチャーを持ってきた時もシャルロットは啞然としたのを憶えている。

「ではさっそく試射してみるね♪ファイヤー」

何と束はその場でロケットランチャーの試射を始め、その銃口の矛先にあった神社の納屋を大炎上させたのだ。

「やつちやつた、てへっ♪」

それで済ませた束に驚いていると篝の父親が怒鳴り込んできたので一夏と篝に手を取られてその場から逃げ出した。

その後篠ノ之神社は納屋の消火作業にてんてこ舞いとなったのである。

しかし、その数日後に何故か納屋は元通りになっていた。

どうして元通りになったのかは未だに謎である。

そんなこんなで、シャルロットは束に対する理解は篠ノ之・織斑両家の次に理解しているのでこの事態も受け止めることができたのであった。

アイキャッチしりとり

一夏「自己紹介しよーぜ！」

シャル「前略、シャルロット・デュノアです」

side 一夏

俺の身に起こった出来事をシャルに説明し終えてシャルも事態を受け止めてくれたらしい。

シャルはリビングのソファーに座りながらお茶を飲んでいて、千冬姉もリビングテーブルの側のクッションの上に座ってお茶を飲んでいる。

だが、俺にはひとつ気になることが。

「あのさ・・・、ひとつ訊いていいか？」

「ん？なぁに一夏？」

「何で俺、シャルの膝の上に乗せられてるんだ？」

そう。俺の座っている位置は何故かシャルの膝の上だった。

いやな、俺はシャルの隣に座ろうとしたんだが何故かシャルが膝の上にポンポンと手を置いて「一夏、ここに座ってよ」と言ってきた。俺は「恥ずかしいからいい！」と断ったんだが、シャルが物凄い良

い笑顔で「その拒否権は一夏にはありません」という、意味不明な強引な理屈を展開してきていつの間にか膝の上に座らされていたのだった。

「理由なんてどうだっていいじゃない。僕がそうしたいからじゃダメ？」

「いや、そう言われても俺が恥ずかしいんですけど・・・」

「ふっふー、ダメ。子供は膝の上で大人しくしてないと」

「子供って、俺は同じ歳だろうが・・・」

なんだろう？

今にもポワポワという音が聞こえてきそうなシャルのこの笑顔を見ていると勝てる気がしないは何故・・・？

というか、俺の膝の上に乗せてそんなに上機嫌になるのも何故・・・？

それとさっきから千冬姉がニヤニヤしながらこっちみてるんですけど・・・。

「ほら、一夏。せっかくだから、僕の事をお姉ちゃんって呼んでみて」

「は、はあ！？な、なんでそんなこと言わないといけないんだよ！？」

突然の要求に思わずシャルの膝の上から立ち上がろうとするが

「あんゝ一夏、立っちゃダメ」

「おわっ！ちょ、ちよつとシャル！」

バツとシャルの手が伸びてきて再度膝の上に座らせされた。
しかも今度は後ろから抱きしめられた状態だ。

マ、マズイ！この状態は非常にマズイ！！

だ、抱きしめられてる所為か、こう、シャルの良い香りが――

――って何考えてんだ、俺は！

そ、それと、後ろから抱きしめられて密着状態だから、シャ、シャルの、そ、そのお・・・、む、胸が、俺の背中当たって・・・。
前に腕を組まれた時もあったけどシャルの胸って意外と大きくて――え
えい！消える！消え失せる煩惱！！

「ほらほら、言ってみて。ね。」

そつだ！余計な事を考えるからダメなんだ！！

ここは恥ずかしがってないでさっさとシャルの言つとおりにして早いトコ解放してもらおう！

「お、お姉ちゃん・・・」

ぬああつ！！は、は、ハズイ！！！！これ何の拷問だよ！！！！！！
俺ぜってえ今顔真つ赤だよ！！！！

で、でもこれで要求は呑んだしそろそろ離れても――

「んっ、一夏かわいいっ！！」

「むぐっ！！」

いいっ！！？

ちよ、いきなり体勢を変えられたと思ったらまたシャルの手が伸びてきて俺の頭がシャルの胸に抱き寄せられた！！？

おかげで俺の顔面がシャルの柔らかな胸に埋もれてしまう！！

おおっ！！な、何か背中を感じてた感触とは比べ物にならないほどに柔らかい！！

恥ずかしさだとかと得体の知れない嬉しさだとかが何かゴツチャ混ぜ状態なんだけど・・・。

キツク抱きしめられているせいで呼吸が出来ない！！く、苦しいっ！！さ、酸素が足りない・・・。

へ、ヘルプミープリーズ・・・！！

side out

（本当にあの頃の一夏だ♪）

シャルロットは一夏の頭を強制ベアハッグしながら幸せに浸っていた。

その様子はヒトデの彫刻に囲まれたCLANADの伊吹。子のようであった。

恋する一夏が初めて出会った、しかも恋を自覚した頃の姿になっていたことにシャルロットは胸が温まる思いだった。

ちよっとした悪戯心を働かせて一夏に「お姉ちゃん」と呼ばせてみたが、顔を真っ赤にして恥ずかしそうに呼んでくる一夏が猛烈に可愛くて思わずギュッと頭を自身の胸に抱き寄せて愛でる。

シャルロットの幸せパーセンテージはすでに某宇宙戦艦の主砲充填エネルギー並の数字であるに違いない。

「くお、くおきゅーんがあゝ（こ、呼吸がゝ）」

結局一夏はしばらくシャルロットが満足するまでの間、強制ベアハッグをかけられ続けて朦朧とする意識の中で綺麗なお花畑を垣間見ることになった。

彼は危うく美少女の胸に埋もれて窒息死という、ある意味「男のこの世で一番幸せな死に方」を実践してしまうところであった。

ちなみに側にいた千冬がシャルロットを止めなかったのは完全に面白がっていたからであった。

第三十四話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪ 中編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

幼少化した一夏を愛でるシャルロットはいかがでしたか？わかると思います。原作4巻の猫耳パジャマのシーンを参考にしています。

ちょっとシャルロットをはっちゃけさせ過ぎたかな？

皆様の反応がちょっと恐いっす・・・

ではまた後編で～

第三十五話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪

後編（前書き）

少し遅くなりましたが、一夏幼少化編最終話です。

今回はちょっとだけ千冬にもスポットを当てました。

あとちょっとお知らせが後書きであります。

第三十五話 小っちゃいって事は便利だねっ ♪

後編

Side 一夏

「あはは、ゴメンね一夏」

「い、いや、気にするな。俺は気にしない・・・」

昼飯を済ませた俺達は縁側に座りながらほのぼのしているとシャルが先ほどの強制ペアハッグの話題に触れてくる。

シャルも少しやり過ぎたと思ったのか謝ってきたので俺は気にするなと言っておいた。

しかしあれだな・・・く、苦しかったけどそれとは別に凄くいい思いもした気がする・・・。

今は身体が縮んで7歳くらいの容姿だが俺だつて15歳の思春期真っ只中の男子高校生だ。

人並みに異性に興味があるし、女子の胸に顔を埋める事なんて人生で初だったしあの柔らかさは正直気持ちよかった・・・。

うう、いかん・・・。何かあの柔らかさを思い出すと顔がニヤケてしまいそうになる！

頭では必死に考えないように押さえ込もうとしているのに勝手に思い出してしまう！

ああ！これが悲しい男の佐賀・・・もとい、性か！！

「ねえ、一夏」

（どきいっ！）

「な、何だシャル！？」

い、いかん！

このニヤケ顔をシャルに見られるわけにはいかん！

俺は必死にポーカーフェイスを作ろうとしてからシャルの方へ顔を向けたが正直変な顔であつたことであらう。

「・・・・・・・・」

あ、あのお、シャルロットさん？何でそんなちよつと胸を隠すように身体を抱いて抗議の眼差しを俺に向けているのでございますか？

「・・・えっち」

「なあつ！？」

ええっ！？お前が勝手に自分で俺の顔をその胸に抱いたんだらうが！！

なのに俺が悪者か！？

なんという不条理！なんという冤罪！

そ、そりゃあ、ちよつとは役得かも・・・とか思っただけさあ！

仕方ないだらう、俺だって男なんだよ！！

「ふふっ」

可笑しそうにシャルが笑った。

なんだらうか？シャルの表情がほんの少し恥ずかしそうでそのくせどこか嬉しそうにも見える。

さっきはあんな抗議の眼差しを俺に向けてたのにどういつ心境の變化だらうか？

「許してあげるよ」

「え？」

「えっちな目してたけど、一夏だから許してあげる」

「あ、ああ・・・」

なんか思わずそんな返事をしてしまう。

俺が悪者扱いになるのは些か心外なのだがにっこり笑うシャルを見ていたらそんなことは気にならなくなってしまった。

まあ、俺とシャルも10年近い付き合いだ。これくらいでわだかまりが残るようならもう疎遠になっているだろう。

俺にとってもシャルは大事な存在だ。こんな事でギクシャクはできればしたくない。それはシャルも同じだと思う。

だからこそこの話題は切り上げる事にした。

「そっいえばシャル」

「ん？なあに一夏？」

「付けてくれてるんだな、それ」

俺はシャルの左手首にしているブレスレットを指差した。

それはGWに2人でデートした時に俺がプレゼントしたブレスレットだった。

「えっ、あ、うん、まあ、ね。えへへ」

シャルは銀色のそれをにこにこしながら愛しそうに優しく撫でる。

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「うん！だって一夏が僕の為にプレゼントしてくれたものだから！」
臆面もなくそんな事を言ってくるシャルに俺は照れてしまう。

「せっかく一夏に貰ったものだし身に着けていられるときはいつも着けてるんだ」

「そうなのか？」

「うん。一夏だってプレゼントしたものをいつも身に着けてもらった方が嬉しいでしょ？」

「ま、まあな」

それにしても、こんなに気に入ってくれるとは思っていなかったな。あまり高いものでもないし、あんな訳のわからん雑貨屋で買ったものだし。

まあ、気に入ってくれたのはこっちもプレゼントした甲斐もあって嬉しいんだけど。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「また2人で一緒にデートしようねっ」

満面の笑みでシャルはそう言ってきた。

その笑顔があまりにも輝いていた為に俺は変にドキドキしてしまう。顔も痛いくらい熱を放っているので恐らく赤いだろう。

「そうだな。また2人で行くか。俺達2人なら絶対に楽しいよな」

「だ、だったら、来週の日曜日はどうかな？」

「おう、いいぜ。来週の日曜な」

「うん！じゃあ、やくそく！」

そう言つて、はいとシャルは小指を差し出す。

子供の頃に指切りを教えてからというものの、シャルはこれがお気に入りに入らしく約束をするときはよく2人で指切りをする。

「高校生にもなつて指きりなんて恥ずかしい！」なんて男子が多いかもしれないが生憎とそんな感情は俺には無いので普通にシャルと小指を絡める。

「指きりげんまん、ウソついたら廃油10kgのーますっ」

そして毎回、子供の頃からのこの決まり文句が非常に怖い……。廃油以前に一度に油を10kgも摂取したら死んでしまう……。とゆうか絶対無理……。飲めません……。

これのおかげで俺はシャルとの約束は絶対に破らないようにしようと心に誓っていた。

「指切つたっ」

「おう」

「えへへ。楽しみだなあ」

まだ1週間も先の話だというのに、気の早いことだ。
まあ、俺も今から楽しみである事は間違いない。
シャルと2人でいるのは楽しいからな。
早く来週にならないかなあ。
あ、俺もシャルの事は言えないな。

s i d e o u t

アイキャッチしりとり

一夏（幼少化）「ストップ！廃油は無理！！」

シャル「理屈はいいからさっさと飲め！！」

「それでね、山田先生がそこでコケちゃってね。食材ばら撒いちゃったんだよ」

「それは何というか、あの人らしいな」

縁側に座りながら他愛ない会話をする一夏とシャルロット。
今の話題は前にあった料理部の活動中に顧問の真耶が食材を運んで

いる時にコケて食材をばら撒いたという話題である。

他にも鷹月さんが読んでいた意外な文庫本の話や谷本さんが言っていたお得なダイエット法の話などクラスメイトについての会話。

そんな日常的事が、今の2人には楽しかった。

そんなことを話しながら時間は過ぎていき、空はほんの少しだけ朱色に染まり始めていた。

「……………」

「……………」

不意に話が途切れて、2人は縁側に並んで座りながら朱色に染まりつつある空をボーッと眺めていた。

（とさつ）

「一夏？」

ふと左半身に重みを感じたシャルロットが視線を向けると、そこには安らかな寝息を立てて身を預けるように寄りかかっている一夏の顔があった。

「疲れてたのかな。今日は色々あったみたいだし」

「すー……………」

無防備に寝息を立てる一夏の姿は幼少化してる事もあったかシャルロットの目には非常に愛らしいものに見えた。

「一夏、かわいいな〜」

シャルロットはまた抱きしめなくなる衝動が湧き上がるが、一夏の寝顔を見ているとどうにも起こさないように気を配りたくもなった。

「仕方ないなあ」

シャルロットはそつと起こさないように体勢を立て直した。足を一夏とは反対方向に向け横にする。そしてゆっくりと一夏の頭を自分の膝の上に移動させた。前にもやった膝枕だ。

「うふふっ」

自分の膝の上で安心するように眠る一夏の髪をそつと撫でる。

まるでそつすることが自然のような気持ちになった。

音はなく、声もなく、感じるのは一夏の温かさと微かに髪を揺らすそよ風。

まるで一夏ではなく、自分が優しい揺り籠の中にいるようだ。

そんなことを思いながら、シャルロットもその心地良い空気に身を委ねてそつと目を閉じた。

side 千冬

「おいお前達。そろそろ夕飯の準備を・・・、お？」

時間も夕方になり腹も空いてきた私は一夏達に夕飯の準備を促すために自室から1階に降りてきてあいつらの側に寄ったのだが、私が見たものはシャルロットの膝枕の上で横たわる一夏という構図だった。

だが寝ているのは一夏だけでなくシャルロットもだった。

2人揃って縁側の心地良い空気の中でまるで安心しきったかのように眠っている。

その光景を見て私はちよつとため息をついてから微笑を浮かべた。なんというかこれは恋人というより……仲の良い姉弟を見ているかのような気持ちになるではないか。

今は一夏が幼少化しているせいかな余計にそう見える。

「まったく、世話が焼ける」

叩き起こして飯の準備をさせたかったが、なんだか今のこいつらを見ているとその気も削がれてしまった。

私はたまには姉らしい事をしてやろうと手近な部屋から毛布を2枚持つてくると、1枚をシャルロットの膝の上で無防備に寝息を立てる一夏に、もう1枚をシャルロットの肩にそっとかけてやった。

「馬鹿者共が」

そう言つて私は2人の頭を撫でた。

こいつらは傍から見ていると実にじれったい。

お互いに意識しているくせして関係の進展は全然だ。

明らかにシャルロットの方は好意が丸分かりなのにそれに気付かない鈍感な一夏も我が弟ながら呆れる。

一夏もシャルロットにはそれなりの想いも持っているようだがまだ自覚は無いようだし、さつさと自覚して欲しいものだ。まあ、自覚したらしたでまた一騒動起こりそうだな。

「お、そうだ」

いい事を思いつき、私の頭上に豆電球が光った。

ちょっと悪戯心が湧いた私はこいつらのこの姿を写真に撮っておいてやろうと思った。

私は昔から写真を撮るのが結構好きだったりする。両親が亡くなってからはそれもあまりできなかったが今日はその意欲が湧いたのでバッチリこいつらの姿を収めて後でからかってやろう。

うん、私はいい姉だ。

（カシャッ）

さて、いい絵が撮れたところで飯の用意をせねばな。

生憎私は料理はできないし、料理担当の一夏はあの様だし、十秋も外で夕飯を済ませてくると言っていたから飯の用意は自分でせねばならない。

ちなみに百春のやつも今日は外で済ますらしい。

「仕方ない。コンビニでも行つて来るか」

私は自室で外出着に着替えて財布を取って玄関に下りた。

「自分を磨けよ、ガキども」

聞こえるはずもないのに私はそう言い残して家を出た。

s i d e o u t

「はあ、まったく千冬姉ときたら・・・」

夜も10時に差し掛かった時間に一夏は自室に戻ってため息をつい

た。

先ほど縁側でついつい居眠りをしてしまい、いつの間にか彼に膝枕して一緒に眠りこけていたシャルロットとのツーショット写真を見せられて今まで散々からかわれていた。

夕飯の準備もせずに居眠りしていたのは一夏も悪かったと思っていたが、酒も進んで酔った千冬の相手はいつも以上にしんどかった。途中で帰ってきた百春と十秋にもからかわれて心も疲弊しきっていた。

「風呂入ってもう寝よ・・・」

色々あった1日だったため彼はもう疲労が頂点に達していたためさつさと寝てしまおうと考えた。

先ほどまで居眠りをしていたのだが身体が幼少化しているせいか睡眠欲はまだ旺盛だった。

手早く風呂を済ませた一夏はいつものパジャマを着込んでから布団に入った。

（朝に身体が戻ってるならこの方がいいしな）

それが理由だ。

幾分、寝心地は悪いが我慢して一夏は目を閉じて夢の中へと旅立っていた。

補足だが、この日千冬の撮った2人の居眠りツーショット写真は焼き増しして1枚は織斑家のアルバムに、もう1枚はシャルロットの部屋のフォトフレームに飾られたのであった。

翌朝

『ぴゅぴゅ、ぴゅぴゅ』

「うーん……、朝かぁ……」

モゾモゾと布団が動きそこから目覚まし時計を止めようと手が伸びる。

（カチッ）

「手が届いた……。ってことは……！」

一夏は飛び起きて自分の身体を確認する。

パジャマの袖から手は出ていて裾からも足が出ている。

窓に目を映すと朝の澄んだ空気のお蔭か窓は一夏の姿をハッキリと映していた。

そう今の一夏の姿を。

「元に戻った！よかったぁー！！」

朝っぱらから歓喜の声を上げる一夏。

まあ、昨日彼の身に起こった事を考えれば大目に見てやって欲しいところである。

「さて、朝飯作るか」

気分も上々に一夏の今日の1日が始まったのであった。

おまけ

「ふっふっふ、まだこの薬は手を加える必要がありそうだねえ
次はどう手を加えようかなあ」

今回の騒ぎの元凶がまた何かを企んでいた。

それもいつかきつと語る日が来るであらう。

第三十五話 小っちゃいって事は便利だねっ

♪

後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

一夏幼少化編いかがでしたでしょうか？

まったりを目標に今回の話を書き上げました。

束の出番はこういった強引な展開じゃないとこの作品だと無理だと感じたので捻じ込みました。おまけでもありますがまだあの薬の出番は終わっていません。次は誰がターゲットになるかはそれまでの楽しみに。

前書きにも書きましたお知らせですが、実は僕は劇団員をやっています。来週に舞台公演があります。その影響で今月は執筆に時間が取れないので9月の更新はこれでストップとさせていただきます。次回更新は10月頭を予定しています。楽しみにしてくれている方には申し訳ありません。

しかし、演技に触れる仕事してるのに駄文しか書けない自分が恥ずかしい……。まあ、演じるのと書くのって違うんですよ！！

では公演頑張ってきます！

また次回に！

IF編 折野壱佳、今日から高校生です（前書き）

お久しぶりです。TAKUMAKI?です。

舞台公演も無事に終わって執筆にも時間が取れるようになりました。

今回の話は思いっきり本編とは関係ないIF編です。

あいえずっ！のコミックを見てIF>インフィニット・フォーチュンくを見たら書きたくなったので思いっきり執筆途中の本編の放り出して書きました。

ところどころ拙い出来になっていますがよかったですらどうぞ

IF編 折野壱佳、今日から高校生です

春である。

桜は咲き誇り、温かな春風がそれらを穏やかに揺らし、陽はつららかに大地を照らす。

誰もが言う気持ちの良い春である。

side 壱佳

「朝だ・・・、起きなきゃ」

私の名前は折野壱佳おりのいちかです。

朝を告げる鳥の囀りが心地良い天然の目覚ましとなり、太陽は燦々と大地を照らし緑に輝きをもたらしています。

そのまどろみに身を任せてしまいたくなる部屋の中、私は家族の誰よりも早く目を覚ましました。

ベッドから起き上がると背伸び一つして窓を開ける。

天気も雲一つ無い快晴で春独特の風がそよそよと私の髪を撫でた。

「今日から高校生か」

今日は私が入学する私立逢越学園の入学式の日です。

「制服制服」

真新しい私立逢越学園の制服に袖を通すと一段と胸が躍った。

新しい世界の幕開け。

誰しもが胸を躍らせるもの。

私は今日から新たな一步を踏み出します。

「朝ご飯作らなきゃ」

私は自室をあとにして1階のキッチンへ朝食の準備に向かいました。

洗面所で顔を洗い、髪をブラシで梳かしてスッキリしたところで私は朝食の用意を始めた。

この折野家では一番寝起きがいい私が朝食の用意をするのが日常で今日は和食でまとめてみようと思います。

メニューは白いはご飯にわかめと油揚げの味噌汁に玉子焼きに焼鮭と和食の王道と呼べるメニューです。

うん、朝はやっぱりコレが一番だね！

「「おはようき佳」「」

「ああ、おはよう。百代姉さん、十昭兄さん」

朝食の用意をしていた私が居るキッチンに2人の男女が声を掛けてきました。

女性の方は折野百代^{ももよ}さん。私の姉で折野家の長女です。スーツ姿で鞆を手にして仕事に行く準備も万全みたいです。

男性の方は折野十昭^{とあき}さん。私の兄で折野家の次男です。まだ起きたばかりなのか服はまだパジャマのままでした。

「千尋兄^{ちひろ}さんはやっぱりまだ？」

「うん」

「あの兄が自力で起きると思うの？」

玉子焼きを頬張りながら十昭にいさんが、コーヒーを啜りながら百代姉さんが苦笑いで答えてきた。

「じゃあ、私が起こしてくる」

「任せるわ」

「よろしくな」

そう言って私はリビングをあとにして2階に上がり、そのまま長男である折野千尋兄さんの部屋へ向かった。

『コンコン』

千尋兄さんの部屋のドアをノックしてから声を掛ける。

「千尋にいさ〜ん、朝ご飯できたから起きて〜。そろそろ起きないと時間もマズイよ〜」

「ん〜」

部屋の中から寝惚けた声が聞こえた。

声は千尋兄さんのものだった。

「起きた？朝ご飯できてるから早く準備して来てね」

「あゝ」

どうやらまだ半覚醒状態らしいけど部屋には入らない。
入ったら怒られちゃうからね。

とりあえず私はリビングへ降りることになった。

千尋兄さんも合流し兄弟4人がテーブルを囲み一緒に朝食を取る。
この家の住人である折野家はこれで全員集合となります。

私達には両親がいません。

何故かいないのかというと、一言で言うなら『死別』です。

私達の両親は外交官をしていました。

仕事で家を空けることが多かったけど家にいるときは家族の時間を
大事にしてくれた。

時には仕事で海外に行くときに私達を連れていくこともあった。

仕事を放り出して家族で海外観光を楽しんだりもした。

公私混同とも取れることとしていた両親でしたが仕事をするときはき
ちんとこなす人たちだったので信頼もされていました。

そんな両親の愛情をすっかり感じて育った私達4人は幸せでした。

しかし6年前に事件が起きた。

両親は仕事の為に4人を家に残して海外へ向かい、その飛行機が事
故に遭い墜落。

乗客数百人の命が失われました。

その中には私達の両親がいました。

突然の両親との死別。

両親はもしものときの為にかなりの額の遺産を残していたため私達4人が生きていくための資金は充分だった。

親戚関係者が私達4人を引き取るという話もあったけど4人一緒と
いうのは難しく、それぞれ別々に引き取られることになったけどそ
んなのは4人とも嫌でした。

親戚関係者には無理を言って私達は両親の残してくれた家で暮らす
ことになりました。

それから6年間、辛いこともあったが私達は負けませんでした。
4人は互いに差さえあって生きてきました。

家族の、兄弟の愛を感じて来ました。

side out

アイキャッチしりとり

杏佳「メチャクチャ違和感ありませんか？」

一夏「確実にあると思うぞ？」

side 杏佳

「早いものだな。壱佳ももう高校生か」

食後のお茶を飲みながら千尋兄さんが呟いた。

千尋兄さんは今日から私が通う私立逢越学園で世界史の先生をしています。

両親を失ってから折野家の家長として私達を支えてきた苦労人なのですが、家では案外だらしない人なのです。

お部屋は散らかしっぱなしだし、休日は昼過ぎまで寝てるし、家事もまるでダメだし。

人はいかけによらないって千尋兄さんのことだと思っなあ。

「壱佳、何か失礼な事を考えているだろう？」

「えっ！？な、なんでもないよ！」

危ない危ない……。

千尋兄さん鋭いから私の考えてることがわかるみたいでいつも見透かしたように睨んでくるんだよね……。

「あんたは考えてることが顔に出やすいからね。気をつけなさい」

私に注意してきたのは百代姉さん。

千尋兄さんと同じで私立逢越学園で養護教諭を務めています。

でも、女性にしては鋭い目とぶっきらぼうな物言いが玉に瑕で一部の人からは恐がられたりもしますが腕は確かで周囲の信頼は厚く、

『口は悪いけど腕は立つ』という言葉の代表例みたいな人なのです。私はもつと笑顔を見せるようにした方がいいんじゃないかなと思うだけだなあ。

そうすれば男性から凄く人気出ると思うのに。

私と違って美人だし、胸だって私と違って凄く大きいし……。

ふん、いいもんいいもん！私はまだ成長期だからこれから大きくなるんだもん！！

「2人とも、そろそろ準備しないと遅刻するよー」

そう言つて2人を促したのは十昭兄さん。

歳は私の2コ上で私立逢越学園の3年生で生徒会長を務めています。一言で言えばマイペースで周囲の人は十昭兄さんのペースに知らず知らずのうちに巻き込まれて毒気を抜かれてしまう事があります。頭もよく器用で物事のイニシアティブを握っているタイプで一見完璧超人のようですが実は背が低い事を気にしています。

確か身長157cmだったかな？

その事を指摘すると物凄い笑顔で「ぶっ殺すぞぉ」と言われるので注意が必要です。

さて、十昭兄さんの指摘があつたように千尋兄さんと百代姉さんはそろそろ家を出ないとマズイ時間です。社会人つて本当に大変なんだなあ。

「では、俺はもう行く」

「私も行く。今日はちょっと早めに着きたいから」

「二人共、いつてらしゃい」

「いつてらっしゃい」

十昭兄さんと一緒に2人を見送る。

「さて、僕達も準備して行こうか」

「うん」

鞆を手に取って靴を履いて私達は玄関を出た。

「忘れ物は無い？」

「うん、大丈夫」

「じゃ、行こう」

「うん」

十昭兄さんと並んで歩き出す。

逢越学園は家からは徒歩で10分ほどのところにあるので余裕を持って行動すれば時間を気にする必要はさほどありません。これから始まる高校生活に私は胸を躍らせる。

「んっんんんっん」

鼻歌を歌いながら思わずスキップしてしまいそうなほど私は舞い上がっています。

何だか心が勝手に高揚してしまってどうしようもない状態です。私って結構浮かれ者みたい。

「・・・」

「ん？なに十昭兄さん？」

十昭兄さんが落ち着いた目で私を見ていたので気になった私は訊ね

てみた。

「壱佳はまだまだ子供だなと思ってさ」

「えーっ！？ひどーい十昭兄さん！」

「そうやって怒るところが子供だな」

「むー」

「あはははっ」

笑いながら十昭兄さんが歩き出す。
頬を膨らませながら私はその後続いた。

「じゃ、クラス分け見てくるね」

「ああ、僕も入学式の準備に行くよ」

「うん、またあとでね」

「僕のスピーチ、ちゃんと寝ないで聞いているんだぞ」

「わかってるよ。それじゃね」

十昭は体育館の方へ歩いて行った。

1人校門に残された壱佳はふっと空を見上げた。雲一つ無い快晴で
絶好の入学式日和だ。

見上げた視界には校門に掲げられた大きな看板がありそこにはこう

書かれていた。

『ようこそ逢越学園へ』

「私も行くっ」

吉佳はクラス分が掲示されている掲示板へと歩き出した。

IF編 折野壱佳、今日から高校生です（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

とりあえず1話の分だけIF編を書いてみました。

性転換したヒロイン達も出そうと思ったのですが今回はここで区切りました。多分次回があるならIF編第二話で登場させます。

さて、本編の執筆に戻るか

第三十六話 ホウキノココロ（前書き）

ちょっと間隔が空いてしまいました。すみません。
リアルでちょっと忙しかったり、体調を崩したりしていました。

今回は筭がメインです。

第三十六話 ホウキノココロ

side 篇

5月も終盤に差し掛かったとある日の朝。

私、篠ノ乃箒は毎朝行っている鍛錬の真っ最中だ。

「945!946!947!948!949!950!」

木刀の素振りは毎朝1000回は行うことにしている。

真剣を用いてやる時もあるが今日は平日ということもあって木刀で済ませている。

真剣を用いて鍛錬する場合はいつも以上に集中力を高めているために時間の経過を忘れてしまうことがあるので真剣は休日、平日は木刀というのが私の中では決まっている。

「1000!ふうっ・・・」

素振りを終えてタオルで汗を拭いながら一息つく。

今日はあまり天気が良いくない。

「今日は一雨くるかもな」

空には雲が掛かっていて雨が降りそうな天気だった。
そのせいか少しじめつとした空気が私の肌を撫でる。

「・・・風呂に入ろう」

不快な空気を感じ取った私は鍛錬を切り上げて風呂に向かった。

side out

篠ノ乃家の風呂場は総檜木のしつかりしたもので、大人4人は充分に足を伸ばして入れるほどの広さがある。
下手な温泉宿の浴室よりも豪華な造りである。

（ざばん）

桶を使って勢い良く頭からお湯を被る筈。
ぐっしょりと濡れた黒髪からポタポタと滴が落ちる。
筈は湯船に浸かる前にこうして数回頭からお湯を被ってから入る癖がある。

こうすることで先ほどまで身体に纏わりついていた汗が一気に流されて気分もスッキリして湯船に浸かれるからである。

「やはり、風呂はいい・・・」

湯船に浸かると筈はそんな言葉を漏らす。
筈の好みに合わせて湯船には少し熱めのお湯が張られていて、その中で身体を伸ばすたびに、ちゃぷ・・・と小さな水音がこだまして、筈の気分をどこまでも和らげていく。

「・・・・・・・・・・」

しばらくの間ぼつとその感覚にたゆたっていた筈は、ふとある人物の事を思い出す。

「・・・・・・・・、いちか・・・」

もちろん、片想いの相手の一夏である。

思い出すのは、先日のGWで久しぶりに一夏と剣道の試合を行った
ときのこと。

試合の結果は筈の一本負けだった。

俗に、剣の道は三日欠かせば七日は失うと言う。

技術的に後退するのではなく、感覚的に喪失するのだ。

そして、それが何より取り戻すのに時間がかかると言う。

感覚とは、経験の積み重ねの果てに生まれる合理である。

得るに難く、失うに易い。

だが、一夏にはこれが当て嵌まらなかった。

一夏は中学に入学してからは千冬達の負担を少しでも減らそうとアルバイトを始め、篠ノ乃道場を辞めてしまい剣道をする機会が減ってしまったが剣の腕が鈍ることがなかった。

一夏は時々篠ノ乃道場にやってきて鍛錬をするだけなのだがGWの時のように試合をしても筈が勝てる確率は1割ほどしかない。
それほどまでに一夏には才能があった。

「一夏、格好良かったなあ・・・」

筈にしては珍しく目尻をとろんつとさせて恍惚といった表情を浮かべる。

父親の篠ノ之柳韻りゅういんがこれを見たら「だらしない！」と一喝されそうなお顔だった。

まあ、筈も15の春を迎えた少女なのだからその辺りは大目に見てあげてほしいものですが。

「・・・・・・・・・・はっ!？」

ふと我に返る筈。

とろんっとしていた目尻をいつものキリッとした吊り上がった目尻に戻す。

そして、恥ずかしさを誤魔化すためか今度は一夏に対して悪態を表す。

「ふん……。一夏の馬鹿者め」

そう悪態をつくると鼻まで湯船に浸かり、息を吐いてぶくぶくと泡を立てる。

筈が一夏に片想いしてからかれこれ8年近い年月が経っている。

それだけ長い間、一夏を想い続けていたにもかかわらず、想いが届く気配は欠片もない。

織斑家と篠ノ乃家は昔から親交が深い間柄だったが筈自身はそれほど人付き合いが得意な方ではないので一夏の事も話に聞くだけだった。

実際小学校に入学してから同じクラスであったし小学校入学と同時に一夏も篠ノ乃道場の門下生となったのだが簡単な話をするくらいであまりかわるうとはしなかった。

ただ父の指導の下で剣道をしているだけだった。

そして一夏との関係を深める事件が起きた。

アイキヤッチしりとり

箒「・・・ぞわぞわ」

柳韻「私の出番は、まだか・・・？」

幼い頃から剣道をたしなんでいた箒は、その強さから「男女」とい
じめられていた。

それは箒が小学2年生の6月の事だった。

「おい、男女」。今日は木刀持ってないのかよ」

「・・・竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな」

「・・・」

「喋り方も変だもんな」

箒は答えなかった。

男子数人に取り囲まれながらも凜とした眼差しで相手を睨んで、一
歩も引こうとしない。

（じゃぼんっ！）

突如、大きな水音が教室に響いた。

「うつせーなあ。お前ら暇なら帰れよ。それか手伝えよ」

水音の原因は教室の掃除をしていたひとりの男子が乱暴にバケツにモップを突っ込んだ所為であった。

その掃除をしていた男子が一夏だった。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、この男女が好きなのかぁ？」

「掃除の邪魔なんだよ」

不快きわまりないといった表情で一夏は男子達を睨んだ。

「へっ。まじめに掃除なんかしてよー、バツカじゃねーの——
つのわ!？」

いきなり箒が男子の胸倉を掴んだ。

「まじめにすることの何がバカだ？お前らのような輩よりはるかにマシだ」

何を言われても手を出さなかった箒が、初めて手を出した。

先ほどの男子の発言が箒にはどうしても許せなかった。

しかし、これが火に油を注ぐ結果となる。

「あー、やっぱこいつらそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。」

知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

一夏と箒が同じ道場に通っている事はクラスの中でも知るところであつた。

この日も朝の鍛錬で一緒だったのだがちょっと試合をして別れの挨拶をしたくらいだ。

しかし、古今東西、子供のからかいというは度し難いものである。このことでも「夫婦だ夫婦だ！」と囃し立ててくるものである。

「だよなー。この間なんか、こいつリボンしてたもんな！男女のくせによー。笑つちま——」

（ガアンツ！！）

モップが宙を舞い、男子の顔の横数cmのところを通り過ぎて壁に激突した。

男子達は何が起きたかわからなさそうに呆然とした。

箒も少し驚いたような顔をしている。

「笑う？何が面白かったって？その娘がリボンしてたらおかしいかよ。すげえ似合ってただろうが！ああ？何とか言えよ！！」

「お、お前、何すんだよ・・・せ、先生に言うからなっ！」

「女の子をよつてたかっていじめてた最低なやつらにそんな事言われたって怖くねえよ。勝手にしろよ。僕は、お前らを絶対に許さないからな」

このときの一夏には気迫というものが滲み出ていた。

男子達は一夏の気迫にのまれて、まるで蛇に睨まれた蛙のように立

ちすくむ。

そして、蜘蛛の子を散らすように男子達は教室から逃げていった。

数日後、放課後の鍛錬を終えた一夏と箒は篠ノ乃道場の水飲み場で
各々水を飲んだり顔を洗ったりしていた。

「・・・お前は馬鹿だな」

「あん？何がだよ」

顔を洗っていた一夏に箒が話しかける。

いきなり馬鹿と来てるいるので一夏も少ししかめっ面だ。

「あんなやつら、私だけで対処できた。なのに余計な事を」

「ん？ああ、あのことが。別に僕はああいっやつらが許せないだけ
だ。よってたかって女の子ひとりをいじめるなんて最低な男のする
ことだろ」

「それが余計なことだと言って――」

「だから、お前も気にするなよ。前にしてたりボン、似合ってて可
愛かったぞ。またしろよ」

「なっ!？」

臆面もなくそう言った一夏に箒の頬が少し赤くなる。

そんなことを言われたのは家族以外では初めてだった。

「ふ、ふん。私は誰も指図も受けない!」

「そーか」

一夏は顔洗いを再開する。

箒は少し落ち着きなくそわそわしながら一夏を横目で盗み見る。

タオルで顔を拭いてスッキリといった表情の一夏に何故かちよつとドキドキした。

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ乃」

「待て」

「うん？」

箒は一夏を呼び止めた。

呼び止めたはいいが、何を話すかを考えていなかった箒はちよつと言葉を詰まらせる。

「・・・わ、私の名前は『箒』だ。いい加減、覚えろ。大体、この道場は父も母も姉も『篠ノ乃』なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」

箒は何故そんな事を言ったのか自分でもわからなかった。

でも、何故か一夏には名前で呼んで欲しかった。

「わかった。——じゃあ、『一夏』な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。この道場には『織斑』はふたりいる。それに、

うちの親とお前の親は仲が良いから一緒にいるときは紛らわしいだろう。だからお前も僕の事は『一夏』って呼べよな」

につこりと一夏は微笑んで見せた。

その笑顔はあまりにも無邪気で、箒は顔が赤くなるのを感じた。

「う・・・む」

「わかったか、箒」

「わ、わかっている！いい、いい、一夏！これでいいだろう！？」

「おう、それでいいぜ。それじゃ——」

「なっ！！？」

箒の心臓が跳ね上がった。

突如、一夏が箒を抱きしめたからだ。

同年代の男にいきなりそんなことをされてパニックになる。

「い、いきなりなにをする！！！」

箒は一夏を突き飛ばした。

顔の紅潮はもう最大まで達していたことだろう。

「あー、ごめん。僕の知り合いにフランス人の女の子がいるんだけどさ。その子が挨拶するときによく今みたいに抱きしめてくるからさ。まあ、友達になった挨拶みたいなもんだよ」

フランス人の女の子という単語に箒は少しムスっとする。

何故か知らないがイラッとした。

「・・・挨拶、か？」

「そうそう。名前で呼び合うつて事は僕達はもう友達だろ。これからよろしくつてことだよ」

「そ、そうか。わかった。——だが、この挨拶はもうやめろ！いいな！！」

「え？何でだよ？」

「恥ずかしいからだ！」

「僕は恥ずかしくないぞ？」

「私は恥ずかしいんだ！！」

「わかったよ。そうする」

「ふ、ふん！じゃ、じゃあな！！」

箒は一夏に背を向けて走り去る。

胸のドキドキが収まらない。

顔の紅潮も収まらない。

箒は自分がどうにかなってしまったのではないかと思ってしまう。でも、心にあるのはひとつだけ。

織斑一夏という同じ歳で同じ道場に通うひとりの少年だけ。箒はこれが恋なのだと知るのにそう時間は掛からなかった。

「あれが始まりだったな。私が一夏に恋をしたのは」

風呂場の天井を見上げながら私はそう呟いた。
教室での騒動。道場の水飲み場での遣り取り。

これだけで私は一夏に恋をしてしまった。

我ながら単純だと思う。

でも、私は一夏が好きだ。

この想いはもう止まらない。

私の譲れない想いだ。

シャルロットとは恋敵同士とはいえ仲の良い友人だ。

だが、たとえシャルロット相手でも譲りはしない。

お互いが一夏に懸想しているのは確認済みだ。

でも、お互いに譲る気が無いのも確認済みだ。

「ま、負けるものか！」

自分自身に発破をかけて私は風呂場をあとにした。

「おはよう篝ちゃん♪今朝は随分お風呂長かったね」

「いえ、ちよつと考え事をしていました」

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲んでいた私にいつもの
のちゃらけた感じで姉さんが話しかけてくる。

今朝は珍しく姉さんが家に居た。

いつもは姉さんが言うに『研究室』とかいう場所に籠りっぱなしで
全く家にいないのだが、一体この人は普段何をしているのか実妹で
ある私にもわからない。

「箒ちゃん、時間大丈夫？もう結構な時間だよ？」

「え？」

姉さんに言われて私は時計を見る。

只今の時刻AM8:12

「……ち、遅刻する！！」

どうやら私が風呂場で考え事をしているうちに時間は結構経っていたらしい。

急いで行かなければ本鈴に間に合わない。

私は大急ぎで支度をしてから玄関に向かった。

「では、行って来ます！」

「いつてらしゃい」

姉さんの暢気な笑顔に見送られて私は家を出た。

遅刻なんかしたら千冬さんの出席簿アタックを食らうハメになってしまう。

それだけは何とかして避けたかった。

信じられないくらい痛いのだあれは。

本当にあれは出席簿なのかと疑いたくなるほどに。

あゝ、くそお！

何で私がこんな目に遭わなきゃいけないんだ！

side out

おまけ

「おっす、おはよう篇。珍しいなあ、お前が遅刻するなんて。寝坊でもしたのか？」

「……………」

「千冬姉の出席簿アタックは恐ろしいからなあ。気をつけた方がいいぜ」

「……………(ギロリ)」

「ん？何だよ？」

「——だ」

「うん？」

「お前のせいだ！」

「へ？何が？」

「ふん！」

「…………訳わかんねえって」

簾が一夏に対して素直になるのは何時の日になるであろうか。
それはまだ誰にもわからない。

ちなみに午後から雨も降り出して簾は傘を忘れていたので鈴の傘に入ってもらって帰ったそう。

「お前のせいだ!!」

「だから何だよ!？」

帰りの道すがら、そんな声が雨の降りしきる路地に木霊していた。

第三十六話 ホウキノココロ（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回は箒をメインでお送りしました。

ファース党の友人にこの小説を見せたのですがシャルロット以外のヒロインの扱いがぞんざい過ぎると一喝されました・・・。

というわけでこれからは他のキャラ達にも少しずつスポットを当てようと思っています。考えていないわけではないのですが、やっぱり僕は一夏×シャルロット主義なもので・・・。

箒と一夏の過去は原作をちょっと僕なりにアレンジして書きました。剣道場でハグしたのも海外に行く事が多い一夏がちょっとその影響を受けたのを描きたかっただけです。

その結果、箒は一夏にオトされてしまいました。

シャルロットと箒は一夏をめぐる恋敵であると同時に仲の良い友人同士。この関係をどう描いていくかが割りと難しい。険悪にはさせたくないの・・・。

あと一夏はまだこのころは一人称が『僕』です。

何度も言ってますが『俺』になるときの話はそのうち書きます。大した理由がある訳ではありませんが・・・。

ではこれで～

第三十七話 L e d e u x i ? m e r e n d e z - v o u s (前書き)

一夏とシャルロットの2度目のデートです。今回デートはちょっと足を伸ばしてみようということに。

あと、一夏達が住む町の名前と電車の路線名などを設定しました。名前は5 p b . の名作「M e m o r i e s O f f シリーズ」から引用しました。後から取って付けた感は拭えませんがご了承ください。

第三十七話 L e d e u x i ? m e r e n d e z - v o u s

してつあしかじまでんてつあしかじません
私鉄芦鹿島電鉄芦鹿島線。通称「シカ電」。

それは一夏達が住む町に流れる私鉄の名前だ。

そして一夏達の住む町の最寄り駅、ふじかわ藤川。

シカ電の駅の中で最も大きな駅であり、他の路線に接続している。

駅周辺には「レゾナンス」をはじめ、繁華街が広がり若者から年配までを網羅する複合施設が存在し、毎日賑わいを見せている。

その藤川駅のホームに2人組の男女がいた。

「本当に今日は遠出でいいのか？」

「うん。たまにはこういうのもいいかと思って」

2人組とはもちろん一夏とシャルロットである。

先日の約束通りに2人は2度目のデートの出掛けるところである。

シャルロットの申し出により、今回は藤川駅周辺で遊ぶのではなく少し遠出をすることになったのである。

理由として前回のGWのときのデートでは箒と鈴に尾行され、数人の知り合いに目撃されていたからである。

シャルロットはデート現場を見られるのは恥ずかしいらしく知り合いがあまりいないであろう事を想定して遠出を申し出たのだ。

一夏も特に反対する理由もないのでこれに従い、この日は少し遠くまで足を伸ばしてみようという事になったのである。

「さて、電車も来たとし行きますか」

「うん」

休日で賑わうホームに電車が滑り込んできてホームに止まる。それはまるで2人を楽しい場所連れて行ってくれる遊園地のアトラクションのように感じられた。それに誘われるように2人は手をしっかりと繋いで電車に乗り込んだ。

side シャルロット

今日は僕と一夏の2度目のデートの日。

僕のたつての希望で今日のデートは少し遠くに足を伸ばしてみようという事になった。

電車に揺られながら一夏と他愛のない会話をしながら目的地に向かう。

一夏と話しているだけでこんなにも楽しい気分になるのはなんなのかな。

以前一夏は僕と一緒にいるだけで楽しいと言ってくれた。

それは僕も同じで一夏と一緒にいるだけで楽しい。

こうして2人でデートできる事も凄く幸せ。

でも、僕たちの関係は未だ恋人同士というわけではない。

一夏はこうして僕とのデートを楽しんでくれている。

待ち合わせ場所で合流して駅に歩き出すと手を繋いでくれる。

そのことは凄く嬉しい。

でも、一夏にとって僕はまだ幼馴染。

一夏は鈍感だから、僕の想いは恐らく伝わってはいない。

けどいつかはこの想いが届く日が来ると僕は信じている。

手に伝わる一夏の温もりが僕に温かな想いと嬉しい気持ちをくれる。それだけでこの想いを信じていける気がした。

「次は、芦鹿島、芦鹿島」

電車のアナウンスが次に止まる駅の名前を読み上げる。
僕たちが向かう目的地は『千羽谷^{ちしや}』はまだ先みたいです。

「そういえば、芦鹿島といえばさあ〜」

「ん？なあに？」

何かを思い出したように一夏が口を開いた。
僕はそれに耳を傾ける。

「芦鹿島といえば夏に大花火大会があるんだよなあ」

「大花火大会？」

聞いたことないイベントに僕はちよつと首を傾げる。

「ああ、そういえばシャルは日本に来たときは花火大会が開催される前にフランスに帰っちまってたから知らないんだったな。毎年8月の終わりに芦鹿島で開催されてる花火大会なんだけど、海に近い景勝地だから花火映えがバッチリでこの近辺じゃ夏の一大イベントって感じなんだよなあ。祭りの会場なんかはカップルで賑わうし、異性を誘って見に行くデートイベントとしても有名なんだぜ」

「そ、そうなんだ・・・」

子供の頃に僕が一夏に会いに日本に来ていたときは良くても8月の20日くらいまでしか滞在していなかったたのでその花火大会のことは知らないのも無理は無いと思った。
でも僕がフランスに戻ったあとにそんなイベントがあったんだ。

むう、ちよつと悔しい。

「じゃ、じゃあさ！その花火大会今年は僕と一緒に行かない？」

「ああ、いいぜ。シャルにもあの花火大会の花火は見せてやりたい
しな」

「いいの！？ありがとう！！」

「？礼を言うほどか？」

快くOKをくれた一夏に思わず僕はお礼を言ってしまう。
でも言いたかったんだから別にいいよね。
また先の楽しみが増えちゃったなあ。

「どうせならさ、箒や鈴達も誘ってみんなで行こうぜ。やっぱこう
いうイベントは大勢で行った方が楽しいもんな」

「・・・・・・・・・・」

「アレ？急に暗い顔になったけど、どうしたんだシャル？」

「なんでもないよ・・・・」

僕は2人きりで行こうと思って提案したのに・・・・。
もう、一夏のバカア・・・・。

「シャル、具合でも悪くなったか？大丈夫か？」

何か勘違いしている一夏は僕の顔を覗き込んできたけど僕はぐい

つとその顔を押し返した。

「・・・・・・・・・・」

僕は無言で目で訴える。

「シャル、あの――」

「一夏」

「お、おう？」

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

つい僕はそんな過激なことを口にしてしまう。

でも一夏が悪いんだからそれは許されてもいいはずだね。

「何だよ急に？――まあ、確かにそんな奴は死んだ方がいいとは思っけどな」

「鏡を見なよ」

「えっ？・・・ん？っとお」

電車の窓を鏡代わりにして一夏は急に身だしなみチェックを始めた。そっという意味で言ったんじゃないんだけど・・・。

「はあああああ~~~~・・・」

今日のデートの滑り出しは僕にとってはあまり良いスタートとは言

えなかった。

side out

アイキャッチしりとり

シャル「果報は寝て待て」

一夏「天を怨みず人を尤めず」

side 一夏

「千羽谷、千羽谷です。お忘れ物の無いようご注意ください」

電車アナウンスが目的地の千羽谷に到着した事を告げている中、シャルがさっさとひとりで電車を降りて先に行ってしまう。

「おいシャル、待てっ！」

駅の改札を抜けたところで俺はシャルの手を取ってその場に止める。シャルは千羽谷のことは詳しくないから逸れたりしたら大変だ。けど、シャルの表情はまだちょっと不機嫌そうだった。

「なあ、何をそんなに怒ってるんだよ」

「・・・・・・・・」

うつ、何か無言の圧力を感じる・・・。

俺、本当に何か気に障るような事言ったのかなぁ・・・。

「なあ、シャル。理由はわからないけど、何か気に障るような事言ったなら謝るから。ごめん！だから機嫌直してくれって」

千羽谷まで足をのばしてのデートだからこのままシャルが不機嫌だとせつかくのデートも暗くなってしまう。

シャルにそんな想いはさせたくないし俺もそんなのは嫌なので何とかシャルのご機嫌を取ろうと俺は必死に謝った。

「なら、僕のお願ひ聞いてくれる？」

おつ、必死の謝罪が功を奏したのかシャルの顔が少しイタズラっぽい笑顔になった。

理由はわからないけど俺のせいでシャルが機嫌損ねたみたいだし、ここは甘んじて受けようではないか。

「おつ、いいぜ！何だって聞いてやる！」

「本当に？」

「男に二言は無い！！」

俺は自分の胸をどんつと叩く。

さあ！シャルのお願いとやらを叶えてしんぜよう！！

「わかった。それじゃあ、えいつ！」

「おうっ!？」

シャルは俺の横に来ると唐突に俺の腕に抱きついてきた。
今は2人で腕を組んで密着している状態だ。

「あ、あのー、シャル？」

「僕のお願いを聞いてくれるんでしょ？」

「えっ?あ、ああ・・・」

「なら、今日は1日僕と腕を組んでいる事。これがひとつめのお願い
い」

「う、うん」

密着しているからかシャルの温もりを感じる。
そ、それにシャルの胸が・・・。

「な、なあ、そのお・・・あ、当たってるんだが・・・」

意識してしまっでどうしようもない俺は我慢しきれずにそれを口に
してしまう。

「何が？」

「い、いや、何がって・・・」

「ん？」

確信犯な笑顔でシャルはさらに強く俺の腕に抱きついてくる。

やばい！ヤバイ！！YABAI！！俺、ピンチ！！！！

し、しかし、腕に当たる胸の柔らかさに顔が思わず緩んでしまいうになる。

ああ、男って悲しい生き物だ……。

「お、お願いなら、仕方ない、よなあ……」

コレも俺が招いた事態だ。

やってやろうじゃないか！

「うん！じゃあ行こう」

「お、おう！」

シャルに腕を引かれて俺達は歩き出す。

「
♪♪」

どうやらシャルの機嫌も直ったようで嬉しそうに鼻歌を歌いながら歩いている。

俺もシャルの機嫌が直ってくれてホッとした。

シャルの ひとつめのお願いもちやんと聞いたし……

ひとつめの……

ひとつめっ!？

「ちょおっと、シャルロットさんや？」

「ん？なあに一夏？」

眩しい笑顔でシャルが俺を見つめてくる。
その笑顔があまりにも清々しいのでちょっと惚けてしまう。

「あ、いや、あのさ、さっきひとつめのお願いつて言ったか？」

「うん、言ったよ」

「お願いつてひとつじゃないのか？」

「一夏はひとつで許してもらえと思ったの？」

「うう・・・」

な、なんだろうか・・・。

シャルの顔は笑っているのだが、何かほんの少しだけ怖い・・・。
俺ってさっきの電車でお願ひひとつじゃ許されないほどマズイことを口にしたのだろうか・・・。

「一夏、男に二言は無いんだよね」

「お、おう」

「だったら、僕のお願い最後までちゃんと聞いてね」

「わ、わかりました」

「うん！えへへ」

嬉しそうにシャルがはにかむ。

そんなうれしそうな顔をされたらお願いされるのも悪くないと思えてしまうあたり、やっぱり俺はシャルのこの笑顔を見るのが好きなんだなあと思っただのであった。

晴れ渡る5月終わりの日曜日。

こうして、俺達の2度目のデートは始まったのであった。

s i d e o u t

第三十七話 L e d e u x i ? m e r e n d e z - v o u s (後書き)

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

はじまりました、一夏とシャルロットの二度目のデート。

ちなみにタイトルの「L e d e u x i ? m e r e n d e z - v o u s」はフランス語で2度目のデートという意味です。

今後はちよつとだけメモオフキャラとの絡みも考えています。 出番はあまりありませんが・・・。

あと、このデートの話が終わったら作中は6月に入ってラウラが登場する予定でしたがちよつとその前にセシリアの話を入れたいと思います。

ラウラ登場を待っている方には本当にすみません。 もうちよつとだけお待ちください。

ではこれで～

第三十八話 訪れたカフェで 前編（前書き）

一夏とシャルロットの2回目のデートの第二話です。

今回は「思い出にかわる君」Memories Off」で登場したあの店に一夏とシャルロットが来店します。作品を知らない方はすみません・・・。

第三十八話 訪れたカフェで 前編

千羽谷。

都内まで続いている芦鹿島線本線との接続駅で、シカ電の駅の中では藤川に次ぐ大きさを誇る。

周辺には大学や総合病院などの大きな施設があり、藤川に負けないほどの賑わいを見せる街である。

千羽谷は藤川からシカ電で11駅離れたところにあり、かがみがわ嘉神川ちまたという川が流れていてその川を境に東と西で別れており、巷では「西の藤川」、「東の千羽谷」と並び称されている。

一夏とシャルロットはまずはぶらりと千羽谷を散策することになった。

これは千羽谷を初めて訪れたシャルロットのために一夏が千羽谷を案内するためである。

午前中は半ばウィンドウショッピングのような感じで、シャルロットが目を輝かせながらブティックのショーウィンドウを眺めたり、何気なく入ってみた雑貨屋を物色したりと前回のデートとしていることは大して変わってはいない。

でも一夏とシャルロットにはそんなことは関係ないようで、2人とも楽しんでデートを満喫している。

そうこうしているうちに時間はお昼過ぎとなっていた。

side 一夏

俺とシャルはあてもなく千羽谷の街をブラブラしていたのだが時間も忘れて色々見て回っていたせいで時間はもう昼過ぎとなっていた。

「シャル、そろそろどこかで昼飯にしようか」

「あ、うん、そうだね。僕もちっとお腹空いちゃったよ」

「なら、どっか店を探そうぜ。うーん、どこがいいかな?」

俺もそれほど千羽谷に詳しい方じゃないかこういうときは自分の足で店を探さなきゃいけない。

適当にブラついてた所為か目抜き通りから少し外れてしまっていた。

うーん、これは下調べをしておくべきだったなあ。

この前の映画の事といい、どっか抜けてるよなあ俺達。

「あ、ねえ一夏。あそこのカフェはどうかかな?」

シャルが指差した先にはひとつのカフェがあった。

ちよっと大通りから外れた場所にあるが外観から見ても店の雰囲気は悪くなさそうだった。

チエーン店のような賑わいは無いが地元の人しか知らないような静かな感じの店って感じがした。

「考えてても時が移るだけだしな。あそこにしよう」

「うん。じゃあ行こう」

シャルに腕を引かれて俺達はそのカフェに向かった。

全体的に白い外装。そして、ややポップな色使い。店の看板には『c u b i c c a f e』と書かれていた。

「『キュービックカフェ』か。結構シャレた名前だな」

もしかしたらこういう店を隠れた名店と言うのかもしれない。
まあ、まだ入ってすらいないから名店かどうかもわからないんだけど。

「そうだね。さあ、入ってみようよ」

俺達は店の中へ足を踏み入れた。

「いらっしゃいませー」

店内に入ると男性の声が響いた。

見た目は20代後半くらいだろうか。

男性店員がカウンターのところでグラスを拭きながらこちらに顔を向けていた。

「どうぞ、お好きな席へ」

「あ、はい」

俺達は手近なテーブル席に座った。

店内はイームズ風のオシャレな家具が並んでいて内装も結構良い感じだった。

やっぱりこれは隠れた名店なのではなからうか。

「君たちは新顔だね。うちは結構常連しか来ないような店なんだけど」

先ほどの男性店員が水を持って話しかけてきた。
いきなり話しかけられて俺もシャルもちょっと困惑する。

「はあ。俺達普段は藤川に住んでいるので千羽谷にはあまり来ないので」

「へえ、藤川ね。あっちに住んでる人が千羽谷まで来るなんて珍しい。遊ぶ場所はあるはずだし」

「あ、今日はちょっと遠出をしてみたいって僕のわがまを聞いてくれまして」

困惑気味だったシャルも会話に入ってきた。

見た感じこの店員はそんなに悪い感じはないので普通にお喋りができそうだった。

「ふむ。君は日本人じゃないみたいだね。見た感じだと欧州人かい？」

「あ、はい。出身はフランスです」

「そうか。それにしても日本語上手だね」

「小さい頃からよく日本には来てましたし。今は藤川にある高校に通ってますから」

「藤川の高校というと藤林高校かい？」

「いえ、藍越学園です」

「おお、藍越か。うちの常連にあそこの卒業生がいるよ。良い所みたいだね」

「そうですね。俺達はまだ1年生ですけど、あそこは一応進学校なのに校風は結構自由で好きですね」

「うむうむ。前途有望な若者が集う学び舎というのも粋だねえ」

店員は結構気さくに世間話をしてくる。
うゝむ、今時こういう人がいるんだな。

「ところで、君たちは恋人同士かい？」

「えっ！？」

俺とシャルの声が見事にハモった。
突然そんなこと言われれば誰だって驚く。

「えゝつと、それは、そのゝ」

「・・・・・・」

あたふたしてしまう俺と恥ずかしそうに顔を俯かせてしまうシャル。

「あはははっ！いやあ、若いていいねえ！初々しいくてさー！」

無遠慮に笑う男性店員に困り果ててしまう。

ってゆーか何で俺達が初めて入った店でこんな目に遭っているんだ？

「ああ、ゴメンゴメン。つい話し込んだじゃったね。注文が決まった

ら声を掛けてね」

一言謝罪を入れてから店員はカウンターへ戻って行った。
とりあえず、助かった……。

「なんかマイペースな人だったね」

「え、ああ、そうだな」

まだ顔を赤くして俯いているシャルにこっちもちよつと気まづくなる。

つたく、どうしてくれんだよあの店員……。

side out

アイキャッチしりとり

シャル「頭巾と見せて頼冠^{ほおかむり}」

一夏「柳暗花明^{りゅうあんかめい}」

side シャルロット

僕と一夏が入ったカフェで店員に「恋人同士かい？」と聞かれて僕は恥ずかしくて顔を赤くして俯いてしまった。
でも、僕は僕と一夏が恋人同士に見えることに嬉しさも感じてしまっていた。

他人から見ると僕達はそう見えるんだ。

えへへっ、恥ずかしいけどちょっとニヤケちゃいそうだよ。

「ほ、ほら、注文決めようぜ！ほら、メニュー」

「う、うん」

一夏があたふたとメニューを渡してくる。

何か一夏も恥ずかしがってるみたい。

あたふたしてる一夏がちょっと可愛く見えたのは内緒。

「お、俺はこの学生ランチセットにしようかな。今日のランチはチキンカツの卸し大根ソースだってさ。うまそうだぜ。デザートにヨーグルトムースも付いてくるみたいだ。シャルはどうする？」

「そ、そうだね。僕も同じのにしようかな」

「わかった。すいませ〜ん」

一夏が先ほどの男性店員を呼んだ。

「はい。注文決まったかい？」

「えっと、学生ランチセットを2つで」

「学生証はあるかい？」

「あ、はい」

学生向けメニューは学生証の提示が必須みたいでメニューにも「学生向けメニュー」を注文する場合は学生証を提示していただきます。お持ちでない方にはお出しすることはできませんのでご了承ください」って書いてあった。

僕も一夏も普段から学生証は財布の中に入れておくので休日でも持ち歩いているのでした。

「はい、確かに。飲み物は？」

「俺はアイスコーヒーで。シャルは？」

「僕はアイステイーで」

「『学ラン』2つ。アイスコーヒーとアイステイーね。了解、ちょっと待っててね」

店員は手際よく注文を取ると素早くカウンターに戻って行った。もしかしてあの店員は結構仕事できる人なのかもしれないなあ。

「しかし、午前中だけでも結構色々回ったもんだな」

「そうだね。藤川とはちょっと違った楽しさもあったしね」

「藤川には藤川の、千羽谷には千羽谷の楽しみ方があるってことだな」

ランチを待っている間に僕と一夏は午前中の千羽谷デートの感想を

言い合う。

藤川は割りと多くの年齢層に人気があるところだけど千羽谷はどちらかというと若者中心の街で並ぶ店も若者向けの店が多かった。藤川よりは都心に近いこともあって駅周辺の人の行き交いも藤川よりも激しかったような気がする。

藤川は『レゾナンス』のように人気スポット凝縮したショッピングモールが存在するが千羽谷にはそれがないみたい。

でも、駅周辺の店の数は藤川にも負けないくらいだったからただ歩いてウインドウショッピングしているだけでも色んな発見があつて楽しかった。

やっぱりたまにはこうして一夏と一緒に遠出するのもいいなあ。

「お待たせ。『学ラン』2つに飲み物ね」

しばらく他愛ない会話をしていると注文した料理が運ばれてきた。ちなみに、先ほどから店員が言っている『学ラン』というのは学生ランチセットの略称みたいです。

学生割引が適応されるみたいで一般客よりは少しだけ安く済ませることができるといいで、普通のランチセットのメニューにも同じ料理があるらしかった。

もちろん、ドリンク・デザート付きで。

「おお！実際見ると一際美味そうだな！」

「そうだね。僕もちょっと我慢できないかも」

実際お腹もちょっと空いているし目の前の料理は一夏の言うように凄く美味しそう。

チキンカツに掛かった仄かなソースとその上に乗せられた紫蘇の香りが食欲をそそる。

「デザートは後で持ってくるから。ごゆっくり」

メニューを運び終えた店員は素早くカウンターへ戻って行った。
うん、やっぱり凄く手際がいいなあ。

「じゃあ、早速頂こうか」

「うん」

フォークとナイフを取って早速料理を食べることにした。

「いただきます！」

「いただきます」

一夏、僕の順番で手を合わせて、チキンカツの卸し大根ソースを口にする。

「おお、うまい！」

「うん、美味しいね」

チキンカツと卸し大根のソースが絶妙に絡み合って、その上に乗せられた紫蘇がまた良いアクセントになっていて凄く美味しい。

「うむ、このソースの隠し味は何を使ってるのかなあ・・・」

一夏はソースの下味についてあれこれ思考してるみたいで一口食べるごとに味を分析している。

こういう姿勢は料理部の部員としては見習うべきなのかもしれないなあ。

あれこれ思考をしながら料理を口にする一夏を僕は温かく見ながら食事を続けた。

s i d e o u t

第三十八話 訪れたカフェで 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

本当はキュービックカフェの件は1話に纏めるつもりだったのですが長くなりそうなので2話に分割する事に。

キュービックカフェへやってきた2人はお昼を満喫。

今回登場したあの店員はもちろんあの「テンチョー」です。

僕自身が「想い出にかわる君」Memories Off」をプレイしたのはもう10年近く前なのでキャラが違っているかもしれませんが。知っているファンの方にはすみません・・・。

ちなみに『学ラン』のメニューは僕のバイト先のランチメニューを参考に使っています。

ではまた次回に～

それにしてもストック無いとこんなに書くの切羽詰まるのか・・・

第三十九話 訪れたカフェで 後編（前書き）

キュービックカフェでランチ第二話目です。

あの人のキャラが定まっていない気が・・・

第三十九話 訪れたカフェで 後編

「なあ、本当にやらなきゃダメなのか？」

「ダメだよ一夏。僕のお願いを聞いてくれるって約束したでしょ」

「い、いや、でもさぁ・・・」

「一夏」(ニツコリ)

「うつ(何だこのプレッシャーは・・・)」

「男に二言は無いだよね」

「わ、わかりました・・・。従います・・・」

「うん」

「は、はぁ・・・。(何でこうなってしまったのか・・・)」

それを説明するには少しだけ時間を遡ります。

side 一夏

「ふう、食った食った。美味かったなあ」

「もう、一夏ったらなんかおじさんくさいよ」

「え？マジで！？」

まだ華の高校生だぞ俺は。

アレ？でも華のって何か女っぽいかな？

まあそれはいいとして、俺もまだ15歳の高校生なのだからおじさんくさいはさすがにちよつと嫌だなあ・・・。

気をつけよう。

しかし、本当にあのチキンカツの卸し大根ソースって料理はマジで美味かった。

チキンカツと卸し大根のソースが絶妙に絡み合って、その上に乗せられた紫蘇がまた良いアクセントになっていた。

やっぱり決めてはあのソースだな。

結構分析してみたけど隠し味に何が使われているかは分からずじま이었다。

うゝむ、この店なかなかやりおるわ。

でも客は今俺とシャルだけしかないな。

料理も美味かったし結構流行りそうなんだけどなあ。

まあ、立地条件とか流行らない原因は他にあるのかもな。

「・・・・・・・・」

ん？あれ？何かシャルがふくれっ面になってる。

効果音があるとすれば、ぷくくくくという感じだ。

「えっと、シャルどうかしたか？」

恐る恐るといった感じで俺は訊ねてみた。

「一夏、今は僕とデート中だよな」

「お、おう」

だから今日はこうして千羽谷まで来たというのにシャル何を言っているのだろうか？

「そのデートの相手をほったらかして考え事するのはちょっと失礼じゃないかな」

「うつ・・・」

しまったなあ。

つい料理の味を分析するのに夢中になりすぎてしまったらしい。

そりゃ、デート中に相手が自分の事忘れて何か別の事に夢中になつてたら誰でもいい気はしないよなあ。

ってゆーか、何か今日俺ってシャルを怒らせてばかりのような気が・・・。

マジで気をつけないとな・・・。

「ゴメン、シャル！もうしないから機嫌直してくれよ。な？」

「本当にもうしない？」

「しないしない」

これは完全に俺の落ち度だ。

せっかくシャルとデートしてるのに俺がシャルをほったらかして考え事してたのが悪い。

本当に反省しなきゃいけない。

「じゃあ、今回は許してあげるよ」

「そ、そうか。ありがとう」

「——でも！」

「うわっ！」

いきなりシャルが俺の頬をつねってきた。
いきなり何をするか！？

「ひゃ、ひやるう！？（シャ、シャル！？）」

「次やったら僕も本気で怒っちゃうからね」

「ふあ、ふあはったあ！ふあはったあはらはらひへふへ！（わ、
わかった！わかったからはなしてくれ！）」

「あははははっ！—夏面白い顔してるよー！！」

「ほれはおまへがほほをひっはへるはらだあー！（それはお前が頬
を引っ張ってるからだー！）」

「あはははははっ！！」

それからしばらくシャルは俺の頬をピロ〜ンと引っ張って遊んでい
るのだった。

俺に落ち度があるとはいえなんか納得できない・・・。

「君たち」

「あの、今脱サラしてこの店始めたって言いましたよね。ということはあなたはこれのお店の責任者なんですか？」

シャルが店員にそんな質問を投げかけた。

確かに今そんなこと言ってたな。

というか、いくら日本に馴染んでるからって脱サラなんて言葉よく知ってるなあシャル。

「ああ、俺はこの店のモンだよ。常連からは『テンチョー』って呼ばれてるよ。まあ、オーナー兼店長だから君たちもよかつたらそう呼んでよ」

そうだったんだ。

オーナー兼店長ねえ。

20代後半くらいに見えるけどひょっとしたらもうちょっと年齢上なのかもしれない。

「あ、はい、テンチョー・・・さん」

「はははっ！さんは付けなくていいよ。その方がこっちもラクだからさ」

「は、はい、テンチョー」

「うんうん。それでいいよ。じゃあ、デザートを楽しんでね」

そう言うとテンチョーはまたカウンターのところに戻っていった。うーむ、やはりマイペースな人だ。

「さて、じゃあデザートいただくか」

「うん。——あつ」

「ん？どうしたシャル？」

急に「あつ」という声を上げるシャル。

「ねえ一夏。2つ目のお願い今言っていいい？」

「えっ？ここでって何をお願いするんだ？」

「うふふっ」それはねえ——「」

シャルは何やらウキウキといった感じでヨーグルトムースをスプーンで掬ってみせて。

「はい、あ〜ん」

「……………へ？」

あまりに予想外の出来事に俺は呆けてしまう。

「え、えーつとっ…………」

「はい、食べて一夏」

そういつてスプーンを差し出してくるシャル顔は若干赤みがかっているがどこか嬉しそうであった。
なんか前に似た様なことがあったような気がするんだけど…………。

side out

そして冒頭のシーンへ。

アイキャッチしりとり

テンチョー「……生きてる！オレ！生きてる！——生きてるよなあ！」

一夏「あ、あ〜ん——なところに空飛ぶペンギンがいる——！」

side シャルロット

運ばれてきたデザートを食べようとしたところで僕はあることを思いついて早速それを実行することにした。

それは一夏にあ〜んしてあげることに。

ちよつと恥ずかしいけどこうすれば僕と一夏も本当の恋人同士っぽくていいかなあと思った。

やっぱり一夏も恥ずかしいみたいで最初はしぶっていたけどさっきの約束のことを持ち出したら一夏は断れないとふんで意を決したようにこっちに目を向けた。

一夏の気が変わらないうちにと僕はスプーンを差し出す。

「はい、あ〜ん」

「ぐっ！・・・、あ、あ〜ん」

（パクッ）

差し出したスプーンに乗ったヨーグルトムースを口入れて咀嚼する一夏。

「おいしい？」

「ああ、うまいよ・・・」

恥ずかしいのか一夏はそっぽ向きながら答える。
あははっ、やっぱり一夏恥ずかしいんだ。
まあ、僕もちよっと恥ずかしいんだけどね。
でもそれ以上に嬉しさが勝っているんだよね。

「じゃあ、次のお願い行こうかなあ」

「えっ！？まだあるのか！！？」

「当然だよ」

せつかくこんなに一夏を独占できるんだもん。
これだけで終わらせたら勿体無いよね。

「じゃあ、今度は一夏が僕に食べさせて」

「うつ、・・・わかったよ。食べさせればいいんだろ?」

一夏はため息をつきながらも了承してくれた。

約束のこともあるけどこれだけ一夏を支配できるなんてちょっと面白いなあ。

一夏はヨーグルトムースをスプーンで掬って僕の方に向けた。

「じゃ、じゃあ行くぞ。その、あゝん」

「あゝん」

僕は少し顔が赤くなるのを感じながらも一夏が差し出したスプーンを口に入れる。

(パクッ)

「ど、どうだ?」

「うん、美味しいね」

一夏が食べさせてくれたんだから美味しいに決まってるよね。

正直に言つと味はよくはわからなかったけど何故か凄く美味しく感じた。

あははっ、なんでかな?

「君たち」

「「ひゃっ!!」」

急に声を掛けられたと思ったらそこにはテンチョーがいた。

さつきからこの人変なタイミングで出てくるなあ。

おまけに僕らも近づいてきたのに全く気付かないし。
もしかしてこの人日本でいうニンジャとかなのかな？

「仲が良いのは結構だし今度は騒がしくもないけど、ちょっと自重してもらえるかい？俺の店なのに俺が居辛くはやめて欲しいんだけど」

「あ、すみません」

僕と一夏と2人で頭を下げる。

なんか僕達謝ってばかりな気がする。

「まあ、デザートを楽しんでくれてるみたいだからよかったよ。それじゃ」

テンチョーがカウンターに戻っていく。

これでこの遣り取り今日何回目だろう？

「テンチョーにもああ言われたし、普通に食おうぜ」

「う、うん、そうだね」

興を削がれたかのように僕と一夏は普通にデザートを食べ始める。

「おお！これうまいな！」

「うん、美味しいね」

さつきはあまりわからなかった味も今は普通に感じられるようにな

ったけど、このヨーグルトムースは絶品だった。

ふんわりした口どけにあわせたイチゴのソースがいい具合にマッチ
していて程よい甘みがあって凄く美味しい。

さっきのランチもそうだけどこの料理って凄く良い。

何だかペロツと全部食べてしまえそうだよ。

「うゝむ、これもまた何か隠し味がありそうなんだけど、わからん
なあ・・・」

一夏がまた味を分析している。

一夏って美味しいもの食べるとその場で分析する癖があるみたいだ
なあ。

10年近い付き合いだけど初めて知ったなあ。

一夏の知らない一面が見れるのは僕にとっては嬉しい事だね。

夢中になり過ぎはちよつとどうかと思うけど。

「なあシャル。これって何が隠し味で使われてるのかなあ？」

今度は僕に話を振ってきた。

さっきひとりで分析に夢中になってるのを咎めたから今度は2人で
分析しようってことかな？

ここで分析をやめないのが一夏らしいよね。

まあ僕もこの味の正体は気になってはいるんだけどね。

「なんだろうね、程よい甘さだから普通にイチゴだけを使ってるわ
けじゃなさそうだけど」

「そうだよな。何か秘密があるはずだけど、それがわかんねえ・・・」

「うん」

なんか一夏がフードジャーナリストみたいに見えるのは気のせいかなあ？

あ、でも真剣に考えてる一夏の顔もカッコイイ——って、僕は何を考えてるんだ！！

「あつ、シャル、口にクリームが付いてるぞ」

「えっ！？ ど、どこ！？」

僕は慌てて口元に手を当てる。

「ちょっと動くなよ」

一夏はナプキンを取ると、僕の口についていたクリームを拭ってくれた。

そのときに頬に一夏の指が少し触れる。

「よし、取れたぞ」

「あ、ありがとう」

「いえいえ」

一夏ってやっぱりズルイ……。いきなりこんなことするなんて。僕の心臓高鳴りっぱなしだよ。

また味がわかんなくなっちゃうよ……。

それからデザートも食べ終えて、あとはお会計を済ませるだけとなったんだけど一夏はやっぱりさっきのヨーグルトムースが気になるみたいで。

「ちよつとテイクアウトしてあとでじっくり分析しようかな。すみません、テンチヨー」

ええ！？そこまでのの！？

一夏つてやっぱり変なところで凝り性だなあ。

そこに呼ばれたテンチヨーが僕らのいるテーブルまでやってきた。

「どうしたんだい？お会計かい？」

「それもあるんですけど、このヨーグルトムースをテイクアウト分に4つほど作ってくれませんか？」

ええ！？4つも！？

あ、千冬さん達の分かな？

「ああ、うちはテイクアウトはやっていないよ」

するとテンチヨーの顔が少し真顔になった。

「えっ！？そうなんですか！？」

どうやらこのお店はテイクアウトはやっていないみたい。

藤川周辺のカフェだとテイクアウトできるお店が多いからその感覚でいたけどこのお店はダメみたいだね。

「そこをなんとか何とかお願いできません？」

「ダメ。湿度とか温度の違いで風味が損なわれるからね。それに、質を保ったままテイクアウトに対応できるほどの数は作れない。だから、うちはテイクアウトはやらないんだよ」

「どうしてもダメですか？ほら、こういう言い方はなんですけど、『お客様は神様だ』って言うじゃないですか。1回だけ大目に見てもらえませんか？」

「一夏も結構食い下がってる。」

「よっぽどここのデザートを千冬さん達にも食べて欲しいみたいです。」

「もし、神がいるんだとしたらここじゃそれはオレだよ。いい？この店のルールはオレなんだから。だから食べさせたい人がいるならここに連れて来てよ」

「なんかテンチョーも凄いこと言ってるような・・・。」

「これは俺のポリシーなんだけど。ここは美味しいものを探そうと努力した人だけがたどり着ける場所なんだから。日常のちょっとした幸運。嬉しくない？」

テンチョーの言葉には何かハッキリとした意思を感じた。何故かはわからないけど何だか僕もその言葉には凄い共感できた。それに気圧されたのか一夏も食い下がっていたのに黙ってしまっていました。

「まあ、君たちは運がいいよ。こうしてこの店にたどり着けたわけだし。そうまで言ってテイクアウトをさせてくれって言う事はうち

の菓子を気に入ってくれたってことでしょ？それは感謝するよ」

「あ、はい・・・わかりました」

「うん、わかってくれて何よりだよ。じゃ、お会計ね。レジへどうぞ」

促されるままに僕と一夏は店を出る準備を始めてレジへ向かった。値段も2人で1600円くらいですんだからリーズナブルだった。

「千羽谷に来ることがあったらまた来てよ。そのときは歓迎するからさ」

「はい、また来ますね」

「俺も、また来ます」

「ああ、よろしく。そうだ。せっかくだから名前を聞いてもいいかい？」

テンチョーが名前を訊ねてきた。

「あ、織斑一夏です」

「シャルロット・デュノアです」

僕たちも気兼ねなく名前を言った。
何だかこのテンチョーには名前を教えてもいいと思えてしまっていた。

「・・・、織斑？」

「え？どうしました？」

何かテンチョーが一夏をじっと見てる。

「いや、なんでもないよ。じゃあ、一夏、シャルロット、また来てね」

「ご馳走様でした」

「失礼します」

僕達はキュービックカフェをあとにした。

side out

「結構いい店だったな」

「うん、そうだね」

キュービックカフェをあとにした一夏とシャルロットは歩きながらキュービックカフェについて話していた。

「テンチョーもちょっと変わってたけど、料理は美味かったしな」

「経営理念っていうのかな。それがあっていいと僕は思うよ」

「そうだな。次に千羽谷に来ることがあったらまた行ってみようぜ」

「うん」

「さて、次はどこ行くか？」

「そうだねえ、それじゃ——」

一夏とシャルロットは千羽谷の目抜き通りに出て人ごみの中へと消えていった。

おまけ

一夏達が帰ってすぐのキュービックカフェでテンチョーが電話をしていた。

「おう、俺だ。久しぶりだな。今日、前にお前が言ってた奴が来たよ。うちで『学ラン』食っていった。フランス人の彼女連れてたぞ。」

織斑って苗字は結構珍しいからな。なかなか面白いやつだったな。うちの菓子をテイクアウトさせてくれって頼んできたくらいだしな。また千羽谷に来る事があつたら寄って行ってよって言ったからまた来るかもな。お前も久しぶりにこっちに顔見せに来い。そんな時は歓迎してやるからさ。じゃ、俺は忙しいんで切るぞ。じゃあな」

テンチョーが電話で話していた相手は誰なのか。それはそのうち語られるであろう。

第三十九話 訪れたカフェで 後編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます

キュービックカフェ編をお送りしました。メモオフシリーズを知らない方にはこの店はわからないと思いますがそこはすみません・・・。

そもそも舞台をメモオフシリーズから引用したのは「海が結構近場で城址公園があるところ」だったので神奈川県藤沢市周辺をモデルにしているメモオフシリーズが最適かと思って引用しました。テンチョーのキャラが合ってるかどうかは自信無いですが・・・。メモオフファンの方はすみません・・・。

ではまた～

第四十話 ひったくり犯と2人の男女（前書き）

この作品ももう四十話か。

執筆してもう半年が過ぎてしまったのか・・・。

今回は「Memories Off シリーズ」からあの2人に出演してもらいました。

第四十話 ひったくり犯と2人の男女

「シャル、あの建物わかるか？」

「え？どれ？」

キュービックカフェを出てから少し駅の方へ戻ってきた一夏達は歩道橋の上を歩いていた。

そこで一夏がある建物を指差した。

シャルロットが指差した方向に目を向けるとそこには大学のキャンパスらしき建物があった。

「あそこが千羽谷大学だ。この近辺では一番デカイ大学でさ、学部も豊富で都内から通うやつもいるって噂もあるくらい有名な大学なんだぜ。何せ、百春兄もあそこの医学部に通ってたくらいだからな」

「へえ、そうなんだ。ということはあそこの大学は結構頭が良くないと行けないのかな？」

「まあ、偏差値は少し高めらしいなあ。俺も百春兄から少し聞きかじっただけだし」

「一夏は藍越学園を卒業したらあの大学に行くの？」

「ん、まだわからないな。そもそも進学するか就職するのかすらまだ決めてないし。まあ、進学するとしたら多分あそこに行くと思うぞ」

「そっか。まだ卒業までは時間もあるし、ゆっくり考えるのもいい

んじゃないかな」

「そうだな。そうするよ」

一夏は納得するようにうんと頷いてみせる。

「そういえば一夏って中学生になってからはバイトをしてたんだよね。バイトっていつでも中学生をそうそう雇ってもらえるものなの？」

「ああ、それは顔見知り頼む感じだったな。新聞の早朝配達とか子守とか小さい子の勉強を見てあげたりもしたぜ。あとは鈴の家の中華料理屋の手伝いもしたことあったな。まあ、主に出前と雑用だったけどな」

「中学校出るときは進学じゃなくて就職するつもりだったんだよね？」

「まあな。千冬姉達の負担を少しでも減らそうと思ってな。だから早めに就職しようと思ったんだけど千冬姉にそのこと話したら凄え怒られたよ。『何を言っている大馬鹿者！ここでその選択をするのは尚早というものだ。お前には未来への無数の可能性があるのだぞ。それを中学を卒業した時点で決めてしまいうやつがあるか』ってさ。百春兄と千秋姉にも似たようなこと言われたよ。だから藍越に進学したんだ。前々から俺の目には千冬姉達はいつも大人っぽく見えていたんだ。だから自分も早く大人になりたくて中学を出たら就職するつもりでいたんだ。少しでも早く千冬姉達に追いつきたくてさ。まあ、今は進学してよかったって思ってるよ。そのおかげでシャルとも同じクラスになれたしさ。箒や鈴とはずっと同じ学校に通ってたけどシャルとは学校はおるか住んでる国も違ったからそれもでき

なかっただろ。だから藍越でシャルと再会して同じクラスになれて
凄え嬉しかった」

「それは、僕もだよ。一夏と同じ学校に通えて、一夏と同じクラス
になれて僕も凄く嬉しいよ」

「千冬姉達に感謝だな」

「そうだね」

一夏とシャルロットは暫し互いを見詰め合ってから同時ににっこり
と笑い合った。

「さて、せっかく千羽谷まで来てのデートだ。次はどこに行きたい
？それともまだ少しブラブラするか？」

「うん。もう少しこの街を見て歩きたいかな」

「そうか。じゃあ、案内致しますよお嬢様」

一夏はシャルロットの手を取って執事にでもなったような態度と言
葉使いで彼女をエスコートする。

「ええ、それではエスコートよろしくお願い致しますわ一夏さん」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「「ぶっ、あはははははははっ！..!」」

「シャル！今のもしかしてセシリアの真似か！？結構上手いじゃないか！！」

「僕も結構上手くできたと思う！笑っちゃセシリアに悪いけど、可
つ笑しいや！あはははは！！」

この場にはいない者をネタにして大笑いする2人。

しかし、シャルロットが咄嗟にノリでやったセシリアの物真似がこ
とのほかクオリティが高かったようで堪えきれずに笑ってしまった。

その頃

「くしゅんっ！誰かわたくしの噂をしていますのかしら・・・」

セシリアがくしゃみをしていたとき。

side シャルロット

一頻り笑い合っていた僕と一夏は気を取り直して歩き始めた。

「そういえばさ、シャル」

「ん？なあに一夏？」

腕を組んでウキウキと歩いている僕に一夏は訊ねてきた。

「お願いってあといくつあるんだ？」

すでに3つお願い事をされている一夏はあといくつお願いがあるのか気になつてゐたいだね。

1つ目は今日は腕を組んで歩く事。

2つ目は昼食時に一夏にあぐんしてあげる事。

3つ目は今度は一夏からあぐんしてもらふ事。

どれも僕にとっては嬉しくて仕方の無い事だった。

「うゝん、秘密」

一夏は「えゝ」と言いたげな顔で僕を見ている。

実際のところ、僕自身も正確な数を決めているわけじゃない。その場で思いついたことをしているだけだしね。

「ほらほら一夏、早く行こう」

「わかったからそう急かすなつて」

何をお願いされるか気が気じゃないみたいで一夏はちょっとげんなりとしているけど、腕を引いた僕の横に並ぶと自然と笑ってくれた。どうやら一夏もなんだかんだで楽しんでゐるみたいで僕も嬉しくなる。

また2人で歩き出そうとしたその時に――

「きゃーーーーー!!!」

突然、僕たちの後方からかん高い女性の悲鳴が聞こえてきた。え、え？何？

僕も一夏も驚いて後方へ振り返る。

「誰か！ そいつひったくりだ！ 捕まえてくれ！」

えっ！？ ひったくり！？

すると前方から不審な走り方で左手に女物のバッグを抱えたいかにも『怪しい人』といった感じの男性がこちらに走ってきている。その後ろをひとりの男性が追走していた。

「おらおら！ どけえー！！！」

しかし、その右手にはコンバットナイフが握られていてそれを振り回しながら通行人を退かして無理矢理道を開けている。

「シャル！ ちょっと下がってろ！」

すると、一夏が僕を道の脇に下がらせるとひったくりの進路を塞ぐように立ち塞がった。

「一夏！ 危ないよ！！！」

「大丈夫だ、心配するな」

僕を安心させるように一夏が言う。

「ガキッ！！ 退けえー！！！！！」

一夏に向かってひったくりがナイフを持って突進してくる。

「一夏っ！！！」

僕は恐くなって思わず一夏の名前を叫んでしまう。
ひったくりはもう一夏の眼前に迫っていた。

side out

アイキャッチしりとり

ひったくり「ルビー大好き」

???（男性）「キチガイじみてやがるな」

side 一夏

ひったくり犯が俺達の方に向かってくるのを見て俺はシャルを道路脇に下がらせる。

心配したシャルが声を掛けてきたが俺は「大丈夫だ、心配するな」と声を掛けるとひったくり犯を捕まえる為に少し腰を落として迎撃体勢に入る。

「ガキッ！！退けえー！！！！」

ひったくり犯がナイフを振りかざして俺に突進してくる。

「一夏っ!!」

シャルの叫び声が聞こえるが俺は道を譲らないで立ち塞がる。
眼前に迫ったひったくり犯が俺にナイフを突き立てる。

その刹那――

「はあっ!!」

一瞬でそれを避け、鳩尾に肘打ちを叩き込む。
篠ノ之道場は剣道を教える道場だが素手での古武術も修めているので俺もそれを習得している。

得物を持った相手を想定した鍛錬も行っていたのでこの場は役に立つ。

肘打ちをまともに鳩尾に食らったひったくり犯は身体をくの字に曲げてたたらを踏む。

「せいっ!!」

そこにすかさず俺は相手の顎にアッパーの要領で掌底打ちを食らわせる。

顎に掌底打ちを食らったひったくり犯は衝撃で脳を揺さぶられそのまま後ろに崩れ落ちた。

「捕まえたぞこの野郎!!」

すると先ほど「捕まえてくれ!」と叫んでいた男性が崩れ落ちたひったくり犯を取り押さえた。

俺もその人に手を貸して犯人を取り押さえる。

「シャル、警察に連絡してくれ」

俺はシャルに警察に連絡するように指示する。

「う、うん、わかった!」

するとシャルは携帯電話で警察に電話を掛けた。

しばらくすれば警察が来てこの犯人も御用だろう。

まあ、掌底打ちをまともに顎に食らったからしばらく動けないだろうけど。

「悪いな。助かったぜ」

一緒に取り押さえていた男性が声を掛けてきた。

「いえいえ」

お礼を言ってくる男性にこちらも笑顔で答える。

「智ちゃんっ!」

そこにひとりの女性が走り寄ってきた。

「おお、唯笑^{ゆえ}! お前のバッグは無事だぞ!」

どうやら男性の連れらしい。

盗られたのはその女性のバッグのようだ。

「あっ! 唯笑のバッグ!」

男性が盗られたバッグを女性に手渡すと女性は大事そうに胸に抱えた。

それからしばらくしてから警察が到着してひったくり犯を連行していった。

s i d e o u t

数十分後に警察が到着してひったくり犯は連行されていった。
バッグを盗られた女性も中身は何も異常はなかったため、コレにて一件落着となった。

「唯笑の大切なバッグを取り返してくれて本当にありがとう！」

「いえ、そんなに頭を下げなくても大丈夫ですから」

バッグの持ち主の女性が一夏に感謝の意を示そうと深々と頭を下げてくる。

「いや、俺からも礼を言うよ。本当にありがとうな」

男性の方も一夏に頭を下げる。

「いえいえ、困ったときはお互い様ですから」

一夏も当たり前のことをしただけと思っているので頭を下げられてちよっただけ焦る。

「でも、よかったですね。盗られた物も無事だったみたいで」

シャルロットも女性のバッグが無事だったことに安堵していた。

「うん！本当にありがとうね！！えーっと・・・」

女性が首を傾げて一夏達を見つめる。

そういうばまだ自己紹介もしていなかった。

「あ、織斑一夏です」

「シャルロット・デュノアです」

「ありがとう！イチカくん！！シャルロットちゃん！！」

女性は一夏とシャルロットの手を握ると勢いよくブンブン振る。これにはシャルロットも少し困惑する。

「こら唯笑。相手が困ってるだろ。その辺にしとけ」

男性が女性の頭のにチョップを入れる。

「はっつ！ひどいよ！智ちゃん。チョップしなくなっただけいいじゃん・・・」

「お前がこいつらを困らせるような事してるからだろ」

「あ、いえ、別に困ってる訳では・・・」

何かとペースを乱されている一夏達だった。

「ねえねえ。シャルロットちゃんって何処の国の人なの？」

女性はシャルロットに人懐っこく話しかける。

「僕はフランス人です」

「へえ、そうなんだ。日本語上手なんだね」

「はい、日本には昔からよく来ていましたから。こっちの彼とは幼馴染なので」

シャルロットは一夏に視線を向ける。

一夏もコクンと頷く。

「そっか」。唯笑と智ちゃんも幼馴染なんだよ」

女性は男性の腕に抱きつく。

「人までくつつくな。恥ずかしいだろ」

「えへへ、テレないテレない」

突然目の前でイチヤつき始めた2人に一夏達は苦笑い。
かくいう一夏達も先ほどまでは似たようなことをしていたのだが。

「じゃあ、俺達はそろそろ」

「あ、はい。え」と・・・」

相手側からも自己紹介をされていないので名前がわからない。
わかるのは男性は智ちゃんと呼ばれていて、女性は唯笑と呼ばれて
いたことだ。

「三上智也だ」

「今坂唯笑だよ。今日は本当にありがとうね！」

「はい。三上さん、今坂さん、お氣をつけて」

「さよなら」

「おう。それじゃ」

「バイバイ」

三上智也と今坂唯笑の2人は一夏とシャルロットに手を振ると仲良
く並んで去っていった。

「なんか、面白い人達だったね」

「そうだな。でも、かなり仲良さそうだったな」

「そうだね。幼馴染だと言ってたしね」

実際のところ、あの感じは幼馴染という関係だけではないだろうと
シャルロットは思っていた。

唯笑が智也を見る目は明らかに好意があったし、智也も唯笑を大事
にしている雰囲気が見て取れた。

恐らく、あの2人は恋人同士だろう。

「なに、仲の良さなら俺たちだって負けないさ。生まれた国が違うのに10年近くも付き合いがあるんだし、こうして2人でデートをする間柄だぞ。俺たちもあの人たちにも負けないくらい仲良しだよ」

「一夏・・・」

一夏にとっては何気ないセリフだったのかもしれない。
でもシャルロットはその言葉が凄く嬉しかった。

一夏のことだからそれは幼馴染としての意味合いが強いであろうとはシャルロットも理解はしている。
だが、自分に温かな想いと嬉しい気持ちを与える一夏の事をやはりシャルロットは愛しいと思えるのだった。

「うん！そうだね！僕たちも負けなくらい仲良しだよね」

またシャルロットは一夏の腕に抱きついた。

「お、おい、シャル!？」

「ほら一夏！早くデートの続きしよっ!」

「わかったからそんなに引っ張るなって」

「えへへ」

一騒動ありましたが、2人のデートはまだまだ続く。

第四十話 ひったくり犯と2人の男女（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

三上智也は初代メモオフ主人公で唯笑は初代メインヒロインです。
この2人には結構悲しい過去があるのですがそれを乗り越えて結ばれたところが僕は結構好きでした。

時間軸的には『Memories Off After Rain
Vol.1 折鶴』が終わったあたりになっています。作品を知らない方は本当にすみません・・・。

プロットではシャルロットのバグがひったくりに遭う予定でしたがうまくまとまらなかったなので、せっかくメモオフを少し絡ませたのだからと思って智也と唯笑を登場させました。

そろそろ2度目のデートも佳境に入ります。

ではまた次回に～

第四十一話 『げーせん』ってどんな下口ロ？（前書き）

一夏とシャルロットのセカンドデート第五話。
今回は『げーせん』に行きます。

第四十一話 『ゲーせん』ってどんなトコロ？

「これは・・・凄いね・・・」

シャルロットは周囲を見渡しながら、感心半分、驚き半分といった感じで呟く。

「まあ、初めて来るやつにはそうかもな。俺は弾たちとたまに来るけど、不慣れのやつは雰囲気圧倒されるかもな」

「う、うん、本当に凄いね、ここ・・・」

キヨロキヨロと辺りを見回すシャルロットの姿は一夏の目には何だか微笑ましく見えたのであった。

さて、一夏とシャルロットがどこにいるのかというと。

side 一夏

「ねえ一夏、あそこは何のお店なの？」

千羽谷でのデートも結構色んな場所を回ってそろそろ行く場所に悩み出していたところにシャルが一軒の建物を指差した。

「ああ、あそこはゲームセンターだ」

「へえ、あれがゲームセンターなんだ・・・」

「アレ？シャルってゲーセン入ったことなかったっけか？」

「え？あ、うん。入った事は一度もないよ。フランスではそういうお店は少ないし、日本に来てた時でも寄り付かない場所だったし」

うゝむ。

そういえばそうかもしれない。

シャルは日本に来てた時は俺や箒や鈴に付き合って遊ぶのが常だったからな。

箒も鈴も結構活発だったから遊びはアウトドアが多かったからゲーセンなんて寄り付かなかった。

まあ、その頃はゲーセンに行くほどの金を持ち歩いてはいなかったんだけどな。

「入ってみるか？」

興味があるようだし、入ってみるのも悪くないかと思って俺はゲーセンに入るか訊いてみた。

「え？いいの？」

あんな興味あり気な瞳で見てたのに遠慮なんかしなくてもいいのになあ。

「いいからいいから。ほら、入ろうぜ」

「う、うん・・・」

組んだ腕でシャルを引いて俺達はゲーセンの中へと入っていった。

入ってから少しの間はシャルが雰囲気には圧倒されていた。

店の規模自体はそれほどではないし、藤川にもここより大きい規模のゲーセンはいくつかある。

が、初めて入るシャルはまるで別世界にでも迷い込んだかのように辺りをキョロキョロと見回していた。

「音が凄いな。ちょっと騒がしいかも・・・」

「まあ、それがゲーセンだしな。慣れれば気にならなくなるけど」

ゲーセンなんてうるさいくらいがちょうどいいくらいの場所だ。シャルもそのうち慣れるだろう。

「何かやってみるか？」

「え！？いいの！？」

「せっかく入ったんだし、遠慮すんなって。何かやりたいのはあるか？」

「ううん・・・」

シャルは困った表情で辺りを見渡す。

ゲーセンに初めて来たシャルにとっては選ぶのは難しいのかもしれない。

「ねえ、あれは何のゲームなの？」

シャルはひとつの筐体を指差していた。

それはクレーンゲームの筐体だった。

「ああ、あれはクレーンゲームって言うてな。クレーンを操作して中にある景品を取るゲームだ」

「へえ、うん、あれをやってみたい」

「よし、行くか」

シャルの腕を引いて俺達はクレーンゲームの方へ向かう。

クレーンゲームの筐体はいくつかあって、その中でもシャルが興味を引かれたのはぬいぐるみを取るマシンのようだ。

「この機械をやってみるよ。可愛いぬいぐるみがいっぱいあるし」

「そっか。じゃ、ほいこれ」

そう言つて俺は100円玉を数枚シャルに手渡す。

「え！？いいよ一夏！お金なら自分で出すから！」

「遠慮すんなつて。初めてやるんだしこれくらい俺が出してやるよ。それに俺も男だしな。これくらいはカッコつけさせてくれって。な？」

デートなんだしゲーム代くらいは男の俺がドーンと出してやらないとな。

「う、うん、わかった。ありがとう」

お礼を言うとシャルはクレーンゲームにお金を入れた。

「これってどうやればいいの？」

「簡単だよ。そのレバーを操作して、欲しいぬいぐるみの上に持っていくんだ。位置を決めたら隣のボタンを押す。するとクレーンが下がって拾いあげてくれる」

まあ、うまくいけばの話だけだな。

「わかった」

シャルは真剣な表情でレバーを動かしはじめた。

クレーンの動きに四苦八苦しながらも目的のぬいぐるみの上にクレーンを移動させる。

どうやらシャルはデイベアを狙っているようだ。

「えーっと、ここかな？もう少し右かな？」

レバーで微調整をしながらクレーンを動かす。

「よし、ここだ」

シャルはボタンを押した。

クレーンが下がってぬいぐるみのところまで下がっていく。

うむ、初めてのわりには位置取りは悪くない。

しかしもちろん、そんな簡単に景品が取れるはずもなく、クレーンは景品を掴んだものの落としてしまった。

「あっ・・・」

残念そうな声を漏らすシャル。
位置取りは悪くなかったんだけどなあ。
もしかしたらクレーンのアームが少し弱く設定されているのかもしれない。

「一夏、この機械、欠陥だよ」

「へ？」

突然シャルがそんな事を言い出すので俺は呆気にとられてしまう。

「だって、掴んだのに落としちゃったよ」

ああ、そういうことね。

「あはははっ」

「な、何で笑うの!？」

「毎回掴めたらゲームにならないだろ？」

「じゃ、じゃあ、何回も挑戦するの？」

「そうそう。だから何枚か100円玉渡したんだし」

「あ、そうだったんだ」

初めてだからわからないのも無理ないのかもしれないな。

クレインゲームは取ったり取れなかったりするから面白いんだし。まあ、いくら注ぎ込んでも取れないときは取れないけど。

「じゃあ、もう一回やってみるよ」

「おう。頑張れよ」

シャルは再びお金を入れて操作を開始する。

俺は見ながら応援することにした。

あれからシャルは5回ほど挑戦したがぬいぐるみを取ることはできなかった。

「うゝ」

恨めしげな声で筐体を睨む。

『クレインゲームは貯金箱だ』なんて格言があるくらいだし、そう簡単にはいかないんだよな。

あれ？ UFOキャッチャーだっけ？

まあ、どっちも似たようなモンか。

「一夏」

シャルがちよつと瞳を潤ませて俺を見つめてくる。

うゝむ、そんな瞳で見つめられると何とかしてやりたくなるなあ。

「ちよつと俺がやってみるか。俺もあんまり得意じゃないんだけどな」

「わかった。頑張つて一夏」

「おう。あのくまのぬいぐるみでいいのか？」

「うん。あれをお願いね」

さて、シャルの為に頑張りますか。

「シャル、横の方から見て、クレーンの位置を確認してくれないか？」

「うん、わかった」

シャルが脇に回ってスタンバイする。

ひとりで大めならふたりで挑戦すればいい話だよな。

よし！チャレンジ開始だ！

俺はお金を入れてレバーを動かす。

「シャル、そっちはどうだ？」

「もうちょっと・・・一夏から見ても前かな」

「おう」

俺は慎重にレバーを動かす。

「あ、ちよつと行き過ぎたかも」

「ああ」

ほんのちよつとだけ戻す。

この微調整が難しいんだよな。

「うん、そこでいいと思う」

「そうか、よし！じゃあ、下ろすぞ」

ボタンを押すと、クレーンがじれったいほどゆっくり降下していく。それは、狙ったぬいぐるみをとらえて・・・
一気に持ち上げた。

「やった！」

シャルが喜びの声を上げる。
だが、まだ油断してはならない。

「待て待て、まだ途中で落とすかもしれないだろ？」

「そ、そうだね」

シャルは真剣な眼差しでターゲットの行方を追う。
そして、景品はポケットの中へと吸い込まれた。

「よし！成功だ！」

「うん！やったね一夏！！」

シャルは手を叩いて大喜びしている。

「ほらシャル。お前にやるよ」

俺はゲットしたぬいぐるみをシャルに差し出す。

「え！？一夏が取ったのに僕が貰っていいの！？」

この遠慮深さはシャルの美点なのかもしれないけど欠点でもあるよな。

こういうときは素直に受け取ってくれていいのに。

「男の俺が持つてたら気持ち悪いだろ。それにシャルにあげようと思つて取ったんだし、遠慮しないで受け取れつて」

くまのぬいぐるみを持ち歩く男。

想像しただけでも気持ち悪いぞ・・・。

「うん！ありがとう一夏！！」

シャルは嬉しそうにぬいぐるみをギュツと胸に抱きしめた。

うんうん、喜んでくれて何よりだ。

そのぬいぐるみもシャルに持つてもらった方が嬉しいだろう。

「さて、次は何やるうか？」

「え？ううーん、そうだねえ・・・」

またシャルが周囲をキョロキョロと見回す。

別に焦る必要はないんだけどなあ。

まあ、今はシャルとゲーセンを楽しむとしよう。

side out

アイキャッチしりとり

シャル「泣くほど嬉しくなんかないだからあ・・・グスッ」

一夏「すっかり、ハマッてます」

side シャルロット

クレインゲームを終えた僕と一夏は体感ゲームコーナーに移動していた。

色んなゲームの筐体があって僕はついキョロキョロしてしまう。

「何かやってみたいのはあるか？」

一夏が僕に訊ねてくる。

正直、パッとやりたいものは思いつかなかった。

「じゃあ、一夏が選んで」

「え？俺が？」

一夏に選択を委ねる。

正直、僕はどれがいいかなんてわからないから、一夏が選んだのをやってみようと思った。

「そうだなあ・・・」

一夏が筐体を見回す。

「うゝむ、格ゲーは無理だよな。音楽体感系やレーシングゲームも初心者には酷だろうし・・・。あつ、シャル、あれはどうだ」

一夏が指差したのは大型のディスプレイとその前に拳銃のようなものが置いてあるゲームの筐体だった。
ガンシューティングゲームって言づらい。

「あれだったら初心者にも比較的楽だと思うぞ。2人で協力プレイも出来るし。どうする?」

「うん。じゃあ、あれをやるう」

「よし!」

一夏に連れられて筐体の前へ向かう。

「これってどうやるの?」

「簡単だよ。画面に出てくる敵をこの銃で撃てばいいだけだ。普通に引き金を引けば弾が出る。引きっぱなしにすればフルオートになるんだよ」

「弾が切れたらどうするの?」

「画面の外を撃てばリロードになる。あと、敵はテロリストだけど、

民間人も出てくるぞ。民間人を撃つたらマイナスポイントになる。画面の上のライフが無くなったり民間人を撃ち過ぎたりしたらゲームオーバーだ。わかったか？」

「うん。大体は・・・」

「じゃあ、やるか」

そう言つと一夏は2人分のお金をゲームに入れようとする。

「ああ一夏、僕の方は自分で出すからいいよ」

「いいっていいって。1回分くらいなら出してやるよ。」コンテニユーするときは自分で出してくれよ」

「う、うん」

一夏つて変なところで強引なんだから・・・。

「始めるぞ」

「う、うん」

コインを入れるとゲームがスタートした。

「わ、わわ、勝手に前に進んでるよ」

「そついうもんだつて。撃つことに集中してればいいの」

「わ、わかった」

うう、何だか緊張するよ。

「ほら、敵が出たぞ」

「えっ？わ、わっ！」

いかにもテロリストといった感じの黒服の男が数人画面に現れてここに発砲してくる。

この人たちを撃ち倒せばいいんだね。
よし！

（バアンツ！バアンツ！バアンツ！）

意を決して銃を構えなおすとテロリストたちは撃たれて画面から消えた。

「こんな感じで」

どうやら一夏はお手本を見せてくれたみたい。

「う、うん、僕も頑張るよ」

「よし！ほら次が来たぞ！」

画面に目を戻すと新たに黒服の男が数名現れていた。
よし！頑張ってクリアするぞ！

「うわっ！撃たれた！」

「ドンドン敵が出てくるぞ。慎重に狙いを定めながら、ガンガン撃つていかないと」

「うん、うん」

僕は慎重に狙いを定めながらテロリストたちを撃ち倒す。

慎重になりすぎて撃つまでに時間掛かってるけど一夏がカバーしてくれていた。

「一夏、凄く上手だね」

「そうか？これぐらい普通だぜ。弾と数馬はもつと上手いな」

画面に目を向けながら会話をする。

目を逸らすとたちまち敵の銃弾の的になっちゃうから目は画面に向けたまま。

僕と一夏は協力して敵を打ち倒していく。

何かこういうのいいなあ。

2人で協力してひとつの事に夢中になるのって。

2人の共同作業って言うのかなあ。

僕はチラッと横目で一夏の方を見る。

その表情は真剣そのものだった。

的確に敵を撃ち倒していく姿が、まるで映画の主人公のようで――

――凄く格好良い……。

そういえば、昔見たアクション映画でヒーローがヒロインと協力して巨大な悪の組織と戦う映画を見た事があったなあ。

まるで一夏がその映画のヒーローで、僕がヒロインになったみたい。2人で幾多の困難を乗り越って最後は組織を壊滅させることに成功して、それが終わってからにはヒーローとヒロインがお互いに抱いていた想いを打ち明けあってキスシーンで締めくくり。

これが終わったら僕と一夏も――

って！うわああああああ！！ぼ、僕

は一体何を考えてるんだあ！！！！！！！

ち、違うんだよ！！

決してハリウッド映画のヒーローみたいな格好した一夏とそのヒロインのような格好した僕がキスしようとしてたところを想像した訳じゃないんだよ！！

とゆーか僕は一体誰に向かってこんな言い訳みたいな事言ってるのかなあ！！？

「おい、シャル」

「ふえっ！？な、何かな！？」

「お前、民間人撃ち過ぎ。あとひとり撃ったらゲームオーバーになるぞ」

「へ？」

画面に目を向けるとライフの下にこう書かれていた。

『Civilian Kill 9 persons（民間人を撃つた人数 九人）』

「うわあ！」

どうやら考え事してたせいで引き金握りっぱなしでフルオートになつてたからそのまま民間人も撃っちゃってたみたい。い、いけないいけない。

集中しないと。

「ほらシャル。ジュースだ」

「あ、ありがとう」

結局ガンシューティングは3ステージくらいで僕も一夏もゲームオーバーになっちゃったのでそのままそのゲームを切り上げてきた。一夏は「コンテニユーするか？」って聞いてきたけど僕は結構楽しめたからもういいかと思って辞退した。

今は近くにあつたソファアーに腰を下ろして一夏が買ってきてくれたジュースを飲んでいる。

「あとはどうする？他にも何かやりたいのあるか？」

「うーん……。どうしよう」

三たび僕はキヨロキヨロと辺りを見回す。

このフロアにはドラムみたいなやつを演奏するゲームとかレーシングカーのコックピットみたいなゲームなんかがあるけど僕は初心者だからああいうのがうまくできるとは思えないなあ。

何かいいのないかなあ。

「ん？」

僕の目は一台の大きな筐体に向けられていた。

そこから一組のカップルが出てきたからだ。

その筐体の周辺には同じような筐体が並んでいてカップルの比率が高かった。

「ねえ一夏、アレは何をするゲームなの？」

僕は筐体を指差した。

「ん？ああ、アレはシールプリントだな。撮った写真でシールを作る機械だよ」

「写真？シール？」

「やってみるのが手っ取り早いかな。行こうぜ」

「あ、うん」

一夏に手を引かれてシールプリント機のところへと向かった。

「ほらシャルここに立って」

「う、うん」

一夏と2人揃って仕切られた中に入る。

一夏は僕の隣に立つと機械にお金を入れた。

「よくわからないんだけど・・・、どうすればいいの？」

一夏との距離が近くて結構落ち着かない。

「まずは・・・、この中から好きなワクを決めて、それからカメラの前に立つだけ。簡単だろ？」

画面に記された色とりどりのワクを一夏が指を指して説明してくれる。

そのときに肩と肩が少し触れ合う。

なんだろう、狭い空間の中だからだろうか？

一夏を近くに感じてやっぱりちよつと落ち着かない。

「このペンみたいなのは何？」

「それで画面に絵や文字を書くとき写真に写るんだよ」

「写真なのに絵や文字が入るの？変わってるね」

「まあ、それは人それぞれだと思うぞ。ほら、シンプルにこんな感じでもいいだろう？」

一夏が決めたワクは白いシンプルなデザインのもだった。

「うん。それでいいと思うよ」

「それじゃあ、さっそく写ろうか」

画面に僕と一夏が並んで映し出される。

画面の端と端いっぱいだった。

「シャル、もうちよつと真ん中に寄ってくれ」

「う、うん」

真ん中に身を寄せるとより一層、一夏と身体が密着する。一夏の匂いが少しだけ感じられてドキンとした。

「シャル、ちょっと表情カタイぞ。もう少し笑ってくれって」

「え？あ、う、うん」

「せっかく記録に残るんだ。だったら、笑顔の方がいいだろう。それにシャルは笑ってた方が可愛いぞ」

「ふえっ！！か、か、かわ、可愛い！！？」

突然の不意打ち！

こんな至近距離で可愛いって言われた！！

「ん？どうしたんだ？」

僕にあんなこと言っておいてハテナ顔の一夏。

やっぱり自覚無しで言ってたんだ。

でもやっぱり気になったので訊いてみることに。

「あ、あのさ、笑ってた方が可愛いって、嘘じゃない・・・、よね？」

「嘘じゃないって。信じるよ」

即答だった。

あまりにもしれっと言ってくる一夏にちょっとだけドギマギしちゃうよ。

で、でも、可愛いって思ってくれてるんだ。
それは凄く嬉しい！

「ほら、撮るから笑えって」

「う、うん。こう？」

ニツコリと笑ってみせる。

だ、大丈夫かなあ？

変じゃないよね？

「・・・・・・・・」

「ど、どうしたの一夏？」

「へ？い、いや、別に」

「も、もしかして、僕の笑顔変だった？」

うう、一夏に変だっと思われたら僕立ち直れないかも……。

「い、いや！そんなことはないぞ！すごくかわ——」

そこまで言つと一夏は口を押さえてしまった。

えっ？一夏は今なんて言おうとしたの？

「かわ——」って言ってから次に続く言葉って……。

「シャ、シャル。もう一回、笑ってくれるか？」

「え？もう一回？」

「う、うん。写真撮り損ねちゃった。すまん」

そう言う一夏の顔は少し赤かった。

なんか誤魔化そうとしている感がありありと伝わってきた。
もしかして一夏、僕に見惚れてドキドキしてくれたのかな？

そうだと凄く嬉しい。

そう思うと緊張がスツとほぐれていった気がした。

「わかった。それなら、仕方ないね。今度は撮り損なわないでね？」

「お、おう」

また僕はにつこりと笑ってみせる。

一夏も画面の側にあるボタンを押した。
すると数秒後に「パシャッ」という音が聞こえた。

「ほら、終わったぞ」

「うん」

僕と一夏は機械の外へと出た。

side out

一夏とシャルロットはシールプリント機の中から出て、今は出来上がりを待つ状態だった。

「だけど、凄いんだね」

「ん？何が？」

「日本ではこんなことができるんだね。僕知らなかったからさ」

「まあ、他にももっと色んな機能あったりするみたいだけどな。俺も全然やった事無いから詳しくは知らないけど」

そこに出来上がった写真がシールプリントとなって出てきた。

「おっ、出てきたな。ほら、シャル」

一夏は出来上がった写真を手に取ると、シャルロットに差し出す。

「……………」

シャルロットの目には仲良く並んで写真に写る自分と一夏が映っていた。

それを見るシャルロットの表情は嬉しさ半分、恥ずかしさ半分といった感じだった。

「どうした？もしかして写りでも悪かったか？」

「いや、そうじゃないよ」

「そうか？」

「ま、まるで僕と一夏が本当に恋人同士みたいで凄くいいなあと思っただけくらいで」（ボソッ）

「ん？何だつて？」

「な、何でもないよ！..」

手をブンブン振るシャルロット。

恥ずかしい事を小声で口走っていた。

それを一夏に聞かれなかったのは幸いなのかはわからない。

「よし、じゃあこれは半分ずつな」

一夏は近くにあった鋏でシールプリントを半分に切り分けた。

「ほい。シャルの分だ」

「あ、ありがとう」

シャルロットは切り分けられたシールプリントを受け取り、もう一度それを確かめた。

そこには一夏とシャルロット。

まるで、恋人同士のように仲良く並んで写っていた。

シャルロットはしばらくこの写真を大切に保管しようと固く決めるのであった。

「さて、あとはどうする？」

一夏がシャルロットに訊ねる。

正直、シャルロットはこの写真を撮れただけで満足だった。

「そろそろ出ようか？あんまりこれといってやりたいゲームとかもないし」

「そつだな。とりあえず、またブラブラするか？」

「うん」

一夏とシャルロットはゲーセンを後にした。

シャルロットの腕は一夏の腕に回されて腕組み状態だ。

その反対の手には一夏がゲットしてくれたクレーンゲームの景品の
ティベアの入った袋が提げられていた。

そして、2人で撮った写真は大切に大切にシャルロットのバッグに
仕舞われていた。

第四十一話 『ゲーセン』ってどんなところ？（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

しかし今回は長文だった・・・。

いつもは4500～6000字を目安に執筆してるのに今回は8000字越えた・・・。

ゲーセンを楽しむ2人はいかがでしたでしょうか？

選んだゲームはあるギャルゲーを参考にしています。

僕自身がゲーセンに行くことが滅多にないので執筆に苦戦しました。

次回でセカンドデートも終わりかな？

長くなったら分割するかもしれません。

ではまた次回に！

第四十二話 最終スポットはお江戸？（前書き）

セカンドデート第六話目です。

今回で終わらせる予定でしたが書いているうちにやっぱり長くなったので一話に収まりきりませんでした。

まだセカンドデートは完結しません。すみません。

第四十二話 最終スポットはお江戸？

ゲームセンターを後にした一夏とシャルロットは再び千羽谷の街を散策していた。

基本的に2人のデートは目的地を定めるということはしていない。ただ2人でブラブラと歩いて気になる場所がきたら寄ってみる。これが彼らのデートスタンスだった。

このデートスタンスが彼らに思わぬ幸運をあたえるのであった。

今2人がいるのは千羽谷駅から少し離れたところにある小さな商店街。

目的地を決めるでもなくブラブラと歩いていた2人はいつの間にか駅からちよつと離れたところまで足を伸ばしていた。

都心に近い千羽谷だが2人が訪れたこの商店街は少し趣が違っていた。

車道の両脇に長屋づくりの古い建物の中にある数々のお店が軒を並べている。

店並みも駄菓子屋、饅頭屋、煎餅屋、乾物屋、呉服屋などそれなりの店がそろっている。

ちよつとした京都のようなものだ。

まるで江戸の面影を彷彿させるような感じだった。

「うわあー！ 凄いよ一夏！ 本当に江戸時代みたいだよー！」

目の前に広がる街並みを見て、シャルロットは目を輝かせていた。結構日本贋贋なところがあるシャルロットだが、こついつた江戸の街並みなんかはテレビでしか見たことがなく、実際に自分の目でこついつた街並みを見るのは初めてだった。

「俺もこんな場所があるなんて知らなかったなあ。これはいい場所見つけたかもな」

一夏自身もこの街並みにちよつとした驚きと感動を覚えていた。何故このような場所にこのような商店街ができたのかはわからないが今の2人にはどうでもいいことだった。突然訪れた幸運に2人は大いに乗っかることにした。

「一夏！ちよつとここを回ってみようよ！」

「そうだな！せつかく見つけたんだし、回ってみるか！」

「うん！」

2人は商店街へと歩き出した。

「ねえねえ一夏！あのお店なんだろうね！？」

組んでいた腕で一夏を引っ張ってシャルロットははしゃぎながら一夏を連れ回していた。

1・煎餅屋

「あちつ！あちちつ！！」

「もう一夏、落ち着いて食べなよ」

煎餅屋で買った出来立ての煎餅を2人で齧る。

一夏は慌てて食べたせいで熱さにやられちゃっていたのでシャルロ

ツトが「落ち着いて食べて」と嗜める。

「だってこういうのは熱々のうちに食わないとさ」

「でも子供じゃないんだから。ちょっと落ち着いて。ね？」

「わかったよ」

シャルロットは一夏の言う事も淒くわかった。

煎餅は醤油がいい感じに染み込んでいても美味しかった。

「よし！もう一枚行くか！」

「えっ！？まだ食べるの！？」

「だってほら！このおこげ黒胡椒ってやつも美味そうだぞ！奢ってやるから食おうぜ！」

「うーん、確かに美味しそうだけど、一夏今日はお金結構出してくれてるから何か悪いよ・・・」

煎餅一枚は大した値段ではないのだが今日は一夏に何かとお金を出してもらっているシャルロットは少し気が引けていた。

「遠慮なんてしないでいいのにな。あ、だったら半分こにしようぜ」

「ええっ！？」

「それだったら一枚買うだけで済むし、2人で食べられるだろ？おじさん！おこげ黒胡椒一枚ねー」

シャルロットの返事も聞かずに一夏はおこげ黒胡椒煎餅を注文する。一夏の提案に根負けしたのかシャルロットは大人しく従い、2人で仲良く半分こにした煎餅を口にするのだった。

2・陶器屋

「ひゃ、ひゃくまん・・・」

「高いねえ・・・」

輪島塗の陶器を眺めていると物凄い高い商品があった。

「あの絵は金三十三万って書いてあるよ」

「もう重要文化財クラスとかなんじゃないのかこれ」

この店は茶碗や箸なども置いてあつて値段も手ごろで販売されているがショーケースに並べられていたそれは確かに重要文化財クラスの陶器だった。

「お？こういうのいいな」

一夏が手に取ったのは茶碗。

茶碗の底に色々な絵が描いてあつてそれを見るだけでも結構楽しめるのであった。

「お？これは夫婦碗だつてよ。同じ柄で揃えてあつて正に夫婦って感じるな」

夫婦。

そう聞いたシャルロットはその茶碗を使って仲良くご飯を食べている一夏と自分を想像した。

（いいなあ、将来はこんな感じで仲良くお揃いのお茶碗で食事するのも悪くないかも。って、何考えてるんだろうね僕は／＼／＼／＼）
そんな想像をしながら一夏と色々な茶碗や箸などを眺めていた。

3・呉服店

「お！この柄いいなあ」

一夏がひとつの着物の生地を手にとって見ていた。
生地は海を表すかのような青で、波を表すような曲線が描かれていて、波間にはフリーハンドによる幾何学的な丸や四角が浮かんでいる。

「一夏って色は青が好きなの？」

偉大な海のような色彩に魅入っていた一夏にシャルロットが疑問を投げかける。

「色？そうだなあ。派手な色じゃなきゃ何でも好きだぞ。まあ、強いて言うなら白かな？清楚って感じるし」

「そうなんだ。一夏は白が好きなんだ」（ボソッ）

一夏に聞こえないようにシャルロットが呟く。

いい事聞いちゃった的な笑顔でコクコクと頷いている。

今度から一夏の好みに合わせた服装を試してみようと心掛けるシャルロットだった。

「お！こつちの柄もなかなか良いな。シャルはこの柄どう思う？」

「ん？どれ？」

その後も次々と着物の柄を物色する2人であった。

4・ガラス細工店

「一夏、これ可愛いよ」

「へえ、凄いな。ガラス細工ってこんなまでできるんだな」

ガラス細工で作られた器や花瓶や小物が立ち並ぶお店で2人は商品を手物色していた。

色とりどりガラス細工があつて、シャルロットが目にとめたのは猫や犬や鳥などの動物達を模ったミニチュアのガラス細工だった。

（とても可愛く作られていて凄くいい。いいなあ、ちょっと欲しいかも）

「シャル、それが欲しいのか？」

シャルロットが物欲しそうな目でミニチュアを眺めていると一夏がそう声をかけてくる。

「えっ？うん・・・、欲しいけどちょっと値段が・・・」

「どれ？うわっ、意外とするんだな・・・」

ちよつと高校生には高い金額が値札に書かれている。

『ミニチュアアニマル　どれでもおひとつ15000円』

さすがに高校生が手を出すには高い値段だ。

一夏もよかったら買ってあげようかと思ったのだがちよつと予想外の値段だったので尻込みしてしまう。

ぼつたりじゃないかと思ったほどだ。

「あ！ねえ一夏、あつちに綺麗な色のガラス細工があるよ！」

どうやらシャルロットの興味は別のものに移動したようだ。

一夏も内心ちよつとホッとしつつシャルロットの後に続いた。

その後も一夏とシャルロットはこの商店街の数あるお店を網羅しながら散策を楽しんだのであった。

アイキャッチしりとり

一夏「すつとばしていこばいー」

シャル「いけないなあそんなこと」

商店街を一通り回り終えた一夏とシャルロットは甘味屋に立ち寄って一休みしていた。

「ふう〜。結構時間かけて回ったな」

店の前の長椅子に腰掛けてお茶を飲みながら一夏が言う。
空をみればもう太陽が傾きかけ夕方になるつかという時間だった。

「そうだね。僕もちよつと時間忘れてはしゃいじゃったかな」

シャルロットも笑ってお茶を飲みながら一夏の言葉に同調する。
時刻はもう17時過ぎだ。

千羽谷から藤川まではシカ電でおよそ40分ほどかかり、この分では帰りは19時近くになってしまっただろう。
藍越学園の寮は門限が20時なのでシャルロットはそれまでに帰らなければならないのもうそろそろ帰る時間が迫っていた。

「そろそろ時間も時間だし、ここの抹茶アイス食ったら帰るか」

「うん、わかった。残念だけどそうしよう」

シャルロットは少し残念そうに声を漏らす。
楽しかった時間ももうすぐお開きとなってしまうのが寂しかった。

「お待ちーっ。抹茶アイス2つになりまーす」

威勢の良いおばさんの店員が一夏達の座る長椅子のところに抹茶アイス運んできた。

「ごゆっくりどうぞーっ」

手際良く抹茶アイスを一夏達の側に置くとそそくさと店の中に引込んだ。

「よし、じゃあ頂こうか」

「一夏、ちょっと待って」

シャルロットが待ったをかける。

一夏はスプーンを止めてシャルロットの方を見る。

「何だ？どうしたシャル？」

「いや、ね、またお願いしようかと思って」

「へ？お願いって・・・」

この日の一夏はシャルロットのお願いを何でも聞く約束をしているのだが、この状況でお願いを持ち出された一夏はちょっと嫌な予感がした。

「お願い、約束、アイス、スプーン」

恐らく解る人はこの4つのキーワードでわかるであろう。

「お、おい、お願いってまさか・・・」

どうやら一夏もピンと来たようです。

シャルロットは抹茶アイスをスプーンで掬うと一夏の方へ差し出す。

「はい一夏、あ〜ん♪」

「やっぱりかー！！」と一夏は思った。

昼食時のキュービックカフェでやったときは他に客もいなかったの
でまだよかったのだが、この甘味屋は大きな通りに面している上に
一夏達が座っている長椅子は店先なので大通りから丸見えになる。

（こ、これはさっきと比じゃないほど恥ずかしいぞ！！）

恥ずかしさのあまりに差し出された抹茶アイスを口にするのを渋る
一夏。

しかし、シャルロットには一夏を逃がさない奥の手があるので、そ
の札を躊躇い無く切る。

「一夏、男に二言はないんだよね？」

もはや退路は断たれた一夏。

「わ、わかったよ・・・」

最早覚悟を決めた一夏であった。

「はい、あ〜ん♪」

「ぐっ！・・・、あ、あ〜ん」

（パクッ）

「おいしい?」

「ああ、うまいよ・・・」

まるでさきほどキュービックカフェの焼き増しのように一夏はそれほど向きながら答える。

もちろん一夏は味はほとんどわからなかった。

「じゃあ、今度は一夏が僕に食べさせて」

「やっぱり、そうなるんだな・・・」

「うん」

キラキラ光る笑顔でシャルロットが微笑む。
こうなってしまうては一夏に勝つ手段はない。

「じゃあシャル、あ、あゝん」

「あゝん」

(パクッ)

「ど、どうだ?」

「うん、美味しい」

頬を赤く染めて可憐に微笑むシャルロットに一夏はちょっとドキドキしてしまう。

最初は渋るものの、やてみれば意外と悪くないと思ってしまつ一夏

であつた。

「君達、ちよつといい？」

「はい？」

突然2人は声をかけられた。

声をかけられた方を見るとそこには20代中盤くらいだろうか、眼鏡をかけたキャリアウーマンといった感じの女性が立っていた。

「君たち高校生？」

「え？あ、はい、そうですけど。何か御用ですか？」

「ああ、ゴメンなさい。私はこういう者なんですけど」

女性は胸ポケットから小さな紙切れを出して渡してくる。

おずおずと受け取った名刺には『。社 インフィニット・ストラ
イプス 副編集長 黛 渚子』書かれていた。

『インフィニット・ストライプス』は中高生、ティーンエイジャー向けのファッション雑誌で、ファッションに敏感な若者から絶大な支持を受けている雑誌だ。

なぜ、そんな人気ファッション雑誌の副編集長が2人に声をかけてきたかというと。

「今度うちの雑誌で街中にいるカップルの特集を組むことになってね。君達が仲良く食べさせあいっこしてたからいいモデルになるかと思って」

「み、見てたんですかっ!？」

衝撃の事実顔に赤くして驚く一夏。
シャルロットも真っ赤になっていた。

「黙って見ててごめんなさい」で、よかったら写真撮らせてくれな
い？」

と、カバンからデジカメを取り出して片手であげる。

一夏は正直こっぴどいのは苦手なので丁重にお断りを入れようかと思
っていた。

が、服の袖が引っ張られた。

「記念に撮ってもらおうよ」

シャルロットが覗き込むようにして小声で言う。

「記念って、何の？」

「今日のデートの記念に」

「で、でも、いいのか？」

「僕はいいよ」

シャルロットは乗り気のようにうなづいた。

シャルロットにこう言われては一夏も断ることはできずに渋々なが
ら取材に応じた。

「彼女の方は日本人じゃないわよね？何処の国の人なの？」

「えっと、出身はフランスです」

「へえ、彼女かわいいわねえ。彼としては自慢じゃない？」

「はあ、まあ」

「付き合ってたのくらい？」

「え？いや、俺達は――」

「1ヶ月ぐらいです」

「えっ！お、おいシャル！？」

シャルロットは笑いながら一夏の腕に自分の腕を絡めてそう言った。

「いいじゃん。そういうことにしておこう。ね」

小声でシャルロットがそう告げてくる。

彼女がそう言うの一夏もそれに頷いておくことにした。

「じゃ、撮るよ。ハイ、チーズ」

まぶしいフラッシュが2人を照らす。

「もう一枚お願い。ハイ、チーズ」

二度目のフラッシュが2人を包む。

「いい画が撮れたわ、ありがとうね」

一通り撮り終わった女性はカメラをカバンに仕舞った。

（顔ひきつってたかな？） ↑ 一夏

（やっぱり、ちょっと恥ずかしい・・・） ↑ シャルロット

「最後に名前教えてもらってもいい？フルネームじゃなくていいけど」

「ああ、俺はイチカです」

「ぼく——、私はシャルロットです」

2人は無難にファーストネームを名乗った。

シャルロットは僕と言いそうになったのを私と言い直した。

「イチカさんとシャルロットちゃんね。ご協力ありがとうございます」

そう言っただけで女性は去っていった。

「雑誌、載ったりして」

「載らないだろ」

「だよな」

載る訳無いと顔を合わせる2人。
それは雑誌が発売されてからのお楽しみだ。

正直、載って欲しくはないと思う一夏と載ったら恥ずかしいと思っているシャルロットだった。

「さて、食い終わったし、そろそろ帰ろっぜ」

「うん、そうだね」

日も暮れかけてきたので、一夏とシャルロットはその場を後にして帰路に着いた。

第四十二話 最終スポットはお江戸？（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

今回登場した商店街は「Memories Off シリーズ」の千羽谷には実在していません。僕が勝手に登場させました。

この場所は埼玉県川越市にある「川越一番街商店街」という場所をモデルに描きました。

「小江戸川越」と呼ばれるいい街並みが広がっている所なので機会がありましたら訪れてみてください。

そして後半出てきた渚子さん。これは原作にもあった雑誌インタビューのフラグだと思ってください。

一夏のお相手は箒ではなくシャルロットになりますが。

ではまた次回に！

第四十三話 勇気と愛と友情と（前書き）

セカンドデート最終話です。

ちよつと一石を投じました。

第四十三話 勇気と愛と友情と

side 一夏

ゴトゴトと揺れる電車。

俺とシャルは並んで座っていた。

乗客の姿は少なく、俺達の他にはちらほらいる程度のものだった。日曜日の夕方ではあるものの、帰宅ラッシュに差し掛かる時間帯の割にはこの空席の多さは意外だった。

まあ、ギユウギユウ詰めで帰るよりは楽でいいけどな。

この電車に乗れたのは結構ラッキーかもしれない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

電車が出てから少しの間シャルと話をしていたが、不意に話が途切れてしまっていた。

話す話題が無い訳ではない。

「今日は楽しかったな」とか「あの雑誌のインタビューは記事になっちゃうのかな？」とか何でもいい。

話すことはいくらでもあるのだ。

でも、何故だかまた話をするキツカケが掴めないでいた。

そんな状態が2駅ほど続いただろうか。

「次は、澄空、澄空」

電車は千羽谷駅を出てから北的射^{きたまとい}、的射の順に止まり、澄空駅^{すみそら}に着いたようだ。

藤川まではあと中目町、なかめちやう 藍ヶ丘、あいがおか とわり、さくらみね 桜峰、はまさき 浜咲、あしかじま 芦鹿島、
林鐘寺りんしょうじと間に7駅もある。

すっかり茜色に染まった5月の空。

俺は何気なしに車窓から夕暮れの光景を眺めていた。

そんな光景を眺めること数分……

(とさつ)

不意に、右肩に何かがのしかかってきた。

何かと思つて右肩をうかがう。

「あ」

そこには、安らかな寝息を立てて身を預けるシャルの顔があつた。
疲れていたのか、まるで無防備な姿だ。

「……………」

「すう……、すう……」

シャルの寝息が聞こえてくる。

こうして眠るシャルの姿は、何か幼くも見えて可愛くもあつた。

車窓から指す夕日が僅かにシャルに当たり、何やら幻想的なイメージを醸し出している。

元々シャル自身が凄く美少女だけに凄く画になる光景だった。

その姿を見て、俺は少しドキドキした。

別にシャルの寝顔を見るのはこれが初めてという訳ではない。

子供のころに一緒の布団で寝たことだってあるし、最近でもGWに
うちでトランプをしていてシャルが寝落ちしてしまったときも俺が
ベッドまで運んだ事もあつた。

だけど、この寝顔だけは何か特別なものを俺は感じていた。
俺だけに見せてくれるシャルの無防備な姿。
それが今の俺にはたまらなく嬉しかった。

（なんなんだろうな、この気持ちは・・・）

そんな思いが、確かに俺の胸の内あった。
決してそれは不快ではない。

言うなれば何か温かな、落ち着くような感じだった。
しかしそれは俺の中で完全な形となって表れているという訳ではな
いような気がなんとなくした。

シャルに対するこの気持ちはまだ俺の中では不完全なものなのかも
しれない。

シャルの姿を見ると起こすのが悪い気がしたのでそのまま寄り掛か
らせたままにしておき、俺は首を元に戻して藤川へ向かう電車の外
の光景を眺め続けた。

s i d e o u t

s i d e シャルロット

「ごめんね。僕寄り掛かって寝ちゃって」

「気にすんなって。今日は結構歩き回ったからな。疲れてたんだろ
う」

僕はさっき電車の中で一夏の肩に寄り掛かって眠りこけてしまった。
悪いと思って謝ったけど一夏は「気にするな」と言ってくれて、逆

に僕を気遣ってくれた。

「疲れて体調崩したりしてないか？辛かったら言えよ」

それは決して押し付けがましいものではなくあくまで自然で、一夏の人がわかる。

「大丈夫だよ。心配しないで」

その気遣いが僕には凄く嬉しくて、一夏の優しさが僕の胸に温かな気持ちを与える。

そんな一夏の事が僕は本当に愛おしい。

一夏の隣に居たい。

一夏に僕を見てほしい。

ずっとずっと、一夏と一緒に居たい。

僕はそのとき、本当にそう思った。

「シャル、今日は楽しかったか？」

一夏が僕にそう訊いてくる。

当然僕は答えは決まってる。

「うん、すつごく楽しかったよ。2人で色んなところ回れたし、一夏と一緒にだったから僕は楽しいと思えたよ」

「そうか。それを聞いて俺も安心したよ。俺も今日は楽しかったよ。ありがとうな、シャル」

「ううん、僕の方こそありがとう、一夏」

僕と一夏笑い合って茜色から藍色に染まり始めた空の下を並んで歩いて家に向かった。

「じゃあ、また明日な」

「うん」

楽しかったデートもいよいよ終わりの時間が来た。

今は織斑家の門の前で僕と一夏はここでお別れだ。

一夏は織斑家に、僕は寮に帰らなければいけない。

距離にしたってお互い十字路の対角線に位置している建物に住んでいるからそんなに離れているわけでもないのに凄く寂しく感じてしまう。

一夏が手を上げると門を開けて玄関に向かう。

その後姿を見送っていると何かとてつもなく寂しさが込み上げてくる。

まだ、もう少しだけ、一夏と一緒にいたい……。

「い、一夏！」

僕は思わず一夏を呼び止めていた。

一夏は玄関の前で振り向いて「何だ？」と言ってくる。

呼び止めたはいいいけど何を言っているのかわからない。

僕はただ、もう少しだけ一夏と一緒にいたいと思っただけで特別な用がある訳じゃない。

言葉が見つからなくて僕は黙って俯いてしまう。

「シャル？どうしたんだ？」

一夏が僕の今まで戻ってきて心配そうに顔を覗き込んできた。
こんな時まで一夏は優しくった。
胸にこみ上げた愛しさが僕をまた支配する。

「ねえ一夏。最後にもうひとつだけ、僕のお願い聞いてくれる？」
気がついたら僕はそう口にしていた。

「まだ何かお願いがあるのか？」

「う、うん。でも、大した事じゃないよ。すぐに済むから。ダメかな？」

僕はちょっと不安になる。

今日は結構無茶なお願いをしてきたからさすがに一夏も嫌がるんじゃないかと思った。

「いいぜ。お願いは何だ？」

ニツコリと笑顔で一夏は承諾してくれた。

「じゃ、じゃあ・・・ね、その、ちょっとの間だけ目を閉じてくれる？」

「え？お願いってそれか？」

「う、うん」

「変なお願いだな。わかったよ、これでいいか？」

そうして一夏は目を瞑った。

僕は一度身体の後ろで手を交差させて、腕にはめられた前に一夏からプレゼントされたブレスレットの感触確かめる。

そうして貰ったあだけの勇気を全部振り絞って僕は一夏の顔に自分の顔を寄せて――

(CHU)

一夏の唇にそつとキスをした。

一瞬触れるだけの子供っぽいキス。

今の僕の勇気ではこれが精一杯だった。

「——っ!？」

僕は唇を離すと一夏を見つめた。

一夏は何が起こったかわからずといった感じで呆然と僕を見ていた。互いの瞳に写る相手の顔を僕と一夏は少しの間、見つめ続けた。

そしてしばらくの後、一夏はキスされたと理解したのか顔が一瞬で真っ赤に染まる。

それはきつと僕も同じだった。

一気に頭の中が沸騰したように熱くなった。

酔ってしまったかのように顔の火照りが止まらない。

「シャ・・・ル・・・?」

「こ、これはお礼だよ!」

「・・・へ?」

「今日のデート楽しかったから!!だからお礼!!」

「え、あ、え・・・」

「そ、それじゃあ、おやすみ一夏!!」

未だ呆然と立ちすくむ一夏に背を向けて僕は駆け足で寮に戻った。駆け足のまま寮の廊下を走ってそのまま自分の部屋に飛びこむ。

（キス、しちゃった・・・）

鼓動はドキドキと跳ね続け、頭は沸騰状態になつてゐる。

指先を唇に持つてくるとそこはまだ熱を持っているかのように熱かった。

「僕の、ファーストキス・・・」

ポツリとそう呟く。

この唇で初めてキスをした相手が一夏。

一瞬だけ触れた一夏の唇の感触が蘇つて来る。

そう考えるだけで僕の中で込み上げてくるものがあつた。

嬉しさや恥ずかしさといった感情がゴツチャ混ぜになつてゐる。

暴れだしたそれを鎮める術を今の僕は持つてはいなかった。

side out

アイキャッチしりとり

「一夏」とうとうこのときが来ました」

シャル「大切なファーストキス、あげました」

あれから部屋着に着替えたシャルロットはしばらくの間、ベッドの上に横たわっていた。

その間もずっと、シャルロットの思考の大部分を占めていたのは一夏の事だった。

心を落ち着けようにしても、何度も先ほどのキスのこと思い返してしまう。

ふと気付くと指先が唇をなぞるように触れている。
そこには先ほど感じていた熱はもうなかった。

「一夏……」

名前を呟くだけで、心がほわっと満たされるようだった。

それと同時に恥ずかしさも再び込み上げてくる。

明日は月曜日なので当然学園があるのだ。

しかし、今のシャルロットは気恥ずかしくてどんな顔をして一夏と会えばいいのかわからなかった。

そんな純情乙女思考モードにどっぷり浸かりながらシャルロットはベッドの上で横たわっていた。

（コンコン）

不意に部屋をノックする音が響いた。

「シャルロットさん、いらっしゃいますか？今日は夕食を取られていないようですが、お加減でも悪いのですか？」

セシリアの声だった。

シャルロットは時計に目をやるとすでに21時をちょっと過ぎていた。

ちなみに帰ってきたのは19時半ごろだ。
どうやらどっぷりと思考に浸っている間に結構な時間が経過していたらしい。

「シャルロットさん？入りますわよ？」

「う、うん、入っていいよ」

ガチャツとドアを開ける音が響くとセシリアが姿を見せた。

「大丈夫ですかシャルロットさん？お身体の具合でも悪いんですの？」

「あ、ううん、平気だよ。ゴメンね。心配かけちゃって」

「いえ、それはいいのですが。それよりももう食堂は閉まっていますけど夕食は取りましたの？」

「あ、うん、ちょっと考え事してたからね。取ってないや。あははは・・・」

シャルロットはお腹に手をやった。

浸っていた思考から抜け出したら急にお腹が空いてきてしまった。しかし食堂は21時までしかやっていないからもう閉まってしまっている。

一応、部屋の中にもキッチンがあるのだが今は冷蔵庫の中に食材があまりないので大したものを作れない。

もう門限も過ぎてしまっているので外に買いに行く事もできない。困ったものだ。

「でしたら、わたくしの部屋に参りましょう。チエルシーにお願いして何か作ってもらいましょう」

「え？ いいの？ チエルシーさんに迷惑なんじゃ・・・」

「大丈夫ですわ。チエルシーなら快く了承してくれます。主のわたくしが言うのですから間違いありませんわ」

「あ、うん、そうだね。じゃあ、お邪魔しようかな」

「はい。では、参りましょう」

セシリアに促されるままにシャルロットは自室をあとにしてセシリアの部屋に向かった。

セシリアの部屋を訪れるとチエルシーがお茶の用意をしていた。

寮の一室は基本1Kなのだが、以前にセシリアの部屋は思いつき増改築されているので一軒家ほどの広さがある。

その部屋でセシリアは専属メイドのチエルシーと2人で住んでいる。どれだけ金を積めばそんなことができるのかはわからないが、世界を股に掛けるイギリスの名家であるオルコット家の財力がそれを成し得たのであろう。

まあ、それを容認しているセシリアの父親である『ジェームズ・オルコット』が一番の問題かもしれないが。

「すみませんチエルシーさん。わざわざ僕の為に」

「いえ、お嬢様のご学友の為ですから。時間も時間ですので、大したもののは作れませんでしたがご了承ください」

セシリアが言った通りチエルシーは快くシャルロットの夕食の用意を引き受けてくれた。

セシリアが寮で暮らし始めて以来、シャルロットは何かとセシリアは共に行動する事が多かったのでチエルシーとも親しい間柄となっている。

とはいえ、こんな時間に料理をするという手間を引き受けてくれたチエルシーにシャルロットは感謝した。

「では、私はシャルロット様の夕食の準備をして参ります」

「わかりましたわ。頼みましたわチエルシー」

「お、お願いします・・・」

チエルシーはキッチンの方へ去っていった。

「さて、わたくしたちはチエルシーが用意してくれたお茶を飲みながらお話でもしていきましょう」

「うん、そうだね。じゃあ、頂こうかな」

リビング？のテーブルにはティーセットが置かれていた。

どうやら3人分の用意があるということは元々セシリアはシャルロットを誘ってお茶をするつもりであったらしい。

「今日はアッサムの良い葉が手に入りましたのでそれをミルクティーで入れてみましたわ。どうぞ」

「うん、ありがとう」

用意された紅茶にシャルロットは口を付けた。

こくがあつてミルクティーに丁度良いアッサムは少しシャルロットの心を落ち着かせた。

「そういえば、今日の一夏さんとのデートはどうでしたか？楽しめましたか？」

「っ！！ケホッ！ケホッ！」

紅茶が気管に入りそうになってむせ込むシャルロット。

一夏の話題は今のシャルロットには爆弾である。

「だ、大丈夫ですか！？」

セシリアが心配そうに背中を擦る。

「ケホッ！ケホッ！だ、大丈夫、ゴメンね・・・」

涙目になりながらも気丈な事を言うシャルロット。

あまりいらぬ心配をセシリアにかけたくはないのが心情だった。

「それで、デートはいかがでしたか？楽しめましたの？」

「う、うん。凄く楽しかったよ」

「そうですか！それは何よりですわ！」

盟友の契りを交わした間柄であろうか、セシリアは自分のことに喜んでもくれた。

「はあく、羨ましいですわ。わたくしも百春様と素敵なデートをしてみたいですわ」

今度は一転して残念そうな顔をするセシリア。

実は彼女も百春にアプローチをかけようと色々と考えてはいるのだが、学校では教員と生徒ということで会う機会も全然無く、休日は百春は残っている仕事があるだのやらなければいけないことがあるとかで全然一緒の時間が作れていないのだ。

医者という職業は成る為の勉強よりも成ったあの方が勉強するところが多いのだ。

彼のそんな夢を追う姿もセシリアが彼を好きになった理由のひとつだがやはり寂しい。

8歳の年齢差といものは社会から見るとそれほどまでに大きいものなのだ。

「お待たせいたしましたシャルロット様。夕食をお持ちしました」

チエルシーがキッチンから戻ってきた。

トレイに乗って運ばれてきたのはどうやらミートスパゲッティと生野菜サラダのようだ。

「簡単なもので申し訳ありません。パスタは茹でるだけのもので、ソースも先日余ったものを温め直して使用しております。サラダも余っていた野菜を使用しています」

「いえ、それで充分です。ありがとうございます。頂きます」

「はい。召し上がれ」

湯気が上がるミートソースの良い匂いは空腹のシャルロットには一段と料理を美味しそうに見せていた。

夜も遅い時間にこれを用意してくれたチェルシーに感謝しつつシャルロットはそれを口にした。

それから小一時間ほど3人でお喋りをしながら時間を過ごした。

「もう22時を過ぎていますわね。そろそろお開きにしましょうか」

「あ、うん、そうだね。明日には学園があるし」

時間も時間ということでの日はこれで解散となった。

シャルロットも夕食をご馳走になったお礼を言ってセシリアの部屋をあとにしようとした。

「シャルロットさん」

するとセシリアがシャルロットを呼び止めた。

「ん？なあに？」

シャルロットが振り返るとそこには何やら真剣な顔つきをしたセシリアがいた。

「シャルロットさん。わたくしは何があつたのかは聞きませんわ」

「え？」

「でも、何か相談したいことがあつたら迷わずに言ってくださいね。何せわたくし達は盟友です。わたくしも力になりますわ」

そう言つとセシリアはにつこりと笑つて見せた。

顔に出さないようにしていたが、どうやらセシリアにはシャルロットがちよつと思ひ悩んでいたことがわかつていたらしい。

だからこそ自分を部屋に招いて色々話をしてくれていたのだとシャルロットはこのとき気が付いた。

セシリアの心遣いに感謝するのであった。

「ありがとうセシリア。僕は大丈夫だよ。本当に何かあつたら相談するから。今は気にしないで」

「わかりましたわ。では、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

シャルロットはセシリアの部屋をあとにした。

「ふう、セシリアのおかげで少しは心が落ち着いたかなあ」

自室でシャワーを浴びながらシャルロットはひとり呟く。

あのまま自室に籠つていても色んな感情に苛まれて酷く落ち着かない状態が続いていたであろう。

全身真っ赤になって布団にくるまって悶絶している自分が容易に想像ができた。

そんな状態が朝まで続いていたらとてもじゃないが学園になんて行けたもんじゃない。

「本当に、僕は良い盟友を持ったものだなあ」

再び心のうちでセシリアに感謝の念を送った。

「今度百春さんと2人つきりになれるようにセッティングしてあげよう」

それが最大のお礼なるとシャルロットは考えた。
きつとセシリアも喜ぶであろう。

シャルロットはシャワーを浴び終えて寝る準備に入る。
準備を終えてベッドに入ろうとすると、枕元にあるフォトフレームが目に入る。

それは先週一夏が束の作った変な薬を飲まれたせいで身体が幼少化し、織斑家の縁側で2人揃って居眠りをしてしまったときに千冬に撮られたツーショット写真。

「一夏……」

また鼓動が早くなってくる。

しかし、心は不思議と落ち着いていた。

「うん、大丈夫。これなら眠れそう」

落ち着きを確認するとシャルロットは部屋の明かりを消してベッドに入る。

「まだ一夏とどんな顔して会えばいいかわからないけど、なるようになるよね。うん！」

ポジティブシンキングのシャルロットは気合を入れて布団をかぶる。
これから寝るのに気合を入れるというのもおかしい話だが。

「夢の中でも一夏に会えるといいな」

暗闇の中で左手首にはめられたブレスレットがキラリと光った。

「おやすみ、一夏・・・」

(CHU)

ブレスレットにキスを落とすと、シャルロットは布団を頭のでっぺんまでかぶり直して静かに目を閉じる。

そして数分の後に彼女は夢の中へと旅立って行った。

第四十三話 勇気と愛と友情と（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

遂にやってしまった・・・。

最初はキスは頬にするつもりだったのですがなんか書いてて「この雰囲気ですって頬じゃなくね？」という考えに至り、思い切って唇にしてみました。

といってもまだ2人の関係を急速に加速させるつもりはありません。一夏のシャルロットに対する認識を「可愛い幼馴染」から「気になる女の子」に変えた状態です。

公開している設定にもありますが心の内では淡い想いは出会ったときから持っています。ただ一夏が自分の気持ちにも鈍感なだけです。

話は変わってタイトルですが、すべてスパロボの精神コマンドから引用しました。

一夏は勇気、シャルロットは愛、セシリアは友情を示しています。本作のこの3人は必ずこのスキル持ってます。

さて、次回はこのデートの裏でセシリアが何をしていたかを語りたいと思います。

彼女は最近出番全くなかったので・・・。

というよりこの作品は一夏とシャルロット以外は空気になりがち・・・。

ではまた次回に～

第四十四話 英国淑女の休日 前編（前書き）

リアルでちょっと忙しかったのでちょっと間が空いてしまいました。一昨日まで22〜8時までの深夜バイトが五連勤で入ってたのでクタクタでした・・・。

さて、今回は一夏とシャルロットのセカンドデートの裏で起こっていたセシリアのお話です。一話にする予定だったのですが、やっぱり書いているうちに長くなったので前後編に分けることに。

またラウラの登場が延びてしまいました。すみません・・・。

第四十四話 英国淑女の休日 前編

side セシリア

皆様御機嫌よう。

セシリア・オルコットですわ。

登場してから十話以上も出番がありませんでしたが今回はわたくしが主役のお話ですわ。

このままずっと出番がないかとハラハラしていましたけどよかったですわ。

存分にわたくしの活躍をお楽しみなってくださいまし。

AM 6:30

今日は日曜日と言うことで学園もお休みですわ。

かといっていつまでもベッドでゴロゴロしていてもだらしないのでそろそろ起きると致しましょう。

あんまり遅くなるとチエルシーがシーツの洗濯ができないと怒ってしまいますからね。

さて、着替えも済ませたところでちょっと朝のお散歩にでも参りましょう。

わたくしは幼き頃は病弱であつたために外を出歩くということはあまりできなかったのですが、最近は身体の調子も良いという事で休日の朝はこうしてお散歩をするのが日課のようになっていきますわ。

これもわたくしが最もお慕いするお方である百春様に薦められて行っているものですわ。

「朝に散歩してみるのはどうだ？健康にもいいし、この町に慣れるという意味でもいい事だろう」と以前に言われましたわ。

お医者様を目指すあのお方の言う事なら間違いはありませんわよね。

「お嬢様、おはようございます」

「ええ、おはようチェルシー」

わたくしの専属メイド兼幼馴染のチェルシーが顔を見せに来ました。どうやら起こしにきてくれたようですわね。でも、わたくしはも目覚めておりましたので少々お手間となつてしまいましたわね。

「お嬢様、これから朝のお散歩に出られますか？」

「ええ、20分ほどで戻りますわ」

「わかりました。私は朝食の用意をしながらお待ちしております」

「ありがとうチェルシー。では、行って参りますわ」

「いつてらっしゃいませ」

うやうやしく頭を下げるチェルシーに見送られてわたくしは部屋をあとにして寮の外へと出ました。

「ん〜。今日もいいお天気ですわ〜」

ひとつ伸びをしてから清々しい朝の空気を吸い込む。これから日本は夏に向かって暑くなっていくみたいですがまだまだ朝は気温も穏やかで気持ちが良いですわね。

「これで隣に百春様がいてくださったら最高なのですが」

わたくしはちらりと織斑家の方に目を向けてみます。
さすがにこのような時間に呼び鈴を鳴らすのはご迷惑なので諦めて
わたくしは足を踏み出しました。

「今日も良い日になるといいですね」

こうしてわたくしのこの日の一日は始まりましたわ。

s i d e o u t

朝の散歩が済むとセシリアはシャワーを浴びてスッキリとしてから
ドレッサーの前に座って髪お手入れをする。
毎日欠かさず手入れを続けてきた煌びやかな長い金髪は彼女の自慢
のひとつでもある。

それもこれも好きな人に美しい自分を見てもらうためだ。

「髪がうまくまとまった日は気分が良いですね」

上機嫌のセシリア嬢。

今日は何か良い事が起こりそうと気分が弾む。

「お嬢様、朝食の用意が整いました」

「わかりました。早速頂きますわ」

「それと、今朝パソコンの方にメールが届いておりました。おそろ
く旦那様からだと思います」

「お、お父様から……。わかりましたわ。朝食を取ったら確認します」

「はい」

若干、苦虫を噛み潰したような顔をするセシリア。

先ほどの良い気分が台無しになったみたいな顔だった。

ジェームズ・オルコット。

世界を股にかけるイギリスの名家であるオルコット家の現当主でセシリアの父。

各分野で非凡な才能を発揮し、彼の妻であるレイチエル・オルコットと共にオルコット家を一代で築き上げた男。

しかし、そんな彼にも大きな欠点がある。

それは『超』が10個くらい付くほどの親馬鹿だということだ。

飴と鞭という諺ことわざがあるが、彼はその飴を体現したような人物で、オルコット家の財力を『セシリアのセシリアによるセシリアのための財力』と公言しているほどの親馬鹿っぷりだ。

セシリア自身も父がそう公言しているのである程度は自由に財力を使わせてもらっている。

あんまり使いすぎると父共々、母のレイチエルに血祭りに上げられかねないからほどほどではあるが。

父のジェームズが飴なら母であるレイチエルは鞭。

それがオルコット家なのだ。

まあ、藍越学園の寮を増改築してしまうほど金を使っても何も言っていないのはそれだけオルコット家の財力がぶっ飛んでいる証拠なのである。

さて、話が逸れたが先ほどセシリア宛にそのジェームズからメールが届いたそう。

実のところ、ジェームズは1日に1回は必ずメールをしてくる。

遠い異国の地にいる愛娘のことを心配しているといえは聞こえはいが、ジェームズは結構度が過ぎている。

セシリア自身も病弱だった自分を見捨てずここまで育て、愛してくれる父には感謝はしているが最近は少しそれを鬱陶しく思う事もあるのだ。

15歳になったということもあって、親の愛情を少し疎ましく思う時期でもあるのかもしれない。

「さて、メールを確認しませんと・・・」

朝食が済んだのでセシリアはノートパソコンを立ち上げる。

メールの受信ボックスを開くと確かにジェームズからのメールが1通届いていた。

件名にこう書かれていた。

『マイスイートドクター セシリアへ』 本来は英文ですが和訳

文でお届けしています。

（ボタンッ！）

ノートパソコンを閉じた。

「お嬢様、そのように力を込めて閉じてはパソコンが壊れてしまいます」

「ごめんなさいチエルシー……。ちょっと眩暈が・・・」

メールの件名を見ただけで辟易とする。

何が悲しくて朝からこんな親馬鹿メールを読まなくてはいけないのかと疑問を持ってしまふ。

「とりあえず目を通しておくだけでもしておいてはどうですか？それでも旦那様はお嬢様のことを思つての事ですし」

「わかつていますわ。はあ・・・」

大きくため息をしつつ、仕方無しに内容を見してみる。

『マイスイートドクター セシリアへ 本来は英文ですが和訳文でお届けしています。』

私の可愛い可愛いセシリアよ、元気にしているか？

もうお前が日本へ旅立つてから1ヶ月近く経とうとしている。

お前が旅立つてからというものの、私は日夜に限らずお前の事を想っている。

最近では目に入れても痛くない程大切な娘であるお前を心配するあまりに毎日吐血をしてしまうほどお前の身を案じている。

しかし、日本には「可愛い子には旅をさせよ」という言葉があるように、これも目どころか口の中に入れても痛くない程可愛い可愛いお前のためなのだとも私も必死に耐えている。

私も辛いがお前も辛いだろうということにはわかっているので親として耐えて耐えて耐えぬいて、お前と次に会える日を心から楽しみにしているぞ。

本当は1日に1通ではなくて30分・・・いや、10分に1回はお前へメールを送りたいくらいなのだが、レイチェルに「ちゃんと

仕事をしなさい!!」怒られてしまうので1日1通で我慢している。
だからお前も寂しいだろうが我慢しておくれ。
おお、そうだ!聞いておくれマイドーターよ。
今こっちではとんでもないことに――

メールを削除した。

「お嬢様、さすがにそれはちょっと残酷なのは?メールも最後まで目を通しておりませんし」

「これ以上はもうわたくしの方が耐えられせんわ……。はあ、お父様にも困ったものですわ……」

額に手を当てて天を仰ぐセシリア。

朝の良い気分はすっかりとセシリアの中から抜け出まっちゃったのであった。

アイキヤッチしりとり

セシリア「助けてください」

チエルシー「いいえ、無理です」

side セシリア

コホン、お父様のメールを見終えたわたくしは、現在机に向かって勉強中ですわ。

留学生というのがありますが5月からの転入ということで少々遅れ気味のわたくしは自習をしておかなければ学園の授業にもついていけなくなってしまうすわ。

元々わたくしは勉強がそれほど苦手というわけではありません。

病弱だった幼少期は学校にはあまり通えてはいなかったのですが、お母様が厳しくわたくしに勉学をご教授してくださっていたので勉強が疎かになるということはありませんでした。

今は日本に留学しているわけなので日本の学校の授業にもちゃんとついていかなければなりません。

どうも近々テストがあるようなのでそれに向けて勉強しておかないといけませんわ。

「しかし、テストも近いということですのにシャルロットさんは余裕ですわね」

わたくしの盟友であるシャルロットさんは本日は一夏さんとデートにお出掛けになるそうですわ。

お聞きした話によれば一夏さんもシャルロットさんも成績は優秀なそうなのでテスト勉強はそれほど切羽詰ったりはしないそうですわ。一夏さんとはかく、シャルロットさんはわたくしと同じで留学生なのはどうしてあんなに余裕でいられるのか不思議ですわ。

やはり1学期の頭から授業に出ているからなのでしょうか？

何にしても愛しき方とデートに出かけられるのは羨ましいですわ。

わたくしも百春様と素敵なデートに出かけてみたいですわ。

ふたりきりでクルージングなんていいですわね。

それで夜景をみながらディナーを一緒するというのも素敵ですわね。日本には夜景が綺麗な場所も多いそうなので今度お父様に頼んでク

ルーザーを用意してもらいましょう。

それで百春様をお誘いしてふたりきりの素敵なディナーを。
うふふっ♪ なんだか考えただけで楽しくなってきましたわ。

「はあ、何だか無性に百春様にお会いしたくなってしまうましたわ」

想像していたことがことなだけに百春様への想いが募ってどうしてもお会いしたくなってしまうましたわ。

思えば日本に来てからというもの、百春様とお会いする機会をあまり持ていませんわね。

休日になっても百春様はお忙しくて中々わたくしのお相手をしてくれませんし。

寂しいですわ・・・。

「ちよつと、家をお訪ねしてみようかしら・・・?」

今日は日曜日ですし、百春様もお家にいらつしやと思いますし。

ちよつと勉強でわからないところがあるという口実でお訪ねしてみましようか?

テストも近いのですし、勉強を教えてもらいに行くのは別に不自然ではありませんわよね。

「そうと決まれば早速実行ですわ!」

わたくしは手早く勉強道具をまとめると自室を後にした。。

「チエルシー、ちよつと出かけて参りますわ。夕食までには戻りますので留守を頼みますわ」

部屋のお掃除をしていたチエルシーに一言掛けてからわたくしは部

屋をあとにしようとする。

「承知至しました。その前にお嬢様。少しよろしいでしょうか？」

「はい？」

チエルシーに呼び止められましたわ。

一体なんでしょうか？

「百春様の元へ行かれるのですね。頑張ってください」

「え？」

何故チエルシーはわたくしが百春様の元へ行く事がわかりましたの？
本当にチエルシーは人の心が読めるのではないかと思ってしまいま
すわ……。

「いえ、私にはそのような能力はありません」

ええっ！？

わたくし今のは声に出してませんのに！
本当にチエルシーはエスパーか何かですの！？

「失礼ですがお嬢様。お嬢様はの考えていることは大体見ていれば
わかります。お嬢様は結構わかりやすいので」

「そ、そうなんですの……」

チエルシーの前ではうかつな事は考えられませんわね……。

「と、とにかく出掛けて来ますわ。家の事は頼みましたわよ」

「はい、いつてらっしゃいませ」

気を取り直してわたくしは部屋をあとにしました。

出掛ける直前に少々面を食らう出来事もありましたが、愛しい方にお会いできると思ったら自然と足取りも軽いものになりますわね。表情と自然と笑みが浮かんできますわ。

あ、だからチエルシーにわかりやすいと言われるのですね。

s i d e o u t

第四十四話 英国淑女の休日 前編（後書き）

駄文にお付き合いくださってありがとうございます。

書いてて思ったのですが、セシリアのモノローグは書き難い・・・。
お嬢様口調はなんか書くの苦手・・・。

次話はずっと第三者視点で書くかもしれません。

ではまた次回に～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338t/>

ようこそ藍越学園へ

2011年11月27日15時47分発行